
王子様を求めて。

ゆながりか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子様を求めて。

【Nコード】

N9222I

【作者名】

ゆながりか

【あらすじ】

【50000アクセス突破！！ありがとうございます！】

空想と現実が入り交じっているちよつと変な美和くみかず。そんな美和の前に現れたのは、伝説の王子達！五人の王子様が美和を狙う中で、当の本人の美和はのんきに小説を。おいおいっ！そんなにのんきだと、後で後悔するぞ（ニヤリ）
少女漫画風味の甘さでお届けいたします

本編完結済みです！今は番外編や特別編を執筆中

1 伝説の王子様！？（前書き）

どうも。

ゆながりかです。

連載を始めてしまいました！

週に一回のペースではがんばって投稿するつもりですが、たくさん書ける時と書けない時があるので、投稿時間はバラバラです。

よかったら、読んでみてください

1 伝説の王子様！？

「勇者様！」

「なんだい、カヅミ…」

「好きです…好きでした！」

「か、カヅミ…」

「ごめんなさい。こんな時に。戦いに、行かなければならないのに。でも、今伝えておきたかったの。もう、勇者様に会えないのかもしれないと思ったら…言っておきたかったの！」

「今は、戦いに専念したいんだ。でも、カヅミへの告白の返事を伝えるためにも、僕はこの地へ戻ってくる！必ず。待っていてくれ…」

「はい！勇者様………」

「私の本当の名はユウキ…覚えていてくれ。それでは！また会う日まで！」

「ユウキ……！」

ああ…素敵。

「いいなあ」

カヅミ、とうとう勇者に気持ちを伝えることができたんだ……うう、感動。

「美和！さつさと行かないと遅刻するわよー！！！」

「ええ！？ヤバイ！まあ、何で言ってくれなかったのー！」

私は、花形美和くはながたみかず。

エヘッ 変わった名前でしょ？

長くも短くもない微妙な髪をツインテールにしている。

入りたての中学一年生

おしゃれとかには全く関心がない今時珍しい（？）女の子。

まあ、髪はぼさぼさ、顔は地味目で、めがねをかけていて、本ばかり読んてるような地味系な私のことなんて誰も見てないと思うからいいんだけど……

そんな私の趣味は……小説を書くこと！

プロとかは目指してないけど、書くのが好きなんだよね。

さつきも書いていたら夢中になりすぎて、遅刻……

つて、ヤバイじゃん！！！！

遅刻だ……！！！！

「い、いつてきまーっす！」

いつか、私の小説みたいな恋をしたい。

乙女な私は、空想大好きだから……今でも私の前に現れる王子様を考えている。

勇者様みたいな、素敵な人なんだろうな。

クールで、優しくて。

かつこよくて、笑顔がカワイイ

そんな人が、現れるかな。

「って、こんなこと考えてる場合じゃないっ！っ！」

急げー！

遅刻はマズイよ。

ガラッ……

「はあ、はあ……ぎ、ギリギリセーフ……」

間に合ったあー！！！！

「美和！うちのクラスヤバイって！！！」

「ほえ？な、何が？」

「何が？って……うちのクラスに、あの伝説の王子達がいるのよ！しかも、五人そろって！」

そんな無駄（？）な情報を与えてくれるのは人付き合いの悪い私にしては仲のよい友達、浜平楓くはまひらかえでである。

楓は、勉強は無理だけど、運動系はめっちゃできる。

顔はかわいいけど口が問題で……。

「ええっと、伝説の、王子達って？？？」

「ええ！？前、私言っただじゃないの！この中学校には伝説の王子様達がいるんだって！」

前……？

ええっと、前って、いつのこと？

「ほら、卒業式の前の日……！」

ううーん……ええっと……

あつ！そつだ！思い出した！

あの時は、勇者を戦わせるか村に住まわせるかで悩んでいて、先生の話も楓の話もろくに聞いてなかったんだよね……。

「聞いてなかった」

「はあ……あんたって……」

「で？その、王子様達って、いったい何者？」

「一人は超力ワイイ系で、一人はハーフでめっちゃ王子様系で、一人はお笑い系で、一人は優しくお兄さん系で、一人は超クール！そんな王子様みたいな人達の集まりが、伝説の王子達ってワケ！この学校でもうファンクラブが作られているくらいだから、相当な人氣だよ？」

へえー。

すごいなあ、楓は。

どこからそんな情報が入ってくるんだらう……。

「へえ……さつそく王子達のお出ましね」

クラスの女子達がキャーッと悲鳴を上げてこちらに走ってくるのが見える。

「あれが、松平君？カッコイイ！」

「カワイ〜」

「ああん！いつしよのクラスになれるなんて超ラッキー」

そんな女子達の声が聞こえてくる。

私と楓は、あつという間に女子達の勢いに押されて、どんどんどん女子の波に入っっていつてしまう。
つていうか、楓、どこーっ？

「美和！大丈夫っ？」

「こっちは、大丈夫！楓は？」

「だいつ、じょうぶだけ、ど、そっちに、行けない！」

「私も！あつ、キャアツ！……！」

見事に私は女子達に押されて転んでしまった。

ああ、ドジ。

なんで、こうなるの？

だいたい、倒れて、倒れて……で、ドミノみたいになるんだよね……
予想はつく。

「あ…れ？」

ずっこけた所は何もないところで、人なんかいない。
ただ、めがねを落としただけ。

一瞬、しーんとした雰囲気流れる。

ええ！？な、なんで？

なんでこんな雰囲気！？
倒れたただだよ？

「プッ！」

頭上から声が降ってくる。

「え……」

「ッハハハ！！！！おもしれえ！俺達の前に堂々とずっこけてくるなんて！」

ムムムッ！！！！

何その俺様口調。

「あ、あの、めがね……」

「え？あ、ああ……」

顔がよく見えないけど、その人と目が合った瞬間、嫌な予感がした。

「カワ、イイ？」

はい？

いやいや、私にその言葉は似合わないし……。

「ああ！本当だあ」

「へえ。こんな子、見逃してたなんてね」

「さすがの拓海の情報でもここまでは無理だったか……」

「……」

ええ？

えっと、誰ですか？

「ちょ……み、美和！？」

「楓！め、めがねが……」

「キヤーツ！王子様……！」

え？

王子様？

「これ、めがね……」

ブスツとした口調でそう言われてはつと気づいて上を見上げると、
ボーッとだが、男の子の顔が浮かび上がる。

「あ、ありがとうございます！」

めがねを手探りで受け取り、かける。

ああ、やっぱり落ち着く…。

「ん？んん？」

めがねをかけて前を見ると、そこには王子様のような人達が立っていた。

1 伝説の王子様！？（後書き）

どうでしたか？

興味を持った方は、次の投稿に期待しててください

さてさて、個人の話ですけど、美和ちゃんって私にそっくり！やっぱり似てきちゃうのかな？（そんなにかわいくないけど…）ドジで、バカで、小説大好き！でも、私はプロを目指してますから！！！！

そんなこんなで、まあ、さようなら！

2 主子様グループの一員！？（前書き）

どうも。

連続投稿！！！

ううーん、すばらしい！！！とは言っても、誰かこの小説を見てくれるのかな？

2 主子様グループの一員！？

ど、どうなってるの？

ここって、現実の世界じゃないの？

私の空想の世界？

おとぎ話じゃあるまいし、こんなにカツコイイ人達が私の前に立っているはずないー！！！！

「えっと……どちら様ですか……？」

「ええっ！？俺達の事知らないの？マジ？」

「ええ……！？すっごおい！感動！」

「そこは感動するところじゃないよ、稜君……」

「へえ〜。知らないんだ……」

「……」

ええー！？

また私変なことを言っちゃった？

「あ、あ、あ……美和、伝説の、王子……」

ん……？

ああ！！！！

この人達が伝説の王子様達かあゝ、ナルホドゝ……

……………

つて、ええっ！？

「美和、倒れた、のは、王子様達の、道……」

わ、私が倒れたのは、伝説の王子様のために女の子達がすきを空けてつくった道だったのおゝ！？

「ご、ごめんなさいつつ！！！！」

急いで謝る。

ああ、どうしようっ！

まさか、刑務所には、入れられたりしないよね？

まさか、死刑？？？

いやだーっ！まだ死にたくないゝ！！！！

「い、命だけはお助けを……」

「ププッ！！！！何言ってるのゝ！おもしれえゝ！！！！」

また笑われてる……で、でも、今はとにかく謝らなくちゃ！！！！

「本当にごめんなさいっ！じゃ、じゃあ、サヨナラッ！！！！」

そう言っつてこの場から逃げようとした私の手を、誰かがガシッとつかんだ。

嫌な予感がするのは、なぜ？

「待て」

ヒューッ……！

怖いよ……無口なイケメンさんが目の前で睨んでるー！
誰かお助けー！！！！

「おまえ……」

「イヤーーーーッ！まだ死にたくないですーやめてえー！！！」

「放課後、図書室まで来い」

え……？

無口なイケメンさんは、ボソッと私にだけ聞こえるような声でそう言った。

「行くぞ」

「じゃーな、おもしろい子」

「バイバイ」

「それでは……」

「さようなら」

⋮

王子様から伝えられた事がまだよくわからなくて、私はその場でぼーっと突っ立っていた……。

私は、王子様に言われたとおりに、図書室に来た。

図書室がどこか知りたかったし……。

「し、失礼しまーす……」

放課後の図書室って、暗い。

「だ、誰か、いますか？」

「ばあつ!!!」

「……」

本棚の影から出てきたのは、私を馬鹿にしていた男の子だった。

「よお、美和ちゃん」

「え？なんで私の名前を？」

「秘密」

「花形美和」

「は、はいーっ！ー！」

「おまえ……いや、何でもない。自己紹介だ、翔」

「ラジャー。それじゃ、始めるかつ」

な、何を？

「俺は、遠藤翔くえんどうしよう。お笑い担当だ、よろしくな」

馬鹿にしていた人（まだ根に持ってる）が自己紹介をする。

「えへへ。えっと、僕は雨風稜くあまかぜりよう。カワイイ物が大好きだから、美和ちゃんも大好きだよ」

カワイイ物って…顔も声もカワイイ男の子がニコツと笑って言う。男の子なのにすごいカワイイかも…。

「僕は、天道司くてんどうつかさ。美和ちゃん、よろしくね」

五人の中で一番背が高くてずっと笑っている男の子が言う。すごい、カッコイイ…

「ハーイ 僕は、笠原蓮くかさはられんです。父がアメリカ人

のハーフです！ヨロシク」

一番王子様っぽかった人が言う。
なるほど、ハーフだったのか。

「……俺は、松平拓海くまっだいらたくみ。よろしく」

めっちゃ無愛想な人が言う。
怖いよ……。

「えっと、私は……」

「美和ちゃんだろ？花形美和。見かけはふつうの中学一年生。でもメガネを取ると超美人。そして趣味は小説を書くこと……」

な、なんで知ってるの？

「なんで知っているかと言うと、拓海の母さんは、この学校の校長なんだ」

へえ………って、ええっ!?

こ、校長先生……!

「俺、美和ちゃん、好きになっちゃった……!」

………

………

はい……?

「ええ~~~~~~~~つつつ!!!!???.?」

「僕も」

「嫌いじゃないよ」

「好きです」

「.....」

な、何この冗談…逆にムナしい……。

「やめて。逆にムナしくなっちゃうし、自分の顔を恨むわ。そういう皮肉はやめてほしい」

「本気だつてえ〜!」

「やめて。まあ、いいわ。帰る」

「待てよ」

え……？

いつもなら帰るところだけど、その声に迫力があつて……

「な、何よ」

「おまえ……俺達の、仲間に、なれ」

「は？」

「全員、おまえを、気に入った」

いや、他の人は確かに気に入ってもらったかもだけど、あなたが怖いからです。

「仲間に、なれ」

なぜか私が半ば強引に伝説の王子様グループに無理矢理はいることになってしまった……。

2 王子様グループの一員！？（後書き）

どうでしたか？

王子様グループに入ってしまった美和ちゃん！

これからどうなるのでしょうか？

それでは、次のお話でお待ちしています

3 夢の文芸クラブ（前書き）

どうも。ゆながりかです。

な、なんとつつっ！！！！二日続けて連続投稿！さっすが

3 夢の文芸クラブ

「美和くくくく…!!!!」

遠くから近づいてくる声。

それは、悲鳴に近い叫び声。

その声の正体は……

「楓!!!!」

「あなた、王子様達と話したんですってえく？今学校中の噂の的よ、あなた」

ええっ!?

「そんなく…」

「はあ…しょうがないわねえ…まあいいわ。それより、クラブどこにするか決めた？」

「うつん。まだ…」

「この学校に、文芸クラブがあるらしいよ?」

ぶ、文芸クラブですとおっ!!!!

「楓、それ、どこっ！…！」

「今は使っていない教室…三年生の空き教室で今日クラブが行われているらしいわ。ただ……」

私は、楓の最後の言葉を聞かずに教室を飛び出していた…。

文芸クラブだーっ

この学校にあるとは思わなかった！
いつそげ〜！

「失礼しますっ！文芸クラブに入りたくてやって来ましたっ！！」

「ううっ…」

「…」

え？

なぜか大柄な人と小柄な人がその場で泣いていた。

ええっ！？

ど、どうして？？？

「あ、あの…」

「話しかけないでくれ…もう、このクラブはおしまいなんだあ〜っ
！…！」

大柄な人が叫ぶ。

つていうか、おしまい！？
なんで？

「このクラブ、一年生が一人も入ってこなかったんだ…もう、文芸クラブは終わりなんだよ。君、何の用？」

小柄な人が小さな声で叫ぶ（？）。

「私、文芸クラブに入りに…」

「何だつてえええつつつ！！！！君、本当か？」

「は、はいいつ」

「やったあゝ！！！！」

大柄な人と小柄な人の声が重なる。

「俺はこのクラブの部長、三年の坂本大輔くさかもとだいすけくだよ。よろしくな、美和ちゃん」

え……？

何で名前を知ってるの？

「僕はこのクラブの副部長、三年の佐々秀くささしげるくだよ。よろしくね、美和ちゃん。君、王子様達の前で転んだ女の子だろ？有名だよ」

そんなに、有名？

大柄な先輩が坂本先輩。
小柄な先輩が佐々先輩だ。

「俺の事はダイさんでいいぞー」

「僕は佐々さんでお願いします」

「私は、一年の花形美和です。これから、よろしくお願いします！」
自己紹介をしていると、空き教室の扉が開き、中に誰かが入ってきた。

「キヤーッッッ！！！」

女の子達の悲鳴と足音が廊下をドタバタと去っていく。

「ふう…助かった」

「先輩、かくまってくれてありがとうございます」

「まあ、このクラブに入る気はないけどな」

「それにしても、ファンクラブの人しっこかったですねー」

「……美、和…」

「ええっ！？」

五人が一斉にこちらを向く。

きっと今私の顔は真っ青になっているだろう……。
だって、前にはあの五人が立っているのだから。

「どう、して？」

「美和ちゃん！運命だな、美和ちゃんはこのクラブに入るのか？」

どうすることもできなくてコクンとうなずく。

「よしっ！じゃあ、僕達もこのクラブに入ろうか？」

「決定でーすっ」

「うんうん」

「……」

「そ、そんなぁ……」

「さ、佐々君……」

「ダイさん……」

「やったな」

「やりましたね、これで、八人！……」

二人が喜んでバンザイッなんて言って喜んでいる。
こっちはバンザイどころじゃないっ！
せっかくの文芸クラブライフがあ……

「こんにちはあ」

「ここって、どんなクラブですかー？って、キャアアーっ！王子様」

「ま、松平君！？」

そんな声とともに入ってきたのは女の子二人。

この子達はまともかな？

「松平君、同じ学校だった片岡舞くかたおかまいぐでえゝす 覚えてくれていたらうれしいな」

少し小太りで、身長は私と同じくらい、髪は茶色で肩までの髪を巻き髪にしていけにもお嬢様ですって言う感じの子が言った。

「ちよつと、舞ちゃんつてばあ…私は、友原鈴加くともはらずかぐ。はじめまして。これから、よろしく願ひします」

腰まである長い黒髪で、いかにも正統派美人でスタイルもよくて背が高いかにもモテ子ですって言う感じの子が言った。

「君達も、文芸クラブに入ってくれるのかいっ」

ダイさんが涙目で言う（ちよつと怖いかも）。

「はい、松平君がいるなら、喜んで」

「私も」

「佐々君、ついに、ついに念願の十人だよー」

ダイさん…。

「美和ちゃん」

「え？えっと、あなたは…」

「司だよ」

「そうそう」

天道君。

私に何のようかな？

「あの二人とも、拓海にゾッコンって感じだね」

「そう？まあ、舞ちゃんって子はそうっぽいけど、鈴加ちゃんは？」

「目でわかるよ。拓海だけを見てるし」

ナルホドゥ。

「あれ？あの子は？」

舞ちゃんっていう子が私に気づいて言ってくれる。

「私は、一年A組の花形美和です。趣味は、小説を書くこと。よろ

しくね」

「私は、一年B組の片岡舞。舞ちゃんていいよ？んゝ…あだ名は…」

できれば、小説の主人公、カヅミって呼んでほしいな？

「カズかな」

おいしい！！

「私は、一年B組の友原鈴加。鈴ちゃんって呼ばれてるよ。舞ちゃんとはいとこなの」

へえゝ。

そうなんだゝ。

「それじゃあ、今日の部会はこれで終了！明日から、コンピュータ一室で詩を書く人は詩。小説の人は小説。ポエムの人はポエムを書いてねゝ。それじゃあ、同じ方面の子と変えるんだよゝ」

同じ方面？って、誰？

「美和ちゃんゝん。俺、美和ちゃんといっしょになれてうれしい！」

ええっと、この人の名前って……？

「翔だよ」

あっそうそう。

えっと、遠藤君だっけ？

「僕の事は覚えてる？」

えっと……たしか……雨風君？

「僕は？」

たしか、ハーフの……えっと……そう！笠原君！

「よくできたです！」

「美和ちゃん、よく全員覚えてたね」

私は、舞ちゃんと鈴ちゃんにサンドイッチにされている松平君以外の王子様メンバーと仲良く校門まで歩いていった。

「美和ちゃんはどっち？」

「あっちです」

「ええ……俺達と真逆じゃん！」

やった！

王子グループと離れられる！

正直、周りからの目線がきつくなってきた……。

「あ、でも、拓海はそっちだろ？」

え……松平君を見ると、無表情でうなずいている。

うひゃっ！ご機嫌ナナメだよ…。

「ま、舞ちゃんと鈴ちゃんは？」

「舞はあつち。舞も、松平君といっしょがいい！」

「私はこちらです。でも、すぐにその角で曲がりますけど」

やった〜！

鈴ちゃんがこっちだ！

少しだけど…。

「行くぞ」

その一言で、私と鈴ちゃんは歩き出す。

「美和ちゃん、じゃーなー！」

「バイバイ」

「じゃあね」

「グッバイ！」

「松平くん、サヨナラー……！」

もうっみんなで大声で呼ばないでよ…
とか言いながらも…

「さようなら」

なにげに楽しいかも。

このグループも（周りからの目線がなければ）。

「それでは、ここでさよならです」

「じゃあな」

「鈴ちゃん、さようなら」

「あぁっ！」

急に鈴ちゃんが倒れ込む。

ええっ！

ど、どうしたの？

「大丈夫かつ」

「ちょっと、気分が…スイマセン、松平君、送ってくださいか？」

すると、松平君は何を思ったか、さっきまでの態度とは違い、ブスツとした態度で鈴ちゃんにこう言った。

「学校近いし、先生を呼ぶ」

「あ、直りました！ありがとうございます、では」

ポカーン…

直るの早！

「鈴ちゃん、大丈夫かな」

「仮病だ」

えっ！？

け、仮病？

松平君といつしよに帰りたいから？
恋って、怖いな……。

「すごいね、見破っちゃうなんて」

何とか会話を続けようとする。

人付き合いの悪い私でもこの空気は嫌だ。

「信じてないだけだから。おまえは信じすぎ」

ムッ！

なんか、嫌だ。

「信じる事の何が悪いの？友達を信じなければ何も始まらないし、信じなければ何もできない。友達だって、信じてるからこそ友達って言えるんだよ！なのに、何で信じてあげないの？」

「さっきだって、信じてだまされるところだったじゃないか」

「信じてあげない人に言われたくない！だまされることを恐れていては何も進んでは行かない！例えだまされていても、何かは変わるはずだから！友達を大切にしたいなら、信じることを覚えなくちゃ、

大切にできない！」

私は、自分で頭にくると小説の主人公になりきってしまつて、意味不明な言葉を言つてしまふ。

ああ、またやつちやつた……。

「あ、ああ……そうだな……」

「きゃ……」

現実世界に戻つてくると、なんだか力が抜ける。

「あいつらが言っていたのは嘘じゃないんだな。おまえに何かを感じるつて。少しは、信じてみることにするよ」

「うん……」

少しだけ、会話が生まれたような気がする……。

3 夢の文芸クラブ（後書き）

どうでしたか？

舞ちゃんも鈴ちゃんも強敵……！！！！

それでは、次のお話でまたお会いしましょう！

4 私は強い（前書き）

どうも。

今回はかなり短いです。

次回はこれよりは長くなる…はずですから。

4 私**は**強い

きまずい。

とにかく、きまずすぎる。

もともと無口な松平君はあれから一言もしゃべらない。
もしかして、私の行動にひいちゃった？

「あ、あ、あ、の……」

何とかこの雰囲気を出しようとおもむろに口を開いてみる。

「……」

私の計算ミス。

何か言えば何か言い返してくれると思ったのに。
こっちを見てもくれない。

こ、これじゃあ、私、松平君に恋してるみたいじゃない！

「あ……」

思わず、立ち止まる。

立ち止まったところは、本屋さん。

じっと見つめるその先には、あの絵本があった……。

「お母さん、ご本読んでー」

小さい頃はお母さんにずっと甘えてて、何をするにもお母さん、お母さん…って。

お母さんが死んだから、こんなに私は強くなれたのかもね。
お父さんが家を出たから、こんなに私は強くなれたのかもね……。

「はいはい。ちょっと待ってね…あら、いけない。醤油がきれちゃった！お母さん、買い物に行ってくるわ」

「え…み、美和も行くー」

「はいはい」

「ご本持つて行くー」

「はいはい」

私達は自転車で近くのスーパーまで買い物に行った。

そのときだった……。

一台の車が近づいてきたのは。

「きゃー！っ！っ！美和！」

とっさにお母さんは私を道路に放り投げた。
自分よりも、私の心配をして。

そして、お母さんは、絵本と一緒になくなった……。

「その、絵本がこれなの……」

気がついたら、事故のことを松平君に話していた。

「そう、か」

この本は、お姫様と王子様のお話。
ずっと、憧れていた。

そして、お母さんがいなくなった後も、王子様に憧れて。
王子様がいたら、この悲しみも少しは楽になるのかな。
王子様がいたら、この寂しさも、なくなるのかな。

「懐かしいなあ……」

「買ってやるよ」

「えっ!?!」

いきなり松平君はそう言うと、本屋さんの中に入っていった。

「はい、これ」

「あ、ありがとう……」

あの絵本だ。

少しだけ、松平君が身近に見えた。

「あ、松平君よ！」

「キャツ 松平様」

「キャーッッッ！……あそこよ、いたわー！」

「げっ！……ファンクラブの奴らだ！美和、逃げるぞ！」

「ええっ？」

こうして、私と、松平君と、ファンクラブの女の子達の盛大なおいかけっこが、始まったのだ……（っていうか、あたし関係ないっ）。

4 私に強い（後書き）

スイマセン。

サブタイトルと本文が全く合っていないんですけど、気にしないでください。

あと、がんばって七時〜九時（午後）には投稿するつもりです。
よろしくお願いします！

5 フォーククラブの皆様とおいかけっこ (前書き)

スイマセン。

また短めになってしまいました。

書く余裕がなくて……

5 ファンクラブの皆様とおいかけっこ

「はあ…はあ…大…丈夫、か…？」

「は、はい……っ」

ファンクラブの女の子達から逃げてやってきたのは、地下街。

「はあ…あいつら、ウルサイんだよな…」

意外に、しゃべってみるとおもしろい人だと分かった。

無口だと思っていたけれど、そこまで無口でもない???

「は、はい…ちょっと、ウルサイですね…」

「ああ」

それにしても、本当に人気だなあ…

ファンクラブって……。

改めて松平君の顔を見してみる。

真っ黒な髪の毛…。

白い肌…。

キリリと鋭い目つき…。

どこをどうとつても、完璧な人間だと思う。

「本当に人気なんです…」

「…そうか？」

「はい」

クスツと笑う。

私につられて、松平君も笑う。

ドキツツツ！！

松平君も、笑うんだ…。
かわいいかも…。

心の中で思い描いていた王子様の笑い顔に、
なんだか松平君は似ていた。

「王子様…」

「何か言ったか？」

「い、いいえっ！」

またすぐにクール系にもどる松平君。

さっきの笑顔がまるで錯覚だったように氷のような表情。

「え？っ、うそお…」

「本当だよ！一回合ったことあるもん！」

「あれが、松平君???」

そんな話し声が聞こえてくる。

ヤバイ……

そろそろ、ばれるかも……!

「松平様!」

「松平君!!!」

「キヤーーーーーッ カッコイーーーーッ!」

ばれた!

「逃げるぞ、美和!」

「う、うん……っ」

全速力で逃げる私と松平君。

松平君、足が速い!

運動音痴の私の手を握って走る松平君の横顔は、私も一瞬見とれてしまった……。

「はあ、はあ……」

「ま、松平君!ど、どうしましょうっ」

「あ、あそこに、逃げるぞ!」

松平君がそう言って指差した場所は公園の遊具の小さなトンネルだった。

二人でギューギューになりながらも入る。

「松平様は、どこっ！」

「探すのよっ」

そんな声が聞こえてくる。

「あいつら、当分ここから出て行かないな……」

「どうしよっ」

「松平君」

「ギャッ！」

「……」

松平君の隣には、舞ちゃんが座っていた。

「え…な、何で？」

「それでも、松平ファンクラブの副会長ですからっ」

そう言って胸を張る舞ちゃんはなんだか輝いている（？）ように見えた。

「大丈夫。ファンクラブのやつらに引き渡したりなんかしないから。」

私の家、すぐ近くの。かくまってあげるから、いつしよに来なよ。
ね？松平君」

ナルホド…私達、逃げてるうちに家の反対方向まで来ちゃったのか
）。

「わ、私は、家に帰らなきゃ…」

「俺、こいつが行くなら行く」

「え……か、カズ…」

潤んだ目で見つめてくる舞ちゃん。

特別かわいいわけじゃないけど、そんな目で見られたら……

「い、いいよ。行く…」

「やったあ！」

「よし。じゃあ、俺が合図を出したら行くぞ…3…2…1…行けっ
！……！」

私達はいっせいにトンネルを飛び出す。

「あっ！松平君よ！」

「キャッ！」

「追いかけるわよ！」

私の手を握って走り続ける松平君。

えっと、舞ちゃんの手を握ってあげたら？

と言おうとしたけれど、舞ちゃんって、運動神経いいんだな…松平君について行ってる。

まあ、いいなあ〜っていう気持ちが伝わってくるけど……

「ここよ、松平君」

「入るぞ」

「お、おじゃまします……」

ま、舞ちゃんって、見かけどおりお嬢様だったんだ……

私の目の前には、超豪華な家が建っていた……。

5 フォーククラブの皆様とおいかけっこ (後書き)

どうでしたか？

明日こそは、きつと、きつと！……！長くするはずです！

たぶん……。

ま、まあ、次のお話で。

6 舞ちゃんのお宅…（前書き）

本日もご愛読いただき、ありがとうございます
今日は、ちょっとがんばりましたっ！（ちょっとだけ…）

6 舞ちゃんのお宅…

「ここに座ってちょうだい、カズ。松平君はあ、こっちの、イスにどうぞあ？舞の、お隣だよあ」

「ここでもいい」

そう言って私の隣に座る松平君。
っていうか、なぜ隣に来るーっ！

それよりも……
広いっつっつっ！

「そ、それにしても、広いね……」

私のボロアパートとは大違い！
っていうか、むなしい……。

「あら。そおかな？ここはロビーだから、まだ中にも部屋はあるよ？あっそうそう。パンフレットと地図を渡しておかないと…迷子になるといけないから」

……ぱ、パンフレットと地図って…どんだけ広いの？

「さてと。ファンクラブのやつらが解散するまでここで休むとするか」

「ええ。そうしてちょうだい？も、もし、よければ、泊まっていってもいいのよ。あ、カズは帰ってね。時間が遅いし」

えつと、時間が遅いんなら松平君もなんじゃ???
なんて言うことはありません。

そんなことを言ったら、舞ちゃんが怖いし…。

「わ、私は、帰ろうかな…」

商店街で買い物して行かなくちゃいけないし……

「なら、俺も」

「まつ、松平君までつ、帰ることないでしょっ」

「悪いが、女を送ることは男の礼儀だから」

……松平君つて、そんなキャラだっけ？

「いいよ、松平君。一人で帰れるし…」

「送る」

うつ……！

決まっちゃってるのか…。

「ちょ、ちょっと待って！カズ、ちょっと…」

「え？何？」

舞ちゃんに呼び出された私は、部屋の隅の方にサササーッと連れて行かれる。

「カズ、松平君のこと、好き？」

「へ？」

「聞いてるのっ！好き？」

「うんっ！ま、まさかつ！今日始めて会ったし……よくわからないし……怖い、もん」

「よ、よかったあ…じゃあ、応援してくれるっ？」

「も、もちろんっ！ということで、私は帰る…」

「え……カズが帰ると、松平君も帰っちゃうのに……」

そんな寂しそうな目で見ないでくれえっ！

「おい、何やってるんだ！行くぞ」

「あ、う、うんっ」

ひとまず、舞ちゃんの目線から逃げることできて、ホッ…。

「何の話をしていた」

「べ、別に……」

「俺に言えないような事が…」

「べ、別に…」

こんな話し合いが何十回も続いている（話し合いって言わないかな？）。

両者一步も譲らず！

なあゝんてねっ

「美和ちゃんっ！」

「え？」

「司」

「どうしたの？こんな遅くに。ま、まさかっ！美和ちゃんと拓海って……」

「付き合ってないから」

天道君が言う前に松平君が言う。
その言葉に少し遅れながらも私は頷く。

「なあゝんだあ…つまらない…」

「つまらないって何だよ、つまらないって…」

「天道君、塾？」

「うっん。習い事」

ならいごと？

偉いっ！

私なんて小学生の時にピアノさぼってばかりだったのにつ！

「コイツ、剣道やってるんだ…」

松平君がボソツと独り言をつぶやく。

「け、けんどうっ！？」

「そうそう。あと、ピアノと、バイオリンと、空手と、習字と、水泳と、バスケットボールクラブと、サッカークラブと、合気道と…」

天道君が長々と解説をする。

「っていうか、何個習い事やってるんですか？
っていうか、合気道っていったい！？」

「司、たまには休めよ？」

「大丈夫だって！このくらい、平気だよ！」

そう言って笑う天道君は、どこか無理しているように見えた。
おかしい…笑顔が引きつっている。
心に、嘘をついている。

「完璧な、人間になれば…」

天道君の声が頭に響く。

「人生、全てが上手くいくはずだから…」

ブチッ！

頭の中で、私の理性がぶつちぎれた。

「そんなんじゃ、いつまでたっても上手くやっていけねーよっ」

驚いた様子でこちらを見る天道君と松平君。

この声、私っ！？

嘘……。

「完璧な人間なんて、この世にはいないんだ。人間、悪いところが誰しも一つは必ずあるもんだ。でもな、いいところがそれと同じ分だけ。いや、その倍、何倍もあるんだよっ」

小説に出てきそうな熱い言葉。

こうなったら、どうにでもなれだっ！

「じゃ、じゃあ、どうすれば、人生上手くいくんですか……」

天道君がおそろおそろ訪ねてくる。

「成功の秘訣…それはな、正直に生きることだ……」

「は？」

「どういう事だ？」

二人の顔にはてなマークが浮かぶ。

「笑いたいときは笑って、泣きたいときは泣いて…人生素直に生きるんだよ。心に嘘をつくな。嘘をつくと、どんどん人生が嫌になつてくる。泣けば、スッキリする。笑えば、楽しくなる。自分の感情に、嘘をつくな」

言い終わった瞬間、頭を打ち付けられたような感覚におそわれた。

「お、おいっ！美和！美和！！！」

ふらつと倒れた私を支えてくれたのは松平君だった。

「あ、松平君、ありがとう。っていうか、私今なんて言ったーっ！？キヤーツ恥ずかしいっ！！！」

「美和ちゃん…」

「え？」

天道君が潤んだ目でこちらを見てくる。

「ありがとう。僕、もう嘘つかないから！だ、だから…」

「え？ええっ！」

「お、おい、司？」

「ウワーーーーーッ」

その場に座り込んで天道君は思いっきり泣き叫びだした。
近所の人は何事だ？と家から顔をのぞかせている。
っていうか、これじゃあ、私悪者っ！？

「な、泣かないでよ、天道君…」

私はそう言ってハンカチを天道君に貸してあげる。

「み、美和ちゃん…好きだっ！！！」

「え？？？」

「もう我慢はしないっ！美和ちゃん、好きですっ」

ええ？？？

す、好き…って……。

？？？？？

あれっ！？

こ、これって、まさか……

「こ、告白？？？」

「そっだよっ！美和ちゃん、好きです！付き合ってください！」

「こ、ごめんな、さい…」

「え……わ、わかったよ……でも、僕はあきらめない！あきらめないからーっ」

そう言って走り去っていく天道君は、かなり不気味だった……。

「な、何なんだ、アイツ……」

「さ、さあ……？」

私達は、しばらくその場でボーッと突っ立っていたのだ……。

6 舞ちゃんのお宅…（後書き）

どうでしたか？

舞ちゃん、お嬢様ですね。

いいなあ〜一度でいいからそんな家に住みたい！

えっと、それから、謝罪です。

第1話で、美和ちゃんを呼ぶ声ですが、あれはお姉さんです…。

母親ではありません…書くのを忘れて、申し訳ございません…。

それでは、次の物語でお会いしましょう！

さよならあ〜。

7 憧れ(?)のお姫様抱っこ(前書き)

どうも

恋愛では定番(?)のお姫様抱っこにチャレンジ!

上手に書けてるかな?心配です……。

7 憧れ(?)のお姫様抱っこ

「美和!」

「あ、楓?おはよう」

「おはようじゃないわよ!アンタ、文芸クラブに入ったの?」

「う、うん...そうだけど?」

いつにもましてすさまじい楓の勢い。
つていうか、怖い.....っ!

「文芸クラブのクラブ長は.....ほ、ホモなのよっ」

ほ...も...????

ほもって、いったい?

「つまり、ど、同性愛者よ!...!」

どう...せい、あ...い、しゃ????

ダイさんは、男で、ダイさんが愛しているのは.....男?

「え。ええ~~~~~っ!?」

「昨日言おうとしたら走っていつちゃうんだもん...はあ」

同性愛者、同性愛者……

頭の中で何かが鳴り響いている…。

ゴーン、ゴーン…

文芸クラブで私やっていけるのかな？

ダイさんと佐々さんはまじめだと思っていたのに…。

「あつ！！美和ちゃん あ・は・よ・う」

「だ、だだだだ…ダイ、さん…っ」

今一番会いたくない人が目の前にっ！

っっていうか、楓、逃げないで…。

「どうしたの、美和ちゃん…顔色悪いよ？」

いや、あなたの性ですっ！

「だ、大丈夫ですーっ」

「あ、僕の事？知ってると思ってたよ。俺が、同性愛者だって事…」

「っわわわわわわわあああああ！！！！」

や、やっぱ、り……？

ダイさんが？

信じたくない…。

「けっこう学校みんな知ってるから、てつきり……ごめんね、驚かせちゃった？はあ…やっぱり、ダメ、かな……」

急に落ち込むダイさん。

あ、あゝっ！

こんなの見たら、見たら、見てしまっただらゝゝっ！

「何言っているのっ！」

またやっちゃったあゝっ

「え？」

「恋に、年齢も性別も関係ないわ！自分が正しいと思った道を進めばいいのよ。好きなものは好きなんだから。さあ、自信を持って！」

ううゝ…今度は恋にオクテナ少女(?)を応援する恋愛マドンナにでもなりましたか？

「そ、そうですねっ！好きなんですから！」

目がキラーンと輝いたダイさん。
よかったよかった……。

「あ…きゃっ」

ふらふたと倒れてしまう。
じ、地面にぶつかる……。――。

「まったく、危なっかしいな――」

「え……松、平君？」

私を受け止めてくれたのは、松平君だった！

「あり、がとう……」

受け止めてくれたのはありがたいんだけど、周りの女子からの視線が……。

「ほどほどにしろよ」

そう言っつて、松平君は教室へと行ってしまった……。

「へえ……あいつも、本気なんだ……」

「えっ？あ、遠藤君……」

「僕達もいるよ」

「あ、雨風君と、天道君と、笠原君！」

「拓海は、気に入った女の子しか、助けません。つまり……」

「はい、そこまで。あいつも、美和ちゃんに知られたくないだろ……」

昨日の天道君はどこへやら。

そこには、冷静なお兄さん天道君がいた。

「そーですかー？」

っていうか、何の話？

気に入った“女の子”しか助けない???

つまり、それって……

女の子にさえ見られてないっ!?

そ、それは、こんなに仲良くしてもらっているのは、女の子として見ていないって事だとはうすうす気づいていたけど……はっきりに言われると傷つくな……。

ショック……かも。

「おまえら、何の話をしているんだ……」

「た、拓海……」

あとずさる遠藤君。

「た、拓海??? 何でもないってえ」

あくまでも平静をよそおう雨風君。

「どーしたですかー」

全く気づいていない笠原君。

「あっちゃあ……」

頭を抱え込む天道君。

そして……

「ま、松平君……」

周りの視線を気にする私。

だつて……

「おいおい、あの五人があんな平凡な女を取り合ってるぞー」

「ねえ、あれって美和じゃない？小学校一緒だったじゃん…」

「マジ？あいつかよっ」

「っていうか、どこがいいのー？私のほうが断然カワイイのにー」

そんな声が聞こえてきて、視線も突き刺さる。

い、嫌だ……。

私をかわいくないと言う声…。

松平君に似合わないという声…。

どれもこれも私の心に突き刺さるような言葉だった……。

「おいおい、おまえらさー、こいつをかわいくないって決め付けんなよなー…ほら、見ろよ」

遠藤君が私に気づいてフォローしてくれる。
うれしいけど……

何でめがねを取るのーつつつつ！…！

「え、遠藤君、めがね、返して…」

ぼやける視界で何とか遠藤君を探す。

「よし、ついでに…」

雨風君の声がする。

と思ったら、髪を結んでいたゴムを取られてしまった…。

「な、何する…」

「か、カワイイ…」

え……？

今、とんでもない声が聞こえたような…？
気のせい？

「あ、あれが、美和？」

「信じられねー…」

「あんなに、かわいかったの…？」

ええっ！？

な、何ですとー？

皆さん、目がおかしいの？

「さ、行くぞ」

そんな声の上から降ってきて、気がつくと…

「う、浮いてるっ…？」

気がつくと、宙に浮いていた。

「あ、いーなー。僕も、お姫様抱っこしたいー」

え……？

おひめさまだっこ……？

「ちょっ……お、下ろしてよーっ」

「ダメだ。どうせ、見えないだろ」

どうやら、お姫様抱っこしているのは松平君らしい。
って、そんなことどうでもいーっ！

「め、めがねを、返してくれれば……」

「だめだよ、美和ちゃん」

「うん、そうだよー。せっかくカワイイのにー……」

「だめでーすねー」

「だめだめ……」

「そ、そんなあーっ！？」

私は、恥ずかしくて耳まで真っ赤になりながら教室へと向かった……。

7 憧れ(?)のお姫様抱っこ(後書き)

どうでしたか？

最近読み返してみたら、誤字・脱字がいくつぱいはははは…うう…悲しい。

ま、まあ、次のお話でお会いしましょう！

8 お色気作戦…？（前書き）

サブタイトル、気にしないで下さい……。

8 お色気作戦…？

「あ、あの…おろしてください…それと、めがね、返してください…」

「あ？ああ…」

は、恥ずかしい…お、お姫様抱っこ、なんて……。私なんかが、松平君にやつてもらったものじゃないよ…。女子からの視線がきついし…。

先生からはひやかしの言葉をもらっちゃったし…。

「あの、めが、ね…」

ひとまず下ろしてもらったから、次はめがねを返してもらったじゃないと、何も見えないよ…。

「ダメ〜！」

この声だと遠藤君？が飛び出してくる。つていうか、何ですかその手で作った×印は！

「だって、カワイイからあ〜」

「か、カワイイっ!？」

おそらく雨風君が言う。

いやいや、貴方のほうが何十倍もカワイイですっ。

「そっだよ、美和ちゃん」

この声、天道君？

貴方だけはマトモだと思っていたのに…っ！

「僕、コンタクトレンズ持ってまーす！貸してあげます！その代わり、僕にめがね貸してくださいーい！」

「そうしろ」

「ええっ！？」

こ、コンタクトレンズウー！？

無理だよ！

だ、だって、だって……怖いっ！
目につけるなんて、怖いよ。

「い、いいですっ！め、めがね、返してくださいっ」

「ダメだ。蓮、コンタクトレンズ持って来い」

「オーケー！」

か、勝手に決めないでえー！！！！

嫌だよー。

怖いよー…。

こ、こうなったら……

「れ、蓮？私、めがね、返してほしいな」

勇気を出して言ってみる。

わ、私だって、カワイイ言葉使いだったら少しはかわいく見えるんじゃない？

「……」

あ、れ？

効果なし？

やっぱり、ダメなのかな……

「はいっ！どうぞです！！！」

「えっ？」

めがねを返してくれる笠原君。
優しいっ！

「な、何してるんだよ、蓮」

あわてた？様子の松平君。

よあっし、こうなったら松平君も……。

「ねえ、拓海…私、優しい拓海が、好きだよ？」

一瞬で真っ赤になる松平君。
おおっ！

純情少年だな〜…。

「拓海っ！いいな〜俺にも言ってえ〜」

「僕にも言っしてほしい！」

「み、美和ちゃん…」

え、遠藤君、雨風君、天道君……。
ちょ、ちよつとそれは、ねえ…？

「も、もう無理ですっ」

「拓海と蓮に言っておいて、俺達にはなしかよ〜」

「不公平だよっ」

「美和ちゃん〜ん」

ああ〜〜〜っ！！！！
もうっ！ウルサイ！

「わ、分かりましたっ！翔、稜、司……静かに…ね？」

顔が熱い〜！

姉から教わったお色気術がこんなところで役に立つなんてっ！
で、でも…恥ずかしいよ〜！！！！

「さ、サヨナラッ！」

この場にいるのがたえられない！
逃げますっ！

「お、おいっ！待てよっ」

松平君の声が遠くに聞こえます。
でも、今は無視だっ！

さっきやったことを忘れてくれえっ！っ！

「美和！」

途中で楓に腕を？まれる。

「か、楓？」

「あ、あんたヤバイって！学校中の女子を一気に敵にしたようなものよっ！あんな大勢で、お姫様抱っこだなんて！」

そ、そんな〜！

あれは、松平君が勝手にやったことで……。

「それもダメなのよ！今まであの松平君が好きで女子に近づいたことなんてなかったわ！それが、お姫様抱っこなんて！しかも、普通の男子にまで気に入られちゃって！今、ファンクラブの人間が貴方を探し回ってるの！見つかったら、どうなることか……」

う、ウソ〜！！！！

ふあ、ファンクラブの皆さんが私をつ！？

って言うことは、舞ちゃんが？

ヤバイ！ヤバすぎるよこの状況！

「美和、ともかく、逃げなさいっ！」

「か、楓、助けてっ」

「無理よ！私の命が危ないじゃないっ！」

楓の命が危ないって言うことは、私の命は……？

「あっ！いたわ！アイツよっ！」

廊下から女の子が叫んでいる。

「っていつか、あんなに大勢っ！？」

追いかけてきたのはほんの十数人なんかじゃなく、学校中の女子達。つまり、何十人も人がっ！！

「ギャーーーーーッ！！！！」

「美和、逃げなさいっ」

誰か、助けてくださいーっ！！！！！！！！

8 お色気作戦…？（後書き）

どうも。

ゆながりかですっ。

いやゝ、今日も無事投稿できました！

読んでくれる方に感謝感激ですっ！！！！

最近、いろいろ忙しくて……。

まあ、そういうことで！サヨナラッ！

9 悪魔との出会い。

「どうして私だけがこんな目にーっ！」

「待ちなさいっ」

ギャーッ！

怖い、怖いよー…っ。

あれから私は後者の中をかけずり回っていた。
意外にも、私はずつと逃げている。

人間、ピンチの時にはと急にパワーアップするものだな。

「でも、もう、体力が、限界……」

そうなのだ。

もうすぐ捕まりそんな所まで迫ってきている。

ヤバイ、ヤバイって！

私、死んじゃうのー????

「あっ！あれって、花形よっ！みんな、捕まえてえーっ」

一人の女子が叫んでいる。

っていうか、ヤバイッ！

前から敵がっ！

卑怯者！

はさみうちとは……っ

「こ、こうなったら……失礼しますっ！」

ガラッ……

すぐ近くの教室のドアを開ける。

ひとまず、ここに逃げ込むしかないっ！

そこには……

「えっ？」

「女……子？」

男子諸君が着替えていたっ……！！

どうしよう、どうしよう……っ

花形美和、人生最大のピーンチッ……！！

だってだって、廊下には女子がいて、もうすぐ捕まりそうなのにー、入り込んだ教室は、男子が着替えているんですーっ！

どうしよう、どうしよう、どうしよーっっ……！！

「あ、あの、その……」

教室から出るに出られなくて必死にいいわけを考える。

「あなたって、花形さん？」

「マジかよっ！めがねとってよー！」

「とれとれー」

私がいいわけを言う前に、男子諸君が騒ぎ始める。
そんなに有名になっちゃったのかな…？

「えつと…」

もうっ！…！

ウルサイなー。

静かにしてくれないかな…今逃げる方法を考えているんだから…。

「いたわっ！花形美和よーっ」

み、見つかったっ！？

この方法だけは嫌だったんだけど……そんなこと言ってる場合じゃない！

このまえのドラマの最終回を思い出すのよ……うっっ……な、涙が……っ
ここで邪魔なめがねを外す。
教室中からわーっと呼ぶ声。

「私……追いかけてるの……お願い……助、けて？」

一人の男子の机に手をかける。
もう片方の手は目の部分に…

「……………」

教室中がシーンとなる……。

「は、はいーっ！！！」

「もちろん、助けますっ」

男子諸君がキラーンと目を輝かせて言う。
成功…かな？

「さあ、美和さん、どうぞっ」

男子諸君が女子達をとめてくれている！
おかげで、一本の道ができている！

男子諸君、ありがとうっ！このご恩は決して忘れないよ…っ！

「さ、さらばっ」

そう言い残して、私は教室を後にする。
ファンクラブの皆様から隠れなくちゃ……。

「どこに隠れよう…あっ！そうだ！」

石灰倉庫にしよう。

あそこなら、誰も来ないし、たいてい鍵は開いてるんだよねー。

バンッ…

扉を開け、鍵を閉める。

さてと、これでひとまずは安心……。

「待っていたわ、花形美和」

「ひいつつっ！！！」

安心じゃないし！

っていうか、この美人なお姉さんはどこのどなたさまですかーっ！

「アナタ、よくも私達の松平君に手を出したわね……」

怖いです、怖いですーっ！

目が光ってますー！

制服のえりをつかまないでくださいーっ！

「あ、あの……」

手を出してはいないと誤解を解こうとする。

「一年の女子が松平君に手を出そうなんぞ、百年早いのもーっ！あんたも、フアンクラブの人間か？んあ？」

やくざ系になってますー！

「ち、違います！フアンクラブの人じゃないし、手なんか出してませんーっ！っていうか、その振り上げた拳は何ですかーっ！暴力反対ですー！」

「私はねえ、三年生松平様フアンクラブの会長なのよ！ってか、二年と一年が松平君のフアンクラブを作るなんぞ、先年早いわ！さっさと散りなっ」

「誤解ですー！っていうか、二年生と三年生にもフアンクラブあるんですかーっ？っていうか、私は松平君好きじゃありませんーんっ！あっ

ちが勝手に私についてくるだけで……」

会長さんの目がさつきよりも輝きを増している。
ヤバイ、私の一言、余計だったかも……。

「なんだとおっ？てめえ、今なんて言ったあ？んあ？あつちが私に
手を出したあ？んなわけあるかーいっつっ！ブツサイクな顔して何
言ってんじゃあ！」

ヒーーーーッッッ！！！

怖いよお……。

「つ、つまりですね、私は女扱いされていないという事に……」

「え……っ？」

会長さんの目に黒い部分が戻ってくる。

おお、正常に戻りましたか？

そのとき……

バンッ……！！！！

威勢よく扉が開く。
だ、誰っ？

「み、美和っ！」

「松平君？」

「ま、ま、ま…松平君…っ!？」

会長さんが目を回している。

「大丈夫か、美和…」

「う、うん……っというか、鍵はっ?どうやって開けたの?何でここがわかったの?」

「隠れる場所っっていえばここだろ。鍵は……」

「僕だよー」

ニツコリ笑う天道君が扉の外にいる。

あ、あんな顔してそんなことを……さすが、空手と合気道をやって
いるだけのことはある……。

「それよりも……おい、おまえ」

低い声で松平君が会長さんの方を見る。

「はあゝい なあに、松平くうゝん…」

もう目がふにやあゝってとろけていて、顔をデレンデレンにした会
長さんが松平君をうつとりと見る。

「おまえ……最低だな」

「っな……!」

一瞬にして会長さんの目が開かれる。

「それと、よく聞け。俺には、こいつしか見えていないから」

そう言っつて、私の方を見る。

つていうか、そう言っときの言い逃れに私を使わないでください。
余計に誤解が……。

「ど、どうしてっ？どうして、そんな子がいいのっ？私の方が、何
十倍もきれいじゃない……！」

「おまえ、それ以上いったらぶっ殺す……」

松平君がギロリと会長さんを睨みつける。

きれいな顔だから、睨まれるとすっごい怖い。

横から見ている私でも怖いから、会長さんはもっと怖いんだろうな
……。

「コイツは、おまえとは違って、俺達に正々堂々と話しかけてくる。
猫かぶりのおまえ達とは、違うんだよっ！それに、コイツには隠さ
れた良さが、たくさんあるんだよっつっ！……！」

ほめ、られてる……？

「そん、な……」

「俺が言えば、退学にもできるんだぞ……」

「や、やめてっ……！」

気がついたら、声を出していた。

だって、退学なんて……。

会長さんも、誤解に気づいてくれたし、反省してるし……。

「もう、いいからっ！教室に、帰ろう？」

「……おまえが、いいなら……」

ブスツとした表情で松平君がつぶやく。

そんな、怖い顔しないでよ。

松平君、怖かったな……。――

でも……

「うれしかった……」

「え？」

松平君が驚いた表情でこちらを見る。

「ありがと。探しに来てくれて……」

私にしては極上のほほえみで松平君を見上げる。
松平君の頬が赤い。

こうして、私達は石灰倉庫を出た。

「松、平君……あきらめない。私は、絶対にあきらめないから……」

石灰倉庫の中で、小さなつぶやきが聞こえる。

それは、私を邪魔する、悪魔の声だった……………。

9 悪魔との出会い。（後書き）

これからは面倒くさいので、前書きはなしで。

それにしても、サブタイトルと本文がかみ合っていない！

ううゝ… サブタイトルって、難しいんですね……。

ええっと、そろそろ人物が多くなってきたので、次回は登場人物紹介をしたいなーと思います。

ちなみに、今日出てきた会長さんの名前は、友原鈴菜くともはらずなゝ。

聞き覚えのある名字だと思いませんかー？

ではでは、また次のお話で！。

10 登場人物紹介

はながたみかず

花形美和

中学一年生。

小説を書くのが大好きで、王子様を夢見ているちょっと変な女の子。
髪は黒髪でツインテールにっていて、めがねをかけている。
鈍感なので恋愛に対してあまり意識をもっていない。
めがねを外せば美少女だが、本人は自覚なし。

まつだいらたくみ

松平拓海

中学一年生。

クールで無口なイケメンで、あまり恋愛に興味はなかった。
黒髪に鋭い目が印象的。
ファンクラブの女子達が苦手。
母が校長。

えんぱうしゅう

遠藤翔

中学一年生。

チャラ系なおもしろ男子。
茶髪でいつも笑っている。
伝説の王子様グループでは、お笑い担当。
五人の中で一番惚れやすい。

あまかぜりょう

雨風稜

中学一年生。

女の子みたいな外見。

茶髪で、クルクルとした髪と低い身長の子に間違えられる。

自分もカワイイが、カワイイ物が大好き。

かさほられん
笠原蓮

中学一年生。

アメリカ人と日本人のハーフ。

金髪で肌が白く、王子様のような外見。
基本日本人だが、英語も話せる。

てんどつつかさ
天道司

中学一年生。

五人の中では大人っぽい性格。

黒髪でいつも笑っていて、身長も高いので稜と並ぶと兄弟に見間違えられる。

お兄ちゃんのような性格で、さまざまな習い事をやっていて、成績も優秀。

さかもとだいすけ
坂本大輔

中学三年生。

文芸クラブの部長で、体格はかなり大きい。

黒髪で髪の毛はボサボサ。

その体格に似合わず、夢見る乙女。

つまり、同性愛者である。

佐々秀 ささしげる

中学三年生。

文芸クラブの副部長で、小柄。

茶髪でさらさらの髪の毛。

大輔の数少ない友達の人。

気弱な性格だが小説を書くのが上手。

片岡舞 かたおかまい

中学一年生。

拓海に片思い中。

ファンクラブの副会長として毎日拓海を追いかけている。

茶髪の巻き髪でお嬢様。

拓海に積極的アピール。

友原鈴香 ともはらすずか

中学一年生。

拓海に片思い中。

実はファンクラブの会長であり、積極的派ではないが実力でアピール。

黒髪のストレートロングで大人のような外見。

恋のためなら全てを犠牲にする。

浜平楓 はまひらかえで

中学一年生。

美和の親友。

茶髪のショート。

美和とは違って鋭くて、美和の恋を応援しようと一生懸命。

はながたき

花形咲

高校二年生。

美和の姉で、超美人。

黒髪をお団子にしていつもめっちゃくちやおしゃれと化粧をしている。

美和にお色気作戦を教えたのはこの姉。

ともはらすな

友原鈴菜

中学三年生。

鈴香の姉で三年のファンクラブ会長。

生徒会長も務めていていつもはっきりしているが拓海関係になるとあっという間にぶりっこに変身。

怒るとヤクザ系になる恐ろしいやつ。

黒髪のストレートロングをポニーテールにしている。

11 文芸クラブの人種

「失礼しまーす……」

部室に入る。

今日は初めてのクラブ活動の日。

ワクワクする……みんな、どんな小説を書くんだろう……。

私はかくのも好きだけど、読むのも大好き。

「あつ！美和ちゃんっ！」

「あ、ダイさん……」

大柄な体型のダイさんがこちらに向かってドシドシとやってくる。

あの、地響きが聞こえるのは気のせいでしょうか……？

「こんにちは！早いね、美和ちゃん」

「あ、はい！ダイさんこそ、早いですね」

「ああ。だって、これからクラブ活動が始まるんだよ。もう、ドキワクワクでさ……」

目をキラキラさせてダイさんが言う。

そうか、本当にクラブ活動が大好きなんだな……。

「私も、楽しみでした!」

「あ、そうそう……。新しい部員がいるんだ……。紹介するよ、僕と同じクラスの、友原鈴菜だよ」

「よろしくね」

「あ、はい、よろしく願いしま……。って、会長さん!？」

「ええ。私も、このクラブに入ることにしたわ!松平君、まだかしら?」

会長さん、松平君目当てで……。

ええっと、舞ちゃんと、鈴ちゃんと、会長さんと……。すごいな、このクラブは……。四角関係?や、ややこしい……。

「こんにちはーっす!」

「こんにちはあ」

「こんにちは、でーす!」

「こんにちは」

「……」

あの五人だ……。

あの五人が一緒に行こうなあって言うてくるから、振り切って逃げてきちゃった……。

だつて、これ以上目立ちたくないもん…。

「こんにちはあゝ」

「失礼します…」

つづいて、舞ちゃんと鈴ちゃんが少し遅れて入ってくる。

今日も舞ちゃんは巻き髪をブンブン振って松平君の方にスキップで近づいていく。

鈴ちゃんもひかえめながらも、顔を赤らめながら松平君の方へ……

「あら、鈴香！」

「お、お姉ちゃんっ！？どうして、ここに？」

お姉ちゃん！？

鈴ちゃんの？

会長さんが？

ええ……っ！？

「あれ、鈴にお姉ちゃんなんていたっけ？」

舞ちゃんが頭にはてなマークを浮かべながらも松平君の手にしがみついている。

「お姉ちゃん！あたしの後について来ないでよっ！文芸クラブに松平君目当てで入るなんて、文芸クラブに失礼だよ！」

いやいや、あなた達だって松平君目当てで来ているでしょう。

「私はアンタの後なんてついて来てないわ！自分の意志でここに入ったのよ。それに、私のマネしてファンクラブを作るような妹に言われたくないわ」

「何よ！誰がファンクラブを作ろうが勝手でしょう！」

す、鈴ちゃんがファンクラブを作ったんだ……って、つまり、一年生松平君ファンクラブの会長は、鈴ちゃんっ！？
あの気の弱そうな鈴ちゃんが……。

「あのお、失礼します……」

小さな心細そうな声が聞こえる。
この声は……

「佐々さん！」

きつと、この文芸クラブの中であたしと同じくマトモな人間は佐々さんくらいしかないでしょ……。

「どうしたんですか？」

「あら。佐々君、文芸クラブだったの？生徒会とは違って、弱弱しいわね……」

せ・い・と・か・い？？？
空耳？

だって、佐々さんが生徒会なんて……

「なんだとおっつつっ！！！！誰が弱弱しいだとお？んあ？もう一回

言ってみろよっ！ぶっ殺すぞ…」

ギロリといつもの佐々さんじゃないような目で睨んでくる。
怖いよぉ。

まさか、二重人格！？

そんな…マトモな人間は、あたししかないの…???

11 文芸クラブの人種（後書き）

どうも。

今回もご覧いただき、ありがとうございます。

遅れてしまつて、申し訳ございません…。

ええっと、どうでしたか？

ちょっと短いですね、はい。

まあ、そんな感じで、また次のお話でお会いしましょう
グッバイ！（なんちゃって？）

12 テーマは睡眠…！？

「さてと。それでは、まず、小説か、詩か、ポエムか……この中でやりたい物を決めてください」

弱々しいはずの佐々さんが今は力強く見える！

「わ、私は、小説を書きたいです！」

思い切って手を挙げて発言。

「私も、小説を書かせてもらっわ」

「俺も」

「俺も…」

私、会長さん、遠藤君、松平君が小説部門に手を挙げる。

あれ？

今、私の反対側に座っている会長さんが、ニヤリと笑った？
あれ？

今度は、ちょっと首をかしげて、にこりとぶりっこスマイル？
どういう事……？？？

その理由は、私の左横側を見るとわかった。

私の左横には、鈴ちゃんが座っている。

会長さんは、鈴ちゃんに勝ち誇ったように笑ったんだ。そして、鈴ちゃんの横には松平君。

会長さんは、松平君にアピールしたんだ。

ナットク。

女の戦いつて、怖い……（あ、そうそう、ちなみに松平君のもう片方の隣は舞ちゃんです）。

「私も！」

鈴ちゃんが会長さんに対抗して手を挙げる。

「あと、僕と、部長と……小説部門は、ダイさん、僕、会長、松平君、美和ちゃん、鈴香ちゃん、遠藤君で決定了。次は、詩部門です。詩を書きたいと思っている人、挙手！」

「はい」

「はあゝい」

「はい」

詩の部門には、天道君、雨風君、舞ちゃんが手を挙げた。

「では、その三人で決定了。では、笠原君は、ポエムでいいですか」

「オーケー！」

ニツコリと笑う笠原君の白い歯が見えた。

ウワ、爽やかだな。

金髪に白い肌、笑うと見せる白い歯……どれもが笠原君をより王子様的にしている。

「それでは、コンピューター室に移動しましょう。次からはコンピューター室で部会が行われるので、間違えないようにしてください。それと、コンピューター室では、コンピュータークラブから文芸クラブ用にきちんと領地をもらっているのです、そこ以外は使わないように」

まるで部長さんだな……。

どうやら、ダイさんは「部長」という名前だけで、ほとんどは副部長の佐々さんが仕事をやっているみたい。

すごい…変人だと思っついていてごめんなさい！

あなたは立派な超人です！

「失礼します」

コンピューター室…初めて見る。

コンピューターがずらりと並んでいる。

なんか、怖い……。

「どうぞ、文芸クラブの皆さん…」

「キャッー！」

「松平君、舞、コワア〜イ…」

「松平君、怖いです…」

「イヤ、あたしも、こ・わ・い」

会長さん、怖がってないし。

私の前に変な物体Aが出てきたら女子はみんななぜか松平君の方へ。
っていうか、コレなんですかーっ

怖いって、怖いって、怖いってー!!!

皆さんじゃないけど、誰か助けてくださいー!

「大丈夫、美和ちゃんは俺が守る!」

遠藤君が私の前に立つ。

「大丈夫だよ、美和ちゃん」

続いて、雨風君も私を守るように遠藤君の隣に立つ。

「僕も守るよ」

ニコニコ笑いながら天道君も私の前に。

「僕もでーす!」

笠原君が私の目の前に。

「……」

松平君……来てくれたのはうれしいんだけど、女の子三人をひきず
ってこないでください!

怖いですから!

と、ともかく、男子五人1（プラス女子三人）が、私の前を立つことに。

「あ、どうも。使わせてもらいます」

え？

佐々さんがふつうに変な物体Aと会話をしている。

「この人はコンピューター室の番人の先生だよ」

なあゝんだ。

そうだったのかー。

でも、なんか幽霊みたいでものすごく怖かったです、はい……。

「さてと、自分の名前が書いてある席に着いて」

えっと、私は……やった 一番すみっこ！

「俺、ここ」

隣に座ったのは……ま、松平君！

あの女子三人は？

と、遠いっ！

「松平君と女子三名が一緒にいるとウルサイので、席を離しています」

やめて〜。

また恨まれる〜。

せっかく誤解をといたのに〜。

「それでは、自分で開始してください」

よし、書くか……。

どんなのにしよう……ようせいのお話？

それとも、恋愛？

いやいや、ここは学園ものかな？

「皆さん！」

え？

珍しくダイさんが発言する。

「今度のクラブ発表会は来月です！それまでに、我が文芸クラブは、文芸誌を作り上げたいと思います。そこで、皆さんでテーマを決めて書きたいと思います。今回のテーマは……睡眠です！」

す・い・み・ん……？

みんな、口を開いて呆れている。

だって、睡眠だよ？

どういう事だよ……。

「もう一度、発表します！我が文芸クラブの文芸誌、「夢を描いて」。
発売日は、来月。締め切りは、来週まで！でないと、印刷クラブ
が印刷してくれないので。そして、テーマは、睡眠です！」

へええ。

夢を描いて……すてきな題名……。

ん？

んんんんん……？？？

今、頭にぴーんときたぞ。

小説の、アイディアが。

「夢」、「睡眠」……私の今回の小説は、眠り姫だ！

主人公は、王子様に憧れて、いつも夢見ている。

そんな主人公は、ある日夢に出てきた王子様にひとめぼれ
ずっと王子様と暮らしたい！そんな欲望が、主人公を睡眠におぼれ
させ、眠り姫と変化させてしまう。

さて、現実世界の主人公の王子様は、主人公を睡眠から救い出すこ
とができるのか……！！

ってかんじ？

うん、最高！

意気込んで打ち込もうとしたその時、どこからか「パチパチ……」と
いうキーボードを打つ音が聞こえてくる。

「え？ブラインド、タッチ？」

それは、私の前にいるダイさんが打つ音だった。

っていうか、ダイさんブラインドタッチですか？すごい……。

「僕の今回の小説はね、睡眠大好きな少女が、ある日公園でお昼寝
をしていた…すると、そこへカッコイイ人が現れて…？みたいな？
早く書きたい！」

さすが！

ダイさん、尊敬します！

文芸クラブで、私はどんどん小説を書いていくのであった。

12 テーマは睡眠…！？（後書き）

どうも。

今回は、文芸クラブ、本気モードの部会を描いてみました。

それにしても、テーマが「睡眠」って……っ！

アホ？って感じですね。

それでは、さようなら。

13 話題、話題、話題!!!

「あなたは、誰？」

「私は、夢の国の王子です。私と一緒に、この、夢の世界で暮らしませんか？」

「はい……」

こうして、眠り姫は夢の王子と一緒に、夢の世界で幸せに暮らしていました。

ところが、現実の世界では、幼馴染みのケンタ。

そして、両親達が、眠り姫のことを心配していました。

「王子様……私、そろそろ睡眠の生活を終わりたいわ……」

「ダメだ」

「え？」

「君は、ずっと僕と一緒に暮らす運命なんだ。現実の世界へは、もう戻さない」

「そんな……っ！」

こうして、眠り姫は夢の塔に閉じこめられました。

現実の眠り姫は、まだ寝たままです。
このままでは、眠り姫は眠ったまま……。
ケンタにも、両親にも会えなくなります。

現実の世界では、ケンタがどうすれば眠り姫を睡眠から現実の世界へと戻せるかを考えていました。
そして……

ケンタ……いや、現実の世界の王子様は、眠り姫に、口付けをしました。

「眠り姫……起きてください」

一方、夢の世界では、眠り姫が閉じこめられている塔に、騎士が現れました。

「ケン、タ？」

「違います。私は、隣の国の王子です。あなたを、助けに来ました」

「ケンタ……。私、現実の世界に帰りたい！今、わかったの。私の、本当の王子様は……ケンタだったの。本当は、ずっと、好きだったんだ……。だから、だから……ケンタに、会いに行きたい！」

「よし。それでは、私と口付けを……」

「え？ええ……っつっ！？」

こうして、眠り姫は騎士……いいえ、王子に無理矢理口付けをされて、眠りから覚めました。

「ん……ふあゝ。え？」

起きると、驚いたようなケンタの顔が目の前にありました。

「ケンタ……ケンタ！」

眠り姫は、ケンタに抱きつきました。

「眠り姫……」

「私の、真の王子様……大好きです……」

やったー！

終わった！

小説が、書き終わったー！

って、あれ？

もうコンピューター室に誰もいなーいつ……！！
なんで？なんで？

「遅い」

え……？

「ま、松平君……」

「小説に没頭するのはいいけど、時間は見た方がいいぞ」

「時間？」

時計を見ると、もう六時半。
つて、遅い！

「帰るぞ」

「あ……うん。待っててくれたの？」

「ああ。一緒の方向だしな」

松平君、優しい。

にしても、私どんなに没頭しちゃったんだろう……。

「おまえって、一人暮らし？」

「まさか！お姉ちゃんがいいます。いつも変なこと教えてくれて、しかも、家事はできないけど、アルバイトしてくれて……」

「そうか……」

か、会話がとぎれたーっ！
どうしよう、気まずいよ……。

「あの、さあ……そ、そう！あの、松平君の誕生日はいつ？」

「二月二日」

ん？

どこかで聞いた事があるぞ？

この誕生日……

「わ、私と一緒に！」

「えっ！？」

「本当に、二月二日？すごい！」

「マジ……？」

あ……うれしくないよね、そうだよね……。

「マジかよ……ヤバ。うれしい、かも」

「え？」

「何でもない」

空耳かな？

でも、運命って感じ？

恋なんてしてないけど、本当に運命……みたいな？

「あ、そうだ。松平君は……」

ーっっっっ、私はどんどん話題をつなげていくのです。

13 話題、話題、話題!!! (後書き)

どうも。

ちよつとだけ、美和ちゃんが書いている小説を書いてみました

夢の中の王子様…素敵

なあって夢見る作者です。

いつか、作者にも運命の王子様が現れたらいいな！。

それでは、またどこかのお話で

14 文芸クラブで眠りについて。

「失礼しまーす…」

まだ誰もいないコンピューター室に入ってみる。
今日もあの五人を振り払ってここまで来た。
だって、周りの女子からの視線が怖い…。

「誰もいないんだー…」

よかった。

でも、何しよう…。

昨日で小説は完成しちゃったし……。

「ふぁゝ…そういえば、昨日寝る時間少なかったなゝ。ね、眠くなってきた…」

ZZZZZZ….

こうして、私は夢の世界へと旅立ちました。

ん…？

今まで、寝てたんだよね…。
ふあゝ。

「ん……ふあゝ。え？」

気がつくと、私の周りに文芸クラブの男子達が集まっていた。

「みんな、何して……あぁつつっ！……わ、私の、寝顔、見られた…？」

みんな目を泳がせている。

つて、寝顔見られたの！？
困る！

よだれとか垂らしてないよね？
白目になってたりして！
どんな顔で寝てたんだろう……。
き、気になるっ……。

「ちよつとお……！私の寝顔も見てよお」

いや、会長さん、起きてる時点で寝顔とは言えませんか！

「舞の寝顔、カワイイよお？」

だから、起きてるんですっ！

「スー…」

おおっ？

鈴ちゃんは本当に寝てるのかな？

「私の、寝顔、どうですか？」

コラコラ、うつすらと目を開けて見ないの！

って、なんでみんな寝顔を見てもらいたいの？

恥ずかしいじゃない！

しかも、男子。

やだー！

「よかったね、佐々君。『夢を描いて』の表紙が決まって。うん、よかったよかった！」

「本当ですねー。よかったですー」

佐々さんとダイさんがこそそと話している。

表紙決まったんですか？

見せてー！

「おい、美和」

「はいいいっつっ」

私の苦手人物、松平君が真上から睨み付けてくる。
怖いですー！

「えっと、何の用でしょうか？」

おそろおそろ松平君に聞く。

「おまえ……人前で眠るな」

「え……？」

松平君が言ったのはそれだけだった。
なんだ、心配して損しちゃった。

「わかったか」

「はい……」

なんか、お説教されてる気分。
嫌な気分になっちゃったな！

私は、まだ知らなかった。
私が寝てしまったことで、クラブ発表会に大恥をかいてしまうということを。

14 文芸クラブで眠りについて。（後書き）

どうも。

ゆながりかです。

もうすぐ、クリスマス！

クリスマスの話を書きたいのに、季節合わないしっ！

次は、クラブ発表会を書いちゃおっかな。

もしかしたら、前編、後編と続く“かも”です。

まあ、次のお話でお会いしましょう！

さようなら

15 売り込みのグループ…

「おっはよ、美和」

「あ、おはよう、楓。今日はクラブ発表会かあ。私の作品を読んでくれるなんてっ！感動！」

「アハハ！美和は今日が出番だもんね。バスケ部はクラブ発表会では出番ゼロだよー」

そっか、楓はバスケ部だっけ？

今日はクラブ発表会。

この学校は、二ヶ月に一回文化系クラブの発表会を行っている。我が文芸クラブのように文芸誌を出すクラブもあれば、劇団クラブや吹奏楽クラブのように練習してきたことを発表するというクラブもある。

その他の体を動かすクラブは発表を見て回る。

「さてとっ！売り込みがんばろー！」

「あ、美和ちゃあーん！」

この声は、遠藤君？

「おはようございます、遠藤君」

「おはよ、美和ちゃん。今日は頑張ろうね！それと、売り込みの時間帯一緒になれるといいね！じゃあ！」

売り込みの、時間？

ああ、ダイさんが言ってたやつか……。

文芸クラブでは文芸誌を売り込むんだけど、我が文芸クラブは全員合わせて十一人。

最初に三人、次が四人、最後が四人で売り込みをすることになっていて。

そのグループはダイさんが決めるとか。

「美和、すごいね！。あの遠藤君と仲良くできるなんて！校内でも有名なチャラ男だし、けっこう人気あるのに……。あたしなんて一言もしゃべれなかったよ……」

あ、あたし、まさかあの五人になじんできちゃってる！？

ヤバイ！

文芸クラブでただ一人マトモなはずなのに！
もはや常識がおかしくなっている！？

「そ、そんなあー！楓は緊張しすぎだよー」

あははははーと軽く受け流したけど、内心、私の心に大きな傷がついた。

「そう、かな……？あ、じゃあ、私はこっちだから。美和も売り込み頑張ってね！」

「うん！文芸誌買ってねー！」

クラブ発表会は学園祭ではないので中学の人間しか入れないけど、お金の使い方は自由！

「あ、美和ちゃん来たー！遅い！」

文芸クラブが集まっている空き教室には全員集まっていた。つて、みんな気合入ってるなー。

舞ちゃんは巻き髪がいつもよりもクルクルに！

鈴ちゃんはちよつと髪をいじったりしている。

会長さんなんか化粧してるし！

「ごめんなさいっ！」

「いいよいいよー。さてと、全員そろったところで、売り込みの時間帯を発表します！ジャカジャカジャカジャカ…ジャーン！」

ダイさん、変な効果音つけないで下さい。

「最初のグループ！美和ちゃん、拓海君、稜君！」

え……。

何で私があのだと一緒なのー！

普通は舞ちゃんか鈴ちゃんか会長さんでしょ！

「ちよとー、何で舞が松平君と一緒にじゃないのー！」

「そうです！」

「……ダイ？あたし、松平君と一緒にだよ……？」

女の子三人がダイさんに攻撃！

勇者ダイは、この怪獣三匹の攻撃を……

「はい、苦情はスルーします！」

こ、攻撃をスルーしたあ……！！

さらに怪獣三匹に攻撃を続ける勇者ダイ！

「次のグループは、僕、鈴菜、鈴香ちゃん、舞ちゃん！」

「ええ………！！」

「何で男の子がダイさんなんですかー」

「……嫌」

怪獣三匹に大きなダメージを与える……！！

だが、怪獣三匹は何とか攻撃に耐え、勇者ダイに立ち向かっていく……！！

「この時間帯は一番混む時間帯なんだ。ここは女の子と部長の僕がやろうと思って。僕だってえ、男の子達と一緒にがいい……」

勇者ダイは、怪獣三匹に最後の攻撃を！

怪獣三匹、勇者ダイに敗れたり……！！

「で、最後は佐々君、翔君、蓮君、司君だよ それじゃあ、最初のグループは準備を始めてねー。他のグループはそれぞれのグループで行動してよー」

え……？

それって、つまり、自由時間もこの二人と一緒に……？

神八、ワレヲ見放シタ……。

最悪だ……。

「行くぞ」

「行こう、美和ちゃん」

「……」

私はこの二人にひきずられるようにして、空き教室を出た。

「よし、準備は完璧」

「ヤッター！じゃあ、売込みを開始する？」

「……」

私はさっきからずっと黙ったまま。

こうなったら、クラブ発表会中ずっとしゃべらないんだから！

「売り込みは、クラブ発表会開始の放送が流れてからだ」

「あ、そうかあ」

「……」

無視だ、無視！
断固シカト！

「美和ちゃん……」

……っ！！！！

どう、いう事……？

今、頬に何か暖かいものが当たっているような……？
これって、まさか……

「な、何するのよっっっ！！！！」

頬にキスしてきた雨風君を突き飛ばす。

「やっとしゃべった。ったく、美和ちゃんは頑固だなー」

ニコニコと笑う雨風君。

私に、話す機会をくれたの？

けっこっ…優しいところもあるじゃない。

「おい」

「あ……た、拓海……」

「え？」

「おまえ、今、美和に何した…あ？テメエ、殺されたいのか…」

ヒーツツッ！！！！

松平君、怖いですー！

やめてー！！！！

「あの、その……じゃあね！」

そう言つて、雨風君は逃げ出した。

それを松平君が追いかける。

こんなおにごっこが、クラブ発表会開始の放送になるまで行われるのだった。

15 売り込みのグループ…（後書き）

どうも。

ゆながりかです。

最近、投稿するのがキツイ！

忙しすぎるー！

部活の試合とか、勉強とか……ああー！ー誰か、助けてー！……！

16 売り込み開始！

「ただいまより、中学のクラブ発表会を開始します。係の人は、それぞれ店の位置に着いてください」

クラブ発表会開始の送が流れる。

よし、ついにクラブ発表会の始まりね。

ドキドキするー！

「よし、開けるぞ」

文芸誌には今まで白いシートがかかっていて、文芸誌が見れないようにしてあった。

そして、とうとう文芸誌が見れる！

「ジャジャーンー！！」

雨風君の無駄なかけ声とともにOPENする文芸誌。

どんな表紙なんだろう……。

わくわくする……。

「え………？」

「………っ」

「わお！あの時のかー。カワイイ！」

表紙には……女の子の寝顔がどアップで写っていた。
さすが、テーマが睡眠なだけのことはあるな……。

一瞬、そんなのんきなことを考える。

この女の子が誰かに似ているなあ……。

……。

……。

っええ！？

こ、これって、私じゃん！

「な、なんで、私、が？」

「おまえが文芸クラブで寝てた時に部長達が写真を撮ってたんだよ。
おまえが寝ているすきに、めがねもはずして、ゴムもとって……」

私の質問に答えてくれるのはうれしいんだけど、そんなにその写真を
ガン見しないでください。

写真でも恥ずかしいです……。

って、そんなこと言ってる場合じゃないし！

「これ、捨ててください！なんで私が……」

「あ、そうだ！僕、いいこと思いついちゃったあ」

ちよっと！

私のセリフを言い終わらないうちにしゃべらないでよ！
作者に私が怒られるんだから……っ！

「あのね……」

雨風君がその“いいこと”とやらを言おうとした時、文芸誌の店に人が入ってきた。

「あ、この子マジカワイイじゃん!」

「うわ、めっちゃタイプ!これ、ください!」

「はあい、ありがとー」

雨風君がにこにここと愛想笑いで客をもてなす。

って、みんな何言ってるの!

カワイイって、馬鹿じゃない?

どこが????

「っていうわけで、美和ちゃんは人気だから、メガネとゴムはずしてここに座って……。看板娘になればいいじゃんっ!」

は?

かんばんむすめ……???

ムリムリムリー……!!

わ、私にそんなのできるわけないってえ!

「美和、やれ。売り上げを上げるチャンスだ。そのまま次のグループまでつなぐぞ」

ええ~~~~っ!?

やだよーっ!

「早く早くー」

「できれば、寝ろ」

「は！？無理！いきなり寝ろって……」

「美和ちゃんは単純だからー…はい、コレ見てー」

ムムツ！

単純って何ですか、単純って！

失礼な！

雨風君がポケットから取り出したのは、糸の先に五円玉がついている物体。

って、それって、もしかして…

「催眠術」

私だってそんなのにひっかかりませんっ！

「はい、見てみてー。よぉく見てー。あなたはだんだん眠くなる」

眠くなんかありませんっ！

そんな子供じみたおもちゃで眠れるわけありませんっ！

「あなたはだんだん眠くなる」

眠くなんかありませんっ！

ね、眠くなんて……

「眠くなるーったら眠くなる」

ね、眠く、なんて……ムニャ……スー……。

こうして、私は深い眠りについたのでした（勝手に殺すなあっ！！！）。

その後

「本当に寝ちゃった」

「単純すぎ……」

「あ、そうそう……拓海、僕、この子に惚れたかも」

「は？」

「拓海、真剣なんでしょ？僕も真剣だから。ライバル宣言……かな？美和ちゃんは必ず僕が奪う」

さっきまでのチャラチャラした稜と違って、真剣な目つきの稜に拓海はたじろいだ。ここで負けてはいられない。

翔・司・蓮は惚れやすいが、この稜までが美和に惚れるとは……さすが、美和。

ライバルがまた一人増えたな……。

「俺も、本気だから。こいつだけは、誰にも渡さない」

拓海も稜を睨み返す。

しばらくの間、睨み合いが続いた。

「すいませーん…おつ、何この子、かわいい！って、美和さんじゃないすかっ！か、かわいい…」

「いらつしゃあゝい 美和ちゃんは、この本の表紙にも載ってるよゝ。さあ、買って買ってえゝ」

一瞬でにこにこ客に笑いかける稜に、拓海は力が抜ける。つたく、こいつは切り替えが早すぎる…。

にしても……

美和、おまえ、無防備すぎだ…。

拓海は、客も稜も誰も見てないことを確認して、美和の頬にキスをした。

稜、これで俺も同じだ。

こうして、美和の密かな活躍によって、文芸誌はどんどん売れるのだった。

16 売り込み開始！（後書き）

どうも～

ゆながりかです！

今日は二つクリスマスパーティーの予定があつて、投稿する時間が遅くなりました。

これから遅くなることがある（もしかしたら投稿できない日もある）かもしれませんが、多めに見てください……。

でも、だいたい一日一話投稿です。

もし出かける用事があつて、投稿できない日はなるべく前日に知らせます。

なるべくですけど……。

それでは、次のお話で～

17 / お店を回ろう！前編

夢を見た。

素敵な、王子様が現れたんだ。

私は、その人に、恋をした。

どこかで、会ったことがあるような…懐かしい、王子様の感じ。
でも……

「ん…え？」

起きてしまった…。

しかも、王子様の顔を忘れてしまったあああ！！！！
最悪…

「起きたか…」

「あ、美和ちゃん あーん 起きたあ？さ、僕達と一緒にお店を回ろう
！」

「え……？あ、私……寝ちゃったの？」

売り込みは…？

私、何もしてない！

「ああ、売り込みは、おまえのおかげで大成功。約半分売れたぞ」

「そうそう。すごいよ、美和ちゃん さあ、行こう!」

私のおかげ?

何もしてないのに……。

まあ、いいか

「じゃあ、私は楓を探しに……」

「ダメだ。俺達と……」

「一緒に行くんだよ」

うつ……!

よりによつてこの二人とお!?

嫌だ……!!

「ま、まず……めがねを、返して、くださいっっ」

「ああ……嫌だ」

「ダメだよ。今日は没収」

そ、ん、なあああ……!!

だって、めがねがないと何も見えない……!

「返して、くだ、さい……」

「ダメだ」

「前が、見えません」

「それなら……」

雨風君が私の手をとる。

つて、なんで？

「こうやれば、いいでしょう？」

たぶん、にっこり笑っている雨風君。

全然よくない……！！

なんで、手をつながなきゃいけないの……っ！

「行くぞ」

さりげなく私の手をとらないでください、松平君！

「そうだ 今日一日は僕達の事を名前で呼んでよ。じゃないと、ずっとめがね預かったままだけど？」

「え……っ！そ、そん、なっ！めがね……。わかりました……」

はあ……なんで、こんな事に……。

私みたいな不細工よりも、会長さんや舞ちゃんや鈴ちゃんみたいな
カワイイ女の子達にアピッてください。

「あ、マンガ研究会の漫画本だあ！美和ちゃん、行こう！」

雨風君がマンガ研究会のコーナーに行こうと手を引っ張る。
い、痛い……っ！

「おい、あれって、バンドの演奏会じゃね！？行こうぜ！」

へえ、松平君ってバンドに興味あったんだ…。
って、そんなことよりも手を離してえ！！！！

「美和ちゃんは、マンガ研究会のコーナーに行きたいって！」

「美和はバンドクラブのコーナーに行きたいって言うだろう！」

わ、私を挟んでケンカしないでえ。
耳が、キンキンします。

「み、美和！？」

「その声……楓？助けて！」

「見せつけるわね。いいな」

い、いいなーって……。
どこがっ！！！！

この手が引きちぎれそうな状態のどこがいいんですかっ！
教えてください！

「うつ、ウ……」

「あ、美和ちゃあーん！！！！」

「美和ちゃん！？」

「美和ちゃんですかー？」

すっごく嫌な予感が……。

この声って……

「遠藤君、天道君、笠原君っ!？」

この三人が来たら……

「美和ちゃんは俺のものだっ!」

「僕的美和ちゃんだよっ」

「美和ちゃん」

また面倒くさいことに……。

っていうか、やめてーっ!!!

「すごい、ハーレム状態……」

楓の声が聞こえてきたけど、無視。

っていうか、ハーレムってなんですかーっ!!!

「だ、誰か…助けてえええーっ!!!」

17 お店を回ろう！前編（後書き）

どうも。

ゆながりかです

えっと、今日も無事投稿！！！

そして、今日言うことは……メリークリスマス……！（イブですけどね）

子どもが夢見る日、クリスマス……！！

とうとう来ました！（明日ですけどね）

ツッコミがさえまくりです……！（私がつっこんでいるんですよ！）

まあ、そういうことで

じゃーねー

18 / お店を回ろう！後編

「美和、あんたって……」

「え、何、楓」

「愛されてるのね」

「ちがー！ー！ー！うつつ！ー！ー！私は、この人達に女として見られてないのっ！」

「はいはい、そうですかそうですか……」

「信じなさい！ー！ー！」

本当なのにー。

まあ、腕を引っ張られながら言ったら説得力ないよね……あたりまえか。

にしても……痛い。

そろそろ、周りの目がかなりキツイ。

特に、女子の目が。

「いつつも拓海と美和ちゃんが二人きりでずるいからー、今日は僕達で順番に美和ちゃんと遊んでいいって事にしよーよー」

雨風君が変な事を提案する。

って、二人きり！？松平君と！？
ないない…ありえない…。

って、順番に、私と、遊ぶ……？

嫌だーっ！

私は楓と女子二人でお店を回りたいのー！！！！

「いいじゃん！」

「賛成です！」

「おもしろそうだね」

「……反対」

反対意見の人も約一名いますが、賛成派が四人で、この案は採用されましたー。
はあ……。

「じゃあ、僕からねー。行こう、美和ちゃん」

にこーと笑って（？）私の手を引っ張る雨風君。
ぼやけているから、視界が……。

「稜、十分だぞー」

後ろから遠藤君の声が聞こえてくる。
十分……長い…。

「美和ちゃん、どこに行く？」

「え……どこでも、いいです……」

「じゃあさ、僕のおすすめいいカナー？」

はあ……おすすめ、ですか……どうぞ、ご自由に……。

「よし、決定　十分しかないから、急ごー」

十分“しか”ってどういう事でしょうか？

私には、十分“も”ですけど？

私の手が強く引っ張られる。

視界がぼやけているから、人に当たりそうで怖い。

「着いたよー。僕のおすすめは……ジャジャー！アクセサリークラブでえす　カワイイ小物がいっっぱいあるんだー」

おお、アクセサリークラブ……！！

さすが、女の子みたいにカワイイ男の子、雨風君。

乙女の気持ちをよく理解してますねー。

「行こうよー。ほら、カワイイ！って、美和ちゃんは見えないか……あつ！僕が買ってあげるよ！待ってて！」

勝手に私に買うと決めつけて雨風君はどこかへ行ってしまう。

「うーん……うん、コレがいい！あ、これください！」

私にアクセサリを当てたりして選んでいる（かな？）。

雨風君の事だから、カワイイの選んでくるんだろーなー。

私、似合わなかったらどうしよう……雨風君の方が似合うよ……きつ

と…。

「買ってきたよ！はい、これ。プレスレットなんだー。絶対似合うから！つけてあげるよ」

私の腕にプレスレットをつけて、満足した様子の雨風君。

「はい、次俺！」

雨風君を強引に突き飛ばして入ってきたのは、遠藤君。

茶髪が目印の、チャラ男。

すごいな、これが本物のチャラ男かあ…初めて見たんだよね…初めて会ったとき、ちよつと感動

「行こうか、美和ちゃん あ、美和って呼びすてでいい？」

「うん、別にいいよ」

「ヤッタ」

たぶんガッツポーズをしている遠藤君。

その後も、彼は一方的におしゃべりを続けて、私は「はい」とか、「うん」とか、「そうだね」とかあいづちをうつと喜んでいた。

これが、女の子を口説くテクニクかあ。

すごい……っ！

「美和…俺、話したい事があるんだ…」

今までのチャラチャラした遠藤君とは違って、急に真剣になっている。

チャラ男も、真剣だとこんなふうになるんだ……。
そういうギャップにも、女の子は弱いんだろうな……。
私も一瞬ドキッてきちゃったし…。

「俺…おまえのこと……」

「はい、そこまでー」

ちょうどいいところに天道君が入ってきて空手の技（かな？）で吹き飛ばす。

「それじゃあ、次は僕だよ。行こうか、美和ちゃん」

「はい…」

正直、疲れてきた。

はあ……もう、疲れる……。

「どこに行く？あ、そうだ！映画研究会が五分のアニメーションをつくったんだって！すぐそこなんだ、行こう！」

「映画？あ、はい。いきます」

映画研究会のアニメーション、かあ………どんなだろう…見てみた
いかも。

私達が行った映画研究会のコーナーでは、ちびっ子がいっぱいいた。
天道君、私のために席を探そうとしているのはいいんだけど、その
ために他のお客さんを殴り倒さないでください………お願いします…。

「ここに座って！」

他の人を蹴散らした後のいすに私を座らせる天道君。
そ、そこまでしなくても……。

五分間のアニメーションは、子ども向けのスーパーマン物語（だと思っ）。

アニメーションはよくできているんだけど、内容がありきたり（音ただだとよくわからない）。

こういうの、すぐくおもしろくない。

「おもしろかったね」

天道君が私に笑いかける。

「うん、おもしろかったです」

愛想笑い。

はつきり言えばおもしろくないからっ！

「次は僕でーす！」

笠原君が超ハイテンションで私の目の前にやってくる。

「どこへ行きましょーかー」

笠原君は、その辺を動き回ってから公園のベンチに座った。

「疲れましたねー」

おまえのせいじゃボケ！

何も考えずに歩くんじゃない！

無駄に体力使っただろう、が……

急に世界が回る。

何、で？

地震？

でも、そんなんじゃない……私が、回ってる……？

「美和……っ！」

「ま、松平、君……？」

ベンチから倒れかけた私を支えてくれたのは、松平君だった。

「蓮！こいつがふらふらしてる事になんで気づかないんだよう」

「み、美和ちゃん……っ。ど、どーしま、しよー。どーしましよー……」

その後、私は気を失った。

頭の中では、笠原君の「どーしましよー」がずっと流れていた……。

18 お店を回ろう！後編（後書き）

どうも。

ゆながりかです！今日は早めに投稿

稜君、強敵ですね！。

あっという間に拓海君から美和ちゃんを離してしまうなんてっ！

まあ、カワイイから憎めないんですけどね…。

ではでは

19 売り込み終了！

ん……。

おでこにヒンヤリと冷たい物が当たっている。
ここは……どこ？

「あ、起きた……」

私の横に松平君（？）が座っている。

「松平君……？」

「これ、めがね……悪かったな、おまえに無理させて。止めなかった俺が悪い」

松平君にめがねを手にもせてもらっ

たあ、これでやっと世界が見える。

ぼやけていた世界とはおさらばだあっ！

「本当ですよ。目が悪い人にめがねを外させて、しかもたくさん歩かせて、フラフラになるまで放っておくなんて！」

保健室の先生の声がする。

つてことは……保健室？

どうりで薬品のおいがプンプンするわけだ……。

「あの…今、何時ですか？」

「今は、一時半だから……第三グループね」

えつと、遠藤君、天道君、笠原君、佐々さんが売り込み、かあ…。

「これからは、気をつけてくだ……」

先生が言い終わる前に、保健室の扉が開いた。

「美和ちゃんっつつ」

「え……？」

「ギャツ」

「……」

先生を突き飛ばして私の目の前に立ちはだかったのは、ダイさんだった。

なんでここにいのの？

「お願い、店に来てえ！美和ちゃんがなくなちゃ、商売なりたたないんだ…。最初の売り上げから、急に下がっちゃって…。お願い……！」

ダイさんが土下座しながら叫びまくる。

そ、そんなに叫ばなくても……。

「美和ちゃんっ」

涙でグシャグシャになった顔で私に拜んでくるダイさん。
ちよっと（かなり）怖い……っ！

「わ、わかりました！わかりましたから、私の膝にスリスリするのはやめてくださーい！……！」

同性愛者だから、女の子にしているという自覚がない。
私が男だったら、ダイさん恥ずかしがるだろうに……。
だから、松平君も止めてくれない。
お願いだから、止めてくれー！！！！

「あ、ありがとおつ。早速、来てくれえ」

「ま、待ちなさいっ！病人を行かせるにはいきませ……」

「失礼しましたあ」

先生の言葉を見殺して私の手をむしりとり突っ走るダイさん。
なんでこんなに必死なんでしょうか？

「だって、文芸誌が売れなきゃクラブ合宿できないよ？合宿するた
めには倍売らないと……」

合宿っ！！！！

やりたい！

こっぴどいの、夢でした！

でも、倍売るのが？

無理じゃないでしょうか……？

「大丈夫、美和ちゃんが座っているだけで商売繁盛間違いないし！」

そんなことを言っている間に、文芸クラブのコーナーに着いた。
中はガラガラで、みんな暇そう。

「そうだ、美和ちゃん、コスチュームに着替えてよ！他の女子三人は、チラシを……」

はい？

こすちゅーむ？？？

女子三人を見ると、それぞれがネグリジエ（かな？）を着ている。
枕を持って、完全に売り子状態だ。

わ、私にもこれを着ると言うのですかっ
なにせ、私はフリル、リボン、花柄という女の子の憧れベスト3が
似合わないのです！

その三つがネグリジエにはそろっているー！！！！

胸元にはピンクのリボン、小さな花の模様に、スカートの下にはフリル段重ね……！！

絶対に似合わない！

「嫌です」

「はい、着てー。女子、着替えを手伝ってあげて」

たとえ嫌でも、女子三人の力には勝てっこない（いつのまに三人はダイさんの手下になってるんだ？）。

気がつけば、私はゴムもほどかれ、めがねも外されて完全にコスチ

ルームに着替えていた。

「よし、そこへ座ってて！女子三人、チラシ配ってきて！」

その後、女子三人のかいあってか、客が徐々に入ってきた。
気がつけば、コーナーには人がいっぱい。

「佐々君、この作戦で」

「そうですね、部長」

ひそひそとダイさんと佐々さんがしゃべっていたのが聞こえたけど、あえて無視しておこう。

今は、幸せな気分になりたい。

でも、私はこの後ダイさん達の話し合いを無視したことを後悔する……。

19 売り込み終了！（後書き）

どうも。

今日は投稿めっちゃ早めです。

ただ、明日は投稿できるかどうか不安…たぶん、大丈夫だとは思っけど……。それでー。

20 姉よ、マトモに生きてください。

「王子！お待ちください…私も…私も、戦いへ連れて行ってください！」

「そんなことはできません、姫。姫を危険な目に合わせるなどということをすれば、王子失格です」

「そんな…っ…！！私…私なら、大丈夫です！王子と一緒にならば、たとえどんなところにもついて行きます」

「姫……」

「ちょっとー、美和？遅刻するわよー」

姉の声で我に返る。

あっ……！！

徹夜で小説完成させようと思っていたのに！

今度のテーマは「戦い」。

そして、三つまでなら投稿可能……だから、今日一個書き上げてしまおうと思っていたのに……！！

「美和！遅刻よ！」

「わかったよー。お姉ちゃんは黙っててよ……！！」

はながたさき
花形咲。

私の姉で、ただいま彼氏は五人、プロポーズされた回数は二十回、そして告白された回数はなんと……七十五回……！！

なあんていう魔性の女である。
ピッチピチの女子高生の姉は悪女度をどんどん上げて、ナンパされまくり。

そして、調子に乗った姉は私にお色気を教え始めたというわけ。

「何よー！ケンくうくん、美和つちが反抗期だよお。まあー、私、困っちゃっ」

今姉の彼氏？のケン君が来ているみたい。

つたく、出たよ、お色気光線。

これに、たいていの男はだまされるんだよね……。

「エヘヘ。大丈夫さ、咲ちゃん。反抗期って言つのは、そのうち直るんだよ？だから、安心して」

一生懸命かつこつけているのが丸分かり。

それに、デレデレしすぎ！

「さっすがケン君！もっと好きになっちゃっ」

「エヘヘヘヘ　　そうそう、プロポーズの事なんだけど……」

「あ、ごめん。用事思い出した。美和、早く行きなさいっ」

姉はプロポーズの話になると話題をそらす。

っていうか、逃げる。

そんでもって、彼氏？のトール君（透君）のところにデートにでも行くのかな？

あ、それとも、彼氏？のマツ君（正樹君）の家に遊びに行くのかな
）。

まあ、彼氏？のたろーちゃん（太郎君）とバイト？

やっぱり彼氏？の飯塚君と真面目にスクールライフかなー？

「はい。いつてきまーす」

ガラガラ…

「あ、美和ちゃあゝん」

「美和ちゃん!？」

「美和ちゃん……」

「美和……」

いつもの五人が教室に入ったとたんに近寄ってくる。
いや、だから、目立ってます!!!
視線が厳しい!!!

「はあ……また、いつもの五人かあ……って、えっ」

五人……？

1、2、3、4……？

よ、四人……っ!?

「だ、誰が、いないのっ」

「ああ、蓮だよ」

「蓮か」

「風邪か」

「……」

へえ、この五人でも風邪をひくんだ……。
意外。

だってさ、無敵ですって感じだもんね。

「あっ!そっだ!」

なんか、嫌な予感……。

「俺達でさ……」

何を言うつもりですか、遠藤君。

「蓮のお見舞いに行かない？」

チーン……。

はぁ……

20 姉よ、マトモに生きてください。(後書き)

どうですか？

ゆながりかです

サブタイトル、無視してくださいっ！……！
お願いします…。

21 ‘モテモテですね、王子様方

ああ、平和…。

こんな時間が、いつまでも続けばいいのに……。

「おい、美和ちゃん、行くぞー」

「美和ちゃあゝん」

「美和ちゃん、早く」

「美和、早くしろ」

私の平穏な日々は、約四名の声で壊される。

はあ……。

まさか、朝のジョークが本当だったとか言わないでよ？

だって、あの王子様グループの笠原君の家に行ってお見舞いって…
ありえない。

笠原君って、王子様グループでも一番王子様っぽい人じゃん？

今日楓から教えてもらった情報によると……

「いい？あんたも王子様グループと仲がいいなら、このくらいの情報を集めておかなきゃダメ」

はあ…って、仲はそんなによくないと思うけど……（特に松平君）。

「王子様グループには、実は影の名前があるの」

へえ。

って、王子様グループって言う自体、影の名前なのでは？

「王子様グループでは、モテている順から、ナンバーワン、ナンバーツーって言うんだけど……」

どこかの戦隊物のアニメですかっ！

「松平君がナンバーワン、稜君がナンバーツー、蓮君がナンバースリー、翔君がナンバーフォー、司君がナンバーファイブってわけよ分かった？」

……くだらない情報をどうも。

でも、何で松平君だけ名字呼び？

「ああ、それは、私が一年生松平君ファンクラブに入っているからファンクラブでは、絶対に名前で呼んではいけないの。みんな公平な立場で松平君に近づこう！というわけ」

ナルホド。

って、ファンクラブに入ったの？

知らなかった……どうして教えてくれなかったのー。

「だって、最近美和の近くに松平君達がいるし、まあ、恥ずかしくて近寄れない……それに、美和は放課後は文芸部にすぐにいつちやうでしょ？ 帰る時間も違うし、言うひまないってえ……」

あ、そっか！

「まあ、そういうことよ？この程度の情報なら、いつでも教えてあげるから　じゃーねー」

語尾に　マークをつけて去っていった…爽やか！？

というわけ。

つまり、笠原君はモテモテランキング第三位！！そんな人の家に
いけますかーっ……！！
無理だな、うん。（断言）

「ってわけで、私は帰…」

「さ、行くぞ美和」

ヒーツ……！！

松平君、ひきずらないで！。

あのクラブ発表会以来、松平君はめがねを外すのをやめてくれた。
よかったよかった…

「あ、の、私、は……」

何とか言い訳を考える。

文芸クラブは運悪くお休み。

週一回（木曜日）には先輩達の極秘会議があるからその日だけはク
ラブはお休み。

そして、今日は……木曜日…。

悲劇だ――っつっ！！！

「美和：言い訳は聞かない。行くぞ」

松平君の迫力がすごい。

そして周りからの視線も。

楓が完全に睨んでる――！！！！

怖い、怖い、怖いから――！！

「そんなに、したしいってわけじゃないし――」

「いいから、来い」

「キャ――」

ズルズルと引きずられていく。

このままではいけない！

決心した私は、がんばって引きずられないように！

だが、松平君を応援している遠藤君達が松平君の手助けを！

いくら私でも男四人にはかなわない。

つてわけで、笠原君の家まで引きずられていくのである……トホホ
……。

21 ‘モテモテですね、王子様方（後書き）

どうもー。

ゆながりかですー

今日も短いです！

長めを期待していた方に申し訳ない…。

それに、今日でお見舞い編を終わらせようと思っていたのにーっ！
はあ……。

ま、しょうがないかあ

そういうわけで、さよーならー （どこがそういつわけなんだよー）

22 ヴァーストキスを奪われて。

……。

言葉が出ない。

なんて言えればいいの？

「あ、あの…ここが、笠原君の家？」

「うん、そうだよ」

遠藤君が笑顔で答えてくれる。

笠原君「王子様」豪邸

って想像してたんだけど、想像とはかなり違う。

だって、私の目の前にある家は……貧乏屋敷。
今時！？

「アイツの親は貧乏でさ、アイツのオヤジは結構お金持ちだったんだけど、おふくろがその金すべて酒につきこんだまっで。で、オヤジさんが今必死で働いてるんだ」

……。

かわいそう。

王子様にそんな事情があったなんて。

ごめんなさい、行きたくないなんていつちゃって。

「まあ、アイツもアイツだけど」

松平君が家を睨む。

って、どうということ？

アイツもアイツって？

だって、笠原君は被害者でしょう？

なにはともあれ、入ってみなくちゃ！

「おじゃましまーす…」

笠原君宅へ一歩足を踏み入れる。

今時インターホンがなくて、廊下なんてギシギシなっている。

松平君たちは何も気にせずズンズン進んでいるけど、あたしはかなり気になるー。

「おい、蓮。美和が来たぞ」

松平君が乱暴に一つの部屋のドアを開ける。

そこには……

王子様のベットが置いてある！？

何で？

貧乏なんじゃないのー？？？

「ん……」

笠原君はまだ寝起きらしくベッドから起きようとしなない。

っていうか、どうということ？

意味が分からない！……！

「こいつは、オヤジさんの金を使って自分の部屋を王子チックにしてるんだ。おかげでオヤジさんは赤字さ」

は？

お父さんのお金を使って……？

あ、ヤバイ。

スイッチ入ったかも。

「笠原君！！！」

「んゝ…なんだい、マイスイートハニー？」

まだ寝ぼけているらしく、意味の分からない言葉でしゃべりかけてくる笠原君。

「なんだい、じゃない！ちょっと話したいことが…」

熱血モードの私にかまわず笠原君はようやく起きたみたい。

「ああ、おはようのキスカい？まったく、ハニーは……」

笠原君の手が背中に戻される。

（ど、どうなってるのよー！！！！）

「笠原君、あなたって人は……」

笠原君にかまわず熱血モードはしゃべりだす。

（お願い、止まってー！！！！）

どんどん笠原君に引き寄せられていつて……

思いつきり笠原君の顔が近くなる。

びっくりして、目をつぶってしまった。

（ん？んん？？？こ、これって……き、キスされてるー！？）

熱血モードの私は笠原君を突き飛ばした。

（ナイス！熱血モード！）

「お父さんが働いたお金をこんなくだらないものに使うなんて最低です！笠原蓮！！あなたには、お父さんに恩返しをしてもらう義務があります。本当の王子様は、影で大きな努力をしている人のことを言うのです。あなたのようなわがままな人のことを言うにあたりません。あなたは、王子という肩書きだけを持っているただの無礼な人間です！さあ、改まって出直してきなさい！」

熱血モードは、言いたいことをすべて言い終わると、気がおさまったらしく、私にもどってくれた。

「あ……」

また力が抜けて倒れてしまう。

「おいっ！蓮！テメエ……」

誰にも支えられることなく、私の体は床に落ちていく。

つて……き、キスされたああ~~~~！！！！！！
最悪……。

「か、笠原君っ！私…私、ファーストキスだったのよっ！最悪最低

「!さようならっ」

怒りが収まらずに笠原君の家を飛び出してしまふ。

最低っ!最低っ!!!!

もう、二度とあんなやつにかかわるもんかつ!

アイツなんて、アイツなんて……だいつ嫌いだああーっつつつ
!!!!

22 ヲーストキスを奪われて。(後書き)

どうでしたか？

ファーストキス、拓海に奪わせようと思っていたんですけどね。
予定変更！！！！

王子に奪わせちゃいました

拓海の怒り爆発！！！！

キャハハ、おもしろい展開になってきたあゝ 最低

美和っち、がんばってねえゝ(オーッホッホッホ！)

それでは、さようならゝ (ご機嫌)

23 鬼ごっこは楽しいな…

ファーストキス……。

はぁ……。

「どうしたの、美和。元気ないね」

「あ、楓…おはよ」

作り笑いでごまかす。

でも、今は気分最悪。

ファーストキスは、運命の王子様が奪ってくれるんだと思っていた。

あの、絵本の王子様みたいな。

なのに……

「はぁ……」

「美和、ため息ばかりだと、幸せ逃げるよー？」

「うん……もう、幸せないから……」

「はっ！？何言ってるのあんた！美和、死んじゃダメ、死なないで」

勝手に勘違いした楓が「死ぬな死ぬな」とわめいている。
はぁ……。

「あ、美和ちゃんだ」

っ！！！！

「美和、王子様達が来たよ……って、ええっ！？」

あの声は遠藤君！？

ってことはみんないるよね？

逃げろー！

一目散に教室めがけて走る。

今日は避けよう。

それしか道はないっ！

「花形美和、12歳、ただいま校内暴走中です！」

そんな声を出して無理矢理明るく走る。

そうじゃないと涙出てきそう……。

はぁ、最悪だーっ

がらがらっ……

まず机に荷物だけ置いてまた廊下へ飛び出す。

先生が来るギリギリまで走り回ってやる！

「美和！」

松平君……？

松平君なら……って、ダメ！

美和、まどわされちゃだめよ！
自分に暗示をかけて走り出す。

「お、おいっ！待てよ！」

さすがに松平君の運動神経だと捕まるのも時間の問題？
ならば……

「拓海……ごめんね……？」

めがねをとって、後ろを振り向きながら笑う。
姉が教えてくれたんですけど、女は真っ正面よりも後ろから振り向
いた方がより色っぽく見えるんだって！
ということで、後ろからお色気作戦！

「っな……！」

一気に足がもつれた松平君。
よっしゃ、大成功！

このわずかなタイミングを見逃さずに走ります！
ダーッシュー！

「私、ファイトですー！」

こうして、私はギリギリまで逃げ切ったのです。

「よし、授業終了。解散っ」

先生の言葉とともに駆け出す。

さっきみたいにギリギリまで逃げ回る作戦でいきましょう！
まずは、授業中に練った作戦で……

「ねえ、男の子達…手伝って？」

まずは他の男子達を手なずけさせます。

「はーいつ」

明らかにおかしい男子を味方につけ、いざ出陣！
って……

「何言ってるの」

お色気にかかってないヤツがいるー！

これは一大事！

あの技をためさなくては！

「ねえ……私……」

スタタタとその男子に近づいて、肩に頭を乗せる。

こ、これは恥ずかしい……っ！

でも、逃げ切るため……。

「手伝ってくれたら、好きになっちゃうかも」

これで、上目遣いにそいつを見上げる。

「わかりました！！！」

よし！

お姉ちゃん、ありがとーっ！

「それじゃあ、男子達、あの五人を引き留めておいて」

「「「ラジャーッ！！！」」」

ウヒヒッ

上手くいった！

じゃあ、どこに隠れようかな……石灰倉庫は見つかるから……屋上！！！！

「レッツゴー」

この鬼ごっこ、意外に楽しいかも

スキップで屋上まで上がると、一名先客が。

この人も、誰かに追われているのかな？

って……

「さ、佐々さんじゃないですかっ」

そこにいたのは、佐々さんでした。
何で？

「あ、美和ちゃん！今校内で噂が流れてるよ。花形美和VS王子達の鬼ごっこ。僕は見物しに来たんだ。ここからだとよく見えるよ」

佐々さんがいる横から見ると、確かに校内がよく見える。

あつ！

あれって、遠藤君と…笠原君。

こっちは雨風君。

あそこには天道君。

あれ？松平君は？

「やっと見つけた」

「ま、松平君っ！」

や、ヤバイ、見つかった……！

23 鬼ごっこは楽しいな〜…（後書き）

どうも〜

ゆなかりかです。

もうすぐ2010！

早いな〜。

もう書くことがないー！

ってことで、さよーならー

24 鬼ごっこは永遠不滅!!!

「え、と、その…」

「どうして逃げた」

「だ、て、昨日、キス…」

「それに俺は関係ない。蓮だって、わざとやったわけじゃない。俺達なりに傷ついてるんだけど」

で、でも……。

何か言おうと思ったけど、ギロリと睨む松平君に負けた。
ごめんなさい…。

「ごめんな、さい…」

「……蓮が悪いんだ。アイツ、よくも…」

松平君が拳を握りしめる。

怖い…っ

「美和ちゃん！申し訳ないです…」

屋上の扉が開いて、他の四人が入ってくる。

「そうだそうだ…美和ちゃんのファーストキスは俺がもらうはずだったのに…」

「まったく、蓮は寝起き悪すぎだよ」

「そうそう。美和ちゃんに失礼だよな」

約1名意味がわからない事を言っている人がいますが、みんな心配してくれたんだね。

「もういいの。私こそ、ごめんなさい。逃げたりして」

「じゃあこれで仲直り成立だな」

松平君が言って、みんな盛り上がる。

やっぱり、この人達おもしろい。

おもしろい遠藤君。

カワイイ雨風君。

爽やかな笠原君。

優しい天道君。

そして……ちょっと怖いけど、優しいところもある松平君。

みんな、大好き！（これは友達としてです）

「あのー…おとりこみのところごめんね。君達、ヤバイよ」

佐々さんがおそろおそろって感じで言う。

何がヤバイの…？

「見いつけたああゝ」

「花形美和、待ちなさい！ファンクラブを押しつけて松平君とい
なんてえ！」

「美和ちゃんゝん」

松平君のファンクラブの人、なぜか私を探しに来た人……ともかく、
私達を追いかけている人が屋上に集まってる……！！

「佐々さんっ」

「はい????つて、あああー！」

私は佐々さんを人混みの中へと突き飛ばして、人がドミノみたいに
倒れるようにする。

よし、予定通り。

そして、その人の道を……

突っ走るしか逃げ切る方法はなーいつ……！！

「美和……っ」

遠くで松平君の声がするけど、無視。

悪いけど、私の身の安全の方が大事な。

ごめんねー！

こうして、鬼ごっこはまだまだ続くのです（たぶん永遠に）。

24 鬼ごっこは永遠不滅!!! (後書き)

どうでしたか？

これでひとまず区切りがついた…。

あ、でも終わりじゃないですよ？

まだ始まったばかりですし…。

これからは、男の子達を書いて、本文に戻る予定です。

それと、一月二日、三日は出かけるので書けるかどうか心配です。

たぶん、無理ですね。

今日はがんばってもう一話書いちゃおうかな。

それでは、またお会いしましょう！

「おい、拓海く。今年カワイイ子いないよく」

「ううくむ…イマイチ…」

「期待できないです」

「…ダメだね、これは」

今俺達は母さんの書斎にいる。

今年この中学に入ってくる女子が見たいとコイツらがわめいたから。

「拓海、どうするー？ナンパのやりがないし…。あ、そうだ！拓海のお母さんに言っつて、俺達同じクラスにしてみらおうー！」

グループのチャラ男、翔が俺にすり寄ってくる。
気持ち悪い。

「やめろ」

「まったく、拓海は誰にもなつかないな」

稜が呆れた声で話す。
うるせえ、余計なお世話だ。

俺は、はつきり言えばカッコイイ。
それが嫌だ。

なんでこんな顔に生まれてきたんだろうか。
来る日も来る日も女達に追いかけて回されて
はあ……。

「そろそろ行くぞ」

このグループはみんな今まで女子に追いかけて回されてこりこりして
いる（翔はのぞいて）。

だから、何かと気が合うのは確かだ。

「あーあ…カワイイ子いないんじゃ、つまんないなあー」

翔がグチをこぼしている。

おまえは美人・不細工関係なしに女好きだろ。

「うーん…僕、一人気になる子がいるんだよね、実は」

「えー…。誰ですかー」

稜がそこらの女達よりもかわいくポーズをとる。

気になる？

そんな奴、いるか？

「フフフ…花形美和。めがねなんだけどさ…」

にやりと笑って言う稜。

はながたみかず？

この時の稜の言葉から、その名前を俺は覚えてしまった。

「あー…アイツ？俺もなんか気になるけど、不細工じゃん」

翔まで気になっていたのか…。

「ふーん…僕は、わかりませーん」

蓮、記憶力ないしな。

とか言う俺もわかんねえけど。

「僕も、わからない」

司はただたんに見てないだけだろうな、興味なさそうだし。
俺は…別に、顔見なきゃわかんねえ。

そんなことを言っているうちに、教室の前についた。
俺達の教室は、ここか。

ガラガラッ…

「キヤーッ！！！！」

クラスの女子達から悲鳴が。
うるさ…。

俺達は女子達の間の道を抜けて自分の席へと歩く。
ここまでは、予定通りだったのに……

「私も！あつ、キヤアッ！！！！」

なぜか俺達の前に倒れてくる女が一人。

何だ、こいつは。

邪魔。

一瞬、教室全体の空気が固まる。

それはそうだろ、俺達の前にすっころんだんだしな。

「あ…れ？」

その女子はまだ俺達の前に出たことに気づいていないらしい。
そいつの顔が見えない。

どんなマヌケ面をしているのやら。

「プッ！」

「え……」

翔が耐えきれなくなって吹き出した。

こいつはうつむいて怒りをこらえているようだ。

確かに、おもしろい。

「ツハハハ！！！！おもしれえ！俺達の前に堂々とすっこけてくるなんて！」

翔は爆笑。

周りの女達は翔をおかしな目で見ている。

「あ、あの、めがね…」

「え？あ、ああ……」

初めてその子は顔を上げた。

そいつの顔を見たとき、俺達は固まった。
どうやらめがねを外して俺達が見えないみたいだ。
だから俺達はその子をガン見。
だって、めちゃくちゃカワイイ…。

「カワ、イイ？」

翔が驚いたような声で言う。
本当に、カワイイ。
でも、どうせ顔だけだろ。

「ああ！本当だあゝ」

「こんな子、見逃していたなんてね」

「さすがの拓海の情報でもここまでは無理だったか……」

「……」

俺はいつもの通り無言。

でも、そいつの顔だけはじっと見つめる。
こいつの性格を知ったら、俺はこいつをきつと嫌いになる。
それまでは、この綺麗な顔を見ておこ。

その子は、近くにいたまあまカワイイ女の子と二言三言しゃべ
る。

友達らしき人は固まってるけど…。

俺は、落ちているめがねを拾った。
これか、こいつが探していたのは。

「これ、めがね……」

「あ、ありがとうございますー!」

飛び上がっためがねを受け取るそいつ。
おもしろい反応……。

「ん? んん?」

初めて俺達の顔をまともに見れたその子は、目を丸くしていた。
それはそうか……。

これが、俺とそいつ……花形美和の出会い。

俺はこの時から、こいつに惹かれていたのかもしれない……。
本格的に好きになったのは、こいつと初めて一緒に帰ったあの日だった……。

く番外編く 君にフォーリンラブ 拓海 (後書き)

どうも。

ゆながりかです

あけまして、おめでとうございまーすっ！

昨日は鐘についてきました。

ゴーンッて。

うるさかったなあ…。

明日は、スキーに出かけるので、更新不可能！

それでは、二日程お休みをいただきます。

あと、感想とか、よろしく願いますー。(今頃？)

ではでは、よいお年をー

今、俺達のグループが気になっているもの、それは……アイツ……
花形美和だ。

正直、俺も少し気になる。

確かにめがねをとればカワイイ。
それは認める。

翔はアイツにゾッコンだし……他の奴らも気になっている様子だ。
そんな中、文芸クラブに入った俺達。
理由は、アイツだ。

俺はどうでもいいが、グループの奴らの意見で決定。

「それでは、ここでさよならです」

コイツは、なんか俺のファンクラブとかの会長、友原鈴香^{ともはらすずか}。
俺、美和、友原の三人が同じ方面なので、一緒に帰っていた。
友原が、この角で曲がるらしい。

「じゃあな」

俺はぶっくらばうにあいさつ。

「鈴ちゃん、さようなら」

おまえ、丁寧すぎだろ。
少し横のアイツを見る。

ニコニコとした表情で友原を見送るコイツを見ると腹が立ってくる。

「あぁっ！」

急に友原が倒れる。

俺の方に向かって。

こういうのは、たいてい……

「大丈夫かつ」

「ちょっと、気分が…スイマセン、松平君、送ってくれますか？」

やっぱり。

仮病。

俺を好きになったやつがよくやるんだよな…。

だから、俺は人を信じない。

「学校近いし、先生を呼ぶ」

人を信じていいことなんてない。

裏切られて、絶望にひたるだけだ。

「あ、直りました！ありがとうございます、では」

フンッ

そんなことで俺に言い寄ろうとするなんて、千年、いや、万年早い。

「鈴ちゃん、大丈夫かな」

えっ……。

まだ信じてたのかっ？

「仮病だ」

アイツの目が丸くなる。

そんなに驚かなくても…。

「すごいね、見破っちゃうなんて」

「信じてないだけだから。おまえは信じすぎ」

急に、美和の足が止まる。

どうしたんだ、急に。

「信じることの何が悪いの？友達を信じなければ何も始まらないし、信じなければ何もできない。友達だって信じてるからこそ友達って言えるんだよ！なのに、何で信じてあげないの？」

さっきまでのオロオロした態度とはどこか違う、はっきりと自分の考えを持ったアイツがそこにいた。

言いたいことを言うと、俺を睨む。

めがねの中から、きれいな目がのぞいている。

「さっきだって、信じてだまされるところだったじゃないか」

「信じてあげない人に言われたくない！だまされることを恐れていては何も進んでは行かない！例えだまされていても、何かは変わるはずだから！友達を大切にするなら、信じることを覚えなくちゃ、大切にできない！」

……。

俺は、アイツに見とれていた。

俺にうつたえるその目が、俺に何かを教えようとしていた。

コイツなら、信じてもいいのかもしれない。

「あ、ああ……そうだな……」

「きゃ……」

急に倒れ込む美和。

どうしたんだ？

「あいつらが言っていたのは嘘じゃないんだな。おまえに何かを感じてるって。少しは、信じてみることにするよ」

「うん……」

そう言って、笑う美和の顔を見た瞬間……

どきっ！

胸が高鳴るのがわかる。

こ、コイツ……。

すごく綺麗……。

思わず見とれてしまう。

美和……君に、フォーリンラブ……。

〈番外編〉 君にフォーリンラブ 拓海 (後書き)

どうも、お久しぶりです、ゆながりかです

お休みをいただき、遊んできました

さて、今回で拓海君は終わりです。

次は、たぶん、稜君に移るんじゃないかな？と思います。

たぶんですけどい、たぶん……。

それでは、さようなら

く番外編く 君にフォーリンラブ 稜

「はあ……」

この顔。

もっと、かつこよければよかったのに。
もっと、男らしければよかったのに。

はあ……。

「どうした、稜」

「あ、拓海……。いや、なんでもないよ」

「そうか……」

僕の悩みの元？……拓海。

拓海は、かつこよくて、男らしくて、僕の理想なんだ。

「あ、美和ちゃんだあ」

隣にいる翔が叫び声を上げる。

当の本人はギョツとしてこつちを振り向き、すぐさま逃げていく。

「まってよ、美和ちゃん」

翔・司・蓮が追いかける。

みんな、かつこいいもんね。
はぁ……。

「稜…大丈夫か？」

一人、僕の横にいるのは拓海。

「うん、全然大丈夫 拓海も行っておいでよ」

「そう、だな…」

僕の悩みの元？。

花形美和。

めがねが印象的なまじめそうな女の子。

僕は、女の子大好き少年だから、美和ちゃん以外の女の子も大好き。
でも、美和ちゃんは、他の子とどこか違うんだ…。

一緒にいると、ときどきして……自分のこのかわいらしい顔がにくくなる。

今まで、こんなことなかったのに……。

「はぁ……かつこよく、なりたい…」

あの、つぶらな瞳。

すいこまれそうに成るような瞳で僕を見たとき、飛び上がりそうなくらい驚いた。

僕より、かわいい子がいたなんて。

正直、僕はかわいい。

そこのアイドルよりはかなりマシな顔だと思っし、動作とかも僕にあっていると思う。

なのに……

美和ちゃんには、負けてしまう。

今時ノーメイクで、髪だってボサボサ…それなのに、彼女は、すごいかわいい。

はあ……。

「それが、原因か？」

「えっ……。拓海！？どうして…行っただんじやないの？」

「ずっと見てた。おまえが、気づかないなんて…。相当、アイツにいかれちゃったのか？」

「そっちこそ。お互い様…でしょ？」

拓海がこっちを睨む。

僕は拓海の攻撃には慣れてるから、軽かわす。

「それじゃあ、僕もいくよ。じゃあね」

僕が立つと、女子のみんなが騒ぎ始める。

につこりと愛想笑いで女子の攻撃をかわす。

美和ちゃんは、拓海のことをきつと……。

今はまだ気づいていないけど、きつと……。

僕、カンはかなりいいんだよね。

みんな鈍いから気づいてないみたいだけど……。

「僕だけの秘密も、大変なんだよね…」

こういうのには、慣れっこなのに……。

胸が痛いのは、なぜ？

それは……このことを知っていて、美和ちゃんを好きになってしまったからだろうな。

「あつ！いた、美和ちゃん！」

今は…今だけは、美和ちゃんと拓海に甘えさせてもらおうと。
だって、まだあきらめきれないし。
そのうち、美和ちゃんの気が変わるかもしれないでしょ？

「げっ！また敵が一人増えた……っ！」

美和ちゃんがものすごく嫌そうな顔をする。
クスッ！

「敵ってひどいなあ。そういうの、僕傷つくんだけどお」

「うるさいっ！近寄るなーっ！」

美和ちゃん、逃亡。

僕の初恋、当分かないそうにないね。
でも、いいんだ。

君を、好きになってしまった……この気持ち、治まるかな？

く番外編く 君にフォーリンラブ 稜（後書き）

どうもー、ゆながりかですーっす

どうでしたか、稜君は。

稜君だけが、このお話でカンが鋭い人として登場します。

ごめんね、稜君…。

次は、たぶん、翔君です。

翔君、司君、蓮君の順番だと思います。

時間の流れとか、かなりバラバラですけど……しょうがないですよ
ね？

まあ、そういうことでー

く番外編く 君にフォーリンラブ 翔

「あ、恵理ちゃあ〜ん」

「あ、翔くん もお、恵理、何日も翔君が遊びにくるのを待っていたんだよお」

「ごめんね、恵理ちゃん。他の女の子達がうるさくてさあ……。でも、僕には恵理ちゃんしかいないよ」

「ええ……。だってえ、翔君ってば、他の子にもそついうの言ってるんでしょー？」

「ばれたか」

ふふ、俺様モツテモテ

俺はプレイボーイ。

つまりは、チャラ男なわけで。

今は、なんと、十人の彼女とお付き合いを。

まあ、お付き合いっていいないかもしれないけど……。

たまに会いに行く、程度かな。
本命、いないから

「おい、翔。行くぞ」

「あ、はいはい。じゃあね、恵理ちゃあ〜ん ま・た・ね」

「うんっ」

俺に近寄ってくるのは、俺がプレイボーイと知って近寄ってくる。まあ、俺、かつこいいから仕方ないか。

「また翔君は女の子と？そのうち、本命が現れたときに嫌われるよ？」

稜が鋭い発言で俺を攻撃してくる。
はんっ！

この美貌がある限り、俺様の魅力は永遠だあー！

「そうでーす！翔、女の子、可愛いそうでーす！」

うるさいっ！

みんな、それを覚悟でついて来てるんだから、いいんだもーん！

「翔君、そろそろプレイボーイ生活は終わろうよ、ね？」

司が甘い言葉で俺に問いかけてくるけど、無視。

俺は永遠にプレイボーイですよ、悪いかつ！

突然だが、俺の夢はハーレムを作ること。

ああ、愛しのハーレム……。

「キヤーツ！！！」

俺達が教室に入ったとたんに、女子の悲鳴が。

俺は五人の中でも一番愛想がいいから、みんなに手を振る。

ああ、俺、モテてますね。

「あつ、キヤアツ!!!」

そのとき、俺達の道の真ん中に倒れてくる奴がいた。

そいつは、うつむいていたから顔はわかんなかったけど、馬鹿な奴なんだろうな。

つてか、俺達の前に堂々と倒れてくるって、どんなんだよ。

「あ…れ？」

どうやら女の子が、変な声を上げている。

プツ！

こいつ、気づいてないのかよ。

つていうか、あそこに落ちてるメガネは？

こいつのか？

おもしろ。

「プツ！」

一生懸命笑いをこらえていたつもりなんだけど、ついに吹き出してしまった。

だ、だつて、今まで完全に俺達王様状態じゃん？

その俺達の前に、出てくる、なんて……つつつ！

ハハ、あほらしー！

「え……」

完全に意味がわからないというような感じで振り向く女の子の目の前で、俺は腹をかかえて、上を向いて笑った。

腹が、こわれる〜!!!

「ッハハハ!!! おもしれえ! 俺達の前に堂々とずっこけてくるなんて!」

周りからもクスクス笑いが。

その女の子は、少し気にした様子だけど、それよりも何かを探していた。

何を、探しているんだ?

俺は、女の子好きだけど、一人の女の子にここまで興味をもったことはない。

ある意味、本当に好きになった子はいない。

だって、女って、超つまんねえ。

でも……

こいつ、おもしれえ!!!

「あ、あの、めがね……」

「え? あ、ああ……」

そんなことを思って、俺はその子の顔をふと見た。

その後、一瞬で、やられることも知らずに。

「カワ、イイ?」

その瞬間、俺はその場から動けなくなった。

俺に近寄ってくる女は、結構かわいい奴ばかりで、それなりに満足していた。

なのに……何、何こいつ!

かわいすぎるでしょ！

大きくて少し潤んでいるようなその目。

真っ白な肌に、ほんのりピンク色の頬…。

そして、プルプルの唇。

かわいいー！！！！

「ああ！本当だあ」

「へえ。こんな子、見逃してたなんてね」

「さすがの拓海の情報でもここまでは無理だったか……」

「……」

マジかよ！

俺、恋してる？

好きになってる？

うひゃっ！

こういうの、一目ぼれ、なんだよな。

俺とこの子は、きつと赤い糸でつながっているに違いない！

そして、これは……運命なんだっ！

く番外編く 君にフォーリンラブ 翔（後書き）

どうも。

ゆながりかでーすっ！

どうですか、翔君。

書いてて、私までちょっとイラツときちゃいました
テメエ、どこまでプレイボーイなんだよおっ！
なあんて。

つたく、翔君のチャラ男にも困ったもんです。

まあ、美和ちゃん一筋に今はなってるんですけどね。
それでは、次のお話でお会いしましょうー

さよーならー

く番外編く 君にフォーリンラブ 蓮

「やあ、美和ちゃん」

「あ、蓮君……」

「なんだい、僕をこんな所に呼び出して……」

黄金の髪の毛をかき分ける僕を、うつとりとした表情で見つめる美和ちゃん。

「私と……付き合って、ほしいんだけど……」

「……っ！喜んで。僕も、君のことを、愛しているのさ」

「蓮君……私のこと、ハニーって読んでいいよ、ダーリン」

「ああ……ハニー……」

ああ、やっと本音を言ってくれたんだね、ハニー。

君が拓海といるときは頭がおかしくなりそうだったけど、ああ、やっと僕の手元に……。

なんという、幸せ！

もう、世界がキラキラに見えるよ。

でも、どんなに美しくても、君にはかなわないよ、マイスイートハニー？

「ダーリン、キス…して？」

「ええっ!？」

そんな、いきなり……。でも……

「わかったよ、ハニー…」

目を閉じて僕を待つハニーの元へ、僕は口づけを……。

「笠原君!!!!」

ん？

なんだい、ハニー？

目を開けると、ハニーが僕の目の前に。

ああ、怖じ気づいてしまったのかい、ハニー。本当に、カワイイなあ。

「ん…なんだい、マイスイートハニー？」

「なんだい、じゃない!ちょっと話したいことが…」

…キス、して?…

ハニーの声が頭に響く。
ああ、もちろんだとも…。

その後のことは、よく覚えていないんだ。
気がつけば、拓海の拳が目の前にあつて…。

「ぶっ！…！」

「テメエ、殺してやる…っ！殺して、殺して…！」

「拓海、やめなよお…」

ど、うなってるん、です、か？

僕は、ただ、愛しのハニーに、口づけを…。

「ハニーだかなんだか知らねえけど、それは夢の中の話だ、アホ！
さっさと正気に戻れえつつっ！…！」

「え…ゆ、め？」

「そうだっ！テメエは、俺の、俺の美和に…っ」

「落ち着いて、拓海。気持ちわかるよ、僕も蓮君のこと殺したい
もん」

NO…！！

平和主義の稜まで、何を言っんですかあ！

僕は、ただ、キスしただけ…。

「おい、蓮……。外国では知らないけどよ、日本のレディの唇をい

きなり奪うのは、どうかと思うぜ？俺だって、ぶん殴りたいし。俺達が怒るのもあたりまえ」

「っな……。僕は、ただ……」

「蓮君、言い訳は、やめてくれる？」

あの司までもが、冷たい視線を僕に送ってくる。

何を言っているんですか、両思いになったから、キスをしたまで……。

しかも、あっちから言ってきたんですよ！

「蓮……っ！テメエ……」

「僕も、怒りがMAXになっちゃった 悪いけど、殴るね」

「俺も。蓮、悪いな」

「僕は、蓮君を押さえつけているよ」

「えっ？NO、ノー！ツツツ！……」

ボコッ、ガンッ、ゴォンッ……！！

「これで、少しは気がすんだ。あと、蓮。言っておくが、両思いになったのは、夢の話だ。現実じゃない。じゃあな、蓮」

「じゃーね、蓮君」

「じゃーなー！」

「それじゃあ、さようなら」

え？

ええ？？

夢？？？

そ、そんなあゝ！！！

それでも、僕はあの唇が忘れられないんだ。
あの、甘い味が…。

く番外編く 君にフォーリンラブ 蓮（後書き）

ども、ゆながりかです

今日も、翔君とは別の意味でイライラしますねえ。

思いこみが激しいっ！

美和ちゃん、かわいそー…ごめんね？

さて、お次で番外編はラスト。

ラストを飾るのは……司君だあ！

よろしく！。

では、またお会いしましょうね？

く番外編く 君にフォーリンラブ 司

「そこまでっ！今日の練習、終わり」

「ありがとうございますっ」

ふう……。

やっと終わった…。

「司、今日は切れ味が悪かったぞ。最近寝てないのか？」

「あ、はい……塾とか、勉強とかで忙しくて……」

「無理するなよ」

「はいっ」

剣道の先生が僕に気を使って話しかけてくれる。

最近、僕は寝不足だ。

というより、全く寝ていない。

この後も、塾が三つと、家に帰ったら家庭教師と勉強、その後はピアノにバイオリンのレッスン……などと、練習がいっぱいなのだ。はあ……。

「さてと。急がなければ、塾に遅れてしまっ……っ」

いつでも、みんな、僕よりも俺の才能目当てだった。

父さんも母さんもそうだ。

僕には才能があるだとか何とか言っ、無理矢理おしつけるんだ。嫌になる。

でも、これは……人生を、成功させるため。

必ず、裏でがんばった人が報われる。

「あ……れ？」

あれは……花形、美和？

美和ちゃんと一緒にいるのは、拓海？

まだ帰っていなかったのか…。

「美和ちゃんっ！」

「え？」

「司」

自転車に乗って猛スピードで二人に駆け寄る。

「どうしたの？こんな遅くに。ま、まさかっ！美和ちゃんと拓海って……」

笑顔、笑顔。

スマイル、スマイル…。

完璧な人間になるためには、笑顔を絶やさず、毎日「いい子」でいること。

「付き合ってないから」

そ、即答……。

でも、学校を出たときと今と、反応が違う……。拓海も、美和ちゃんの魅力に気づいたんだ。

「なあ〜んだあ…つまらない…」

冗談まじりに言ってみる。

完璧な人間になるためには、ジョークを忘れずに。

「つまらないって何だよ、つまらないって…」

微妙に頬が赤くなっていることに気づいているんだろうか、拓海。こっぴうとこ、わかりやすいよなあ。

「天道君、塾？」

「うっん。習い事」

一瞬、目を丸くした美和ちゃんだけど、すぐに表情を整えてなぜか尊敬のまなざしで見てくる。
なぜに？

「コイツ、剣道やってるんだ…」

「け、けんどっ！？」

美和ちゃんの目がまたもや丸くなる。
クスッ、おもしろい。

「そうそう。あと、ピアノと、バイオリンと、空手と、習字と、水泳と、バスケットボールクラブと、サッカークラブと、合気道と……」

美和ちゃん、口が開いてる……。

「司、たまには休めよ?」

「大丈夫だって!このくらい、平気だよ!」

そう。

僕の人生のためならば、このくらい、どうってことない。
僕の目指している、完璧な、人間になれば……

気がつけば、口に出てしまったらしい。

「人生、全てがうまくいくはずだから……」

口に出した言葉をつなげようと、言葉をつけたず。
その瞬間、美和ちゃんの目が変わった。

「そんなんじゃ、いつまでたっても上手くやっていけねーよっ」

美和ちゃんの声が道ばたに響く。
は?

何言ってるんだろう、この子。
近所に迷惑……。

「完璧な人間なんて、この世にはいないんだ。人間、悪いところは誰しも必ず一つはあるもんだ。でもな、いいところがそれと同じ分

だけ。いや、その倍、何倍もあるんだよっ」

美和ちゃんの迫力がすごい。
後ろに炎が見える……っ
目にも火花が……。

「じゃ、じゃあ、どうすれば、人生上手くいくんですか……」

「成功の秘訣…それはな、人生正直に生きることだ……」

「は？」

ついつい気が抜ける。

しよ、正直に生きろって言われても……

「どういうことだ？」

拓海もそう思ったらしく、頭の上にはてなマークが。

「笑いたいときは笑って、泣きたいときは泣いて…人生、正直に生きるんだよ。心に嘘をつくな。嘘をつくとか、どんどん人生が嫌になっってくる。泣けば、スッキリする。笑えば、楽しくなる。自分の感情に、嘘をつくな」

言い終わると、美和ちゃんはフラフラと生氣がなくなったように倒れ込んだ。

僕は、その場に立ちつくすしかなかった。

人生を、正直に生きる……それが、僕には足りなかったんだ。
そうか…そうなんだ！

僕がいろいろ考え込んでいる間に、美和ちゃんは生気を取り戻し、かなり回復していた。
よかった、よかった…。

「美和ちゃん…」

「え？」

僕は、美和ちゃんの方を向く。

美和ちゃんは、人生の先輩。

人生未熟者として、そして……男として、尊敬しますっ！

あ…れ？

僕…恋してるー？

「ありがとう！僕、もう嘘つかないから！だ、だから…」

自転車を放り投げて、その場にヘナヘナと座り込む。

「え？ええっ！」

「お、おい、司？」

「ウワーーーーンッ」

「な、泣かないでよ、天道君…」

目の前に、ハンカチが差し出される。
み、美和ちゃん……っ。

「み、美和ちゃん…好きだっ！…！」

「え???」

「もう我慢はしないっ！美和ちゃん、好きですっ」

「こ、告白???」

もう言葉が止まらない。

好き、好き、好き……。

我慢できない。

「そっだよっ！美和ちゃん、好きです！付き合ってください！」

「こ、ごめんな、さい……」

ガン……。

好き、なのに。

「え……わ、わかったよ……でも、僕はあきらめない！あきらめないからっ」

自転車をこいで、どんどん進む。

今日は、家に帰ろう。

そして……寝よう……ファ……。

こうして、僕は、君に恋をした。

好きで好きで、たまらないんだ……。

〈番外編〉 君にフォーリンラブ 司（後書き）

どうもー。

ゆながりかです。

これで、番外編ラストとなりましたあ
みなさん、いかがでしたか？

たまには、息抜きをしないと……。

次から、本編に移ろうと思います。

まずは、美和ちゃん視点で、学校の様子でも書くとするかーなんて
思っています。

それでは、さよならあー

25 兄弟げんかは、外でやりましょう…

「ええ…今回の部会は、商店街の喫茶店で開きたいと思いまあ
す」

唐突なダイさんの言葉。

は……？

商店街…？喫茶店？

どうということ……？

「実は今日、コンピューター室が二ヶ月に一度のそうじ、空き教室
は先生達が使うそうで、部会を開く場所がありません。なので、今
回は今度のクラブ発表会の打ち合わせもかねて、喫茶店で部会を開
きたい…ということです」

仕事モードの佐々さんが完璧に説明してくれる。

佐々さん、すごいなあ…。

「それじゃあ、出発」

相変わらずテンションが高いダイさんがみんなを引っ張っていく（
つていうか男子を引っ張っている）。

最近、テストがあるからほとんどの部活が一時中止。

でも、うちのクラブ…文芸クラブは、なぜか実行中。

女性郡（おもに舞ちゃん、鈴ちゃん、会長さん）と、男性郡（あの
グループ+ダイさん）が「クラブやりたい」光線を出したからだと

私は思うけど……。

「さあ、着きましたよ、みなさん さあ、拓海くうくん、行こう！」

だ、ダイさんが松平君にアピッています…間近で見たのは、これがはじめて……。

ちよつと、衝撃…。

「美和、行くぞ」

さりげなくダイさんを追っ払って私の横に来る松平君。す、すごい、あのアピールをかわしたなんて……。

「松平くうくん」

……もちろん、これ、私の声じゃありません。舞ちゃんです。

私の横に松平君がいるんで、めちやくちやうるさいです。

「入りますよ」

入り口のところで何やらかんやらしていた私達を最終的に動かしたのは……佐々さん。

は、迫力が……っ

みんな逆らえずに入っていく。

「いらっしやいませえ って……あらあ！美和じゃな〜い！」

……。

「私、帰ります」

「いやあゝ！美和、待ってよ…」

なぜにここに！？

そう…そこには、恐怖の女…姉がいたのです。

「こ、この人が美和ちゃんのお姉さんっ！？」

「すごおい、きれい…」

「すごいでーす！めがねをはずした美和と似てますねえ」

「美人ですね」

「……」

松平君たちがそれぞれ感想をのべている。

これこれ、男達はみいゝんなその笑顔に引っかけたて辛い想いをしたのじゃぞ、きちんとよく見るがよい。

化粧の濃い、ケバツケバのおばさんではないか。

「誰が、『化粧の濃い、ケバツケバのおばさん』…よ！まだまだピツチピチの高校生よ！」

え……心を、読まれた…。

「美和は心に思ったことが口に出てるのよ。わかりやすいって言うのかしら」

「ちょっと、花形さん」

「あ……っ！い、飯塚君……」

この人……何日か前のお姉ちゃんの彼氏！？

う、うそでしょ……だって、姉は付き合ってた彼女とは約三日目でプロポーズされて、約一日後見事に別れるのです……。

姉は、最初に付き合ってた男の人が忘れられないから。

つまり、付き合ってた四日で別れるという超最低最悪な魔性の女なのです……！！

なのに……なのに……！！

姉と飯塚君が『五日』も付き合っているなどとは、天と地がひっくり返ったようなことなのです……！！

しかも……！！

姉は付き合ってたすぐにニックネームをつけるはず……なのに、飯塚君とはいまだ飯塚君、飯塚君……こんなこと、ありえない……！！

「あんたは、姉を何だと思ってるのよ……っ」

「はっ！姉……聞いてた？」

「ええ、もちろん、ね。私はただ純粹に飯塚君と付き合ってるだけでしょーがあ！」

「姉は超最低最悪の魔性の女でしょ！だから、おかしいって言うだけじゃないですかあ！」

「だから……！その『超最低最悪の魔性の女』っていうのがおかしいって言うてるのよ！私のどこが『超最低最悪の魔性の女』よ！どこからどう見てもピッチピチギャルギャルの高校生でしょ！」

「そこまで。兄弟げんかもほどほどにね、花形さん。それに…美和ちゃん…だっけ？」

飯塚さんがけんかを止めに入った。

おお、今までにはなかったタイプだ！

今までは、みんな完全に姉の味方だったのに…この人なら…私のお兄さんに、ふさわしい！

「姉よ、この方と結婚しなさい」

「はっ！？」

姉にしては珍しく、真っ赤になっている。

姉にしては、初々しい反応だ！

「つまり！　姉とこの方が結婚なされば、この方は私のお兄様…こんな方が私のお兄様なんて…あこがれてしまいますわ」

あれ？

周りの空気が重いぞ？

何で？私変なこと言った？

「なんで、お嬢様みたいな言葉なんだ？」

松平君がボソツと口を開く。

はっ！！！！

これって、まさか…また、小説の主人公に変身してた？

そういえば、昨日の夜読んでた小説は、お嬢様が主人公だったっけ…自分でも気づかないなんて！

これは、かなりの重症です…はあ…。

「ともかく！ 私と飯塚君は、この店でアルバイトをしているの！どうぞ、お席にご案内します！」

姉が赤い顔を背けながら、席に案内してくれる。
お姉ちゃんも、こういうところがかわいいんだよね。

「飯塚さん」

「はい？何ですか、美和ちゃん」

「姉を、よろしくお願いします」

「つな……！！！」

飯塚君の顔も真っ赤に染まる。

将来、結婚してもらわなければいけないんです。

きちんと、お願いしなくちゃ…そうすれば、母も、喜んでくれますね。

にしても……さっきから、微妙にあの人たちの機嫌が悪い？

松平君はいつもブスツとしている顔を余計にゆがめて。

雨風君は笑ってるのに口元と眉が引きつっていて。

遠藤君は完全に機嫌をそこねたみたいで、眉なんてトッキントッキンで、口はへの字にゆがんでいて、顔もクシャツとしていて。

笠原君は白い顔を青くしながら私を見ていて。

天道君は飯塚君を睨んでいて。

みんな、どうしたんだろう…。

「松平君、どうしたんですか？」

「なんでもない」

目をそらして答える松平君。

いつもは、もっと優しい(?)のに…。

「それなら、こっちにも考えがあります」

「は……？」

どうしても、言ってくれないって言うならば……

めがねをはずし、ゴムをとる。

最近、少しだけ自分に自信がついてきた。

少なくとも、この五人には優しくしてもらえる。

「ねえ、拓海…それに、稜、翔、蓮、司……なんで、こんなにも好きなのに、こっちを…向いてくれないの？私……悲、しい……」

姉が無理やり教えた泣きまね。

っていうか、本気で泣くというすごい技。

ヘッヘーン！

「わわわ、美和ちゃん…っ」

まず遠藤君があわてながら、その辺を走り回る。

「どうしたんですか？」

蓮君は私にハンカチを差し出す。

「美和ちゃん、ごめん…」

天道君は、私の頭において。

「だいじょーぶ？美和ちゃん…」

雨風君は、私に近寄ってきて。

「……美和…」

松平君は……ぶっきらぼうに私を見てきて。
みんな…ありがとう

「うん、大丈夫」

「はい？」

「ええ？」

「……っ？」

「ええー！？」

「……っ」

みなさんがそれぞれ反応を示す。
みんな、私のこと、心配してくれた……っていうか、機嫌が直っている
ので、よしとしましょう。

「みんな、席に行きましょう?」

私は、みんなの先頭をきつて、席へと急ぐのであった。

25 兄弟げんかは、外でやりましょう…（後書き）

どうも、ゆながりかです！

そろそろ、あの王子様グループを動かしていかないと、つまらない…。

もうすぐ、動かしていこうかな…と。

番外編も、かき終わったことですし。

そう、ついに動き出すのです…あの、地上最強の王子様が！
なんちつてえ

そーいうことで、さようならあ

26 私が勇者！？

「それでは、部会の方に移ります。まずは、今度のクラブ発表会の件です。それでは、グループを発表します。ええ……まずは、第一グループ……僕……佐々と、鈴香さん、司君、蓮君です」

一気に女子の方からわーっとな声が聞こえる。
はあ……うるさい……。

今ここは、喫茶店の中。

なんていったって、文芸クラブ合わせて十一人ですからね、かなり席がきつい……。

いや、それはまだいいんだけどね……私の右隣が、遠藤君、左隣は、雨風君と、グループの方が座っているのですよ。

それだけではないのです。

遠藤君の隣は、天道君、そして雨風君の隣には笠原君が。
これだけでも、目がクラクラしちやいそうなのですが……

なぜに、私の目の前には松平君がーっ！？

せめて、目の前くらいは、女の子か、部長か副部長くらいにしてほしかったのに……。

神様は、意地悪なのです、はい。
し・か・も！

松平君の右隣には会長、左隣には鈴ちゃんと、虎VS竜くらいの迫力の戦いが行われているのです。

お、恐ろしい……っ！

ちなみに、舞ちゃんはいたっておとなしく鈴ちゃんの隣です（でも、

一番アピールしてるのは舞ちゃんのような気がする……」。

そして、どうやら松平君をターゲットにしたダイさんは、松平君に近い、会長のお隣をきちんと陣取っています。唯一の一般人(?)の佐々さんは、ダイさんの横に座っています。

つと、私の目の前で激しい争いが行われているのです…。

「いやったわあ〜！鈴香に勝ったわ〜！これで私と松平君のらぶらぶは決定ねえ〜」

「そ、んな……っ。この、私が負けるなんて…」

いや、勝も負けるも、戦いじゃないんですよ？それに、グループ、そんなに大事でしょうか？

「ねえ、松平君 舞とお、松平君はあ。一心同体だからあ、きつと一緒にのグループになるよねえ？」

舞ちゃんが松平君にアピールしながら話しかけている。隣の鈴ちゃんは放心状態だから、舞ちゃんのアピールも気にならない様子。

「なに言ってるのよ、このお子ちゃまが！私が、松平君と一緒にのグループになるに決まってるでしょっ！」

いや、決まってるません。

次は、舞ちゃんVS会長の激しい戦いだあ〜！

両者、松平君と鈴ちゃんを挟みながら睨みあっています、全く譲りません！

おおっとお、佐々さんが口を開くぞ、ここで運命の決断がああー
！！！！

「第二グループは、ダイさん、会長、稜君です！」

おおっとお！

この勝負……舞ちゃんの勝利だああ！

「舞選手、今の気持ちは？」

「はい、最高に嬉しいですっ」

「何言ってるんだ、おまえ達」

はっ！

気がつけば、新聞記者のように選手に質問していた……うわ、恥ずかしい！

「わ、私ってば、つい……」

自分の席を飛び出して、舞ちゃんのところにシュタツと駆け寄った私を見て、みんなは大爆笑。
ムッス……。

「第三グループは、舞さん、拓海君、翔君の三人です」

舞ちゃんがあの二人を見下ろしていばっている。

その二人は、もう魂が抜けたような顔をして、固まっている。

「……って……」

わ、私はっ!?

どのグループにも入ってないし!

いくら存在が薄いからって、傷つきました…。

「そう。実は、美和さんには、重要な任務があるんだ…それは……
……………コスプレを、してもらいたいんだ」

一瞬、その場の空気がしーんと静まりかえる。
きつと、三分くらいその場で固まってしまっていただろう。

「つまり……ダイさん、あれをみんなに見せてあげて」

「ラジャ、佐々君」

立場、逆じゃね?

何でダイさんが部長なんだろう…。

そんな素朴な疑問を胸に抱えながら、ダイさんがカバンから出した
ノートの一ページを見てみる。

「うわ、上手っ」

その場にいる誰もがこの声を上げた。

だって、これ、上手すぎでしょ…。

何で漫画系のクラブに入らなかったんだろう…。

「僕、小説＋絵も担当したいんだ。だから…」

へえ、そうなんだ…って、説明しなきゃ!

ノートに書かれていたのは、ある女の子の絵。

それだけなら、ただの少女漫画になっちゃうんだけど……その女の子は、まるで『勇者』のような格好をしているんです。体には動きやすそうだけど、なかなかカッコイイヨロイ。手には勇者の剣が。

そして、頭にはなんていうんだろう……宝石がついている、うーん……まあ、ヨロイの頭バージョンみたいなものが。

「これを、美和ちゃんには着てもらいまあゝす」

……はっ？

「つーまーりー……前回、美和ちゃんが着たネグリジエ……大評判だったんだよねえ。だから！今回は、この衣装を着て、学校を歩き回って、小説をピールしてもらう係に、美和ちゃんは決定したんだよ」

だよゝじゃないですよ、だよゝじゃ！

無茶にもほどがあります！

こ、こんなの、私なんかには似あいつこありませんし、第一、そんな恥ずかしいことなんてできるわけありませんっ！

「もちろん、めがねは取って歩いてもらっよ」

人の話を聞けええゝ！

めがねをとつたら、なおさら無理！

無理無理無理無理……！！

何回言ってもいいです、無理！

「あらあゝ。大丈夫よ、美和」

げげっ…。

嫌な予感…不吉だ、不吉すぎる！

今、この声が聞こえるなんて……神様、これ、夢ですよ？ね？

「できるわよ、コンタクト使えば。お姉ちゃんに、任せなさいっ」

ウギヤアアア〜！！！！

姉、なぜにここに〜…。

「バイトに決まってるでしょ…たまたま、聞こえちゃったのよお」

たまたまじゃなくて、絶対盗み聞きしてたな…。

はあ、最悪最低…。

「いいわ、このあたしに、任せなさいっ」

この姉の一言で、ダイさんと佐々さんはハイタッチ。

王子様グループは、それぞれ勝手に話してるし。

はあ……。

26 私が勇者！？（後書き）

どうも、ゆながりかです。

遅くなってスイマセン…ちょっと、ハプニングが…。

それより、予告変更。

次こそは、アイツを動かそうと思いますっ！

拓海君ばかり甘やかしていちゃいけない！と思ひまして…。

美和ちゃんと拓海君には悪いんですけど、ちょっと二人の仲はまだくつつきそうにないですねえ。

ちなみに、私としては稜君にがんばってほしいです。

個人的に、稜君大好きなんです。

かわいすぎでしょ…私は、かつこよさよりもかわいさを追求してしまっんですよ。

稜君をひいきしないように、がんばります
では〜

27 真つ暗闇の帰り道

「それでは、解散」

それでは、解散じゃないって…。
もお、嫌だよ……。

「あつれえゝまあつだいら、くうん、だあ こおんな、素敵な、せ
かあいであ、えるうなあんてえ、運命、だよおねえ」

鈴ちゃん、顔が真つ赤。

笑い上戸、って言うんだよね。

それもこれも、お姉ちゃんのせい…。

「ヒック…な、何でよお…私が、最終的に、松平君と、結ばれる
はずなのにい」

泣き上戸、だよな。

全て、お姉ちゃんのせいなんだ。

お姉ちゃんが注文されたジュースを持ってきていて。
そしたら、鈴ちゃんと会長は水を頼んでいて。

水を飲んだら、こうなった。

「ブッ！おい、店員っ！これは酒じゃなくて水じゃねえか！」
なあんて声が聞こえて、まさかとは思ってたけど……

お姉ちゃんが、水とお酒を間違えたから…。

飯塚さんだつて、すごい謝つてたし。
他人に迷惑かけすぎなんだよね……。

「まつだいらくくん」

「うつ…松平君…っ」

「拓海、求められてるよ、二人に」

雨風君がニヤニヤと松平君に近寄っていく。
こういうときの雨風君は小悪魔みたいな顔になるから、怖い。

「……からかうな」

「うわっ、さすがプリンス！」

「からかうなの一言で雨風君を撃退です！」

「でも、どーする？この二人をこのまま家に帰らせたら……」

「ご、ごめんなさいっ！私のせいで……」

「花形さんのせいだけど、そんなに深く考えないほうがいいよ」

飯塚君がフォローといえないフォローをしている。

「うつくん、こういうところ、鈍い？」

「拓海君、悪いんだけど、この二人を送っていつてくれない？」

「副部長が言いにくそうに松平君を見る。」

もう熱血モードは消えて、普通の佐々さんです。
この佐々さんのほうが落ち着くんだけだな……。

「……はい……」

「お姉ちゃん、一緒に帰……」

ギロツと姉と飯塚君に同時に睨まれる。

うつ……！！

そうですねー、二人のラブラブを邪魔しちゃダメですねー。

わかってますよー。

はあ……

「一人で帰りますよ……姉は仕事終わってから来てください。それじゃあ……」

はあー……。

一人は、怖いって……。

お化けとか、そういうのに弱いんだけどなー。

気がつけば辺りは真っ暗で。

余計に暗い怖い雰囲気をただよわせています。

嫌だなー、怖いなー……。

ばさばさっ

「キャッ」

暗闇だと、少しの音も気になる……っていつか、怖いよお……だ、誰か、助けて……。

その場から、動けなくなってしまった私。

ここで、お姉ちゃん達が来るのを待つ？

そ、それも怖いよお…。

もうみんなは帰っちゃったし……ええーん、嫌だよお…。

「……わっ」

「キャッツッ！……！」

うわわわあああ……！！

誰かが、誰かが……！！

神様、仏様、お姉さまあ！

誰か、お助けくださあい……。

ボタンツとその場に座り込む。

「驚いた？」

「え……？」

顔を上げると、そこには……憎たらしいほど、かわいい顔が。

この顔、見覚えがあるぞ？

誰でしたっけ……？

「雨風君っ！」

「大丈夫？にしても、固まってるから声をかけたら、座り込んでんじやうんだもん……ハハハ、すごい演技だねー」

えんぎ……？

そんなんじゃないのに……。

本気で、怖か、た、のに……

「う……うわああーんっ……。こ、怖かったよあ……」

雨風君に抱きついて泣きじゃくる。

今まで、誰にも甘えてこなかったから。

小学一年生の時のお化け屋敷だって、泣きじゃくりながらも誰にも頼らずゴールまで行っただし……。

姉がいない夜に雷がなった時だって、一人で泣きじゃくりながら我慢したし。

お……お母さんがいなくなった日だって、お父さんがいなくなった日だって……泣いて、泣いて……誰にも頼らずに、ずっと、泣いてたのに。

人の顔を見たときに、甘えなくなるなんて……。

「っちょ……美和ちゃんっ！？ど、どうして……。……はあ……」

最後のため息が気になるけど、雨風君はずっと私の頭をなでくれた。

心なしか手が震えていたような気がしたけど……気のせい、かな？
??

「うつ……。そ、ういえ、ば、どうして、ここ、に？」

「美和ちゃんが心配だったから」

え……。

顔がだんだん熱くなる。

こんな恥ずかしいこと、どうしてこんなに近くで言っちゃうのかなあ……。

「プッ…。何で抱きついていると赤くならないで、今赤くなるのー？
感性がおかしいってー」

あ……。

今、気づいたけど……

抱き合ってるー！？

ヤバイ、ヤバイって、この状況はあ！
うそ……。

「ごめ、んなさい……」

「別にいいってー。にしても、そんなにカワイイ事されちゃうとさ
ー、僕……」

????

何だ？

言葉が途中で止まったぞ？
どういうことですかー？

「我慢できなくなっちゃうんだけど」

そう言うと、唇を何かがかすめた。
前には、雨風君の悪魔の顔が。
って……

「っな……！……！」

「アハハー！隙ありすぎだつてー！にしても、鈍い。今気づいた？三秒くらい固まってたし。プッ！アハハハッ！」

う、うそ、でしょ…。

あのファーストキスは忘れようと思って、次が私の初めてだと思つて、いた、のに……

また私の唇を奪うなーっ！

「にしても、蓮が言つてた通り、唇甘い…。もう一回キスしていい？」

「だっ、ダメに決まつてるじゃないですか……！」

「えー……。じゃあ、これで許してあげるよ……」

私の右手を、暖かい物がつつむ。

え……？

「これなら、あつたかいでしょ？」

「……」

全く、何をするかわからないんだから……。

でも、私の顔は真っ赤なのである……。

27 真つ暗闇の帰り道（後書き）

どうも、

ゆなかりかです。

ああ、予定変更…。本当は、翔君にこの役をやらせるつもりだったのにー！

やっぱり、似合わないかも…。ってことで、綾君登場！

いいな、美和ちゃん…。うらやましい！

っていうか、綾君といい感じになっちゃったし…。

もう、お相手は綾君でもいいかなーなあって。

それでは、さよならー

28 またまた変人がやってきた！。

「……」

「おっはよお、美和ちゃん」

神様、そんなに私のことが嫌いですか…。

昨日のことがあったから、雨風君には近づきたくなかったのに。朝家を出た瞬間雨風君が玄関の前に。

これ、ある種のいじめ？

「どうして…」

「ん？」

「どうして、うちの前にいるんですかつ」

「そりゃあ、美和ちゃんのことが好きだから？」

「ふざけないでください。マトモな理由を言ってください」

「えゝ。だからあ、美和ちゃんのこと、好きだからー？」

カチンッ！

いつまでもおちゃらけなその態度に腹が立ちます。

さっさとその場をどけ。

どけえええー！！！！

「さようなら」

「待つてよお、美和ちゃん」

だいたい、何で反対方向の雨風君がここに！？
何を考えているのかわからないです、はい。
だーかーらー！
私の横で手をつなごうとするなー！！！！

「えー……。ぶー……」

「あらー！美和う？」

げげっ！

最悪最低。

ああ、今日は星座占いでも最下位だったしー、朝から嫌な奴いるしー、しーかーもー、この声聞いちゃうなんて、運悪すぎっ！

「姉……何でここに……」

「だつてえー、美和ちゃんのこと好きだからー」

雨風君の声を真似しないでください、似てないし。
邪魔だ、どけっ！

雨風君も嫌だけど、姉はもつと嫌です。
今日は私、朝から機嫌悪いんです。
さからったら、姉でも……っ

「にしてもお、美和って、人気ねえ 昨日は美男子五人に囲まれて
たし キヤツ、言っちゃった」

「ねえ、咲ちゃあゝん 早くバイト行こうよー」

「はあゝい 待っててね、タイちゃん」

「タイ、ちゃん？」

隣の雨風君までもがあきれている。

ほら、姉が変なこと言うから、雨風君までもが、あきれているじゃないですかー！

「姉は、相当な遊び人で……彼氏が今は三人。いつもは五人くらい
なんですけどねー。確か、プロポーズされているのは、今の人と、
彼氏？のフミ君だったような……あ、昨日の飯塚君とは正統派のお
付き合いをしているらしいけど」

「へ、へえ……そうなんだあ」

ああゝ。

これはあきらかにあきれてるよ、私の印象がた落ちじゃん……。

そりゃ、前から女扱いされてないのはわかってたけど……今回でま
た落ちた……。

ま、まさか……男子以下！？
最悪だ……。

「おい、稜」

「あ……拓海……」

「美和と登校してくるなんて、いい度胸だなあ」

松平君、目が怖い……っ

後ろからモクモクと黒いオーラがただよってますけど？
怖いんですけど？

「アハッ バレちゃったね、美和ちゃん」

いや、バレて当然ですし。
っていうか、バレてむしろよかったあ…。

「松平君、おはようございます」

「あ……おはよう……」

「ププッ！拓海の迫力も美和ちゃんには無意味！？アハハ、おもしろ。でもお、僕ら、昨日あれをやった仲だしね」

あ、あれって、キスウ！？

それは、雨風君が勝手に……。

…はあ…思い出しちゃったよ…。

「っな……！おい、美和！稜に何やられたんだっ！」

「え……？な、何って、その……」

「クスッ！当分からかえるな」

ボソッと雨風君がつばやいたのが気になるけど、今松平君に肩をつ

かまれて動けない。
や、やだ…なんか、身の危険を感じる……。

「そのお……き、キス……」

「はっ？キス、だけ？？？はあ……心配かけんなよ……。キス、ね。
キス……」

言った瞬間、松平君がはっとこちらを向く。
顔が笑ってるよ？

でも、ニヤニヤしてるよ？

ちよ、ちよっと待って、言ったのに肩から離してくれないこの手は
何？

だんだん近づいてくるこの顔は何？
うぎゃあああーっ！っ！っ！

「……っ！」

こ、ここ、校庭だよっ？

みんなに見られてるよっ？

っていうか、なんでまたキスされてるのーっ？？？

「おまえが他の奴に唇を奪われたら……俺がその分、キスをする。
いいな」

ちよ、ちよおっ！と、待って！

何それ、何それー！！！！

なんで勝手に決められなくちゃいけないの、っていうか、やだあー
！！！！

その後、やはり私は女子のみんなに囲まれてしまつのである。
はあ……。

つ、疲れたあ……。

今はコンピューター室に向かっているところ。

これまで女子に追いかけられて、追いかけられて。

はあ……もう、散々だよー。

「失礼しまーす……って、あれ？誰？？？」

「やだあ もおー、かず君ったらあ」

「何を言っているんだい、カヅ……」

文芸クラブ専用のコンピューターのところで、見知らぬカップル（？）がイチヤついている。

な、なんか、見てて寒気がする……っ

「あつ！ねえ、かず君。あの人、見てるよ？」

「いいじゃないか、僕達のアツアツっぷりを見せ付けてやるっじゃないか」

「……」

ひ、ひきますっ！

だいたい、よく見れば……

「同じ顔ーっ!？」

「「そうに決まってるでしょ。だって、僕（私）達双子だもん」」

あ、なるほど、双子ね……。

って、双子おお!？」

ヤバイじゃん、兄弟同士でキスとかしちゃっていいのー?（目撃したとき、キスしてました）

「ちよっ……だ、ダメでしょ、そんなの……」

「恋に性別は関係ないって言うでしょー?」

「現に、ここの部長は同性愛者だし」

「「つまり、恋愛に兄弟関係は関係なしってこと」「」

いちいち八毛るなー!……!

だいたい、そういうのは法律で認められないんじゃない……。

「それなら、駆け落ちしようか、かず君」

「そうだね、そうするしかないようだ」

「いやいや、勝手に話を進めるなよー！……って、どうしてこの部屋にいるんですかー」

「え？入部希望だから」

……。

……。

ぎゃああああー……！！！！！！！！

28 またまた変人がやってきた！。（後書き）

どうも、ゆながりかです

よく考えてみたら、中学二年生がいなかったんで！。

新キャラ登場！

もう一名、登場させるつもりですけどね。

あ、この人たちは中学二年生です。

一度、兄弟の恋愛、書きたかったんで。

それでは、さよーならー

29 コイツ達、何者？

どどど、どおなってるのー！

この人達が、文芸クラブに、入部希望っ！？

大丈夫です、美和。

これは、悪い夢なのです。

「うぐっ」

ほ、ほっぺが、ひきちぎれるよー。

ひっぱらないでー。

「ふあ、ふあひふるんふえふひゃー（な、何するんですかー）」

「夢じゃ」

「ないって」

「「教えてあげてるの」「」

は、ハモツた……。

「失礼しまーす あっ、美和ちゃん！早いねー…っで、誰、その人達っ」

だ、ダイさん……。

助けてくださいー！

「こ、この人達、キスで、クラブで、ほっぺブニブニって、痛くて痛くて……」

痛かったよー……っ

うええええーん……。

「っちょ……美和ちゃんっ!？」

うぐっ……うつ、ひっ、ええええーん！

「こ、こついうの拓海君達にいつもやってるの？拓海君達も、大変だね……」

どこか気持ちにゆとりがない様子のダイさん。

だ、ダイさんはっ、同性愛者だから、泣きついてもいいーよね……。

「失礼しまーす…っ、美和ちゃんっ！何でダイさんに抱きついてるんですかー！」

遠藤、君？

涙で視界がつぶれながらも、遠藤君らしき人の顔を見る。

うん、この茶髪は遠藤君だ。

「うわっ！美和ちゃん……っ」

え？

なんだか、見つめ返してきてるんですけど？

「かわいいっ」

うごっ！

抱きつかれてるー！

その勢いでダイさんから腕を放す。

そしたら、勢いがついてしまっ……

「うわあっ」

「キャッ」

いったあゝ……。

あれ？

私、どうなっ……

「失礼します……っ……美和？」

その声は……

松平君？

「な、何で翔の上にいるんだよっ！」

え……？

うぎゃあああっ！

私の、下に、遠藤君が……っ

「ぐいぐいごめんなさいっ」

「いいって、いいって」

重かったよね、ううー…。
はっ！

そう言えば、本題の……

「ねえ、かず君、この人達、どうしたんだろう」

「さあ」

「あ、君達が、美和ちゃんの言っていた入部希望者だね？初めまして。僕は、このクラブの部長、坂本大輔だよ。ダイさんって、呼んでね」

「私はー、あかはかつき赤羽華月でーすつ。かず君のー、彼女と兄妹をやっ
てまーす」

「僕は、あかはかずき赤羽一輝です。かづー筋でーす」

「「どうぞ、よろしくー」「」

赤羽先輩、ですか……。

個性が強いつつ！

いきなり禁断の兄弟愛？？？

ああ、ハードルが高すぎてついていけません。

「失礼します」

ん？

文芸クラブにしてはまともな声。

この声、知らない……誰？

「初めまして。僕は、井上智いのうえさとるです。どうぞよろしく」

う、うわ……めがねに、黒髪、片手には本と、優等生系の人間が来た……っ

す、すご……く嫌な予感がしますね……。

これ以上、文芸クラブにキャラが濃い人間は入りませ……

「文芸クラブに入部したいのですが」

……チーン……。

あは、あはは。

もう、最悪だし……。

「どうぞ、ウェルカム 僕は、部長の……」

「坂本大輔先輩ですね、存じております。そちらが、松平拓海君、遠藤翔君、そして……有名な、花形美和さん。で、赤羽さん達ですね」

す、すごっ！

ものすごいヤツがやってきたあ！

絶対に、まともじゃないな。

はあ……。

30 オシャレ部隊、出勤せよ！

「それで、その人達も文芸クラブに入部したの？」

「うん……」

「美和も、大変だね。そうだ、知ってる？」

話を聞かないとわかりません。
今は学校へ向かう途中。

今日は夏休み初日。

なぜ学校へ行くのかというと、今学期最後のクラブ発表会だから。
楓と学校へ向かってます。

本当は、文化系クラブの人以外はこなくてもいいんだけどね。

「あのね、松平君達がいるから、本当なら文芸クラブに女子がたくさんいるはずだけどね。会長や、鈴原さん達が邪魔してるらしいよ？怖いよね。その邪魔をはねのけてその三人が入ってきたんだ……」

ふん。

まあ、あれほどの変人なら会長達の邪魔なんて、関係なさそう。
すごいね……。

「その三人はどうするの？」

「売り上げが高ければ、合宿があるでしょう？そしたらその三人もくるってさ」

「合宿……どっか行くの？」

「うん。舞ちゃんの家の特荘を使わせてもらえるって。売り上げが高ければ」

「そっか」

あれやこれや話している間に学校に到着！
あゝ、これで楓と離れちゃうのか……。
ちよつと憂鬱、かも。

「おはよーございませーす！」

「おっはよお」

「おはよう、花形さん」

「鈴ちゃん、舞ちゃん、会長っ！おはようございませす」

なんだか、テンション高いなあ。

昨日聞いた話だと、松平君を交代で使っらしい（使っってどっいうこと？）。

「おはよ」

「おっはよー！」

「おはよお」

「おはよーございまーす」

「おはよう、美和ちゃん」

松平君、遠藤君、雨風君、笠原君、天道君つつつ！

い、言うの疲れたあゝ…。

「みんな、そろってるねゝ。それではあ、第一グループ、よろしくねゝ。それと、美和ちゃんはこっちの服に着替えてゝ」

ダイさんが珍しく指示をだす。
へえ、やるときはやるんだゝ。

「あゝん、拓海くゝん 一緒に準備しよゝ」

……前言撤回。

ダイさんはいつでもダイさんなんですネ、はい。

「はい、衣装」

佐々さんから手渡されたコスプレ。

うっ……！

こ、コスプレなんて……っ

はあ……。

姉がはりきってしまつて、コンタクトレンズを買ってくれた。

「見にいけなくて残念だわあゝ」

見にこなくていいからっ！

「これを、着ると？」

「うん、そうだけど？似合うよ、きっと。そうそう、オシャレクラブに頼んであるから、大丈夫だよ」

何が？

と、言おうとしたら……

「おしゃれ部隊、全員集合っ！整列！番号！1」

「2」

「3」

「4」

「5」

「全員、配置につけー！本部からの指令は、花形美和を、かわいくしろという、ミッションが届いているぞー！」

ポカーン……。

この学校、まともな人っていましたか？

目の前には、バッチリオシャレして、バッチリメイクした女の子が五人。

しかも、「オシャレ部隊」って何よ。

戦隊物のアニメかって。

「わ、わわわ…っ！な、何するんですかー！」

「何って、あなたを勇者風でオシャレに変身させたら、千円くれるってダイさんが言うんですもの。今こそ、我がオシャレクラブのオシャレ部隊が出動するときだと思ったわ」

いいえ、出動しなくてもいいですから。
はい、全く必要ございません。

「まあ、ともかく！千円のために、私達は出動するの！」

うわわわわ……っ！

髪をいじくるなー！

化粧するなー！

勝手に服をぬがさないでー！！！！

「できたあ
」

「できましたか、オシャレに。入りますよ」

佐々さんが部屋に入ってくる。

ままま、待ってよ、私も見たい！

鏡ないの、鏡。

「わおっ！！！！すばらしいですね、オシャレ部隊のみなさん。ありがとうございます」

ちょ、ちょっと、見せてよー！！！！

31 チラシはまさしくミステリアス！

……。

うええ~~~~つつつ！

「ちょ、ちょっと、この格好……」

「美和ちゃん準備の時間だよ」

「だ、ダイさん……」

こ、これ、勇者じゃないでしょうっ！

このまえのスケッチブックには、もっと、こう……勇者っぽい、ヨロイみたいな……だったのに……！！

これは、どピンクで、フリフリで、花も頭についてるし……しかも、剣にはハート！？

勇者のイメージくずれまくりだし……！！

「さあ、行こう 合宿がかかっているからね」

うっ……！

合宿って言われると、がんばらなくちゃと思ってしまう。だってさ、だってさ……文芸クラブでお泊まり会でしょ？

夜を通して、作品を書いたり、読んだりして、さ。

ああ、憧れちゃいますよ……。

「コンタクトつけた？」

「はい、つけました」

コンタクトって、こんな感じなんだな。

初めての感覚！

にしても

衣装が派手！

いくら派手な格好をしている人が多いクラブ発表会でも、これは目立つちゃうよ……。

ピンクのヨロイに、ポニーテールをちょっと横向きにした（？）みたいな髪型には花がのってるし、バッチリメイクしちゃってるし、剣を持って歩くっていうのも不満だし、だいたいこの胸についているリボンは何？首元にはアクセサリーがあるし、手首にもジャラジャラついてるし、足にまでついてるし。靴なんて、ド派手なピンクに黒のリボンやフリルがゴツゴテ。ヨロイのウエスト部分にはフリルがたっぷりついてて、スポンのはずなのにスカートみたいになってるし。動きにくいよ……っ。

「何をブツブツ言ってるの、美和ちゃん。でも、たぶん合宿費用は大丈夫だと思うよ？なんていったって、そのコスプ……じゃなくて、衣装だし、表紙にはあれがあるし」

佐々さん、思い出させないでください……。
はあ……。

何日前、いきなり衣装に着替えさせられて、ダイさんに写真をとりにまくられちゃって。

その写真が……文芸誌の、表紙なのです……。

うう……。

「それじゃあ、学校中にこのチラシをまき散らかしてきて」

ダイさんがご機嫌な様子でチラシを手渡してくる。

満面の笑顔……。

もともと顔の形は整っているから、ちょっと笑顔にくらっときます、はい。

「わかりました……って！こ、この写真はつつっ！……！」

この写真は、ダイさんが最後に撮った、超どアップの写真。

ダイさんは

「すごい！この写真を表紙にしよう！」

なあんて言ってたけど……ダメ……！！

だって、その……髪とか妙に輝いていて、目なんて怪しい光を放っていて……。

そして、このカメラを見つめる角度とか、すごくミステリアスな雰囲気、というか……。

色気……がある……の、かな？

「い、嫌ですっ！こんなの、ばらまくなんて……。できませんっ！というよりも、恥ずかしすぎます！」

「大丈夫、大丈夫 だって、色気があるしー。コレ見たら、買ってくれるよ、たぶん」

「断ります」

「……合宿……」

っ……！

その手は、卑怯なり！

うぐぐぐ……っ

が、合宿なんて、合宿なんて……

「その仕事、引き受けまゝす」

はっ……！

気がついたときには、手を挙げてダイさんの目の前に出ていたのだ
った……。

31 チラシはまさしくミステリアス！（後書き）

うぎゃあああ！

どんなサブタイトルだよっ！

自分で自分につっこみ。

どうも、お久しぶりです

いや、ここ最近、後書きを書かずに投稿だけしてました。
すっごおおお、忙しくて……。

小説を書くのに一苦労、二苦労、三苦労……。
疲れた、疲れた。

ともかく、今日も無事更新できて、よかったあゝ
それでは、さようならあ

by ゆなかりか

32 マジカル少女、カツミ???

「ぶ、ぶぶぶ、文芸誌、夢を描いて、好評発売中……」

うつ、うつ……。

恥ずかしいよお……。

こんな派手な格好で学校中を歩き回っているなんて……。

信じたくない……。

でも、これも合宿のため！

がんばらなくちゃ……。

「文芸誌、夢を描いて。文芸クラブ部室、三年空き教室で、発売中……。今度のテーマは、戦い。戦場でのコマや、ちょっとしたケンカ、戦国武将のお話など、もりだくさんです……っ。どうぞ、買ってくださいあ……い……」

はあ……。

にしても、よかったあ……ここに姉がいなくて。

姉がいたら、写真をバリバリとっているんだろうなあ。

「キヤー！美和ちゃん！かわいい　こっち向いてえー
キヤーッ」

……。

姉、なぜここに？

フェンスの向こう側から叫ぶ声。

そうまでしなくても……

「お姉ちゃんっ！うるさい！！！」

「いやあゝ 美和ってばあ、反抗期？」

「はい、そうです、そうですとも！だからさっさと帰りやがれっ」

はっ……！

周りから冷たい視線が……。

す、全ては姉のせいなのに……。

みんな、誤解です、誤解なんですー！！！！

「ふふっ、美和、こんなときは、どうすればいいのか、教えたわよね？今日は実戦にふさわしいじゃない」

あっ……。

この方法は、クラブ発表会中は使つまりと思っていただけ……。

このままじゃ、文芸誌の売り上げが危うい！！！！

「ねえ、みなさん？私と、一緒に……戦いましょう。みなさんなら、私に……ついてきて、くれるわよね？」

世界中を敵に回したというシチュエーションでのお色気。

たとえ世界中を敵に回しても、この技があれば大丈夫……らしい。

「大丈夫よ、美和の美貌があれば、男共がひっかかること間違いないし！」

と、姉は言っていたけど……

「戦いまーす」

「喜んで、ついていきます!」

「文芸誌、買ってきます!」

ほっ…よかった、よかった。

でも……

これで、文芸誌が売れる?

「よし、ここは、実行あるのみ…ですよね?」

どこか、舞台みたいなところ……

ありやうや?

あそこに、何か人が集まっていますけど……?

何かやるのかなー?

「みなさーん!ようこそ、我がエンターテイメントクラブへ!」

えんたーていめんとくらぶ……???

何それ?

この学校には、数え切れないくらいクラブがあるし……そんなのあったんだ…。

にしても……

あんた、なんていう格好をしているんですかー!

私も相当派手だと思うけど、その舞台に出ている人も派手。

付けひげに、真っ黒のシルクハット、赤の服に、オレンジのカボチヤパンツ。

そう、それはまるで、サーカスの団長、または、マジックショーの

男爵のような格好なのである。
私以外にも派手な人はいたんだな。

「イツツア・ショータイム！」

発音がド下手だけど、サーカス（？）の最初を明るく始める。
すごい、派手だ……。

もう、私の目は衣装に釘付け。
って、それどころじゃな——い——い——！！

この場を借りて、文芸誌の宣伝を、しなければ……。
そのために、一番いいお色気は……
あれだつつつ——！！

「それでは、まず最初のエンターテイメントは……」

「は——っい——」

観客とエンターテイメントクラブの人たちの目が私に向けられる。
観客席の中で手を挙げたんだから、目立つのは仕方ないだろう。
でも、目立ちすぎ？

「ちよっ……お客さん、困りま……」

「私が、エンターテイメントクラブ第一号の、マジカル少女、カヅ
ミでえ——っす——」

エンターテイメントクラブの人……団長（？）さんが、口をぽかんと
あけている。
それもそうだろう。

いきなり現れてクラブの人といううそをついているのだから。
エンターテイメントクラブの方々、ごめんなさい……。

「それではあゝ、マジカル少女、カヅミの、マジックをご覧ください方あゝ」

「……………はい……………」

よおし。

これで、観客は私の味方。

これで、団長さんは私に逆らえない。

「それでは、団長、マイク借りますねゝ」

「…………え」

「さて、と。今から、私が皆さんに、魔法をかけたいと思いますっ
観客の皆さん、全員に、です」

団長さんをドンとおしやってから、話をつづける。

団長さんがいたら、話が進まないしね

「その魔法とは……」

……ねえ、私のお願い、聞いてくれる？文芸クラブの、文芸誌を、買って？」

舞台中がシーンとなる。

あれ？

ま、まさか、失敗……？

そ、そうか……いきなり、文芸誌を買って？は失礼かな？

「「「「「はい、買いにいつてきまーす」「」「」「」

えっ……。

だ、大成功！

意外な結末に、驚くばかりです。

やったね

あつという間に、観客席からお客さんは消え去り、残るはエンターテイメントクラブの皆様と、私だけになってしまった。

「あ、ああ……ど、どーなってるんだよー！！！」

団長さんの声が、誰もいない観客席に響き渡るのであった……。

33 売り上げは……

「あつれ〜？」

「あの人って……」

「「文芸クラブユニークな人第1位の、花形美和」」

この声、このハモリぐわい……。

そして、私をけなすこの怖さ。

この人達は……

「赤羽先輩っ！」

あー、嫌な人達に出会っちゃったよー。

ひとまず仕事も一区切りついて、料理研究クラブで買ったお弁当を食べているところなのにー。

やだなー、できれば逃げたいなー。

しかも、「文芸クラブユニークな人第1位」って、どういうことですか。

私よりユニークな人はたくさんいると思うんですけどね。

「えー。でもさ、かず君。文芸誌には、そう書いてあったよねー」

「ああ、確かに書いてあった」

そうですかー……って、は!?

どういうことだよ、書いてあったって。

「あれ、知らないのー?」

「文芸誌には、今月のから、おもしろランキングがのっているんだよね、カヅ」

「うん、そうそう。今月は……」

「「文芸クラブユニークな人ランキングと、文芸クラブモテモテな人ランキングと、文芸クラブ鈍い人ランキング……」」

……。

そんなこと、一言も聞いてませんけどー。

ひどいよ、ひどいよー。

ユニークな人って、そんなの……ううゝ…。

「その中の」

「一位は全部」

「「花形美和だったんだよねー」」

……。

はい!!???

一位が、全て、私!?

どういうこと???

ユニークな人っていうのもよくわかんないけど、モテモテな人って

……もつとわかんないよー！
ありえないって、うん。
松平君とかの方がモテてるしー。

「ありえなくはありません」

「うぎゃっ」

「あ、智君」

「智」

いきなり後ろから現れた人……井上先輩が、ぼそりとつぶやいている。

「文芸クラブのあの五人からモテモテですし、学校中の男子を二氣にとりこにしたと言われています。とりこにならなかったのは、僕と、この赤羽一輝のみらしいですけど」

「そりゃー、僕はカズ一筋だから」

「いやだ、かず君ってばー」

「アハハ」

そこで楽しく青春してもらうのはかまいませんけど、私の目の前でやられると……かなり、ムカつきます。

「そつだ、花形美和。僕達のことは、名前で呼んでいいよ、区別つかないでしょ」

「そうそうー。私も言おうと思ってたー」

「「やっぱり、僕（私）達って気があうね」「

う、うるさい…。」

ハモるのが、何ともいえず気持ち悪い。

「気持ち悪いって」

「どづいづことさ」

……。

この人達と話していると、疲れる…。

何はともあれ、クラブ発表会は無事（？）終了した。
よかったー。

「さて、売り上げのことですが……」

ダイさんがみんなを見回して言う。
き、気になる…。

あんなに働いたんだし、お願いだから、合宿に行かせてー！

「無事、予定の金額を売ることができました。いや、それ以上ですね。なので、今年の文化祭は、パーッと盛り上がりましょうー！！！！」

ダイさんの一言で、文芸クラブの部室が一気に盛り上がる。

よ、よかった。

これで、合宿に行けるんだね。

うれしい……っ！

「それで、合宿ですが……八月一日から、八月三日まで、二泊三日の予定です。もし、都合が悪ければ……まあ、事前に調べておいたし、大丈夫だとは思うけど……僕に言ってください。何とかします。それと、決してお遊びではないので。予定表や、持ち物リスト等は、後日渡します。文芸クラブは、夏休みは、あさってからです。それでは、解散っ」

言いたいことを言い終わると、ダイさんはさっさと帰って行った。そういえば……

もうすぐ、文化祭…。

素敵……っ

文化祭では、五個まで小説をのせていいらしい。

やったー！

合宿では、主に文化祭について考えていくらしい。

今から、ものすっごく楽しみになってきた

33 売り上げは……（後書き）

どーもー、久しぶり（？）ですねー。

ふう、疲れました……。

今日は、これからゆっくりするつもりです。

午前中はいろいろと忙しくて……。

まあ、午後はのんびりしてたんですね。

明日から、毎朝ジョギング！と、意気込んでいる作者です。
体力をつけなければ！

と、勝手に思いこんでいます。

三日坊主にならないようにがんばります！
それでは

by ゆなかりか

34 デート日和の快晴です。

「っん……」

ふあゝ…。

眠い……。

つて……

「ち、遅刻だああゝゝゝ!!!!」

どうしよ、学校に遅れちゃうよお…。

うぎゃああ!

もー、なんでおねえちゃん、起こしてくれなかったのー!!!!

「ちょっと、お姉ちゃん!どうして起こしてくれなかったの!」

「え……?だつて、今日から夏休みでしょう?」

「えっ」

なつやすみ……?

そ、そうだ、た……。

ガン。

シヨック、だよ…。

「あら、美和ってば、忘れてたの？さすがね」

「さ、さすがって、何よ！」

「あ、そうそう。私、今日、デートだから。それじゃーねー」

「あ、うん……」

……って、その格好で！？

いつもより、気合が入っているよーな……。

気のせい？

まさか……

「今日のデート……飯塚君と？」

姉の体が一瞬にして固まる。

ずばり、的中か。

だから、そんなに化粧して、フリルとかいっぱいいつてるのを着て、リボンもつけて、帽子もかぶって……恋する乙女みたいなんだ……へえ。

「っな……！ちょっと……ど、どうでもいいでしょ！あ、そうだ……」

こっちを振り向く姉。

うつ……！

悪魔の微笑み。

ニヤリと顔をゆがませて、こっちを見ている。
怖いっ！

「あのね、私ってば、馬鹿でね、美和のお洋服、捨てちゃったん

だから！今日はね、私の服を使つてね」

……はああ~~~~！？

どういうことじゃ、ボケエ！

私の、服を！？

そういえば、毎日制服だったし、今週、姉が青い顔をしているときが、一時期あつたっけ……？
げえええっ！

「ちよつと、お姉ちゃんっ」

「私の服、使つていいからね。五時までには帰るから、バイバイ」

「お姉……っ！はあ……」

別に、お姉ちゃんの服とサイズはそう変わらないから、別にいいんだけど……

フリルとかついてるのばかり！

はあ……。

私が普段愛用している服は、Ｔシャツにズボンという、断じてオシヤレとはいえないような服。

だから、姉のなんて……男がスカートはくようなもんなのです。

「ともかく、残っている服がないかどうか探さなくちゃ……」

いくら姉が馬鹿でも、全部捨てたなんていうことは、まずない……

……。

という、私の考えが甘かった。
はあ……。

「何も、ない……」

何を考えていればこうなるのよー！

クローゼットの中はもとも物はそこまで入っていなかったけど、
何もない。

はあ……。

じゃあ、姉のクローゼットを……

「見なかったことにしよう。今日は一日パジャマで過ごそう、そう
しよう」

よりによって……姉は、デートの服を用意していたらしく、クロー
ゼットの中には……ドレス。

どうして、こんなものが家に！？

っていうか、ドレスなんていつ着ていくのよー！

だいたい、ズボンは？

ないの、ないの？

はあ……。

ピンポン……

「あ、誰だろう……宅配便？なら、パジャマでいいか……」

ピンポン……

うるさい…。

出るしか、ない。

「はい……」

「あ、美和？今日さー、一緒に出かけない？」

インターホンに出た瞬間、頭にキンキン声が響く。
この声、このぶつ飛んだ発言……楓？

「かえ、で？」

「そうそー。今日さー、デートする約束の人が用事できちゃってー、
今すぐおおく、ヒマなんだよねー。だからさー、今日は寂しく
女二人でデパートにでも行かない？」

でーと……。

おまえもかいっ！

にしても、またカラフルな服装だなあ。

ピンクの上着に、黄色のキャミソール。

青のショールパンに、きんきらきんのアクセサリー。

キラキラすぎない？

って、それよりも……

「ごめんね、楓。今日、服がないんだあ」

丁重にお断りさせていただきます……そう言おうとしたときに、イ

ンターホンからでもわかる、楓の叫び声が聞こえた。
つていうより、ドアを通して聞こえるんですが……？

「ちょっ……服がないってどういうことよ、美和！開けなさいよお！さっさと開けないと、父さんの鉄砲持って来てぶっ放すわよおお！」

いやいや、やめてくださいー！

「楓！ひ、ひとまず、中に入って……それから、説明する、から……」

そんなこんなで、私は楓を部屋の中に入れることになった。
まず、これが間違いだったんだよね…。

35 文芸クラブ合宿お祝いパーティー……!?

「わ、わぁ……ど、ドレスウ!？」

部屋に入って楓が最初に口にした言葉。
それはそうですね……。

事情を話して、部屋の中に楓を入れさせたんだけど……。
うっ……ん……ダメだったかな？
姉の部屋だし。

「う、うん、そうなんだ……。はぁ……」

「素敵 そうだ、今日、パーティーやろうよ、これ着て!」

は……？

楓のすっ飛んだ発言に一瞬動きが止まる。
ば て い ？ ？ ？

どーゆーことですか、楓さん……。

「つーまーりー ほら、美和の友達に、舞ちゃんがいたでしょ？あ
の人の家で、こういうドレスを着て、パーティーをするの ほら、
素敵!」

……。

「悪いんだけど、楓。用事思い出したから、帰ってくれる?」

「わ、わわわあああ!!!ま、待ってえ!ほ、ほら、合宿にいけるお祝いとして!ね?合宿、合宿よ!ほら、松平君たちとお近づきになれるチャンス……」

「お近づきになりたくありませんから。では、さよう……」

「ああ……いいのお、あのことバラしても。私、美和のことなら、何でも知ってるんだけどお」

ひ、卑怯なあああつ!

ズルイ、セコイ、最低っ!

「……舞ちゃんが、許してくれたらね」

「大丈夫! その辺、心配後無用!電話貸してね、ファンクラブとして舞ちゃんちの電話番号は知ってるんだ」

……。

舞ちゃんが、許すなんて、ありえない。

……たぶん……。

「あ、舞ちゃん、ですかー?私、松平君ファンクラブの楓、または、文芸クラブ花形美和の友達の楓でえっつす 実はあ、今日……パーティーやりませんか?あ、ああっ!!!き、きらないで!ほらあ、松平君とお近づきになるチャン……え?今すぐ、会場を用意させる?あ、よろしく願います じゃあ、今日の五時頃いきますから」。もちろん、松平君達もつれて、ね?それでは」

「……楓、卑怯ナリ」

「このくらいの手は使わないと あとは。鈴ちゃんちは電話番号知ってるけど……松平君達はわかんないなあ……。そうだ、美和、言いにいってくれない？あの、文芸クラブの先輩達も。よろしくね、美和」

ええ~~~~っ！

そ、そんな！

私、パジャマだし、第一家だって、知らないし……笠原君の家以外は。

と、ともかく、ヤダ、無理~~~~！！！！

「ぱじゃま？ああ、そうか……。そこにあるワンピース！それ着ていけば？めがねはずして、コンタクトにしたほうがいいよ。ああ、髪そんなボサボサなんてありえない」

結局、楓にあれやこれやと体中をいじくりまわされて、水色のワンピースに、髪はといてサラサラ、カチューシャして、靴は真っ白の清楚な感じ……。みたいなふうにしあがった。

いや、確かにシンプルなんですけどね……ワンピースにはフリルがあるしー、全体的に……。お嬢様？？？

「それじゃ、いってらっしゃい」

ドンツと家を追い出され（ここ、私の家なんですけど）、庭へと落下。

はあ……

「あ……れ？美和ちゃん！」

「え？あ、遠藤君っ！偶然だね、どこかに行こうとしてたの？」

家の前にいた遠藤君を見つけて、立ち話。

「ま、まあね……」

「じゃあ、暇じゃない、よね……今日、パーティーがあつて……文芸クラブ合宿お祝いパーティー……なんだけどね。ダメ、かあ」

「全然、オツケー……！……それじゃあ、行こう！」

急に張り切りだした遠藤君。

つて、ダメだよ。

まだみんなを誘ってないんだし……

「つて……み、んな？」

「そつだよ、みんな。松平君達……とか？家に行かなくちゃ。あ、遠藤君、案内してくれる？」

「……ああ……」

どこかションボリとした遠藤君。
何で？

男心は複雑です……。

「そついえば……最初のクラブ発表会の時に……呼び捨てでいいつて、言わなかったっけ？」

「あつ！……い、いや、呼び捨てって……恥ずかしいし……」

プツ……！

チャラ男の遠藤君が、そんなことを言うなんて！

アハハ、うつそ〜！

似合わないってえ〜！

「と、ともかく、だな！まずは、ここから近い拓海の家に行こうぜ
」！

「うん
」

こうして、それぞれの家を回りだしたのだった。

35 文芸クラブ合宿お祝いパーティー……！？（後書き）

どーも、お久しぶりです

今日は、翔君を出しちゃいました。

チャラ男にも似合わず、純情っすね。

あ、ちなみに！

翔君は……美和ちゃんをデートに誘おうと来た……という設定になっています

ぐふふ、美和、鈍い。

さて……と。

予定とはちょっと違う展開になってしまいました。

本当は、楓ちゃんとお買い物 って感じにしようと思ってたんですけど……

やっぱ、ドレスっていえばパーティー？ってことで。

ともかく、今日も更新できてよかったです、そろえでは、次のお話
でお会いしましょう

by ゆながりか

36 ドレス&タキシード

ピンポン……。

ここが、松平君の、家……？
でかつ！

舞ちゃんに負けなくらい大きいよ、豪邸だよ！

っていうか、この家なら私も知ってる！

どんな人が住んでるんだろうって、思ったんだっけ。
松平君が住んでいたなんて……。

「……はい」

「おい、拓海？翔だよー」

「……帰れ」

「わあああ！！！！ほ、ほら、美和ちゃんもいるんだってー」

「……すぐ行く」

遠藤君がこちらを振り向いて親指を突き出す。
す、すごい……楓の技と似てる？

「で、何のようだ。“二人”でやってきて」

後ろから、完全に機嫌をそこねた松平君が声をかける。
いや、怖いです、怖いですから。

「あー……やきもちやいてんの？拓海らしくないねー。実はさー、文芸クラブ合宿お祝いパーティーをやるうって。誘いに来たんだってー。っつーことで、行こうぜー」

やきもち？

誰に？

あ……ま、まさか……

遠藤君に、やきもちを？

っていうか、私、邪魔者？

松平君は、友情を大事にするの？

いや、っていうか、やつぱり女としてみられてない？
いろんな意味でショッキング……。

「あの……パーティー……なんだけど……」

「なんだ、美和」

ビクツと体がはねる。

怖いよ……。

すごい目で睨んでくるし、美形の人に睨まれると、相当怖いんだよね……。

「私の、家……ドレスは、ある、けど、タキシードとか、ないし……。だか、ら……松平君の家、なら、あるかな、て」

さつき見て思ったこと。

この家なら、タキシードの一つや二つ、あるんじゃないかって。だって……普通にパーティーとかやりそうな豪邸だし、ね。

「ああ、ある。いい、貸す。俺と、翔で他のヤツにも声をかけておくから。あの、赤羽先輩の女の方はそっちに行くように言っておく。ドレス、あるんだろ」

「う……うん！ありがとう、松平君。それじゃあ、私は、行くね」

よかった、一件落着？

怖いけど、優しいし。

やれやれ……って感じ？

「あ……っ！ねえねえ、美和……！」

え……？

誰だろう……。

後ろから、声が聞こえる。

誰ですか……？

「あ……っ！赤羽先輩っ」

「だから、名前でいいよー。華月先輩って呼んで」

赤羽……いや、華月先輩が走ってやってくる。

私、先輩が一人でいるところ初めて見た。

いつも一輝先輩と一緒にだし。

「ええー。だつてえ、かず君と一緒にいなくちゃー、華月、死んじ

「やうもおーん」

急に甘ったるい声を出さないでください、耳に悪いです。
私まで影響されてしまったらどうするつもりですかー！

「それで？ドレスって、どこ？」

じよ、情報が早い……。

「私の、家にあるんです。いろいろと。だから、行きましょう、華月先輩」

「おっけえー」

こうして、私と華月先輩は歩き出した。

37 ドレス試着会

「ただいまー」

「あ……っ！おかえりー、美和」

華月さんとあれやこれや言い合いながら家に帰ると、舞ちゃんと鈴ちゃん、会長もいた。

っていうか、みんなそろってる？
すごい……。

「えっと、いらっしやい。でも、何で舞ちゃんまで？舞ちゃんの家には、ドレスくらいあるよね？」

「ええ、もちろん。でも、シンプルなのばかりで……。松平君のダンスパートナーにふさわしいドレスを選ぶなら、こっちの方がいいかな、って」

だんすぱーとなー？

あれ、文芸クラブ合宿お祝いパーティーじゃないの？

それに、パートナーって、いったい……。

「おじやましてます、美和ちゃん。華月先輩が増えたから、これからは、カズじゃなくて美和ちゃんって呼ぶね？」

おお、鈴ちゃん！
すっごく優しい！

何よりも、マトモなことを言ってるよ！
ううーん、感動…っ

「何をいいこぶりっこしてるのよ、鈴香。松平君がいないんだから、
ここでやつても無意味に決まってるでしょう。馬鹿ね」

か、会長……っ！

そんなふうに出発すると、また……

「何ですって！ええ、そうね。松平君がいなければ、意味がないかもね。でも、綺麗な子っていうのは、内面から磨いていくものよ！だから！お姉ちゃんみたいな性悪女は松平君のパートナー、失格よ！」

あ、ああ……。

まともな存在だったのに……
はあ……。

「美和、ほら、立ちなよ。みんな、ドレス選んでいいよー」

楓……。

楓は、マトモだよな、うん。

「さてと 私も松平君のハートをゲット！するために、かわいいのを選ぶうっつ」

……前言撤回。

このクラブには、一人もまともな人間はいないのね（私をのぞいて）。
でも、みんな美人だよな……。

華月先輩はもう一輝先輩がいるから、ちょっとひかれ気味だけど、美人だし…。

友原兄妹は、二人ともオシャレが得意で、カワイイし。

舞ちゃんも、ぷっくり系なんだけど、ぶりっこで男子には人気あるっぽいし。

楓だって、男の子を虜にしちゃうくらいの魅力だし。

魅力ないの、私だけ???」

「かず君は、どのドレスを気に入ってくれるかなー」

「お姉ちゃんっ！そのドレスは、あたしが着ようとして……」

「何よ！最初にとったのは、このあたし！」

「舞は、ピンクが似合うかな」

「そうだなー。この色がカワイイかも」

みんなそれぞれ部屋に散らばって、ドレス選び。

あたしも、選ばなくちゃ！

できれば、シンプルなドレスがいいな……。

フリルもゼロで、リボンもゼロで……ピンクとかなし。ありえない。

「決めた」

華月先輩が真っ先に真っ赤なドレスを持って試着室（洗面所）に走

る。

華月先輩が持っていたのは、肩が出ていて、ウエストの部分とか超セクシーな赤いドレス。

胸には黒のバラが飾ってあって、ウエストの部分には黒のリボンが巻かれている。

スタイルがいい華月先輩に、よく似合ってるかも。

「あたしは、これ！」

「あたしは、これよ！」

そう言つて、走つていったのは鈴原兄妹。

鈴ちゃんは、黄色の派手なドレス。

ウエスト部分には、オレンジのリボンとひまわりがついている。

肩の部分にはシヨール（？）っぽい物がかかっていて、カワイイ

会長は、青の大人っぽいロングドレス。

チャイナドレスみたいに、足のところが開いているっていうか、何ていうか……。

胸の部分は大きくあいてるし、かざりはないのにすっごくはなやか！

「これで、舞が松平君の気持ちをわしづかみだよ」

そう言い残して鈴原兄妹を追つていったのは、舞ちゃん。

舞ちゃんは、ピンクの膝までしかないミニドレス。

スカートにはフリルがたっぷりついていて、ボリニームがあるし。

胸元には大きなリボンがついていて、肩にもフリル。全体的に、ふんわりしている。

「私、これに決めた あれ、美和は？」

あ……っ！

楓に言われて気がついたけど、私選んでないし！

ちなみに、楓は水色の膝までしかないミニドレス。

舞ちゃんのと違って、フリルはスカートにしかついてないけど、肩の部分についているリボンがカワイイ

それに、細い足が見えていて、楓らしいっていうか…。

「ちよつと、解説してないで、早く！もう、美和は……あたしが決めるよ？いい？ううん……これだね、これ」

ふえ？

楓がとつたのは、真っ白なドレス。

ウエディングドレスみたいで、オシャレなんだけど……

あたしに、似合わないよ！

だって、胸・肩にはかざりはないんだけど……

スカートとかフリルの段重ね！？

背中とか開いてるし！？

無理だよ……。

「美和は、めがねとれば美人なんだから！自分に自信を持って！」

「そ、んな……」

「ほら、試着室に行くよ」

「ええ〜っ……」

あれやこれやで、私は楓に引きずられながら、試着室へと向かうのです。

〜数分後〜

「わあ、美和、カワイイ」

「そ、う？」

似合わないって……。

フリルなんて、ドレスなんて、絶対に似合うはずがない。

「あ！私、お供に車用意させてるから……。みんな、来て」

お、おあ……。

さすが、お嬢様……っ

そういうことに関心がない華月先輩以外はみんなあっけらかんとしている。

だって、お供って……

「で、でかつ」

外に出ると……大きな車が、止まってるのです。
これぞ、本場のお嬢様だよ、うん。

「お嬢様、今日もおきれいでございます」

「ええ、それはもう。みんな、乗って？」

「キャツ、こんな車に乗るの初めてー」

そういうことに興味が無い（しつこい？）華月先輩以外はその場に
固まっている。

それはそうだろう…。

この車……私の家より、高そう……。

38 波乱のダンスパーティー、始まり。

「お嬢様方、お着きになりました」

「ありがと、セバスチャン。下がって」

せ、セバスチャン……。

どんな名前だよっ!?

にしても、何度見ても広いなあ、舞ちゃんの家は。

松平君の家も広がったし……みんな、すごい。

「お嬢様、お客様方は大広間に通しております。今日はご主人様もご友人のお宅でパーティーだそうなので、ごゆっくり、お楽しみください」

「松平君も、いらっしゃって?」

舞ちゃんが目を輝かせてセバスチャン(?)さんに言う。

すごい、これが恋のパワー?

「はい、いらっしゃります。今夜は、松平拓海様へのお近づきのチャンスでございます、お嬢様」

「そんなこと、わかっているわ、セバスチャン。今日は、そのための作戦もありましてよ?みんな、こっちに来て!私についてきてね、じゃないと迷子になるから」

さ、作戦……？
どんなんだよ…。
それに、迷子？
どんなに広いんだよっ

と、思ったけど、確かに迷子になるかも。
庭が、ジャングル並にでかい。
でも、ジャングルとは違って、きれいに手入れされてある。

「ねえ、美和。すごいね、この家。どんなんだよっ」

楓が私と同じツッコミをしている。
だよね、そう思うよね。

鈴ちゃんは慣れているらしく、平然とした足取りで屋敷へと入っていく。

会長は……緊張してるけど、大丈夫みたい。

華月先輩は……相変わらず、好奇心旺盛で目をキラキラさせている。

「ここが、大広間よ。みんな、入って」

大きな扉の前で舞ちゃんが立ち止まる。

真っ赤なドアに金で縁取ってあって……豪華。

ガチャ……

「松平くーん、舞、寂しかったあ」

扉が開いたとたんに、舞ちゃんが松平君へとダッシュ！
す、すごい、これから、戦いが始まる……

「あ……っ！私も、寂しかったわ！」

会長も負けじと走り出す。

体力では、会長の方が勝っているから、あっという間に舞ちゃんを抜かして松平君のそばへ。

「ちょっ……おねえちゃんも、舞ちゃんも、ずるいつ！私も、松平君と一緒にいいー！」

鈴ちゃんが一步遅れて松平君のもとへと走る。

ドレスで動きづらそうだけど……

にしても……

男の子は、タキシードが似合うんだな……。

黒のタキシード、白のタキシード……みんなそれぞれかつこいい。

「オホン……ッ」

どこからか、音が聞こえてくる。

あ、舞台の上に、セバスチャンさんが！

「それでは、文芸クラブ合宿お祝いパーティーを始めます。ちなみに、今日のパーティーは、かたおかざいばっ片岡財閥方式でやらせていただきます。今夜は、皆様の好みに合いますように、ダンスパーティーという形で行わせていただきます……」

ダンス、パーティー？

あ、それで、パートナー……とか、言ってたんだ……納得。

「そろえぞれ、好きな方とダンスをなさってくださいって結構です。もちろん、料理もご用意しましたので、食べてもらってもかまいません。それでは、音楽隊、ミュージック・スタート……」

セバスチャンさんの声にあわせて、ずっとしまっていた舞台のカーテンが開く。

そこには、バイオリン・チェロ・ビオラ……などの、楽器が勢ぞろい！

そして、ワルツのメロディーをかなでる……。

「松平君、一緒に踊ってくださいる？」

舞ちゃんがアピール。

松平君は……一瞬嫌な顔をしたけど、すぐに舞ちゃんの手をとって踊り始める。

むっ……なんか、嫌な気分……。

「み、みみみ……美和ちゃん、僕と……踊って、くださいっ」

後ろから声がして、振り向くと、そこには遠藤君が。

いつもよりも髪に磨きがかかっている？

「喜んで」

せっかく誘ってくれたし……こんな私でよければ、ね。

軽いステップで、私をリードしてくれる遠藤君。

最初はぎこちなかったけど、だんだんと笑えるようになってきた。時々ジョークを言う遠藤君は、気軽に話せる。

）

曲が終わって、遠藤君は私から手を離す。
離れていった手が、名残惜しそうにしていた。

「さて、美和ちゃん？お次は僕と踊ってくれるかな？」

あ……っ

天道君……

「ええ、私でよければ」

また、曲が始まる。

天道君と踊っているそばを、松平君達がかけぬけていく。
今度は、松平君と会長のペア、か。
完全に会長がリードしてるし。

「美和ちゃん、足元気をつけてね……」

「あ……うん」

天道君は、いろんなことに気がついて、すごく優しい。
ちよつとした気遣いって、いいよね。

「それじゃあ、美和ちゃ……」

「今度は、僕と踊るでーす」

何か話そうとしていた天道君を突き飛ばして入ってきたのは、笠原君。

「よろしく、お願いします、笠原君」

「オーケー、任せるでーす」

そう言っで、ダンスのステップをふむ笠原君は、さすがハーフ、ダンスが上手だった。

上手にリードしてくれて、下手な私でもついていけるようにしてくれた。

「あ……曲、終わったね……」

「残念でえす。もっと、踊りたかった……」

「あはは、踊るのが好きなんだね。じゃあ、笠原君は楓と踊ってきたら？私は休憩してるから……」

ちょっと、踊りつかれた。

ジュースでも飲もうかな……って！

「う、うわ、華月先輩と一輝先輩、ダンス上手っ！っていうか、ずっと一緒に踊ってる？」

二人で踊る赤羽兄弟は、たまにクルリと回ったりして、ダンスにも余裕があるみたいだった。

あ……。

井上先輩が、ガツガツと料理に食いついている。めがねから見える目が光っている……！

怖い……。

「えっと、ジュース、ジュース……」

「はい、ジュース」

「あ……ありがとうございます……って、雨風君！」

ジュースを差し出してくれたのは、雨風君。

この人は、要注意人物……いきなり、キスしてくるし、キスしてくるし、キスしてくるし……

「アハハ、そんなに逃げないでよ。大丈夫だってえ。それに……。ジュース……ほしくないの？」

目の前でジュースをちらつかせる雨風君。

ああ、ジュースが……

ジュース、ジュース……

「いりますっ！すっごおおく、ほしいです！」

「いい子だね、はい、ご褒美」

チュッ……

甘い音が聞こえて、口の中に甘い味が広がる……。これって……ジュー、ス？

何で、口の中に……
って……！

「っな……ちょ、雨風君っ」

「アハハ ごめんごめん エヘッ」

エヘッ じゃないでしょう！
ひどい、ひどいよおおー。

「おい、美和」

うきゃっ！

こゝこの声って……

「あ、あ……松平君？」

「覚えてるか？ほかのやつが、おまえにキスしたら……」

目の前が真っ暗になる。

視界が隠されて、何も見えない。

どう、なってるの……？

キス……され、てる？

幸い、誰も見てなかったみたいけど……。

「わかったか？そういうことで……お姫様、僕と、踊ってくださいませんか？」

そう言つて、手をとる松平君は、いつか見た絵本の王子様にそっくりだった……。

38 波乱のダンスパーティー、始まり。 (後書き)

ども、お久しぶりです

いよいよ、明日からは合宿スペシャルです

二泊三日で、おもしろそうですよね？

さて、この夏休み初日編が、長くなってしまいました……。
使いすぎましたね、反省……。

と、ともかくっ！

また、お会いしましょう

by ゆなかりか

39 いよいよ、合宿

「おはようございまーす」

「おはよう、皆さん」

「おはようございますう」

今日は、待ちに待った合宿！！！！

これまでの苦労のかいがあつた！

今思うと、大変だったんですね……。

コスプレ着たり、写真勝手にとられたり、宣伝係にされちゃったり

……

でも！

そんな苦労も、今日で……終わり……！！！！

「三人とも、おはようございます。みなさん、気合いが入ってますね……」

「……それはそうでしょう……！！……」

うぎゃっ！

び、びつくりした……。

今私とバスの前にいるのは、鈴ちゃんと会長と舞ちゃん。

三人とも、気合い入りまくりです。

鈴ちゃんは、髪にジャラジャラリボンとつけて、服は、ブランド物のキヤミソールにフリルたっぷりのパーカー、ピンクのスカートに、首にはネックレスが、ジャラジャラ〜。

会長は、髪を上でお団子にして、服は、真っ白で飾りっ気のないワンピースと、水色のパーカー（どでかいリボン付き）と、水色のハイヒール。

舞ちゃんは……髪は、巻き毛にプラスして、おおおーきなリボンをつけて、ブランド物のピンクのＴシャツに、これまたブランド物のオーバーオール。

オーバーオールには、ピンクのハートのアップリケがついていて、アクセサリーとかは、ジャラジャラ。

といったように、みんなそろいにそろってオシャレしてきているのです。

それはまあ、ここでは校則とかないし、自由でいいと思うけど……今から行くのは、山と、海の間の別荘。

つまり、動きやすい格好って、ダイさんが言ってなかったっけ？

「だって、松平君と、一緒にお泊まりですよ？きやつ」

「もう、考えただけでもワクワクしちゃうわ〜」

「いや〜、舞、うれしい〜」

……なるほど〜。

そっということか…。

私は、至って普通の服装。

ただ、夏だから、髪はポニーテールにしたし、普段のジーンズも、今日はシヨールパンにしたし……。

ともかく、オシヤレはしてきてないってこと。

でもでもー、鈴ちゃん達じゃないけど、合宿は楽しみ

だって、海だよ？泳げるよ？

山だよ？ピクニックに行けるよ？

何て言ったって、高級な別荘！

すごい、すごすぎる。

まあ、別荘……だから、そこまで大きくはないかもだけど……

「でも、楽しみですよね」

にっこりと三人を見回す。

今日はみんなにっこにこ、これなら、いつものケンカもなくなるかも………

って、そうはいかないらしい。
バスに乗ったとたんに……

「私が松平君の隣よーつつ」

「私に決まってるでしょ、この馬鹿っ」

「舞、松平君とお泊まり、楽しみにしてたんだあ」

ああ、日常茶飯事になっているこのケンカ。
うるさいんですけど……

ここは公平に……と、松平君は雨風君のお隣になったみたい。
舞ちゃんは、鈴ちゃんと。

遠藤君と笠原君。

天道君と井上先輩。

華月先輩と一輝先輩。

佐々さんと、ダイさん。

余った私と、会長さん。

バスでは、今度の小説のネタを考えていて、ダイさんの説明なんて……これっぽっちも、聞いていなかった……。

「それでは、みなさん、つきましたよー？」

テンションが高いダイさんが道案内する。

そのそばでは、セバスチャンさんが道を教えている。

あ、ちなみに、セバスチャンさんは、中年の男性です。

「う、うわ……っ」

ダイさんが、道の途中で立ち止まる。

ど、どうしたの？
って……

「うわあああゝ！！！！」

で、でかいっ！

「うちの別荘、そこまで広くないのよ？でも、皆さんの分の部屋は、余るほどあるから……どうぞ、ご自由に使って？もちろん、一緒に使いたいという方は、私に言ってくれれば……」

そう言つて、舞ちゃんは松平君の方を見る。

ナルホド、一緒に使いたいよね。

当の松平君は……完全に無視。

「はい」

「僕達」

「一緒に使わせてもらいまゝす」

赤羽兄妹がそろつて手を挙げる。

まあ、そうだろうな……兄妹だし……恋人、だし。

「さてと！部屋に荷物をおいたら、すぐに水着に着替えてくださいね さつきも言ったとおり、海で、写真撮影しますから」

写真撮影？

ああ、記念写真？

でも、バスの中で言っただ……聞いてなかった。

「記念写真もとるけど、聞いてなかったの、美和ちゃん。ここでは『写真集用』の写真をとるんだよ」

……はぁぁゝ!？

40 海だー、写真をとれー!?

「写真集って、どういことですかー!」

「つ、つまり、今度の文化祭ではー、文芸クラブモテ組みの、王子様グループ五人と、美和ちゃんの写真集を、作ろうかなって…。そういことで、アシスタント三人組、美和ちゃんにこの水着着せてあげてね、じゃー!!!」

私におびえて、逃げていくダイさん。

まったく……。

どういことですかー!

「美和ちゃん、早く着替えよー」

「そうそう、更衣室はこっちょ」

「花形美和、早くしてくれる?」

言われるがまま、されるがままに、脱がされ、着せられ、メイクされ……（っていうか、メイクは落ちちゃうんじゃ……。）。
というわけで、イジられた私は……完全に真夏の女の子……。。

水着は、幸いビキニじゃなかった。

ワンピース型の水着で、色はマリンブルー。

肩の部分は、フリルがついていて、胸には大きなリボン。

スカートの部分には、これまたフリルが算段重ねと、フリフリゴツテゴテの水着なのです…はあ。

「よし、私も着替えようつと」

「私はできたよお」

どお？と言って私の前でクルリと回る舞ちゃんの水着は、ビキニ…。

真っ赤なビキニと、巻き毛をほどいた舞ちゃん（巻き毛がない舞ちゃん、初めて見た）。
かわいいです、はい。

「私も、着たわ」

そう言って、フフンと笑う会長も、ビキニ。

黄色に、ひまわりの柄がついたビキニは、いかにも夏！って感じですよ。

セクシー…ですね、はい。

「よし！私も、着ました！松平君、見てくれるかな……」

そう言って恥ずかしがる鈴ちゃん（カワイイ）も、ビキニ。

薄いピンク色のシンプルなデザインのビキニは、かわいらしくて、素敵です。

綺麗、ってかんじ？

「大丈夫です、みんなかわいいですから…」

「…そうかな？」「」

おお、三人の息がそろった！
すごい、さすがあ

「じゃあ、外にいきますか」

ご機嫌な三人の後をついていく私。
この合宿、これから先どうなるのかな……。

「あ…きたきたあ　美和ちゃん、カッワイ」

「み、美和、ちゃん？」

「……カワイ」

「ラブリーでえす」

「かわいいね」

「……カワイ」

五人にじろじろと見られている。
は、恥ずかしい……っ

「それじゃ、撮影を始めるよー。佐々君、井上君、カメラオツケー？
美和ちゃん、海に入って！ほかの人は今は休憩！」

え……私だけ、ですか？
ひどっ

「笑って、笑ってー。って、表情がキツい……。っ。うーん……。このまえ隠し撮りした写真はよかったんだけどなー」

ピクッ

今、見逃せない発言が……。

「ダイさん、隠し撮りって、どういうことですかー」

「あ……。っ！言っちゃった」

ひ、ひどい……。っ！

ストーリーか、おまえはっ

「……それじゃあ、先に遊んできなよ。こっちには、作戦があるから」

というと、ダイさん、佐々さん、井上先輩の三人は、カメラマンチームこそこそと三人で話し始めた。

なあんか、変なお。

でも、いいか。

「ねえ、遠藤君！一緒に遊びませんかー？」

近くにいた遠藤君に声をかけると、ピクッと飛び上がる遠藤君。あれ？どうしたんだろう……。

「み、美和、ちゃ……。っ」

キュッと音をたてて、遠藤君が倒れる。わ、ワワワ、どうしたのー！……！

「う、ごめん……。えっと、何、して、遊ぶ？」

顔を真っ赤にして言う遠藤君。
顔が赤い……。熱中症？

「大丈夫、遠藤君。日陰で休んでた方が……」

「プツ！さっすが美和ちゃん、につぶう」

後ろから声が聞こえてくる。

あ、雨風君。

何が、につぶう……よ。
うるさいなあ。

「みんなで、ビーチボールしない？」

雨風君の提案で、みんなでビーチボールすることに。
さすが、王子様グループ、みんな運動神経いいな。

特に、松平君はバシッバシッと決めていくから、女子から声援がある。

「ふう……疲れましたねー」

「よし、いい写真がとれた！」

え……？

嫌な予感が……

「そうそう、ビーチボールの瞬間を、とってただけ。よし、美和

ちゃん、着替えて！」

そ、そんなあ……

41 合宿は恋の予感？

「次は、この水着だよ」

……。
はあ。

今度の水着は、上下分かれているもので、上はブランド物のイラストが描かれていて、下はズボン型の水着。
また、派手なものを……

「で、私にこれを着ると？」

「うん そうすれば、文化祭、盛り上がるよ？」

うぐぐ……私の水着で、盛り上がるなんて、ありえないような……
ともかく、着ないと、佐々さんが怖いなあ。

「わかりました、更衣室にいつてきま……」

「ちょっと待つて。着替え終わったら、隣の部屋にあの三人がいるから、髪型は三人に任せて じゃあ、僕達はあるの五人を撮影してくるから」

いつてらっしゃーい……。

この水着を着るのか……気がひけるなあ。

はあ……。

数分後

……似合わない。

こんなの、似合いつこないよお。

ために、水着を着てみたけど、スポーティーすぎる。
めがねっこの私には、絶対似合わない……。

「美和ちゃん、まだ？」

三人が呼んでいる。

さっさと松平君の撮影にいきたいのが、まるわかり。
しょうがない、いくか。

「よし、髪型、いくよ」

「「おっけー」」

松平君目当てで、この三人が一致団結！

すごい、松平君の影響って、こんななんだ…。

「できた！部長に、髪は微妙にウェーブ気味って言われてたけど…
…美和ちゃん、似合うね」

「うんうん、いいな、舞もそういうふうになりた〜い」

「あたしも、ウェーブかけたら、松平君に……キャッ」

みんなそれぞれ勝手なことを言っている。

どれどれ……？

鏡の中の私は、私じゃないみたいだった。
運動オンの私じゃなくて、スポーツも、運動もできる、スーパー
ウーマン…みたいな？

めがねをはずして、コンタクトにする。

おお、へんしゅんって感じ？

「いつてくるね、みんな」

「部長なら、あっちよ？」

「いつてらっしゃあゝい」

「花形美和、がんばれ」

たぶん、応援してくれているんだな…ありがとう！

そんなこんなで、ダイさんが待っている…らしい、岩場へと、足を
速める私。

ちよつと、写真撮影も、楽しくなってきたかも。

「ダイさん、いますかー？つて……ま、松平君っ！？」

ダイさんがいるはずの岩場には、松平君がいた。
な、なんでっ？

よりにもよって、松平君にこの姿を見られるなんて……
なんだか、嫌だ。

急に恥ずかしい気持ちがおしよせてくる。

「み、美和っ！？どうして、ここに……」

「わ、私は、ダイさんを探しに……」

「っていうか、その格好……。おまつ、それ、写真、とらせるつもりかよ……」

何を言っているんだろう……あたりまえじゃないですか、とってもらわなくちゃ意味がな……

……えっ？

気がつけば、私は松平君の腕の中。
ど、どどど、どうなってるの！？
顔が熱くなるのが分かる。

きつと、顔、真っ赤だろうな……。

「やば……。おまえのこと、誰にも見せたくない。こんなの、ヤバイって……」

はっ？

どういうことなの？

見せたくないって……？

「それって、どういう……」

「……おまえ、無防備すぎ」

んっ……！

そのまま、松平君の顔へと引き寄せられて……。
また、キス？

もう、何で？
わかんないよ……こんなの……。

カシャッ

え……？
嫌な予感が、する。

松平君から離れた顔を、180°回転させて、周りを見渡す。
誰も、いないよね……？
いたら、困るんですけど。

「じゃあな」

「あ……松平君、待つ……」

「美和ちゃん、遅くなってごめんねー フィルムきれちゃって
ー。それじゃ、撮影始めようかあ」

ダイさん……。

松平君を追いかけたい気持ちを必死でおさえ、カメラに向けて、笑
うのであった。

くコソツと話

「美和ちゃんの顔、見た？」

「恋する乙女って感じてしたね、部長」

「あれは、完全に恋しちゃってますね」

「そうそう、井上君、あのシヨトとれた？」

「バッチリです、部長」

「ウヒヒヒヒ」

42 岩場でツーショット？

「じゃあ、次はこの水着だよ。さ、着て 早く早くう」

やけに乗り気のダイさんが、次の水着を渡す。

今度の水着は、どんなのだろう……。

つて……！……！

ええ……っつっ！？

び、びびびび…ビキニイ！？

「だ、ダイさん！嫌です、私……こんな、ビキニなんて…」

「あ、大丈夫大丈夫。そういうと思って、半そでのパーカーを用意しておいたから。その水色のビキニと、白のパーカーで、バッチリだよ あと、このカツラをかぶってね」

そう言つて渡された白のパーカーと、ショートヘアのカツラは、どちらもシンプルでいいんだけど……

やっぱり、ビキニはちよつと……

おなか出るし。

スタイルないの丸見え…じゃない？

「とも かく これ、部長命令だから、早く着替えてきてね 僕達は、またこの岩場で準備してるから」

準備？

何だそりゃ。

ダイさんがそう言う間にも、井上先輩がそそくさと出て行ってるし。こんなんで、大丈夫なのかなあ。

「美和ちゃん、早く！」

「早くして、花形美和」

「来たあ 遅いよあ」

更衣室には、女子三人が待ち構えている。
へえ、情報が早いなあ……。

「ええっと、次は……シンプルに、でもセクシーに？」

鈴ちゃんが何かの紙を見ながら言う。
シンプルに、セクシーに……？
どうということ？

「あのね、これは、部長さんからのあ、伝言っていうかあ……」

「部長からの、指令よ」

「ようするに、美和ちゃんのヘアースタイルとかの注文？かな」

鈴ちゃんが最後にわかりやすくまとめて（他の二人はわかりにくい）
私は納得。
なるほど……。

ダイさんも、いろいろ考えているんだな……。

と、私がいろいろ考えているうちに……

「はい、できた」

「完成」

「遊びにいこうっと」

それぞれ、勝手なことを言って、海へと帰っていく。
私はというと……

カッラをかぶっているせいか、別人みたい。
さつきとはかわったかたちでの変身？

で、岩場に行くんだっけ？

「急がなくちゃ、ダイさん達が待ってるし……」

そう思っで、ダッシュでいったのに……

「あ……れ？美和ちゃん！」

「あ、雨風君っ！？どうして？」

岩場には、雨風君が。

さつきは、松平君がいたし……
いったい、どうなってるのー！……！

「美和ちゃん、それ……」

「え？……あああつつつ！！！！み、見ないで！恥ずかしい……」
ビキニなんて、見られたくない……。

「かわいいよ、美和ちゃん」

え……っ？

振り向くと、そこには、雨風君のにこりと笑う顔が。
なんか、逆に怖いんですけど……？

「そう、かな？」

「うん、すごく、かわいい。だから……」

あ……。

すばやく私の手をとる雨風君。
ま、またやられた……っ

「一緒に、デートしようよ」

うつ……そ、そんな笑顔で見られたら……
そんなの、ズルイ……。

「で、でで、デート、だなんて……」

「本気なんだけど。ね？」

か、顔が近い、近いっつっ！……！
急に慌てふためいてしまう。

だって、この人には前科があるしい……。

「だ、ダメ、だよ！ダイさん達が、来るし……」

「ええ〜……。……じゃあね、美和ちゃん」

さっきまでのしつこさはどこへいったのか、チラリと岩陰の方を向いてから、雨風君はいつてしまった。

さっきのは、何？

「美和ちゃん、ごめん！写真写真」

あ……。

ダイさん……。

言われるがまま、されるがままに、適当にポーズをつくる。

何か、あやしい……。

カメラマン三人のニヤニヤとした顔、雨風君がすぐに帰ったこと……何か、関係があるの？

その後も、撮影はつづいて……

白のワンピースに、ピンクのぼうし……というお嬢様スタイルには、遠藤君が岩場にいる。

オレンジと赤のアロハなドレスのときには、天道君が岩場にいる。

上はブランド物のＴシャツ、下はピンクのショールパンというボーイッシュなスタイルのときには、笠原君が岩場にいた。

これは……何か、ある？

43 あ、あの、怖いです。

「ふう〜……。やっと撮影終了！さ、僕達も海で遊んでこよ」

ダイさんが、最後の一枚をカメラに取り押さえてから、ニコツと笑って言う。

や、やっと終わったあ〜……。
疲れたなあ……。

今の格好は、ピンクのワンピース。

デザインはシンプルなんだけど、スカートのところにバラがプリントしてあって、やはり派手。

どうしようかな、着替えようかな……。

「あ、美和ちゃん、言っておくけど、その格好で海に来た方が時間短縮だよ。今から着替えると、着替えて終了になるから。それじゃあね」

ええ〜……。

佐々さんがアドバイスをしてから海に向かっていく。

そんなあ……だって、面倒くさいのにい。

「花形美和さん……」

「う、うわっ！な、何ですか、井上先輩……っ」

まったく、影がうすいのか濃いのかわかんない人だなあ。
目立とうとしていないのに、相当目立っている。
でも、存在感は薄い……。

「今、僕に対して非常に失礼なことを考えていましたね」

「え、何でわかるんで……って、違います！」

危ない、あやうく本音を言いそうだった……。
っていうか、もうすでに本音を言っていた？

「フフフ…。花形美和、あなたは極度の恐がりですね」

めがねをキラキラ光らせながら井上先輩がジリジリと近寄ってくる。
はい、とても恐がりです、特にあなたが怖いです。

「今日、夜、肝試しが……あるそうですよ」

え……っ

「あなたの反応が、楽しみですねっ。“じっくり”観察させてもらいます」

こ、怖いです……っ

ストーリーですか、あなたはっ

いや、それよりも……き、肝試しいいい……!?

聞いてないです、そんなこと！

っていうか、そんな……っ

そうだ、ダイさんに言っつて、私は肝試しをキャンセルさせてもら……

「あ、そうそう。キャンセルは、不可能……ということですよ」

……この人は、私の希望を踏みにじることが好きなんですか？
私が、少しでも希望をもとうとしているというのに……

「それと……。肝試しは、男女三人ペアで行うとのことですが、グループだけ、男女二人つきりになるところがありますけれどね。神は、僕に味方をしています！フフフ、つまりは、おもしろい情報と写真が、とれそうですね。それでは、花形美和、さらば！」

……この人、マジで怖い。
背筋がゾクゾクです……。

ストーリー並みの情報と、あのめがねの奥の目、怖すぎ！

だいたい、私が質問する前に答えていくんだから、私が話すひまがない！

「って、私も海にいくつと……」

にしても、本当にさんざんな合宿。
これじゃあ、文芸クラブじゃなくて、撮影クラブだし……。

「あ、美和ちゃん！」

「美和ちゃんっ」

「美和ちゃんです！」

「あ、来たんだね」

「美和……」

なんか、あの五人が私をジーツと見ているような……？
気のせいかな？

「……カワイイ……」

はっ？

そういえば……私は、あのワンピース着てるし、結構化粧してるし、
それに、髪型もクルクルの巻き毛だし……。
やっぱ、派手すぎ！？

「わ、わかってるよ！」

あ……っ

つつい、大声が。

「……はっ？」「……」

「こ、こんなの私なんかに似合わないのなんて百も承知だし、派手

なのもわかってるけど……」

「ちょ、美和ちゃん、それ誤解……っ」

「美和ちゃん、カワイー」

「カワイイです」

「うん、カワイイよ、すごく」

「……ああ」

え？

あ、ほめてくれてるんだ……。

でも、そんなにおせじ言わなくても……逆に照れるし。

「も、もう、なんか照れちゃうじゃないですかっ！み、みなさん、遊びましょう！」

照れ隠しに、ダッシュで海に走る。
わあ、水が冷たいっ

夏の海は、夕日に輝いていました。

43 あ、あの、怖いです。（後書き）

どうもー

ついに、あの人（井上先輩）と美和をからませちゃいましたー

ああ、コイツ（井上先輩）おもしろい。

書いていてそう実感しました。

いや、ストーリーっていうより、ゴキブリ並のしぶとさ？

っていうか、気持ち悪いな…。

それでは、さよーならー

by ゆながりか

44 肝試しは、恐怖です……。

「それでは、バーベキューも終わったことですし、毎年恒例の……」

「肝試しを、やっちゃいまあ……す」

……。
きもだめし……。

私は、怖いのが大の苦手なんだよあ……。
はあ……。

来るな来るなと思っていても、時間は容赦なく過ぎていく。
気がつけば、楽しい楽しいバーベキューも終わり、恐怖の肝試し。

「肝試しでは、文芸クラブ、十四人で五グループ作ります。お化け役は、片岡財閥の皆さんにお願いしました。それでは、ルールを説明します」

佐々さんが、どんどん説明を開始していく。

いや、それはいいけどさ、この暗い雰囲気は何？
怖いって、マジで。

「ルールは簡単です。まず、この門を通ると、森があります。そこを、このろうそく二本で通ります。暗いので、とても怖いんです。その次に、海があるので、海辺を歩いてください。そこに、第一チエ

ックポイントがあります。次に、海辺を歩いていくと、そこに空き家があります。そこは、お化け屋敷となっているので。そこに、第二エックポイントと、第三エックポイントがあります」

……いかにも、怖そうな説明ありがとうございます。

でも、それならせめて、文芸クラブの女子五人でいきたい。だって、怖いし。

「それでは、グループの発表だよぉん　ちなみに、グループには女子が一人ずつ入っていますっ」

テンションの高いダイさんがグループ発表をする。

っていうか、女子一人ずつ!?

うわ、余計に嫌だ……。

「まずは、第一グループ! 舞ちゃん、蓮君、佐々君っ」

「ええ~~~~つつつ!!!」

舞ちゃんが悲鳴をあげる。

こ、怖い……。

「第二グループ、鈴香ちゃん、司君っ! ここは、人数の都合で二人ね」

「え……」

鈴ちゃん、絶望。

目が白目、口が開いているし……。

「第三グループ、鈴菜、翔君、僕！」

「……はっ？」

会長さんがジリジリとダイさんにせまっていく。
ダイさんは逃げながらも解説を続ける。

つて、待てよ…このパターンだと……？

残っているのは、私、雨風君、松平君、赤羽兄妹、井上先輩……。最初のクラブ発表会を思い出すと……
ヤバイ…また、松平君と一緒にになってしまったら……。女子からの苦情が、ヤバイッて……！

「第四グループ！」

ここで、判定がくだされるの？
ま、まだ、心の準備があああー……！！

「美和ちゃん、一輝君、稜君！」

ほっ……。

一安心。

松平君は一緒じゃないんだ、よかったあ…。

あ、でも……

要注意人物の、雨風君がいる……。

「第五グループが、華月ちゃんと、井上君、そして、拓海君ね」

ダイさんも、なかなか考えてグループを決めているんだなあ。
一輝先輩一筋の華月さんなら、女子からの苦情もこない。
でも、それなら雨風君も私のグループ以外のところに……。

「いやだああ！私、かず君と一緒にがいいー」

「僕も、華月と一緒にの方がいいんだけどね」

え……っ

す、すごおく、嫌な予感が……

「それじゃあ……」

ダイさんが、こっちを向いて、ニヤツと笑う。
どうか、この予感が当たりませんように……っ

「拓海君と一輝君、チェーンジッツ」

……。

45 怖すぎる！井上先輩が。

「それでは、第一グループ、どうぞ」

ダイさんがはりきって第一グループを外へと押し出す。

こ、これは、やばい……。

怖いって……。

それに……私の相手が、よりにもよって……松平君と雨風君……！！
怖い人＋要注意人物＝危険……！！
という計算が頭の中をうるついている。

「あと十分したら、第二グループ出発だよ」

あ……膝が震えている。

と、止めなきゃ……。

手を膝においても、ふるえが止まらない。

「ダイ、さん、私、肝試し嫌で……」

「苦情はなしね」

ぐはっ……！！

ダイさんの言葉矢が胸に突き刺さる。

もう、どうすれば……

「大丈夫か、美和」

え……？

上から声が降ってくる。

誰…？

「あ…松平君？」

上を見上げると、整った綺麗な顔立ちが。

「肝試し……怖いのか？」

本気で心配している顔。

な、なんか、申し訳ないです……。

「だ、大丈夫！ちょ、ちょっとだけ、怖い、だけだから！」

「そうか…よかった…」

そう言つて、松平君がニコツと笑う。

ドキッ！…！

な、なに？

今のドキッて。

や、やだ、心臓がバクバクいつてる…。

「美和ちゃん、僕も、心配だよぉ」

横から雨風君の声が入ってくる。

あ……。

「大丈夫！雨風君も、松平君もいるし、平気だよ」

び、ビックリしたあ…。

なんか、乙女チックな気分？

なんでだろう…。

「それじゃあ、第二グループもいったし、僕達、第三グループもいくから、十分したら、第四グループ出発してねえ」

そう言つて、ダイさんが部屋から出て行く。

あ、あと十分で、肝試しが……。

「それでは、空いた時間に写真を撮らせていただきます」

井上先輩、どこまで真面目なんだろう…。

でも、その目が光っていて、口がニヤニヤしているのはなぜ？
あるいみ、怖いです……。

「一樹さん、こっちを向いて。華月さん、もう少し顔を下げて」

おお、本物のカメラマンっぽいし。
なかなかの仕事っぷりじゃない？

「それじゃあ、いつもみたいにアツアツっぷりをカメラに…」

へえ、いつもアツアツなんだ…。

バカップルっていうか、バカ兄弟っていうか…。
まあ、バカってこと？

「はあい、わかったよ？」

「僕達のアツアツっぷり、見せてあげるよ」

「ね、かず君」

「ああ、かづ」

にこつと笑って一樹先輩と華月先輩が顔を見合わせる。
「いったい、何をするんだろ……って……！」

「な、ななな、何をやってるんですか……！」

「なんと、一樹先輩と、華月先輩は、き……キス、してるんです！
ちよつ、井上先輩、写真にとらないで！」

「いいですね……。さて、次は、花形美和達です」

「いや、なんでフルネーム？
って、私達！？」

「やるか、美和」

「やろうよ、美和ちゃん」

「絶対、嫌です……！！！！」

「な、なんで私が、そんなことを……」。

「美和……っ」

「美和ちゃん……っ」

「嫌ったら嫌ですってばー!!!」

部屋の中を逃げ回る。

もう、何でもこうなるのー！

あ……めがねが、ずれてくる。

「花形美和、いい感じ！そこ二人、早く！」

井上先輩がささつとカメラを持って私の前に。
つて、ヒイイー！！！！

「オッケー」

「任せろ」

井上先輩が目の前にいて、走れない。
立ち止まった私の右と左に、松平君と雨風君が入ってくる。
う、うわ、はさみうち！？

「よし、いい写真がとれそう……はい、どうぞ！」

「え？ええ……っつっ！？」

ちゅっ

軽い音が部屋中に響き渡る。

両頬に、なんか感触が？

って……

ほ、ほっぺたにキスされてるー！？
嫌ー！！！！

「こ、これは……！すごい写真だ！三人とも、協力ありがとう！」

「どうもー」

「……」

「な、何…どうなって…」

私……二人に、両頬、キスされてたー！？

「ちよっ、二人とも……」

「「三人とも、時間だよー」」

「はーい」

「いくぞ、美和」

「え……そ、んなー！！！！」

46 肝試し <前編>

「行くか」

「レッツ・ゴォ」

「……」

つ、ついに、来ちゃった……。

目の前には、暗闇に広がる森。

ま、まるで、大魔王みたいな迫力……。

「おい、美和。何止まってるんだ、行くぞ」

何も知らない松平君が、私を振り返る。

も、もう、二人で肝試しってください、私、ここにいます。

——バサバサッ……！！

ひいっ！

とっさに目の前の物にしがみつく。

それは……

「っな！？み、美和！？」

松平君でした…。

「あ、ご、ごめんなさいっ」

急いで離れる。

すると、背中に何かあたって……

「美和ちゃんは、怖いのが苦手だもんねー」

げっ、雨風君……。

「そうなのか？」

仕方なく、うなづく。

だって、怖いんだもの。
しょうがないでしょ。

「……………美和、来い」

グイッと手を引っ張られて、森に入ってしまう。
ちよっ、松平君、何をするんですか……

「んっ」

き、キス、されてる？

目の前は暗闇。

何も聞こえない…。

あれ？怖くない？

「行くぞ」

あ……。

手を引つ張られて前へと進む。

や、やだ、また心臓がバクバクいつてる…。

「ま、待つてよ、美和ちゃん…」

後を追いかけてくる雨風君。

もう片方の手をにぎって、ニヤアツと笑う。
な、なんか、寒気が…っ

「手つないでいれば、怖くないだろ？」

松平君が前を見ながらつぶやく。

な、なんか急に恥ずかしくなってきた…。

顔が上げられなくて、俯く。

暗くてよかったと思うのはこれが初めてかも。
暗いと、赤い顔が見られなくてすむ。

「あ、海が、見えてきたよ」

夜の海って、雰囲気がミステリアス。

変な感じに光っていて怖い。

「海辺を歩いていくと、家があるって言うってたよね…家って……あ、
った???」

雨風君が立ち止まる。

どうしたの？って、あ……

「怖い、な」

あの松平君までもが、立ち止まっている。
い、嫌…これは、何かの間違い？
だって、こんなの……

怖すぎるでしょーーー！！！！

「か、帰りましょう、松平君、雨風君」

手を引っ張って帰ろうとするんだけど……

「へえ、結構おもしろそうじゃん？」

「行くか」

「ええーっ！っつ！っつ！っ！」

二人は、怖い物が大好きでした。

雨風君なんて、先頭を歩いてるし、松平君も目が光っている。
一方私はというと……

松平君に引きずられるような格好。

「にしても、今日は星が綺麗だねー」

上機嫌の雨風君がニコニコツツとしてほほえむ。
それはいいんだけど、背景にあるあの屋敷がね……。。

古い家なんだけど、異様に広い。
昔の豪邸みたいなの？

そして、黒々とした雰囲気？オーラ？

「綺麗だな」

松平君の声に、ふと上を見上げると……

怖くて気づかなかったけど、満面の星空が。
素敵……。

隣の松平君を見ると……

ドキッッッ！……！

な、何、この気持ち……。

星を見つめる、優しそうな笑顔。

う、うわ、おかしいって、この気持ち……。

この気持ち、何だろう……これって、まさか……

私の乙女チックな気持ちは、ある音によって壊される。

「キャー……！！！」

あの屋敷から聞こえてくる、会長の悲鳴で……。
どんだけ怖いんですかー！！！！

47 肝試し <後編>

「い、今の……会、長？」

「そうらしいな」

「へえ、そんなに怖いんだ」

あの冷静な会長までがあんな叫び声を……。

「わ、私、やっぱり帰り……」

「行こうか、美和ちゃん」

「行くぞ、美和」

いやいや、こんな時だけ意気投合しないでください、お願いします。
見るからに怪しいオーラたちまくりだし。

……ギギギ……

……ど、どどど、ドアが勝手に開いたああー！！！！

「へえ、お出迎え……」

「おもしろそうだね」

「行くしかないだろ（ないでしょ）」

顔から血の気がひいていくのがわかる。
お、お出迎えて……

や、やっぱり、私、帰りたい……。
なのに……

手を引っ張られて、屋敷の中へと……。

「うらめしやあああ……」

「うぎやあああー！！！」

「どうもー」

「……子供だまし」

私以外特に反応を示す様子がない。
や、やだ、怖い……っ

うぐっ！

い、今、なんか顔に当たった……！！
な、ななな、何よ、これ！
どうなってるのおおお！

「ぞうきん、か。定番だな」

「つまんなあゝい」

「……………」

も、もう嫌だ…こ、ここから逃げ出したい…。

今私達がいるのは、たぶんリビング。

不気味な音楽が聞こえてくるし……。

怖い……っ

「わっ！……いやああー！……！」

い、いいい、今、足をなんか触った、怖い……！！！！
って、いうか、ここ、暗いよおお！！！！

「美和ちゃん、大げさー」

「……………」

「うつ……こわ、いよ……」

それ以後、屋敷には大きな叫び声が鳴り響くのであった……。

「次が、最後の部屋だよ、美和ちゃん」

「最後か…」

「や、やっと終わるんですね…」

最後の部屋は……屋上。

屋上を突破して、そこからの階段でしたまで下りて、お化け屋敷は終了。

でも……

お、屋上は、墓場になっていましたー！ー！ー！

「こ、怖い、ですね…」

「そうか？」

「アハハ、おもしろーい」

どこがおもしろいんですかー！

墓場って、怖すぎるにもほどがある……って？

どこからか、不思議なメロディーが……？

そして……

「ぐあああー！ー！ー！」

「イヤアアアー！ー！ー！キヤアアアー！ー！ー！だ、誰か、助けてええええ！ー！ー！ー！」

「うわっ」

「うきゃっ」

松平君と雨風君までもが声を出す。

お、恐ろしすぎる……。

なんと、お墓の中から、何人ものゾンビが……っ

キヤアアアア——！！！！！！！！

絶叫が屋敷中に響いているけど、そんなの気にしていたら、ゾンビがあああ！！！！

「って……」

「このゾンビ……」

「「文芸クラブのメンバー？」」

え……？

ど、どういう、こと…？

ゾンビをよく見ると……

「な、名前が、書いてある……」

胸に紙がはってあって、名前が書いてあるのです。私達を襲ってきたゾンビには、「片岡舞」。

つていうことは……？

松平君も雨風君も自分のゾンビを探し始める。
だって、気になるじゃないですかー

「あ……っ！僕のゾンビ発見」

「雨風稜」と書いてあるゾンビは……顔とか緑だし、服ボロボロだけど、髪の毛はクリクリで言われてみれば雨風君ソックリ？

「……似てないだろ」

そう言う松平君のゾンビは、確かに、似てない？
髪とかボッサボサだし。

「あ……これ、私？」

なぜか、私のだけは……

これ、ゾンビなんですかー！

「それ、何で着物着てるんだ？」

「幽霊？」

私のだけは、着物を着ていました……トホホ……。

48 姉よ……死ねえええ!!!

「それじゃ、肝試しも終わったことですし、お風呂にでも入りま
すかー」

「うちのお風呂、男女混浴なんです……っ!」

イエーイ、レッツ・入浴タイムッ!

って、はっ!?

こ、ここに、混浴うう!?

「だから、男子と女子、時間を分けてお風呂に入らないと……。あ、
でも……この近くに、片岡財閥の所有銭湯があったっけ? ねえ、セ
バスチャン」

「はい、ございます。片岡財閥のみが入浴できる銭湯がこの先一キ
ロメートルほどありますが……そこは、このような別荘よりも広
いです……」

ええーっ! っ! っ! っ! っ!

銭湯だけで、この別荘よりも広い!?

あ、ありえない……っ

「そういえば、あの辺には、片岡財閥の所有物のホテルやハイキン
グコースもあったかしら。お父様に頼めば、貸してくれるかも……。
ね? 松平君」

松平君にアピることは何があっても忘れない舞ちゃんです。
さすが、LOVE松平君というだけあります…。

っていうか……

ホテルに、ハイキングコースウウウ!?

ハハハ、そのうち片岡財閥の所有物の式場（結婚式の）もできちゃ
ったりしてえ〜。

「そうそう、式場もありますよ、お嬢様。それでは、そちらの銭湯
にご案内しましょうか？明日のご予定は、ハイキングと聞いており
ますし……。あちらのホテルにはもう予約をさせていただきました。
最上階の特別室にお部屋をご用意させていただけるそうです。さて、
荷物を持って玄関前へ集まってください」

し、仕事が早い……っ！

私とは大違いだ…。

って、荷物荷物……。

部屋に戻って、バックの中からジーンズとＴシャツ、そして下着を
出そうとしたら……

な、な……

「なんじゃこりゃああー!!!!」

ど、どうなってるんですかー!!!!

だ、だだだ、だって、私は普通のジーンズとＴシャツを入れたはず
なのに……

「せ、セバスチャンさんつつっ!!!!」

「何ですか、花形さん」

「で、電話っ！貸してください！」

電話の場所を教えてもらい、そこにダッシュ！
もう、この家ムダにでかくて迷うじゃないか！！！！

あ、電話……。

これは、洋風の古い電話？

素敵……って、んな場合じゃない！

ブルルルル……

「はあい、花形咲でえす 雅君？あずつち？まーくん？それとも……
飯塚君……？」

「おい、テメエエエー！！！！私のバックに何いれてんじゃコラアー
！」

「いっやあーん、美和つてば お姉ちゃん、美和のバックのぞいた
ら……」

「勝手に見んじゃねええー！！！！」

「そしたら、かわいくないＴシャツとズボンと下着があつたからあ、
お姉ちゃんがかわいいのに変えてあげ……」

「あげなくていいわアホオオオー！」

そう。

姉は、私のいたって普通の服を、フリルゴツテゴテ、リボンたっぷりの、ゴスロリに替えてしまったのだ。

「明日はハイキングなのに、どうしてくれるんですー！ゴスロリで歩き回れるわけねえだろ！」

「やだ、お姉ちゃん、そのこと忘れてた　テヘッ」

「明日飯塚さんが来るからって、調子に乗ってんじゃねえよっ」

「え……っ！何で、わかったの……」

「そんだけ調子に乗ってればわかるに決まってるだろうがあああ！
！！」

ああ、ム力つくぅ……。

もう、これからどうすればいいのよぉ……。

48 姉よ……死ねえええ!!! (後書き)

……。

ぷぷっ！

ご、ゴスロリって……しかも、ハイキングでしょ…？

美和ちゃん、かわいそー。

まあ、書いてるのがすごく楽しかったけど…。

美和ちゃんが怒るのって、おもしろいと思いませんか？

もう、書いててサイコー！

美和ちゃんには悪いけど……ハイキング、嵐の予感ですよ…。
にしても、この合宿編長すぎたかな？

まあ、仕方ないか

b y , ゆながりか

49 うーん、プールじゃなかったよね???

窓から見える空には、星が輝いている。

素敵……。

「ちょっと！松平君の隣に座るのは私でしょ！」

「お姉ちゃん、私のほうがさきに文芸クラブに入っただから、遠慮してよね！」

「舞は、松平君の隣だよねえ」

「僕もお、松平君の隣がいい」

……。

私の乙女チックなムードは一瞬によって壊される。
まったく、ダイさんも女子三人も、うるさすぎます！

「俺は、誰の隣でもいい……」

「美和ちゃんの隣がいんだよね」

雨風君のチャカしによつて、松平君の顔が赤く染まる。
？どういうこと？

あ、私のことを女だと思ってないから？
ヒドイよねえ……。

でも、何だろう…この、胸の痛みは……

「わ、私、誰の隣でもいいんで……。っていうか、みなさん座った
ほうが……？」

そうなのだ。

今は山道で車の中なのに、なぜかみんな立っている。
危ないって何度言えばわかるんだろうか……。

「みなさん、銭湯のほうへ着きました。そちらのロビーからお入り
下さい。それと、ホテルと銭湯はつながっていますので」

「「「「「はい（文芸クラブ全員の声）」「「「「「

にしても……

でかつ……！

ありえないでしょ、市民プールとかよりもデカイし。

「いきましょう、みなさん」

呆然としているみんなを目前に、舞ちゃんはレッツ・ゴーとでも言
わんばかりに歩き出す。

やっぱり、こういうのに慣れているんだろうか……？

「デカイな……」

あ……っ

松平君…。

「そうだね……」

これしか、いいようがないのだ。
だって、デカすぎでしょ……。

「それでは、各自銭湯に入った後で、最上階に来てください。最上階に、それぞれお部屋が用意してありますので……。扉にお名前が記入されておりますから、そちらの扉を開けてください。中に鍵もありますので……」

そういうと、セバスチャンさんは舞ちゃんの後を追いかけ始めた（っていうか、セバスチャンさん、どこまで舞ちゃんを追いかけるつもり？ま、まさか、女湯まで入ってこないよね……？）。

「それじゃあ、いきましよう、松平君」

珍しく鈴ちゃんが積極的にアプローチ。

何でだろう……？

「ちょっと、鈴香！そこ、邪魔！」

あー、会長さんと張り合ってたんですね……。

それじゃ、お風呂にレッツ……ゴー……！！

何はともあれ、こんなに大きなお風呂、楽しそうじゃないですかー

〽数分後〽

「でっかー！」

脱衣所で服を脱いだ私達は、お風呂（温泉）を見て、啞然とした。だって、これは、プールですか？ってくらいでかい……。

何でかしらないけど、ウォータースライダーまであるし（温泉の）。っていうか、あれは流れるプール？

あっちには海のプールもあるし……（って、温泉だっけ？）。

ど、どんな温泉ですかっ！

「そう？まあ、このくらいの広さじゃないと、お客様全員が入れないでしょ」

松平君がいないからか、舞ちゃんがなぜか冷たい。

ともかく、体を洗おう！ってことになったんだけど……

何このシャンプー！

泡立ちがすごすぎて、前が見えないー！

ボディソープも、リンスも、高そうだなー…。

ああ、この一押しで、三百円くらいつかっちゃってたりして……？

「このシャンプーとかは、高級だから、一押し五百円くらいだつてー」

……。すいません、使いすぎました…。

ひとまず、体も洗い終わって、お風呂につかること十分……。

「あー、気持ちいいですねえー」

思わず本音がもれて、他の客ににらまれること数回。それでもやはり、気持ちいいのです。なんか、肌がすべすべになる……みたいなの？

「さてと、出ようかな……」

↳ 数分後↳

「気持ちよかったあ……」

「あ、花形さん…。舞お嬢様はまだでしたか？」

女湯の前で舞ちゃんを待っていた（待ち伏せ…）セバスチャンさんが、私に聞いてくる。

セバスチャンさん、かなり怪しいです…。

「まだだと思えますけど……?」

「そうですね…。そうそう、最上階に荷物をお運びしておきました。部長さんが、各自自由に遊んだり寝たりしてくださいとのことですから…。それと、屋上には展望台があるので、ぜひいつてみてくださいさ
いね」

さ、さすがセバスチャンさん、つねに仕事は忘れずにですね…。

つていうか、展望台……。

いきたい……。

よし、いつてみよう！（優柔不断）

50 ときつ、この胸の高鳴りは？

ガチャ……。

静かな空間に、音が響き渡る……。
扉を開けると、そこには……

満面の星空が……っ！

やっぱり、肝試しの時よりも綺麗に見えるよね……。

「素敵……っ」

「ああ、そうだな」

「……………って、うえええっ！」

後ろを振り向くと、松平君が。

な、なんか、お風呂上がりで、髪も濡れていて、いつもと違う雰囲気
気が……？

「ここに、美和がいるって聞いたから」

私がいるって、聞いたから？

それって、私に会いに来てくれたの？
そうなの？

「そ、そうなん、だ……」

なぜか、こんなにも気になる。
なんか、おかしい……。

「セバスチャンが、屋上は手すりがないところもあるので、危ないのでいってあげてくださいって……。だから来た」

そ、そうだよね…私に会いに来たんじゃ、ないよね…。

「き、綺麗だね、星……」

「ああ……」

そう言つて、私の隣に来て星空を眺める松平君。
私は、星空を見るふりをして、松平君の横顔をチラチラと見た。
な、なんだか、気になる……。

「合宿、楽しいですね!」

明るくふるまつて、松平君の方を向く。
すると……

「ああ、楽しい。おまえと、一緒だと」

……ええええっ!

な、な……今、なんて?

や、やだ、こんなの……おかしい…。

「ま、松平君っ!?!」

「美和……」

松平君が近づいてくる。

もう、星空なんて目につかなくなっていて。

松平君の顔ばかりが気になって。

すごい、綺麗な顔立ち……。

わ、私、どうなってるのー！？

「あ……っ！？」

とまどって、後ろへと足を踏み出したら……そこには、床がなく……

「み、美和っ！ー！」

「え……？キヤアアアー！ー！ー！」

私は、空へと降りていく。

空に、とけ込んでいく……。

さようなら、松平君……。

「つつうー！ー！」

え……？

頭上から声が。

どうなってるの……？

「美、和……大丈夫か……？」

「松平、君……？」

上を見上げると、松平君の顔がある。
う、うわ、近っ！

「松平君、離し……」

「引き上げるぞ……俺に、つかまつてろ……」

絶対、重いはずなのに……。

捕まれた腕が、熱を持ち始める……。

体中が、熱い……。

腕を捕まれているそこから、私全体が染まっっていく……。

「つく……！！！」

「あ……っ」

ぽーん、と、宙へと放り出されたと思ったら……
屋上の床へと思いつき腰をぶつけちゃいました……。

「い、た……松平君、大丈夫？」

「はあ、はあ……。み、美和、は？」

「私なら、大丈夫……っ」

「そうか……なら、よかった……」

そう言って笑う松平君。

どきつつっ！！！！

な、何、この胸の高鳴り……？
体全体が、赤く染まってい……。

「美和？顔、赤いぞ？」

こ、これって、もしかして……？

……恋……？

51 最大のピンチ!?

さて……。

今私は、この合宿での最大のピンチに遭遇した。
そのピンチとは……

「私い、今日、松平君にい……告っちゃおうかなあ……」

……である。

この口調から、舞ちゃんだということは、おわかりいただけますか？

いやね、前までだったら、どうでもいいんですけどね……
自分の気持ちに気づいた今、どうすればいいんですかああー！

それと……

第二のピンチが……ゴスロリ……。

「美和ちゃん、舞ちゃんが告白しに行くよ……っ」

「え……っ」

鈴ちゃんの声で我に返る。

何とか、パジャマだけは無事だったので、今はパジャマ姿。
さすがにこれで出て行くわけにもいかないしな……。
かといって、ゴスロリっていうのも……。

「どうしようっ。松平君が、舞ちゃんの告白を受けちゃったりしたら……」

鈴ちゃんがオドオドし始める。

ああ、絵になっている…っ

「大丈夫でしょ。松平君は、あんなのにホレたりはしないから」

会長さんが自信を持って（なぜそんなに自信があるの？）言う。
これはこれで、絵になっている……？

「ゴスロリ…どうしましょう」

「ええっ！？ゴスロリイゝ！！！」

「……」

言うんじゃなかった。

明らかに目が笑ってるし……。

ひどい。

「何も、そんなふうに言わなくても……」

「私達が……っ」

「ゴスロリ姿に変身させてあげるわっ」

何で、こういうときだけ気が合うの？

って、そんなああー！

だつてさ、二人ともジリジリせまってくるしー！
怖いよ、怖いよおお……っ

「ほら、鈴香、そこにこれつけて」

「お姉ちゃん、この靴どう？」

「そうだ、ダイにリボンもらってきてよ」

「ナイスアイディア！」

うわぁ……っ

なんか、イジられてる……？
状況最悪……。

つて、それよりも……

「「歓声」」

「部長に見せたら、喜ぶかもしれないよ、お姉ちゃん」

「あ、確かに！お金もらえたりして……」

そう言つて、会長さん達はダイさん呼びにいった。

つていうか、私の格好どうなってるの……？

鏡つて……ないな。

でも、無惨な姿つていうのはわかる。

こんな姿を、見せられるわけないでしょ……っ

そうと決まれば……？

「逃げろおおー！」

ともかく、ここから逃げ出す。

ホテルは広いし、隠れる場所ならたくさんあるはず。

ハイキングまでは時間があるし……。

それに、セバスチャンさんに言えば、服を用意してもらえるかも……。

「あつ！せ、セバスチャン、さん……っ」

周りの視線がやたら気になりながらも、ロビーをかけずりまわっていた時、セバスチャンさんを発見！

だけど、セバスチャンさんは「関係者以外立ち入り禁止」の場所へと……。

もう、運が悪いつ！

「でも……」

入っちゃえ！

バンッ！

決心して入ったそこには、誰の姿もなく……。

窓が開いていて、そこから、何か聞こえるような……。

「松平君……私い、あなたのこと……好き、なんだあ……」

告白の真ん中ううう！？

52 好きなのに……。

「……」

どうしよう、どうしよう……。

今、どうやらこの裏にある庭では……舞ちゃんの告白が、行われているらしい。

それで、セバスチャンさんが入っていったのか……。

って、それよりも！

今は、ここから出ることが優先だね……。

「お嬢様、こちらはもうすぐ会議室として使われます。場所を移動することをおすすめします」

「……ええ、わかったわ。松平君、行きましょお？」

会議！？

早く、ここから出ないと……

「おい、次の会議まであと何分だ……」

「あと一分。というよりは、みんなもう集まってるけど？」

……。

絶体絶命！！！！

だって、窓の外には舞ちゃん達。
ドアの外にはホテルの人達。

どうすれば、いいのー？

ガチャ……

こ、こうなったら、一か八か……！！
移動するって言ってたし……。

私は、窓の外へと飛び出した。

「今、音がしたような？」

「気のせいだろ」

ふ、ふう……。

何とか、セーフ？

あ、そうだ、舞ちゃん達は……いない？
よかったあ……。

「さてと、帰ろうつと」

にしても、セバスチャンさんに服を借りようと思っていたのに……。
って、そういえば……？

会議室の横の部屋の窓に、自分の姿が映る。
どんな格好なんだろう……。
イマイチ、自分ではわからないんだけど……。

「……っ！……！」

一瞬で顔が真っ赤になるのがわかる。
だって……

髪の毛はなぜかふわふわに（巻き毛じゃないんです、ふわふわなんです）なってるし、髪の上に、真っ白のリボンが。
リボンにはフリルがごてごてして……。

服は、白いゴスロリっていうか、なんて言うか……。

ともかく、フリルたっぷり、リボンたっぷりなんです。

それと、靴は白いブーツ……と、全体的に、ふわふわ系？

「こ、こんなの、誰にも見られたくない……っ」

「松平君、それで、返事は？」

……！！

ま、まさか……？

「ああ……」

茂みの向こうから、声が……。

これは、つまり……。

舞ちゃん達は、一メートルしか、移動していない？

そして今……舞ちゃん達は、私の後ろの茂みの奥に……。

最悪な、状況だ……。

「…………ごめん…」

！？

松平、君？

「俺、好きな人がいるんだ……」

好きな、人？

そうなんだ、松平君には、好きな人が……。

私の恋、終わっちゃったんだ……。

そうだよ、私なんて、男として見てるんだよね……。

「…………納得、いかないわ！」

舞、ちゃん……？

「私の方が、カワイイに決まってる！私は、あなたのことが……」

「うるせえ。しつこい、邪魔だ」

……。

松平君が、怒っている……。
怖い……。

「ま、松平君なんて、大嫌いよおおー！」

「失礼します、拓海殿」

「……………」

セバスチャンさんが、丁寧に松平君に接している。
好きになった翌日に、失恋なんて……。
ついてないにも、程がある……。

「も、もう……松平君なんて……大嫌い………」

自然と、目から涙がこぼれ落ちる。
もう、どうして……。
悲しいよ……。

こんなにも、松平君の事を好きだったんだ……。

「え……っ！美和ちゃん！？」

「……………？雨風君！？」

もう、どうしてこの人は、タイミングが悪いんだろう……。

「泣いて……？」

「泣いてなんか、いないから！大丈夫、だから………」

「……………許せない……っ」

「え………？」

「美和ちゃんを泣かせた奴が、許せないんだ……っ」

まるで自分のことみたいに怒る雨風君。
優しいんだね……。

「ありがと、雨風君……。私ね……。失恋、しちゃったんだ……」

体全体のバランスが崩れて、地面に座り込んでしまう。
私の涙で、土が濡れている……。

「……。美和ちゃん、気持ちを、伝えたの？」

「えっ？」

「本当に、その人に気持ちを伝えたのかって。伝えなくちゃ、わからないじゃないか……」

真剣な顔で、そう言ってくる雨風君。
でもね……

「もう、終わっちゃったんだよ……」

ポタポタと、涙がこぼれ落ちる。
そう。

もう、私の恋は終了。
これ以上、好きでなんていられない……。

「僕は、美和ちゃんのこと、好きだよ」

「えっ？」

またまた、タイミングの悪い……

つて、ええっ!?

「だから、今、ものすごく悲しい。僕の分まで、がんばってよ……。これからは、応援、するから……」

そう言つて、雨風君が笑う。
泣き笑いみたいな顔だった……。

「雨風、君……」

「おまえら、何やってんだよ……」

……今、一番聞きたくない声……。

「松平君……っ」

「た、拓海!?! こ、これは……」

「いいわけするな。つきあってるなら、言えはいいのに……」

「松平君っ!?!」

「拓海、違っっ……」

「うるせえ! じゃあな……」

「松平君っっっ!?!」

そん、な……。

松平君が走り去っていった方向を、眺めていた……。

やだ、もう……。

「ごめん、美和ちゃん……」

「いいの……。もう、終わったんだから……。ケジメを、つけ、な
くちや……」

53 もう、終わりなんです……。

「よし、僕に任せて」

「は……？」

ついつい本音が出る。

だいたい、こうなったのは雨風君のせいだというのに。
今さら……

松平君はあの後、完全に誤解している。

私が、雨風君と付き合っていると。

それで、席まで雨風君の隣になってしまった……。

まあ、もう失恋したからいいんだけど……

って、今のうそ。

まだ、好き……なのかもしれない……。

だって……こうして雨風君と話しているときも、こんなにも気になる。

鈴ちゃんと一緒に座っている松平君のことが。

「聞してる？美和ちゃん」

「えっ？あ、うん」

「だからね……僕と美和ちゃんが、付き合っているふりをするんだ

よ！」

……？

付き合っている、ふり？

そんなの、意味がないんじゃない？

「そしたら、拓海が……。反応するから、大丈夫。それまでは、演技だよ」

演技って……。

私、うそをつくのも下手なのに。

今日は、最低で最悪な一日かも。

しかも……

さつきから、男性人の視線が気になる……。

いくらこんな私でも、ゴスロリという武器は強いわけで……。

なめるように見られているようで、ちょっと……。

松平君は、見向きもしてないけど。

はぁ……。

「でも……」

「はい、皆様着きました。今日はこちらでキャンプをする予定との事で……」

「「「「「ええええ」」」」」

聞いてないないんですけど。

今日は何から何まで最悪。

っていうか、服はどうするんだろう……？

「セバスチャンさん、服は？」

「服は、こちらで用意した服を試着してもらいます」

おおーっと、バスの中でどよめきが。

って、つまりは……ゴスロリを、脱げる……！！

やったあああゝ*。

「部長さんが、今日はみんなで撮影とのことなので。部長さんが選ばれた服をご用意させていただきました」

……いやな予感が……。

セバスチャンさんが一人一人袋を渡していく。

みんなは、普通のＴシャツにズボン（あの五人と赤羽兄弟はブラインド物の）なんだけど……

「どうぞ、美和さん」

……。

私のは、思ったとおり、フリルがついている（袋に。ありえない……）。

「美和ちゃんは、今日は五人とペアでとるからね。最初は、誰ととる？」

「稜とらせてやれ」

ダイさんの後ろから、松平君が。
目が、怖い……。

「え？美和ちゃんだよ？いいの？」

「いいから。じゃあな」

松平君は、そういつと手を振っている鈴ちゃんや会長さんの所へと行ってしまった。

松平君の好きな人って、もしかして……

「美和ちゃん、行こう。女子はあそこの家で着替えだつてさ。僕達男子はバスの中。だからさっさと出よう」

「……雨風君、もういいから」

「え？」

「気づいちゃったの…松平君の気持ちに……」

「ム力つく…」

「え、どうしたの？」

「なんでもない」

稜と美和が二人でいるところを目撃してしまった俺。
美和、あいつと付き合ってるのかよ……。
くそっ！

今俺は、稜と美和を見ている。
あんなに楽しそうにしている稜を見ていると、ムカムカする。
美和は……ぼーっとしている。

「松平君、一緒にハイキングしましょうね」

俺と一緒に座れたことで喜んでいる友原。

美和が、隣にいれな……。

でも、もう遅い。

53 もう、終わりなんです……。 (後書き)

一度はかいてみたかったすれ違い系の物語！

こんなところで実現できるなんて！

光栄です！

というより、なんか変な展開になってきてしまった……。

にしても、稜君、えっらぁーい

かつこよすぎでしょー……。

かわいいし。

美和ちゃん、鈍いつすね……。

いい加減イライラしてくる頃です。

自分も十分鈍い(らしい)ですけどね

それでは、またお会いしましょうねー

by ゆなかりか

54 切ないkissは……

「美和ちゃん、行こッ」

「あ、アハハハ……」

「……」

ただいま、苦笑い中。

雨風君の作戦で、イチヤイチャする……らしいんだけど……

松平君の目の前。

もう、いいのに……。

「雨風君、もうい……」

「あ、あっちい……」

松平君が動くと共に雨風君も動く。
じゃ、邪魔なんじゃ……？

「雨風君っ！ちょっと、こっち……」

「え？なにい……？」

雨風君をグイグイ引っ張って、そばの茂みに隠れる。

きちんと説明しないと……。

「いい？あのね、もう、いいんだよ。松平君の好きな人、わかつちやったもん」

「え？拓海の好きな人は……」

「鈴ちゃん……でしょう？だから、もう……」

「美和ちゃんは、そんなことで好きな人をあきらめるの？それなら、僕、美和ちゃんを奪うよ？拓海の手から。いいの？拓海」

「え？松平君？」

「……いつから気づいてたんだよ」

ガサガサッ！！！！

う、うそ……っ

一番嫌なパターン……。

松平君？

「さつきから。そのくらい、予想がつく。で、いいの？僕が美和ちゃんを奪っても」

「……」

「大丈夫、美和ちゃん。さつき来ただけだから、バレてないよ」

あ、そうなんだ……。

私が、恋をしていることを、気づかれていないんだ……。

「…………じゃあな」

「いいのっ？本当に。僕が、奪うからねっ」

そう言つと、雨風君は……

CHU

口の中に、甘い味が広まる。
これって……

「美和ちゃん、行こッ」

「あ、アハハハ……………」

「……」

今俺は、すぐムカついている。
原因は、前にいるこの二人だ。

稜の奴、美和を俺に見せびらかそうとしてるのか……っ
んなの、ありがよ……っ

スツと横に移動する。
これ以上見てられるかよ。

「雨風君、もうい……」

「あ、あっちい」

カチンッ

そろそろ、俺も我慢の限界だ。
稜から美和を奪うかなければ、この怒りはおさまらないと思う。

「雨風君っ！ ちょっと、こっち……」

「え？ なにい……？」

ほっ。

美和が俺から稜を遠ざけてくれた。
助かった……。

でも……。

これはこれで、気になる。

美和達が入っていった茂みの方。
くそっ、行きたい……。

「松平君、あの……一緒に、ハイキング、しない？」

あ……。

友原……？

そういえば、コイツもいたっけ。

「あ……」

どうしよう……。

美和には、稜がいるのに。

あきらめ、きれない……。

「悪いな、友原。俺、やっぱり……」

「えっ？」

「ごめん！」

「あ、松平君つつっ！……」

俺は、茂みの方へと駆け出していった。

「いいの？拓海」

茂みの所に行つてすぐに、この声が聞こえた。
はっ？

気づくの早っ！

「……いつから気づいてたんだよ」

「さきから。で、いいの？ 僕が美和ちゃんを奪っても」

⌈
⋮
⌋

もう奪われているんだから、仕方ない。そう思って黙っている。

コソコソと何かを話している稜。
ほっとした様子の、美和。
いったい、何を話してるんだよう

もう、この場にはいられない…。

「……じゃあな」

「いいのっ？本当に。僕が、奪うからねっ」

そう言うつと、
稜は俺の前で。

よりにもよって、俺の目の前で、美和とキスをした。

くそっ！

畜生！！！！！！！！！！

55 みんな、おかしい……？

「ちよっ……！！あ、雨風君っ！？」

「あ……」

「……見せ付けるなよ……」

あ……っ……！！
松平く……

「雨風君、どうしてくれるのよっ！馬鹿っ」

「ご、ごめん……。いつもの調子で……。でも、確実にあれは……。よし、美和ちゃん、イチヤっこっ！」

「も、もう嫌っ！我慢の限界。もう、いいから、やめて！さようなら！」

「み、美和ちゃんっ」

最低！

雨風君なんて、大嫌いなんだから……。少しはいい奴かもって思ってたのに。もう、信用がた落ちじゃない。絶対に、信用しないんだから……。っ

「美和ちゃんあゝん……」

「あ、遠藤君……？」

「美和ちゃん、稜と付き合ってるって本当ー？それ、ショックなんすけど……」

「え？あ、ちが……っ」

完全に、誤解をしている……。あんな奴と付き合ってるなんて、最低。そんなの、ありえないし……。

「稜と付き合わせるくらいなら、俺……」

「え……っ？え、遠藤、君……っ」

「美和ちゃんを、奪っよ」

「きゃっ」

無理矢理唇をふさがれて、口の中にあの感触が広がる。や、やだ……何、これ……。

口の中をかきまわされて、もう……っ

バチーンッ！

「最低っ！もう、どいつもこいつも……。大っ嫌い！！！！！！！！！！」

「！！！！」

「あ……み、美和ちゃんっ！？」

まだ顔が赤い。

こんなの、嫌だよ……。

もう、終わりに、したい……。

パシャッ…

「ナイスシヨォーット！」

「え……？だ、ダイ、さん……？」

茂みから現れたダイさんが持っているのは、カメラ。
こんなときまで……。
ヒドイ……最低っ！

「ダイさんの、馬鹿ああっつ！」

ぼろぼろとあふれ出す涙が頬をつたる。
もう、止まらないよぉ……。

「ええっ！？ちよっ、美和ちゃん！？」

ほかすかたいたっていたのに、だんだん崩れ落ちる。
涙が、止まらない。

「もう……みんな、自己中すぎだよ……」

「美和ちゃん……大丈夫だよ……」

ん？

体全体を、暖かい物が包み込む。
なんだこりゃ？？？

つて、これって……

「だ、ダイさんつつっ！？」

「あ……。ご、ごめっ……」

う、嘘……っ

あのダイさんが、私を、抱きしめた……？

あ、ありえない……。

「ぼ、僕、女の子を……？どうかしちやってる……。ご、ごめんね、
美和ちゃん！今は、忘れて！」

「あ、ダイ、さん……っ」

いっちゃった……。

もう、嫌……。

早く、家に帰りたいよ……。

「ちよっ！！！！あ、雨風君っ！？」

「あ……………」

「……………見せるけるなよ……………」

こんなの、ナシだろ……。
バカップルすぎ。

美和は……………真っ赤になっている。
そんなに、うれしいのかよ……………ばかやろっ……。

俺は、もうダッシュでその場から逃げ出した。
もう、見てられない……………。

こんなに、見せ付けることないだろうが、馬鹿。

「くそっ！！」

「ハァーイ、フラれちゃった拓海君のショット、ゲェーット……」

「は……っ？」

部長……？

そういえば、こいつ、ホモだっけ？
って、二人きりって、ヤバくね？

俺が用心して、一步後ずさると、部長はなんだか寂しそうな目をする。

は？

どういうことだ……？

「僕……おかしいんだよね……。前までだったら、拓海君に抱きついてちやうのに……。今じゃ、これだもん……。はぁ……。ま、美和ちゃんの傷心ショットを取りに行かなくちゃいけないから、じゃーね

」

悲しそうに笑う（泣き笑い？）部長。

それって、まさか……？

部長、までもが？

走っていくダイさんの後姿を見ながら、そんなことを考える。

さすがだな、美和。

部長までもを……。

「ダイさんだけじゃないよ」

「わ、うわっ！……！」

「美和ちゃんを狙うのは、部長だけじゃないって言ってるんだよ、拓海君」

「さ、佐々先輩っ!?!」

気がつくのと、横には佐々先輩が。
どうして、ここに?

「まあ、部長までが、美和ちゃんのエジキだからね……。当然、他の人もそうなつてると考えておかしくないでしょ?井上も。そして、僕も」

「はっ!?!井上先輩って、恋愛に興味あるんですか?」

あ、変なところに食いついちゃった…。

だって、あの勉強オタク(がり勉)の井上先輩が?

っていうか、あの人美和のこと怖がらせてなかったか?

「って、佐々先輩もっ!?!」

「そういうこと。だから、中途半端な気持ちだと……アウト、だよ?」

そう言って笑う佐々先輩は、優しい佐々先輩とも、熱血の先輩でもないオーラをはなっていた。

これが、恋の力ってやつなのか???

「でも、もう美和は……」

「大丈夫。そんなの、まだ奪えるに決まってるじゃん?それとも、

こんなところであきらめるつもり？」

その言葉が、俺に火をつけた。

やってやるうじゃん、略奪勝負。

美和の心、奪ってやるぜ……。

「冗談ですか、先輩。ここまできて、あきらめられませんよ……」

あきらめられない。

アイツの心は、すべて俺のものだ……。

55 ‘みんな、おかしい……？（後書き）

なんか、拓海君、キャラ変わったなあ……。書いていてそう思いました。

まあ、それは恋のパワーってことで無理矢理？まあ、仕方ないでしょ……。

にしても、美和ちゃん、幸せ者つすねえ。逆ハーレム状態ですよね……。うらやましい……！

それでは、またお会いしましょう！

by ゆながりか +*。

56 パーベキュー中にハプニング。

バンッ……

目の前にお肉が乗ったお皿が。
にしても、多い……。

「さあ、ドンドン食べてねえ」

あ、あの……ダイさん？

私のお皿だけ、異様に肉が多いような……？
こんなに、食べれるかな……。……。

「部長、美和ちゃんのお肉、多くないですか？」

あ、雨風君……。

隣に座ってきた雨風君がダイさんに文句を言う。

私の変わりに言ってくれるのはありがたい。

だけでも……

最低最悪な変人が隣に座っていると思うと、寒気がする。
ひそかに、もう一個右へと移る。

雨風君から少しでも逃げなければ……っ！

あ……っ

今は、夕食中。

ちなみに、バーベキューです

って、そうじゃなくて……。

バーベキューだから、焼く係りと食べる係りの人がいるんです。
食べる係りが、私……！！

焼く係りは、ダイさんと佐々さん。

二人とも、笑いながら焼いてます！
うっくん、ナイスな光景

で、食べる係りの私達は、木で作られているいすにキュンキュンに
座っています。

だから、右につめると、隣の人に当たるわけで……。

「あ、ご、ごめんなさっ……」

「あ、別に……。美和……？」

え……っ！？

右隣に座っていたのは、松平君だった。
タイミング悪っ！

「あ……あのさ、一緒に、食べるか？」

「え……っ……あ……う、ん……」

な、なんか、恥ずかしいっ。

自分の気持ちに気づいてからマトモにしゃべったのって、これが初
めてだよねっ？

き、緊張します……っ。

「……俺、絶対に、奪うから」

「えっ???」

意味のわからないことを言われて、戸惑ってしまっ。

どいう、こと？

奪うって、何を？

何を何から???

頭の中がはてなでいっぱいになる。

もう、意味わかんない……。

「……稜とは、うまくいつてるのか？」

「え……っ？あ、それって、」……」

誤解です……そう言おうとした瞬間、タイミングを見計らったような形で、雨風君が入ってくる。

「もっちろおくん 僕達、アツアツだよくん」

「……そう、か」

「ばっ……！あ、雨風君っ！？ごか……」

「証拠を、見せてあげるよ……」

そう言って、雨風君は私の頬に手をかける。

あ、あれ……？

これって、まさか……

「い……いやっ！！！」

つ
ん
.....
○

あれ？

なんか、ちが……

つて
……

ま、松平君つつ！！！？？？

今日の夕食はバーベキュー、か。
そういえば、キャンプだったしな…。

俺は、今あきらかに不機嫌だ。
さっきから、部長が美和の前に上等の笑顔で皿を置いているから。

こいつは、何をするかわからない……。
俺達のときも、ベタベタくつつきやがって。
み、美和にも、そんなことをしたら……っ

くそっ。

俺がどうこう言える人間じゃないよな…。
美和の心を支配しているのは、稜だし。
はあ……。

トンッ

はっ？

俺はあきらかに不機嫌な顔で左隣を見る。
どこのどいつだ、俺にぶつかったのは。

「あ、ご、ごめんなさっ……」

「あ、別に……。美和……。？」

俺にぶつかってきたのは、美和だった。
す、すげえ、ラッキー。

ついつい、欲望のままに口に出した言葉。

「あ……。あのさ、一緒に、食べるか？」

「え……。っ！……あ……。うん……」

ま、マジッ！？

心の中が明るくなる。

うわ、うれしいっ

どうだ、稜。

まだ俺に、望みあり！

「……俺、絶対に、奪うから」

「えっ？？？」

あ……。

また口に出たっ

美和のクセが移ったのか？

「……稜とは、うまくいつてるのか？」

一番聞きたかったこと。

うまくいつているのなら、俺は……。

でも、あきらめられないな。
絶対に。

「え……？あ、それって、」……」

「……？」

続きを聞くときに、邪魔が入った。
こいつ、タイミングを見計らったな。

「もつちろおくん 僕達、アツアツだよおくん」

「……そう、か」

そうだよな……カップルになって早々、破局なんてことはないか。

「ばっ……！あ、雨風君っ！？ごか……」

「ごか……？」

ついに聞けると思ったのに……。

「証拠を、見せてあげるよ……」

そう言っつて、稜は俺の目の前で、美和の頬に手をかけた。

ま、まさかっ！……！

こいつ……っ

俺の中の理性がブチつときれる。
悪いな、稜。

その後、俺は何も見えなくなった。
美和の唇以外は。

もちろん、俺は……

何をしたか、わかるよな……。

57 これ以上は。

「っん……」

じよ、状況が理解できない……。どうなつて、るの……？

松平君の顔がどアップ。
つていうことは……

バチーンツツツ！！！

気づいたら、手が出ていた。
音がそこ周辺に響き渡る。

「さ、最低つつつ……！！」

だ、だつて……だつて、松平君には、好きな人がいるくせに！
私なんか相手にしないでよ！
もう、これ以上……私を、混乱させないで……っ

「つてえ……！！」

あ……。

ここにある現実に突き当たる。
わ、私、松平君を……。

たたいちやった？

「う、ごめんなさ……」

「別に……。稜の彼女に手出した俺が悪いんだし。じゃあな」

「えっ！？ま、待って、まつだら……くん……」

手をのばす。

いけないで……やっぱり、あなたのこと……っ

でも、その手は松平君にあと数センチというところだとまってしまう。

やっぱり……だめだ……。

松平君には、鈴ちゃんがいるから。
これ以上……。

そう思ったとたんに、鈴ちゃんがにくくなってきた。
やだ……私、変だ……。
これ以上……これ以上は……っ

「美和ちゃん、大丈夫？」

「雨風君……。もう、ケジメをつけたはずなのに……。やだ、私ってば……。ごめんねっ」

目についた場所、森へと駆け出す。

あ、雨………？

このまま、死ぬのもいいかも……。

私は、ずぶぬれになりながらも走った。
涙と、雨が重なり合う。
もう……嫌だよ……。

「っん……」

あ……。
やってしまった……。
これって、キス、してるよな？

最悪だ……。

稜の彼女なのに。
くそっ！！！！

気持ちはそう思っているのに、唇の誘惑に負けてしまう。
や、やべっ……。
とまらねえ！！！！

キスをとめたのは、美和だった。

バチーンツツツ！！！！

「さ、最低つつっ！！！！」

美和……？

「つてえ……」

もろにきた、今の。
今のビンタで、平常心がもどってくる。
あ……っ

美和の目に、涙がたまる。

美和……。

俺、最低だ……。

「じ、ごめんなさ……」

なぜか謝ろうとしている美和を、俺の言葉がさえぎる。
そんなの、言わせない。

「別に……。稜の彼女に手出した俺が悪いんだし。じゃあな」

これ以上、ここにいたら……。また、俺は……。もう、泣かせるわけにはいかないんだ……。俺は、もう、あいつの前から消えなければいけないんだ……。

だから、俺はテントにもどる。

合宿が終わったなら、文芸クラブなんてやめよう。成り行きで入ったんだし。

美和に嫌われたんじゃ、意味がないし。

さようなら、美和……。

テントへの帰り道をトボトボと歩く。

よみがえるのは、アイツの泣き顔だけ。アイツ、泣いてたな……。

「くそっ」

美和の隣にいないといけないのは、稜なんだ。俺なんかじゃない。

だって、俺は……。ただの、部外者だから。

「待てよっ！ 拓海！」

「……………？ 稜？」

「はあ、はあ……………っ」

「どうしたんだ？」

息があれている。

そんなに焦って、何を？

「おまえのせいで、美和ちゃん……森の中に、入っていったんだ」

「はっ？？？何で、俺のせい？」

「それは……………っ。ともかく、おまえがあんなこと言ったから」

意味わかんねえ。

美和は、おまえの彼女だろ？

「美和ちゃんは、僕の彼女なんかじゃないよ。僕が勝手に仕込んだだけ。だから、早く！早く、美和ちゃんを……」

え…………。

稜の、彼女じゃない？

つてことはつまり、望みがある…………？

でも…………。

ここまできたら、意地だしな……。

「俺、いかねえよ。おまえが行けばいいだろ」

「はあっ！？そんなわけにいかねえだろうが、バカ！！！！拓海は、美和ちゃんの気持ちをわかっていない！」

「わかってるよ！！！！美和が、おまえのことを好きなくらい、わか

ってんだよ!」

そうだよ……俺には、もう……。これ以上、俺を苦しめないでくれ……。

「……美和ちゃん、極度の恐がりだね」

「……!!!」

「いいの?」

……。

美和の、バカヤロオ……。

「俺がいつでも、いいのかよっ」

「ああ……。拓海が行かないと、意味がないから。がんばりなよ」

「……美和つつつ!!!」

こうして、俺は、森へと走り出した。待ってるよ、美和!

く番外編く

稜

「ふう……。これで、いいか」

まったく、あの二人鈍い同士だから、こっちにも苦労かけるよねえ。
っていうか、美和ちゃんが僕のこと好きって……。どんな勘違いだよ……。
こっちはむなしくなる一方だよ……っ！

「まあ……。できるだけのはしたしね……。後は、君達しただいだよ？」

もう、手助けはしない……。

僕は、自分の恋を、探さないと。

「さあってと、どっかにカワイイ子いないかなあ」

58 暗闇の中で君と出会う。

もう……嫌だ……。

雨が冷たい。

でも、気にならない。

ずぶ濡れ……はあ……。

こんなことになるなら……この気持ちに、気づかなければよかった……。

松平君の、バカ。

「はあ、はあ……っ」

結構、走ったなあ……。

ここ、どこ????

いつの間にか、森の奥の方に迷い込んでしまったみたいで……
ここ、どこですか……？

「あの……」

夜の森、雨……この二つがそろつと、不気味だ。

そして私は、怖い物が大の苦手だ。

ということは、この後の決断はたった一つ。

「キヤアアアアアーーーー！！！！」

どれだけ叫んでも、私の声は森に吸い込まれる。
だ、誰か……っ
たす、けて……。

その場に崩れ落ちる。
やだ……怖いよっ

こんなに広い世界の中で……
私は、ひとりぼっち……。

暗闇に一人、残されてしまった……。

「誰かあああ！！！！」

叫ぶ私、押し寄せてくる暗闇。
もう、ダメ……。

「おい、美和！？」

え……っ？

そんなわけない……いるはずがない……。
だって、あの人はもう……。

「聞いてんのかよっ、おいっ」

まさか……。

うそ……？

「松平君っ」

「う、うわっ！」

よ、よかった、来てくれて。

怖かった……。

恐怖から逃げて、松平君の腕の中に飛び込む。

って……

私、抱きついてる！？

「ご、ごめんなさいっ」

ピョーンっと効果音がつきそうな勢いで松平君から離れる。

や、ヤバ……今私、何をした……？？？

「え……あ、ああ……」

松平君が、目をそらしてますよ！
完全に、ひかれています！

どうしよう……。

「い、今は、その……勢い、といいますが……」

「別に、いい、から」

「え？」

「……何でもねえ」

そう、だよね……。

私に抱きつかれても、意味ないよね……。
だって、松平君が好きなのは……

「いいんです、帰ってください」

「はっ？」

「鈴ちゃんの、所に行ってください」

声を出すのも辛い。

涙を目にためて、松平君にうつたえる私。

「鈴ちゃんと、松平君は……おに、あ、いで……す、から」

「何言ってるんだよ？意味わかんねえ……。俺、別に友原好きじゃないんですけど」

「……え……？」

鈴ちゃん、好きじゃない……？

だって、松平君は鈴ちゃんばかり見てたし……。

「それより、ごめんな……。俺、おまえと稜が付き合ってるなんて勘違いして……」

「え……。そ、そんなっ！私、別に……」

なんだか、心が温まるのを感じる。
嬉しい……。

鈴ちゃんには悪いけど、すごく嬉しいです……。

「さて、と。そろそろ帰るか、美和」

「はいっ」

あ……。

松平君から手がのびてくる。

私は……？

もちろん、顔を真っ赤にさせながらも、その手をにぎりましたとも。

〈番外編〉

翔

「美和ちゃん!!!!」

「どこでーすかー?」

「拓海ー?」

俺…翔、蓮、司の三人は今、美和ちゃんを探している。

ズバリ、美和ちゃん搜索隊だああー!

拓海だけ抜け駆けなんて、ズリィんだからな。

バーベキューの時、俺らは肉をもらいに焼いている所にいたから……
机に戻ったら、美和ちゃんと拓海が消えていたんだああー!

462

これはどういうことだ!と、稜に問いつめたら、あっさり「えー…

…まあ、二人でラブラブ中?」とか言いやがった。

あの時俺はとっさに一発殴ったが、その後の理由を聞いて急いで来たってワケ。

「美和ちゃん…」

どこにいったんだろう……?

59 髪イジりましょう！

んうゝ……。

眠い……っ

「ふあゝ……。ええっと……？」

ここって…キャンプ場か…。

昨日、松平君が森に来てくれたんだよね…キヤッ
うれしかった…。

それで、手を、つないだりしちゃって……。

帰ったらみんなにひやかされたし、鈴ちゃん達には白い目で見られ
たけど、やっぱりうれしかったんだっけ。

はあ、恋する乙女の気分ですね……。

「ちょっと、美和ちゃん、起きてるなら早く手伝って！」

あ……朝食の準備とか？

鈴ちゃんの声が聞こえて、我に返る。
いかんいかん、完全に乙女チックモードでした…。

「はい、すぐにいきま……って、はっ！？」

そこで目にした物、それは……

ま、舞ちゃんの巻き毛を手伝ってるの!?

え……っ

口が開くを感じる。

「美和ちゃん、早くしてねえ 美和ちゃんの髪イジリは、最後だからねえ」

え……!?

舞ちゃんが振り向いてマイペースに言う。
つていうか、私もイジられるの?

「よし、完了!はい、次、お姉ちゃん」

「ええ。ありがとう」

な、なんか、気合い入りまくりだなあ……。
だって、ここにいるだけの使用人(総勢十名)と、鈴ちゃんと舞ちゃんと会長さんが交代で髪をイジっていく。
舞ちゃんは二つに結んでプラスで巻き毛。

つて、フラれたのに落ち込んでない!?

「あら、知ってるのお?」

「あ……っ」

「まあ、いいのよお。そ・れ・に あきらめてないもん」

ま、マジですか…。

あきらめてないって、すごい根性…。

「お姉ちゃんは、どんな髪型？」

「そうねえ……。ここは思い切って、ポニーテールで美和に対抗よ！」

えっ？

なんで、私と対抗？

確かに私もポニーテールだけど……。

「オッケー……」

シャッシャッシャと手早く手を動かす鈴ちゃん。

おお、さすが……っ

って、何がさすがなんでしょう？

自分で言っておいて、わかんなくなりました……。

「終わった！次が、先輩ですね」

「ワァーイ 私は、ウェーブかけて〜？」

あ、華月先輩！

ウェーブか、似合いそうかも……。

「ラジャーです！」

さすがにあの三人が一緒にやると、早い。

三人同時に（使用人も）ウェーブをかけると、すぐに終わる。

「できましたよ、先輩」

「わぁ！ありがとう！」

「「「それじゃあ、次は……美和ちゃん（花形美和）」」」

な、何で三人がそろってるんですかー！？
っていうか、三人とも目が輝いている？

「美和ちゃんって、どんな髪型でも決まるから」

「イジリがあるってものよ」

「もう、ライバルなはずなのに、イジリなくなるう」

は、はぁ……。

って、今なにげにライバル発言！？

「それはそうとしてえ、どんな髪型にするう？」

「やっぱり、ここは巻き髪……」

「お団子がいいわね」

「「「わたくし達としては、三つ編みがよろしいかと」」」」

な、なぜに使用人さんまでもが話に参加を！？

っていうか、三つ編みに、お団子に、巻き髪……。

私としては、ふつうにポニーテールを……

「「「「「「「「却下」「「「「「「」

う、うわ、ここにいる全員に冷たい目で見られてしかも却下と!?
ひ、ひどいです……。

「やっぱり、巻き毛が……」

「いやいや、お団子……」

「三つ編みもいいきがするう」

わ、私は、ふつうの髪型が……っ!…!

「よし、それじゃあ……髪はいじらずに、リボンをつけることに
しましょう!…」

60 ラストの合宿。

り、リボン！？

マジですかい？

昨日もどでかいリボンをつけられたんですけど……？
私、嫌なんですけど？

「あの、リボンって……」

「これが、これが、これが……」

って、何でそんなに持ってきてるんですか！？
ピンクのリボン、白のリボン、水色のリボン……
あ、これ……

小さい頃に憧れた、レースのリボンが。
薄い桃色の、綺麗なレース。
カワイイ……。

「あ、そのレースのリボン、いらないからあげるよ？」

え……。

鈴ちゃんの声が頭に日々気宇。

あげる……？

「本当っ！？」

「わっ……。び、びつくりするなあ……。うん、あげるけど？」

「あ、ありが……。って、私なんか絶対似合わない……」

そうだった…。レースのリボンなんて、にあいつこない…。

私がレースなんてしたら、男の子がリボンしてるみたいだ。髪は長いから、それはないかもしれないけど……。

「美和、自分に自信を持ちなさい」

かい、ちょう？

なぜか三人が私を取り囲んでいる。

ど、どういう状況？

「そっだよあ……。美和ちゃんは、たった一人松平君が心を許している女子なんだから。私なんか……」

え？

どういう、意味？

あ、男の子扱いされているって意味？

でもでも、それって心を許されているとはいわないのでは……？

「もうっ！美和ちゃんは、みんなが見られるほどカワイイんだから！何でライバルを励ましてるの……」

かわいい？

どこが？

こんな地味な顔に、スタイルだって……はあ……。

よっぽど舞ちゃんや鈴ちゃん、会長さんの方がカワイイのに。

「……はあ……。これだから、励ましちゃうんだよね」「」

ええっ!?

なんか同時にため息をつかされたんですけど？
なぜに???

「と、ともかく、です。レースなんて、似合いません……」

「それ以上は言わせない。鈴香、舞、用意」

「いいよ、お姉ちゃん」

「準備完了……だね」

「……それでは、レッツ……ゴォ!」「」

うわあああつ!!--!

三人が襲いかかってくる。

一気に来るなんて、卑怯者おお!

私達かもみ合つて、混雑中。

はうつ、どうなっているんですかー?

髪をブラッシングされて、リボンをむすばれて、服を脱がされて、
服を着替えさせられて。

うぎゃあああ、どうにかしてえええ……っ

「完成っ」

「完成……」

「かぁんせえい」

え……？

できたの？

私、どうなっているの……？
って……。

「な、なんでこんなセクシいな……っ」

「だって、美和ちゃんの鞆にこれ入ってたし……」

「……お姉ちゃんめ……」

着替えさせられていたのは、ワンピース。
でも、結構胸元が開いてるし……膝より上の高さだし……。
こんなんじゃ、パンツ見えちゃうんじゃ……。

「まあ、それはそれで……」

「セクシイでいいんじゃない？」

「うんうん」

そ、そんなあ……っ

やだやだ、こんな姿で外に出たくないよあ……。

真っ白のワンピース。

髪にはリボン。

靴は、一応スニーカーなんだけど……

「スニーカー？やだわ、ヒールの靴を持ってきて。ダイに言えばあ
るはずだから」

「はい」

ええっ

最後の望みのスニーカーまでもが、サンダルに……。
ビーチサンダルならまだいいんだけど、このパターンだときつと……

「もらってきたよ、美和ちゃんっ」

「お花のついた、清楚なくつう」

ガン。

もう、言葉もでないよ、アハハ

はあ……。

「ほら、早く」

「外にみんないるから」

「美和ちゃん、出てきてよ」

う、うぐう……。

こ、こつなつたら……

つてわけにもいかないし……。

「……遅い」

え……っ？

テントの扉が開いて、外から誰かが顔を出す。
だ、だれ……？

「ま、松平君っ！？」

顔が赤くなっていくのがわかる。

やだ、恥ずかしすぎるっ

ただでさえ目の前にいると何が何だかわかんないのに、こんな格好
って…。

もう、最悪。

「……………カワイイ、じゃん。早く来いよ」

……。

かわ、いい????？

それって……少しは、女らしく見えてるの？

やったあ！

せめて、「男の子」から「女の子」までは昇格したい！

「美和ちゃん？」

「はい、今行きます」

決心はついた。

いざ、出発。

「……………」カワイ「……………」

60 ラストの合宿（後書き）

すいませええん!!!

昨日、休んでしまつて……くそ、毎日更新だと言つていたのに!!!
ほんと、申し訳ないです、はい。
もう、自分の責任感のなさに涙が……。

少しでも読者の方がいる限りは、私には責任がある！
と思つていたのに……。

ああ……すいません、すいません、すいませんー!!!

謝罪ばかりで、すいません（これも謝罪だし…）

ともかく、ゴメンナサイしかいいようがありません。

明日からは、きっと。

きっと、終わるまでは毎日更新……！の、予定です。
予定ね、予定。

ともかく、がんばります!!!

by ゆながりか

61 自由行動、デェト（）計画！？

「それでは、最後の合宿でえゝす！」

ダイさんのはりきった（？）声が聞こえてくる。

それはいいんだけど、やっぱりこの格好は恥ずかしい……かも。だって、さっきからみんなが見てくるし。

似合わないと思うてるんだろぅなぁ……はぁ……。

「美和、どうしたんだ？」

「あっ！？松平君！だ、大丈夫、ですからっ」

一瞬にして、顔が真っ赤になる。

も、もう、いきなり現れるなんて……。ビククリするんですよ……。

「それではあ、今から自由行動だよゝん 誰とどこへ行ってもいいけどお、二時間後には、ホテル前のバスに乗っていてね それじやあゝ」

自由行動かぁ……誰と行動しよう。

鈴ちゃんや舞ちゃん達と？

でも、きつと松平君と一緒にだろぅし……。

松平君……？

だ、ダメダメ！

私なんか、松平君となんて……うん、ありえない。

「松平君、私と一緒に行動、しません？」

あつ。

早速鈴ちゃんが誘ってるし。

いいなあ、カワイイ子は。

自分に自信がある子だけが、ああやってアプローチできるんだよね…。

私なんて、アピる勇気ないし。

「……ごめん」

また、松平君らしいぶっきらぼうな返事だなあ。

そつだよね、松平君は男子といくよね……。

「ねえ、かず君？ いこつかあ」

「え？ ああ、もちろんさ、かづ」

うわ、またラブラブしてるし、あの兄弟は。

そんなにアツアツで、お母さんとかに気づかれないのかなあ。気づかれたら、ヤバイよね、きつと。

「あの、美和ちゃん？一緒に、行かないか？」

「え……っ？あ、遠藤君……。いいですよ、行きましょつか」

松平君がダメなら、誰とでもいいか。

遠藤君が声をかけてくれたし、一緒に行動すればいいよね。

「それじゃあ、あっちに花畑があるら……」

「待てよっ」

え……？

まつだいら、くん……。

「待てよっ」

あ……。

ヤバ、つい声をかけちゃった。

くっそ、翔がデートに誘ってるから、なんかムカムカして声出しちまったじゃねえか。

ああー、もう……。

当の美和本人は、ケロツとしてるし。

昨日は、なんか幸せだったのに……。

一瞬、両思い？ってうぬぼれてたのに、結局は破滅かよ。
あげくに翔と……

はあ……。

「なんだよ、拓海」

あきらかに邪魔者扱いで見る翔。

それはそうか、だって完全に邪魔だよな、俺。

でも、抜け駆けなんて百年早いぜ。

俺は、これくらいであきらめない。

「俺も、一緒に行くから」

「ええっ!？」

真っ先に反応したのは、美和だった。

そんなに驚くか？

っていうより、そんなに驚かれてるのか……。

「……なんで拓海が入ってくるんだよ……」

「別にいいだろ、自由行動だし」

「ちよっ……松平君っ!？」

そんなに俺と行くのが嫌かよ、美和。

こうなったら、意地でもついていってやる……。

「行くぞ、美和」

「あ……。ま、待って、松平君っ」

「はあっ!？勝手に決めんなよっ」

悪いけど、翔。

テメエのデート計画、俺が全力でぶっ潰すから。
覚悟しとけよ……っ

62 合宿最後のハッピー笑顔

「そ、それじゃ、あ……どこ、に行くっ？」

こ、声がうわずる。

だ、だって……手、つないでるし。

こんな乙女ムード、初めてなんですけど。
一応初恋は経験あるはず……なんだけど……。

「花畑に行こうよ、美和ちゃんっ」

「湖に行こうぜ、美和」

二人が同じタイミングで言う。

おお、さすがともだ……

って、むちゃくちゃにらみあっているような……？
気のせい？

「えっと……どこに、行こう？」

「花畑」

「湖」

バチバチツと火花が散る。

な、何、この戦い。

二人とも、そんなにお花畑や湖に行きたいの！？

っていうか、二人とも、意外にロマンティック？

そういうところに行きたがるとは、以外かも。

「そんなに行きたいなら、両方行きましょう」

さっきまでの緊張は、二人の子供っぽい様子でなくなった。
どこまで子供なんだか。

「はっ！？美和、ちゃ……」

「俺達は、おまえと……。はあ、もういいや。行くっぜ」

うわっ！

松平君に手を引っ張られる。

やだ、心臓の音が体に響いてる！？

ドクン……どきっ…。

もう、松平君のバカア……。

「ちよつ、待てよ拓海！美和ちゃん、俺達は、美和ちゃんと一緒に……」

「まったく、どこまで鈍いんだか……」

ええっ！？

わ、私が鈍い！？
そんなはずない！

だって、小説を書いている私、だから、カンは一倍鋭いのだ！
っはっはっはっはあ！

そう、特に恋愛に関しては、鋭すぎて困っちゃう
だから、松平君の好きな人とか、わかつちゃうんだよね……はあ。
鋭い女は悩みます。

「私は、人一倍鋭いんですよ！だから、みんなの好きな人だって、
一目瞭然……！」

エッヘン！

えびります、とことん。

だってだってえ、鋭いんだから！

「ほお……。じゃあ、俺の好きな人、わかるのか？」

え……？

松平君……視線がバッチリ合う。

ほええっ……！！

す、好きな人！？

わ、わかるわけな……

「美和、行くぞ」

「えっ！？」

いきなり腕を引っ張られる。

遠藤君の手に包まれていた片方の手が、空中に舞い上がる。

私達は、走り出した。

ごめん、遠藤君。

私、今……幸せ。

「まつ、松平君っ」

「なんだ、美和っ」

くそ、引っ張られてやっとスピードについていつてる。
今度ばかりは、自分の運動神経のなさを恨む。
でも、今はそんなことっ、気にならない。

「どっ、どこに、いくのっ」

本当は、こんな事が聞きたいんじゃないけど。
本当は、松平君の好きな人が知りたいけど。

そんなの、聞けないじゃないか。
照れ隠しに、質問するしかないじゃんか。

「……もうすぐっ……わかるっ」

道が上り坂に変わる。

き、キツイッ！

さすがの松平君もバテてきたみたい。

「はあ、はあっ……」

も、もう……ダメ、かも……。

意識を失いかけたとき。

私の目に飛び込んできたのは、キラキラと輝く光だった。
ど、うなってるの……っ？

「ここ。山の、頂上なんだ。綺麗だろ？」

そう言っで、私にほえみかける松平君。
やだ、カッコイイ……。

そこは、山の頂上。

ここから見渡せる海は、キラキラと輝いていて。
太陽に照らされた水面。

光が何倍にもなっているみたい。

「素敵……っ」

思わず漏れた言葉は、一言。
素敵。

これ以外に、言葉が見つからないのが悔しい。
小説書いているんだから、言葉を探さなければ。

「なあ、美和。俺の好きな人、気になるかつ？」

え……。

海にいつている目を、松平君へと向ける。
またまた目が合う。
どきっ

胸が高鳴る。

どんどん、松平君に吸い込まれる。
その綺麗な瞳に。

「しり、たいっ」

気がつけば、本音が出ていて。
今更嘘なんて、つけなくて。

今はただ、その瞳に吸い込まれそうなのを防ぐだけ。

「俺……………」

「美和、ちゃあゝんっ」

！！！！

も、もう、なんてKYな！
松平君も遠藤君を睨んでいる。

そう、この空気の中入ってきたのは、遠藤君。
まったく……。

「美和、行くぞ」

「えっ！で、でも…………っ」

「もうすぐ…………合宿も、終わるな」

あ…………そうか、終わっちゃうんだ…。

「大丈夫だよ。また、いつもの日常が、始まるだけなんだから。今

は、楽しもうよ」

なっ！

何言っちゃってるんですか私ってば！
恥ずかし……

「……ああ。そうだな」

あ……この夏一番の爽やか笑顔。

こうして、私達の合宿は終わっていくのだった。

く番外編く

翔

「あの……俺、忘れられてない???」

翔はただ呆然と、ラブラブ(?)な二人をみつめるのだった……。

< F i n >

62 合宿最後のハッピー笑顔（後書き）

あぁん、ラブラブウ

読者の皆様も、二人のくつつきそうでくつつかない関係にムシヤクシヤしてる（？）と思いますっ。

早くくつつきたいけど、まだ文化祭があるしなぁ……。

そうなんです、文化祭！

やだです、はい。

いやいや、書くのが嫌ってわけじゃないんですよ。

ただね、ちよつとね。

まぁ、いろいろあって……。

って、大事な事を言わなければ！

明日は、事情があって更新はお休み。

スイマセン……。

あさっては、必ず書くんで。

まぁ、合宿編が終わったんで、お休みをください！

それでは、

by ゆながりか

63 夏休みも、終わるなあ……。

「で、俺になんか用？」

「え……っ。あ、その……」

「用件、早くしてくんない？」

ど、どうしよう……恥ずかしすぎるよお。
こんなこと、言えない……っ

「はあ……俺、行くから」

「ま、待ってください！その……これ、渡してくださいって……」

「はっ……？」

え……？

ううー。

この先が続かないなあ……。

夏の日差しがビシバシ当たる。

今日も暑い。

今、スランプ状態。

恋をすると、小説かけなくなったりして。

でも、ヤバイんだよねえ……。

明日、学校始まるし。

さっさと書きちゃわないと、部長に怒られるよあ……。

「ああー！もうっ」

どうしよう……。

そーだなー……。

「はあ……」

「えっ！……ちよっ……い、飯塚君？ねえ、いいづかく……っ！！
！……はあ……」

一階から姉の声が聞こえてくる。

どうしたんだろっ……？

「お姉ちゃん、どうした……の？」

お、お姉ちゃんっ！？

部屋のドアを開けて入ってきた姉の顔は、涙でグシャグシャになっ

ています。

ど、どうして!?

「み、美和う……。い、いいつ、づかくつ、んがぁ……………」

飯塚君関係?

なるほど……。

つて、納得してる場合じゃないし。

「お姉ちゃん、大丈夫?」

「う、ううつ」

あー、泣いてるなぁ……。

どうすればいいんだよ……………。

つて、これじゃあどっちが姉かわからないし。

全く、困るなぁ……。

「あ、あの、ね……………」

姉の話は相当わかりづらかったので、わかりやすく説明すると……………

? 飯塚君から電話がかかってきた

? 飯塚君にプロポーズされた。

? 姉は困っている。

つてこと。

でも、それなら……………

「プロポーズ、受けちゃえばいいじゃない」

「そつ、そんな、わけには……いかな、い、のお……」

そうなんですかあ…。

よくわかんないなあ……。

「じゃあ、断れば？」

「そんなの、い、やあ……」

「もつ、どうしたいのよおー！」

訳分かんない……！！

つまりは、飯塚君が今までの彼氏とは違っってこと？

「あの人、があ。わす、れられな、いの、にい。飯塚君の、ことおつ、もつ、好きな、のお……」

なるほどね……。

今度の彼氏は本気ですってこと？

あの人って言うのは、姉が初めてつきあった人。

その人は、チャラ男だったんだけど、その人自身から姉に告白してきたの。

で、姉はもちろんつきあい始めたんだけど……

その人は、チャラ男だったから……一週間してフラれたの。でも、姉はその人を忘れられなくて。

今までは、その寂しさから逃れようと遊んでたわけ。

「お姉ちゃん、大丈夫だよ。飯塚君は、裏切ったりしないでしょう？大丈夫だから。飯塚君を、信じようよ」

「みつ… かずう……。わか、た、けどお……で、もお……」

「もうっ！お姉ちゃんってば、いいかげんにしてよね！飯塚君の所に行くまでは、家に入れないからっ」

バンッ！

ズルズルと崩れ落ちている姉を玄関まで引きずって、放り出す。まったく、お姉ちゃんってば。

勇気を出してよねっ

これ、私なりに応援してるんだから…。

64 Hello 文芸クラブ！

「おはようございます…」

ふあ〜とあくびをしながら文芸クラブの部室へと入る。

今日は集まるだけなので、コンピューター室ではなく空き教室だ。

にしてもあ、眠いんだよねえ〜。

昨日、夜まで徹夜で小説を完成させたから。

×切が今日だったし、まだ全然書けてなかったし。

ま、徹夜したから原稿用紙五十枚ほどの中編小説が二個書けちゃった

「おはよう、美和ちゃん」

「あ、ダイさん。もう、眠くて眠くてえ……」

またまたふあ〜とあくびがでる。

あー、ねたいよあ…。

「まだみんな来てないんだよね〜。困るなー、夏休み明け最初の部会なのに。それに、明日までに印刷クラブに持っていかないとさー、印刷してくれないしー」

そういえば、前にもそんなことを言っていたような……？

「ふあゝ……ねむ……」

「み、かずちゃん!？」

「んうゝ……」

も、もう……ムリィ……。

「失礼しまーす」

今日の始業式は、午前中のみ。
それからは、各自帰るか部活動。

ちなみに、俺は文芸クラブへと、レッツ・ゴー！
美和は先にいってしまったけれど、仕方ないか。

「ダイさーん？美和ー？」

とりあえずここにいなそうな二人の名前を呼ぶ。

あの二人をこの密室に閉じこめておくのはまずい。

俺の本能が、そう観じている。

なんていったって、ダイさんは……。

美和に、恋してるんだし。

なのに、美和は全く警戒心がないつつつか、気づかないつつつか、
鈍いつつつか……。

部室の奥へと入ってみる。

おっかしーな……。

確かにいるはずんだけど……

「ダイさー……え？」

「あ……」

何かをしているダイさん。
いったい、何をして……。

えっ???

一瞬、時が止まった……
ような気がした。

「な、何をして……」

「た、くみく……っ」

驚きを隠せない。

落ち着け……俺は、クールだと言われる松平拓海だ。
こんなことで、冷静を崩してはならぬ……

でも……

美和の事に関しては、別件だああー！

「部長おおお！」

「こ、これには、ワケが……」

そう言うダイさんの後ろには、スヤスヤと眠る美和。
まさか、ダイさんが美和にキスしているとこを見るなんて、思わ
なかった。

マジかよ……っ

「こ、んなの……ゆるせねえっ」

平常心を失った。

後から思うと、自分でも驚く行動だ。
いつもは、きつと温厚な俺が、人をぶん殴るなんて。

「つつ……！僕は……真剣、なんだ。こんな気持ち、初めてなんだ
よ……」

え……？

殴られた頬をさすりながら、ダイさんがぼそぼそと答える。

「ダイ、さん……」

「夜、眠れなくなるんだ…美和ちゃんのことばかりが気になるんだ……。そばにいと、ときどきして、顔が熱くなって……もう、ワケわかんないよ……」

もしかして、ダイさんの初恋は、美和？

真剣、か……。

チラッと横で寝ている美和を見る。

つたく、どれだけの男子を巻き込むつもりだよ。

「俺も、真剣ですから。正々堂々と、戦いましょうね」

新たな強敵がまた一人。

最後に、美和を手に入れるのは、いったい誰なのか。
楽しみだな……。

65 Hello 文化祭！

ふあゝ……。

んー？

「あ、おはようございます、ダイさんに松平君？？」

また寝ちゃったのか、私。

でも、寝顔を写真に撮られてないだけ、マシ？

「あ、美和。起きたか」

「美和ちゃん！」

あれれ？

ダイさんの頬が赤くなっているような……？
気のせい？

「ダイさん、原稿持ってきました！」

「あ、ありがとう！拓海君は？」

「……これ」

「よし、後は他の人だね」

ニコツと満面の笑顔で笑うダイさん。

さてと、×切に間に合ったし、今日はもう帰りたいなー。

「失礼しまーす……」

ゾロゾロと他の人達がやってくる。

みんな夜が遅かったらしく、眠そうな顔。

私は一眠りしたから、スッキリだけど。

「さてと、全員の原稿をもらおったし、印刷クラブに出してくるよ！そうそう、佐々君は、みんなと今度の文化祭の打ち合わせをしようって」

「はい！それでは、打ち合わせに入ります……」

なんか、二人とも気合いが入ってるなあ。

それもそうか、三年生は文化祭以後は、受験に忙しい（これまでもだっけ？）から。

本当は夏休みまでだけど、文化祭のために、受験をちょっとお休みしてるんだよねえ。

「まず、売り込みメンバーですが、文化祭はたくさんの方が来ます。よって、宣伝係と、売り込み係に分けようと思います」

おおー。

そっか、文化祭……。

改めてその実感がわいてくる。

ううーっ、待ちに待った文化祭……サイコー！

「まず、宣伝係ですが……」

「「「はぁーい！」」」

えっ？

後ろの方から声が上がる。

この声、あの三人？

「ええー……。会長ふくめ、その三人は売り込み係です」

「「「……」」」

三人の希望をあっさり打ち切る佐々さん。
か、かわいそう……。

「宣伝係隊長、松平拓海っ！」

「……はい」

うわ、すごい嫌そうだなー。
隊長って、大変そうかも……。

「宣伝係副隊長、花形美和っ！」

「は……はい！……ど、どういう……」

「返事はっ？」

「は、はい？」

ええーっ！！！

何それ！

ふ、副隊長って……そんなあ……。

って、それより、宣伝係！？

今度こそは、売り込みの係になりたかったのに…。

「ええー……と。宣伝係隊員、遠藤翔、雨風稜、笠原蓮、天道司、赤羽華月、赤羽一輝……以上っ」

そ、そんなにいるなら、私は売り込み係でもいいんじゃない？

それに、誰かと副隊長変わってもらったほうが、いいんだけど……。

「残りの、部長、僕、井上君、そして三人は、売り込みをやってもらう！」

「『ええーっ』」

一気にあの三人から今までのクレームがどばつとやってくる。今までは呆然としていただけみたい。

恐るべし、乙女のパワー。

「なんで、松平君と一緒にじゃないのー？」

「っていうよりは、宣伝係の方がカッコイイのに！」

「佐々君、変えてちょうだいっ」

「クレームは受け付けないと、部長が言っております」

な、なんかダイさんが言うよりも迫力が……っ
気のせいでは、ないよね。

「それと、今回は文化祭スペシャルということで、全員にコスプレをしてもらいます」

「えっ」

それを聞いたとたん、口から前言（ ）が飛び出ていた。
だって、またコスプレ？
嫌だなー……。

「ちなみに、美和ちゃんと五人には、一時間ずつ、服を着替えてもらうからね。着替える時間は十五分、宣伝する時間は四十五分。あ、赤羽さん達はずっと同じ格好でオッケー。売り込み係も同じ格好でいい」

売り込みがよかった……。

あ、でも、売り込みでもコスプレは着るのか……はあ……。

「あの、ちなみに今回のコスプレのテーマは？」

「え？これとってないけれど……ファンタジー？」

……はあ……。

66 Hello クラス！

さてさて、時と場所は変わりますが、ここは一年B組、私のクラス。

昨日は、文化祭へのショックで一瞬気を失いましたが、でも、無事に家に帰れたの！

「それでは、文化祭の出し物ですが……」

今は、クラスでの出し物を決めています。
劇とか、いろいろ。

我が校の文化祭では、一日目がクラス発表、二日目がクラブ発表という事になっていて……。
文化祭では、体育会系クラブも発表するんだけど……まあ、簡単に言うと、試合をするらしい。
楓が張り切ってたしなー。

「喫茶店で決定します！」

「……イェー……」

このクラス、ノリがいいなあ。
喫茶店、かあ。
めんどくさいなあ。

「では、執事喫茶か、メイド喫茶か、どちらにしましょう？」

「執事喫茶！」

「メイド喫茶！」

……。

ここで、いつも仲がいいはずの女子と男子が、二つにわかれた！
執事かメイドか？

もちろん、執事と言い張るのは女子、メイドと言い張るのは男子。
壮絶な戦いだ！

「美和ー、やっぱ執事でしょー？」

隣の楓が話しかけてくる。

執事ー？

うーん…楓のメイド服も見たいかも…。

「だってさー、松平君の執事服って……きゃっ」

ええっ!？

ま、松平君の、執事服???

……………（妄想中）

うわ、カッコイイかも。

「楓、執事喫茶にしよう！」

「ヤッター！」

松平君って、クールだから似合うかも。
それに、よく考えると、メイド喫茶って……

私もメイド服着なくてはならない！
それだけは嫌だなー。

「……それではー、二つとも混ぜて、萌え喫茶っていうのはどーですかー？これだと、メイドも執事も見られるから、お客さん倍増？」
えっと、確か、あの子は……

やぶはらあけみ
藪原明美ちゃん？

前、学校が同じだったよね…。
相当な変わり者で、女子なのにオタク（またはヲタク？）なんだっけ。

「「「「「オオー……」」」」」

さすがオタク！の一言にはみんな賛成。
って、ちよつと待てええー！
メイド喫茶もやるんすか？

いや、マジ無理っす。
あれ、なんでか知らないけどチャラ男になってる？
昨日読んだ小説にチャラ男が出てきたからかな？

「それじゃ、喫茶の指揮を明美さんにはとってもらいまーす」
ずいぶんとやる気がないクラス委員長が叫ぶ。
クラスから拍手喝采？

その後も明美ちゃんの指示によって役割が決まっていけます。
衣装係を希望した私なんだけど……

なぜか、お客さんの接客係になってしまった。

なぜ???

推薦で決めたから、きっと一票も入らないと予想したのに。

なぜか、票がたくさん入ってしまった……。

「それでは、明日は衣装係の人は残ってください。他の人は、私が接客態度を指導しますっ」

ええー……。

い、イヤなんですけど……。

っていうか、この接客係は美少女多いんだけど、私だけ地味で、不細工……。

はあ……。

「美和ー、明美ちゃん怖いねー。っていうかー、指導って………適当にやればいいのにい」

こういう楓も、もちろん接客係。

「がんばりまーす」

なんて言っちゃって、舞ちゃんに負けないぶりっこです。

「はあ………」

心にしまっておいたのに、ため息は外へと流れ出る。

にしても、クラブというクラスといい、災難すぎでしょ……。

こうして、文化祭はどんどん近づいてくるのである……はあ。

66 Hello クラス！（後書き）

さて、新しいキャラが出てきましたね！。

ふっふっふ… オタクキャラの明美ちゃんです。

美和と同レベルの変わり者ですね……。

美和と明美ちゃんのからみが…… おもしろそう

あ、もちろん、今後も明美ちゃんは登場する予定です。

文芸クラブではありませんけどね

まあ、オタクキャラの明美ちゃんとしては…… 美和のメイド服、
見逃すわけにはいかないでしょうね…… （ニヤリ）。

これから、どうなるのかな？

by ゆながりか

67 文化祭、密着スクープ!?

「おはよ、美和」

「……。なんで、そんなにハイテンションなんですか……?」

今日は、文化祭初日!

いやあ、小説は時の流れが速くていいなあ。
つて、そんなんじゃないかって……つと。

「いやあ、だつてえ。美和ちゃんの、メイド服が見られるのよ?
?そんで、お姉ちゃん?なあんて言われたら……イヤアアーン!」

……。

馬鹿な姉です。

文化祭つて、お姉ちゃんも見にこられるから嫌なんだよね……。

お姉ちゃんだし、写真を取りまくるに違いない。

はあ……。

「はいはい。どうでもいいけど、朝ごはん早く用意してよね」

「はあーい。今日は、午後から行くからね 飯塚君と」

「ふうん……」

結局、どうなったのかは分からないけど、ともかく仲直りはした……

…らしい。

まあ、仲がよければ、いつか

「さてと。今日は、美和をかわいくしないとねえ」

……はっ？

こ、この状況、ヤバイ気がする……。

このままでは、ご飯が食べられないっつっ……！！
ノオ……！！

「とうっ」

昨日見たヒーローアニメを思い出して、思い切りジャンプしてみる。
よし、もうすぐで、食パンに手が届くっ。

「そうはさせないわっ」

あっ……！！

姉がすばやく食パンを奪い取り、そして……

なんとっ！

それは、恐ろしい攻撃ですううう……。

食パンが、すべて姉の胃へと入っていきます……。

ああ、愛しの食パンが……。

「くそう。それならっ！」

まだ大丈夫だもんね！

日本の宝、ご飯があるもんね！
炊飯ジャーに、突入です！

「ふっ。そんなことしても、ムダなんですっ」

な、なにっ！？

炊飯ジャーへと手が届いた瞬間、姉の言葉が突き刺さる。
む、ムダとはどういうことっ？

「ああーっ！！！」

炊飯ジャーには、米粒一つもないのです……。
さ、先に食べられてしまったのか！？

「さあ、観念して、私にイジらせなさい」

「……参りました……」

あ……。

いつの間にか、スーパーマンごっこをやっていたの？
なんで？？？

と、ともかく、その後私は一時間ほど姉に髪をイジられました。
そして、化粧も薄くやられました。
なので……

「ち、遅刻……！！！」

「美和、ファイト」

「お姉ちゃんっ……！お、おにぎりある……？」

「あるよー 行ってらっしゃーい」

制服に急いで着替えて、おにぎりをつかんでもうダッシュ！

しようと思っただけで、よく考えると、お金を持ってないし……。

部屋に戻って、お小遣いから三千円抜き出して、かばんに入れる。
よし、準備完了！

「ダアアアッシュ！」

ずばばばばば……

アニメや漫画なら、こんな効果音がついているであろう……。

つまり、私は真剣に走ったのだ。

おにぎりを食べながら。

おかげで（？）、学校につくころには、おなかもいっぱい

それに、よく考えると私の当番は昼ごろの一番混む時間帯なので、
全然平気！でした。

「楓は、いつの当番だった？」

「ええーっと、おやつタイム？」

「そうなの？じゃあ、午前中は一緒に屋台とか見ない？」

楓とのいつもとそう変わらない会話。

まあ、楓の返事はいつも決まっているんだけど……

「あ、ゴメン！」

たいてい、これ。

そうだよー。

楓は、彼氏が結構いるから、引つ張りだこのの。

「いいよ、別に。彼氏と楽しみなよ」

いつものことだから、ショックなんてない。

まあ、一人で見るのはむなしいけど……

「あ、違う違う！今日は私じゃなくて、美和がダメでしょ？」

「えっ。なんで？」

「えっ！！明美ちゃんから聞いてないの？」

明美ちゃん？

ああ、あのオタク（またはヲタク）キャラの……。

明美ちゃんがどうしたんだろう…。

「緊急！大人気、花形美和と、王子様達に、文化祭密着！」

え？？？

楓の声ではない声が、後ろから聞こえる。

な、なにっ？

「どうも。こんにちは、美和ちゃん。新聞部、特別部長の、明美です」

新聞部???

あ、そういえば、校内新聞ってあったっけ？
それを作っているのが、新聞部？

私は興味ないから、読まないんだけど……

「今日：いや、今日明日と、美和ちゃんと王子様達に、密着させて
いただきます」

……。

はああ~~~~!?

68 ターゲットは、遠藤翔。

「み、密着、て???」

「つまりは、最近大人気の、花形美和さんと、王子様グループの皆さんに、文化祭の間、密着しようという企画を作り上げまして…。王子様グループのかたがたは、軽く承知してくださいましたし」

ええ~~~~!!!!

き、聞いてないよ、っていうか、そんなの勝手に決めないで下さい！

「そういうことで、いきましよう！あそこに王子様グループの皆様もいることですしね」

えっ！

って、密着…っていうことは、松平君と、一緒に行動するの？
恥ずかしすぎる……っ

「美つ和ちゃんあ〜ん」

キラァーンと輝いている遠藤君が、いつものように手を振る。
でも……。

明美ちゃんの様子が、おかしい……？
どうしたんだろう……。

「あけ、みちゃん???」

「くそ……。アイツめ……」

はっ?

明美ちゃんの遠藤君を見る視線が、怖い。

今までののにこつとした目線ではなく、ギラリと光る視線である。

「必ず……。っ。敵を、うつからね、小百合」

さゆり????

誰、それ。

「さ、いきましょ? おはよーございまーす! 新聞部の、明美でえ
ゝす 今日のはあ、遠藤君っていう、素敵な方とご一緒できるなんて
え、もお、運がよすぎですよねゝ」

明美ちゃん?

さつきまでのオーラとは程遠いような、ぶりっこ系。
これって……????

「あれは、遠藤君がヤバイわね……」

「えっ?」

「美和も、さつきのセリフ聞いたでしょう? 明美ちゃん、遠藤君に
……復讐、するつもりだと思う」

ふ、ふくしゅゝ!?

ま、またどうして、そんな……っ

でも、これは小説に使える……って、そんな場合じゃないか。

「ふ、復讐って？」

「さあ？でも、何か遠藤君を恨んでいるのは確かだね。あんなにぶりっこで、いかにも恋してます みたいな顔してるけど、あれは演技だよ。心の中で何を思っているかわからない」

やけに明美ちゃんを睨む楓。

楓って、優しいんだね……。

遠藤君のこと、そんなに心配するなんて。

「なっ……！た、ただ、気になっただけ、だし……っ」

なぜかあわてる楓。

おだててるわけじゃないから、素直に受け止めればいいのに……。

「ともかく……！美和、あんたは、明美ちゃんを見張っていなさい！私は、試合があるしっ！じゃーね……！！」

「うん！いつてらっしやい、楓」

明美ちゃん、か……。

文化祭、何が起こるんだろっ……？

く番外編く

翔

「美つ和ちやあゝん」

俺は、五人の中で一番に美和ちゃんを発見し、声を張り上げる。
やったね、一番乗りだ！

つて、隣にいる子は……？

ああ、美和ちゃんの友達の、楓って奴か。
その隣って……。

さっきから、俺を熱いまなざしで見てくる女。
めがねっこだけど、どこかかわいらしい雰囲気のある女の子だ。
同じクラスの、明美ちゃん、だっけ？
でも……

それ以外に、どこかであったことがあるような……？
気のせい、か。

あんなめがねっこ（美和ちゃんは別格で）、チャラチャラしてると
きも相手にしなかったしな。

「おい、翔。アイツ……」

「ああー、明美ちゃん？だいじょーぶだよ、浮気はしないって」

拓海は俺が浮気すると思ったみたいだ。

そんなはずないじゃん？

俺は美和ちゃん一筋だったの。

「そういう問題じゃなくて……。はあ。ともかく……気をつけろよ」

「はっ？」

どういうことだ？

でも……

明美ちゃんは、まだ俺のことを見ている。
やっぱり、俺にホレちゃったかー。

俺には美和ちゃんしか見えてないのになー。

ま、俺の美からして、当然？

俺は、明美ちゃんを甘く見ていたのだ。
これから起こる事を知らなかったから。
文化祭……無事に、終わるんだろうか…。

69 現代の名探偵、美和

はあ……。

今、私達は、喫茶店の準備をしている。

私の出番ではないので、まだメイド服は着てない（ホッ）んだけど……

どんだけフリルついてるの？

いやいや、っていうか猫耳とか、マジありえないんで。

「さてと、まずは、メイド姿と執事姿を写真に撮らせていただきま
す ええっとあ、遠藤君は、カッコイイからあ、その真ん中の位置
に立ってくださいあい」

最初の出番は、遠藤君と雨風君。

だから、「メイド姿なんて違うでしょー？」と思うでしょうが……

雨風君、なぜかメイド服です。

しかも、ウサギの耳。

それが似合うから、カワイイ男子は困るんだよねー…。

「いっやー……カッコイイ？そっかー？」

さっきからものすごく調子に乗っているのが、遠藤君。
女子を落とし入れる気マンマンですね……。

ワトソン君、君はこの明美ちゃんの行動についてどう思うかね。

ホームズさん？そうですね……部外者（楓）の意見を聞き入れると、やはり、何らかの復習かと……

あつまーい！ー！

ふぎゃあああ……。

これは……恋、をしているのだよ。明美ちゃんは、遠藤君に。それしか考えられないだろう。

ナルホド！さっすがホームズさん、見事な推理です！

それほどでもないよ。

私の脳内でホームズとワトソンの奇妙な会話が繰り広げられる。

そっかあ、明美ちゃんって、恋してるのかー。

じゃあ、応援してあげないと……。

「明美ちゃんも、一緒に撮影してもらったらどうですか？私がとりますし……」

気をきかせて、そしてみんなにバレないように応援すると、なぜか睨んでくる明美ちゃん。

な、なんで……？

あ、そうか……自分のカメラをさわられるのがイヤなのか……。

新聞記者にとって、カメラは命！だもんね。

「いいですから。早く、立ってくださいあい。準備の手伝いもしなく

てはなりませんのでえ。はい、そこに立つてくださいね。ハイ、チー……ズ」

そう言つて、シャッターをきつた明美ちゃんの顔が、ニヤリと笑つたように見えた。

え？

そんなに遠藤君がカッコイイの？

「翔、危ないつつつ！……！」

「え？たく、み……？う、うぎやつ」

……え……。

気がつけば、松平君と遠藤君が倒れ込んでいた。

そして、その後ろにはボーガンが……。

つて、ボー、ガン……？？

これって、まさか……

殺人ー！！！！

うぎゃああー！！！！

「ま、松平君っ！遠藤君も、だいじよ、うぶっ？」

「いてて……。ああ、美和ちゃん。僕はこの通り、大丈夫さ。何でいきなり押し倒すんだよ、拓海」

「……あれを、見る。おまえ、狙われたんだぞ」

「え？」

松平君が指さした方向。

それは、あのボーガンが突き刺さっている壁。

こ、こんなの見たら、きつと遠藤君はおびえてしまう！

でも……

これでこそ、現代のホームズ（私だよ！）の出番だと思わない？

そう、遠藤君に近づく明美ちゃんに嫉妬した、遠藤君ファンが明美ちゃんを狙ったんだ！

ところが、そのボーガンははずれて、遠藤君に……。

だって、明美ちゃんと遠藤君は向き合って立っている状態だし…。

この事件、おもしろくなってきたあ

名探偵美和は、明美ちゃんを守って、犯人を必ず捕まえて見せます！

69 現代の名探偵、美和（後書き）

いやあ、これだけを書くために、こんなにも使っはすじゃなかったのにな。...

あははは、まあいいかー

今日も無事更新できたしー。

よかったよかった

ついに文化祭きたなー！。

改めて実感する...

クク、翔君には、日頃のウザっぶりの恨みなんですね

さて、前回明美ちゃんが口ずさんだ、「小百合」とは！？

そして、美和のバカ推理は？

って、これって推理小説じゃないよな？？？

とりあえず、一日目は悪いんですけど、あんまり甘系ではないかも...。

ま、おもしろいんじゃないかね？？？

そのの、甘さが足りないと思っっている人！

大丈夫、二日目はきつと、きつと！...！

極甘なはず！

ま、はずですけどね...。

それでは

by ゆなかりか

70 明美ちゃんの恋???

「……ということで、明美ちゃんがねられているのです!」

フフフ、みなさんどうですか。

この私の見事な推理に恐れ入りましたね…。

「って、本気か、美和……」

「すごい、美和ちゃん!名推理だね!」

何かを言おうとした松平君を遮る(さえぎる)遠藤君の声。

えへへ、そうかな!。

まあ、それほどでも。

ワトソン君、君はあの明美ちゃんの顔を見てどう思うかね。

え……っと、顔色が悪い????

そうなんだよ。ズバリ、おびえているのではないかと私は考えるね。

なるほど!

ほら、口だって開いたままふさがっていないではないか。あれは、相当きているな。これは、僕達を守るしかないのだよ。

ホームズとワトソンがまた出てくる。

なるほど、守らなければいけないんですね、ホームズ殿！
私、あなたの名誉にかけて、明美ちゃんを守って見せます！

「明美ちゃん、守ってあげるからね」

「え……？？？は、はあ……」

「この、名探偵ホー……じゃなくて、美和に、任せなさいっ！」

ふふふ、皆さんも、私の実力に恐れおののくがよい。

「ところで、そろそろ喫茶店開くんですけど……」

クラス委員がおそろおそろ話しかけてくる。

あ、そうか、もう文化祭開幕？

よし、張り切っていくぞ！

「明美ちゃん、どうする？ 私達と一緒に行動する？」

固まっている明美ちゃんに声をかける。

怖いんだよね、わかるわかる。

「え……つと……。あの、私は、遠慮して、おきます……。そ、そう
！私、遠藤君のそばにいたいんです！だから……」

そんなに好きなの？

隣で遠藤君がうんうんとうなずいているけど、イマイチ魅力がわかんないんだけど……。

まあ、カッコイイ、のかな……？

「ともかく、です。私は、取材に来たので。こちらでメイド服や執事服を写真にとらせてもらおうと……」

「……おい、俺もここに残る」

え？

今までずっと黙っていた松平君が、いきなり話し出す。
何が???

って、一緒に行動するんじゃないの？
うぐうぐ……。

はあ……結構楽しみにしてたのになあ……。

「な、なんで?!?!」

明美ちゃんが目を見開いて抗議する。

い、いくら何でもそんなに嫌がる事はないんじゃない?。
みんなもそう思ったのかしらないけれど、明美ちゃんを見つめている。

「そんなに嫌なのかよ、俺がこの場にいるのが。それには、きちん
とした理由があるのか?」

追いつめる松平君、追いつめられる明美ちゃん。
って、どうなってるの?

なんで明美ちゃんを追いつめているの???

「な、何を言ってるんですかあ? 私はただあ、取材の邪魔になつ
たら嫌だなんて思っただけですよ。もう、みなさんも、そんな目

で見ないでくださいよお」

あ、そうだよね……。

邪魔になったら嫌だもんね……。

それに、きつと遠藤君と一緒にいたかったんだな。

これが、乙女のパワー……ってやつですか？

「……じゃあ、俺はこの席にいるから。美和達は、どうか見て来いよ。俺はここにいるからさ」

「リョーカーイ」

「喜んで、です」

「いいの、拓海」

それぞれいろんな返事をしながら去っていく私達。
はあ……松平君と一緒にまわりたかったのに……。

71 眞の名探偵、松平拓海。

さて……。

突然だが、俺の名前は松平拓海である。

今回の主人公は俺だ。

以上っ！

「拓海、何でここにいるんだよー。邪魔邪魔！ってゆーか、俺への嫌がらせかよっ」

「たたく、翔の奴め……」。

自分が狙われているとも知らずに。

のんきに俺に文句言いやがって。

誰のために俺がここにいると思ってるんだよっ！

「……翔、うるさい」

いちいち文句を言うのもめんどくさいので、一言で済ませる。

こっちの方が効率的だ、たぶん。

「なんだとおおー！！！！」

一人で怒っているけど、知るか、そんなの。

だいたい、俺だって本当は、美和と店を回りたいんだよっ

そう、今頃は、美和とイチャイチャしているというのが計画だったんだ。

でも、あいつ……そう、薮原が、翔を狙っている。

「遠藤くうーん ええっとお、写真をとらせてもらってもお、いいですかあー？」

きた。

アイツだ……。

薮原は、単なるぶりっことは違う。

あれは、心に無理をしてぶりっことをしているんだ。
いつか、正体を暴いてやるからなっ

「いいよ、明美ちゃ……」

「邪魔になるんじゃないのか。仕事中の撮影は禁止と言われて
いるだろう」

俺は、翔を守らなければいけない。
たとえ、美和を狙うライバルでも。
友達だしな。

「……。そおですねえ〜 ところでえ、松平君、ちょっといいです
かあー？」

……挑戦ってやつか。

俺に挑んでくるとは、なかなか勇気があるな。

「ああ、望むところだ」

俺と薮原の間で、火花が散る。

その間に突っ立っている翔はボーっとしている。

「たく、テメエのために美和と店を回る予定（俺だけの予定だけを断って（まあ、誘われてないけど）までここにいんだから。感謝しろよな……。」

「キャハッ 遠藤君、ちょおっと、まっててねえ」

「あ、うん……？」

それだけ言つと、藪原は俺を外へと引きずり出した。
女子からの視線が気になるが、今はしょうがないだろう……。

「ちよつと、松平君？ 邪魔しないでくれる？」

「っふ……。それがおまえの正体か。やっと姿を現したな」

「何を言っているのよ。私は、小百合の復讐をするのよつ。アイツに……あんな奴に、小百合の心をズスタにされたなんて……っ！
二度と、女遊びをできないようにしてやるっ」

……。

状況からすると、その小百合って子が、翔に遊ばれたってわけか。
それ、翔が悪いな。

けど、今は女遊びしてねえけど……？

「うるさい！ 黙って。ともかく、今度は私がアイツを地獄へと落とそうとしているのよつ。あんた達に、小百合の気持ちかわからないのはわかっているわ！ だから、邪魔をするなど言っているのよ」

確かに、わかんねえな。

そんな気持ちなんて、味わったことないし。
でも……

「そんなんで人に復讐をするおまえの気持ちがわかんねえな。だいたい、あのボーガンはいつたいなんなんだ？トリックは？」

「とりつく？そんなの、ないわよ。うちの若達に狙わせたまで。もちろん、命を狙えとは言ってないわ。おびえさせるていどに言うただけよ」

「ふんつ。それでも、へたしたら当たっていたかもしれないじゃなか」

「その確率はゼロね。若がはずすわけないわ。だいたい、藪原家の執事が弓矢をはずすなんてこと、ありえないでしょう。ともかく、邪魔をしないで。それだけよ。あなたまで敵にまわしたくないの」

やはりそうだったか……。

藪原、っていうのは、藪原財閥だったんだな……。

藪原財閥は、日本で一二を争う財閥だ。

どでかい城が日本中に何個かあると聞いたが……

そこのお嬢様、つてわけだな、藪原明美は。

ともかく……俺達の、敵だということははっきりした。

72 戦いの幕開け。

「確かに、俺も敵にはなりたくないな。ただし、翔を守る以上は、
数原と敵同士になるのは仕方のない事だ」

「ふん。往生際が悪いわね。ともかく、これから狙っていくから」

「守ってやるさ。全力でなっ」

バチバチツと火花が散る。

そう、何が何でも、俺は翔を守らなければいけない。
こんな奴に殺されてたまるかよ。

「それじゃ……」

「ま、待てっ！」

廊下から立ち去ろうとする数原。

くそ、翔の所に行く気だな！

そうはさせるかよ……っ

っ
つて……

「ちょ、何だよっ！？テメエら、離せっ」

「そうはいきません。お嬢様のご命令ですから」

「っな！！！！離せよ、離せつつってんだろぅが、馬鹿つつ！！！！」

「若」とかいう、執事が俺の腕をガシツとつかむ。

くそ、藪原がどんどん離れていくっ！

離せえええ！！！！

「拓海っ！！」

「！！！！稜っ」

とっさに教室から出てきたのは、稜。

そうか、コイツもこの時間帯だったか。

よし、そこにいる藪原を捕まえ……

「あ、明美ちゃん！」

「……………」

って、おい！

何素通りしてるんだよっ！

って、藪原の正体を知らないのか、コイツは。
くっそお、いい気につてんじゃ……

「ねえつつーの！」

若の足を引っかける。

よし、成功するかわかんねえけど……

背負い投げだ！！！！

って、重た……っ

「そのような技には引っかかりません」

「なにっ？」

「拓海っ！ふせて！」

「稜？？？」

「へ？」

稜が、飛んでいる？

とりあえず稜に言われた通りにふせてみる。

次の瞬間、すごい音が鳴り響いたのは言うまでもない。

「りよ、稜、おまえ……」

「えへっ おじいさまから教わっていた飛び膝蹴りが役に立ったね
って、この人誰っ？」

お、教わっていた、飛び膝蹴り……。
スゲエ……。

事情を知らない稜が、倒れている若を横目で見る。

あ、そうだ。

藪原！

「事情を話している暇はない。翔のピンチだ、手を貸してくれ」

「拓海が人に頼むなんて珍しいじゃん。いいよ、手伝う。スリル満点？」

「ああ、もちろん」

これから、俺と薮原の戦いが始まる。

くそ、翔。

無事でいてくれよなっ！

「美和ちゃん、あれを買っでえゝす」

「う、うん。ほら、天道君も来なよっ」

「ああ」

今は私と天道君、笠原君の三人。
適当に各クラスをまわっている。

にしても、笠原君テンション高いっ！
なんで????

そんなに文化祭、楽しみなのかな…。

「美和ちゃん、残念だね」

あ……。

いつもの優しいオーラ全開の天道君。
さ、さすが、お兄さんキャラ！

「え、何がですか？」

残念？

何がだろう……？

「拓海と、一緒じゃなくて」

「……つつっ！……な、な……っ」

どどどどど……どっ！っ、じと！…

いや、これは何かの間違いでしょ。
っていうか、ここを乗り切らないと……。
松平君にバレちゃう！

「あの、天道君？」

「アハハ、大丈夫。黙っているから。すぐにわかるよ、美和ちゃん
わかりやすいしね 大丈夫、拓海と、翔と、蓮もわかっていないか
らさ」

「え、えつと、その……」

「大丈夫さ、拓海だって……」

「え???」

拓海だって、何???
松平君が、どうかしたの？

「大丈夫だから」

いやいや、さっきの言葉の意味は?
ワアツツ????

73 決戦in教室

教室へと入ると、客でいっぱいだった。
くそ、どこにいるのか見当もつかねえ！

「稜、藪原と翔を探せ」

「え？明美ちゃん？」

「ああ。藪原が、翔を狙っているんだ。ヘタしたら、翔は殺されるかもしれない」

「…………ああ、わかった」

俺達は、手分けして翔を探そうとした……………んだけど、な。
男の客もいれば、女の客もいる。
俺は普通の格好だが、稜のこのメイド服は…………

「きゃあ！稜君、メイド？カワイイー！」

「う、うわっ！ちよっ、ちよっと、みんな！押さないで……………っ。拓海、早くいって！」

う、うわ、ドンマイかも。
ってか、今は見送るしかないだろ。
翔だよ、翔！

「しよーっ！……どこだー？」

「遠藤君、指名入ったよー」

「はーい」

あ、翔の声？

指名って……ホストクラブ？（またはホステス？）

「翔っ！」

「おっ、拓海！この時間帯でこんなに混んでるから、昼はやバイよなあ。拓海、ファイト！」

「あ、ああ……。ところで、やぶ、はらはっ？」

人混みにまみれて、疲れ切った俺の声。

つたく、テメエを守りにきたのに、どんだけのんきなんだよ……。全く気づいてないな……。

「あー、明美ちゃん？どこだろう……？稜の写真でもとってるんじゃない？」

「そう、か……」

そんなわけない。

アイツのねらいはただ一人、おまえだけなんだから。
にしても、鈍すぎる……っ

で、数原はどこなんだ？

うーん……。

アイツの考えがよめない……。

さっきの若って奴を倒したとはいえ、まだ心配なんだよな……。

「遠藤君、指名！早くいつて！」

クラス委員長の叫ぶ声がする。

委員長は、厨房で料理を作っている。

委員長以外に料理できる人がいないから、一人で一日中やるらしい。
大変だな……。

「らじゃー。じゃーな、拓海」

「おう」

にしても、翔を指名したのって、誰なんだろう……。

いや、俺達は人気があるから、女子なのは間違いないとして……

「あ、遠藤君！ここですー！私があ、指名しちゃいました」

ん？？？

こ、この声って……

無意識に体が反応する。

このぶりっこ声、間違いない……

奴……藪原明美だ。

マジかよ、客側にまわったのか……。

そっぴや、アイツも俺と美和と同じ時間帯だったか。
ってことは、お客になれるんだな……。

「あ、明美ちゃん！？お客さん？言ってくればよかったのにー」

何も知らずにのこのこと藪原に近づいていく翔。
ばっ、馬鹿っ！

何勝手に藪原のところにいつてんだよ！

藪原の口は絶えず動いている。

だが、その口元はニヤリとほえんでいて、怖い。
急がなければ……翔が……っ

「翔っ！ー！」

「え？」

ダッシュ！

くそ、間に合うか？

「どしたんだ、たく……」

「若、とめてっ！」

「はっ」

なにっ？

もう回復したのかよっ！

俺の目の前に黒服の男が立ちはだかる。
ぜ、絶体絶命、ピイイーンチ！

「くっそお！てやああー！」

道行く人が俺を見てくる。
だが、そんな今は今関係ない。
拳を振り上げ、若へと突撃。

ガンッ！

若の隙をついて、腹に拳を殴り当てる。
うし、手応えあり！

かといって、倒すまでの力が俺にあるわけもない。
ということ、一瞬ヨロめいた若の横を駆け抜ける。

「翔、藪原から離れろっ！」

「え……??？」

「チッ……！やっだあ、松平君つてば、何を言っているんですかあ？
ね、遠藤君」

「あ、ああ……。そうだよ、拓海。今接客中なんだから、静かにしろよな」

「……は……？」

い、今までの俺の苦勞は……？
ターゲットになっている翔は、俺の気も知らずにのんきに接客してるし。

藪原は相変わらず猫をかぶってるし。
あー……。

「明美ちゃん、ジュースは、何にする？」

翔が女の子をもてあそぶ時に使う技の一つ、顔を思いっきり近づける技を使っている。

「たく、どこまでのんきなんだか……」。

「つて、ありや???」

藪原の顔が一瞬にして赤くなる。

「と思ったら、一瞬にして冷静な顔に。
んでもってまた猫かぶりの顔に。」

「これ、まさか……?」

74 決戦 in 石灰倉庫

「じゃ、じゃあ……オレンジジュースくださあい」

「オッケー いいんちょー、オレンジジュース！」

「はい」

ま、マジ？

そ、そんなわけではない。

だって、藪原は翔の天敵のはずだ。
だから、こんなの、ありえない……。

「た、拓海……」

あ……。

よろよろと稜がやってくる。

客に相当扱われたらしいな……。

「りよ、稜……。翔は無事だ、今のところ」

「あ、明美ちゃんだ！へえー、真正面から、ってわけね」

「そーいつこと。どうする？」

「んー……」

考え込んでいる稜。

初心者の俺より、スリル大好きでいつもスリルを味わっている稜に聞いたほうが絶対にいい。

稜、何かいい考えはないのかよ……。

「そうだなー。ま、ここは、もっとスリルを味わうためにも、決戦、つてところじゃない？」

けっせん……？

どういうことだ???

「ま、決闘、の方がピッタリくるかも……。翔君をエサにして、呼び出すんだよ、明美ちゃんを」

「あ……！なるほどな……。よし、その作戦でいくか」

翔をエサにするっつーのはいい考えだ。

さすが稜。

さて、と……。

呼び出すには……

「しゅーっ」

「え？なんだよー、拓海」

「あのさー……。三年生の発表で、お化け屋敷やってるんだ。そこで、学校一周オバケツアーっていうのがあって……。今、「美和」がそれに参加してるんだよなー……」

ピクリ。

翔の体の動きが止まる。

俺はその動きを見逃さない。

……そして、薮原の反応も。

翔が反応したのを見て、薮原はワナワナと震えている。
やはり、これは……

「いくぜ、拓海！美和ちゃんのカワイイ顔を見に！」

「ああ」

「じゃ、いこうか、翔君 石灰倉庫ぐらにいると思うよ？」

ナイス稜！

石灰倉庫なら、見つからないし、鍵も開いているはず！

「おつしゃあ、一番乗りだ！」

ただただと駆け出す翔。

俺達もその後に続く……。

そして、薮原はしばらく呆然とした後で、まんまと俺達についてきた。

作戦は成功。

だが……

薮原の顔は、翔だけを捕らえている。

ターゲットだから当たり前なのかもしれない……

だが、その顔には、不安が残されている。

「藪原……」

「な、何よ、松平君」

「……やめるなら……今だぞ」

そう。

この計画をやめるなら、今しかない。

小百合という人のためにも、やめておいたほうがいい。

「……なつ、なんでやめなくてはいけないんでしょうか。私は、この計画を実行し、成功してみせます。そのためにも、花形美和が邪魔な存在だから、私はムシャクシャして……」

「後悔しても、しらねえ」

はつきりとそう告げる。

後悔しても、もう遅い。

藪原は……恋という、魔法にかかってしまったのだから。

だから、美和に嫉妬しているんだ。

ずっと隠し続けていただろう、翔への気持ち。

それが今、開かれる……。

藪原……！

74 決戦in石灰倉庫（後書き）

いやあ、美和と絡ませるつもりだったのにな……。失敗……。

ま、これはこれでもおもしろいけど……

私、ミステリーなんてほぼ経験ナシ！なんで、誰か変なところがあったら教えてくださいね

あと、誤字、脱字もあれば……

つてか、アリアリですよ……。はあ……。

と、とと、ともかく、次はとうとう決闘！

明美ちゃんの気持ちはどうなるんでしょうーかー？

b y、ゆながりか

バンッ！

石灰倉庫の扉を開く翔。

石灰がそこら辺に舞い散っている。

ったく、周りのことも考えるよな……。

「美つ和ちゃん、どこー？」

翔に続いて俺達も入る。

藪原はもう少しあとから追いかけてきている。

よし、これでひとまずは、オッケーだよな。

うまくおびき寄せれたみたいだし。

「おい、拓海ー。美和ちゃんいねーぞ？」

「黙れ、翔」

「はっ！？なんだよ、その言い方は……」

つかかってくる翔を無視して、藪原を待つ。

一応、稜にはドアの後ろで待機してもらっている。

あるシカケのために…。

「ちよっ……！え、んどくん……！待って……」

ぜえぜえと肩で息をしながらやってくる藪原。
よし、いまだ……っ

「はぁい」

「ええっ！？ちよ、雨風君？何をして……」

カチャリと笑顔で鍵を閉める稜。

藪原の顔がだんだん青ざめていく。

「まったく、これじゃ俺達がいじめてるみたいじゃんかよー。
違うっつーのに……」。

「若が入れないように、閉じ込める。おまえと、じっくり話したいから」

「なっ、なんですつてえ！どっいうことよ、松平君っ！さっさと遠藤君を渡しなさいよ！」

本性を完全に現している藪原。

よし、これで翔も藪原の正体がわかったよな……。

「あ、明美、ちゃん？」

恐る恐る顔を出す翔。

俺の後ろに隠れさせていた。

「え、遠藤君……！」

「別に、翔を監禁してたわけじゃねーしな。それと、俺は、おまえと話がしたい」

「……」

「それが嫌なら、俺達は全力でテメエの計画を阻止する。たとえ、今のおまえがどうなっても」

はつきりとそう告げる。

さっき、最終確認はした。

この作戦を、やめることができないのならば。
その恋の魔法を、解いてやるしか方法はない。

「……ソイツは……ソイツは、小百合を、地獄へと導いたのよっつ
っ……!」

口を開いた藪原から出てきた言葉は、小百合という名前。
そして、獣のような声。

「どういうことだ。小百合って、誰なんだ」

「お、俺、小百合ちゃんなんて、知らなっ」

「その男は、小百合の名前さえ覚えていないのよっ!今まで、何人もの女性を犠牲にしてきた、最悪の男だから。私は、小百合の敵を
うちに……っ」

「わかんねーな。話がよめねー。小百合って、誰だよ」

厳しく指摘する俺の声。

キーワードは、小百合、翔、復讐……。

藪原、おまえはいつたい、どうしたんだよ……っ

「小百合は……私の、友達よ。一歳年上の。ずっと、一緒に遊んでいたわ。あなたがやってくるまではね」

そう言って翔を鋭く睨む藪原。

その視線におびえて、俺の後ろに隠れる翔。

この問題は、テメエの問題だろうが。

「お、俺は、小百合なんて……」

「黙って！！さーちゃんを追い込んだあなたに、口を挟まれるなんて心外だわ！」

「あ……」

反論してきた翔の口から、真実が零れ落ちる。

知ってるんだな、翔。

小百合という人物を……。

「さーちゃんは……俺が、グレてきた頃につきあった子。適当に会った女の子に声をかけたんだ……」。

それが、さーちゃん。一個年上だったけど、気にしなかった。遊ぶのが、楽しかったんだ」

徐々に話し出す翔。

小百合という人物の過去が明らかになる。

「その遊びも、今まで通り、それじゃーねで終わるはずだったんだ。一日だけのお遊びのつもりだった。ナンパなんて、そんなものだから」

「さーちゃんは……優しい子なのよ！それで、単純で、かわいくて……見てると、こっちまでがにこにこしてきそうな、とってもいい子なのよっ」

藪原……。

理由は、それか……。

「……さーちゃんは……俺が、じゃーねって言った時に……こう言っただ。『なんでいつちゃうの？恋人同士でしょう？』って」

……本当に、単純だな。
というか、世間知らずだ。

ナンパを知らないような子がいたんだな……。

「俺は、はっきりと告げたよ。これは、ナンパだから。恋人なんかじゃない、ただの遊びだよって」

「さーちゃんの、ファーストキスだったのよ！さーちゃん、すつごく真面目だから……。それ以来、遊んだりしてないのよ！アンタなんて、アンタなんて……っ」

バンッ！

なっ…なに！？

鍵を閉めたはずなのに、いつの間にかドアはこわされている。くそ、若め……！

「若、ソイツを、殺して！」

「こ、ころすっ！？」

翔のマヌケな声が響く。

そうだよ、翔。

藪原は、殺そうとしてるんだ、おまえを。

だが……

できるか、藪原。

おまえに、翔を殺す事が。

「お嬢様……っ」

「何をしているの、若っ！早く、いきなさい！」

「……はっ」

大きな体格なのに、素早い身のこなし。

さすが、若。

だが……

藪原……。

「た、拓海！翔君が……」

「待て、稜」

「え？」

若を止めに入ろうとした稜を、手で止める。

そう、これは、藪原の気持ち次第だ。

藪原、どうする……っ！！

「ちよっ！！！！た、拓海、稜！？助けろおお！！！！」

「翔様、失礼しますっ」

若がポケットから取り出すのは、ポケットナイフ。
ヤベエ、あいつ、本気かよっ！

「うぎゃあああ！！！！」

「わ、わかっ」

！

藪原が声を上げたのを見逃さない俺。
やはり、おまえは恋という魔法から、逃れられないんだ。

だが……

勢いがついた若は止められない。
け、計算外だ！！！！

「翔！」

「翔君！」

「あつつ」

「遠藤君つ！！！！」

しよ、翔！！！！

……。
翔？

目を開けると、倒れ込んだ翔と……あれは、美和の友達の子？？？

「楓ちゃん？」

「だ、大丈夫？遠藤君」

「あ、ああ……」

「え、遠藤君つつつ!!!」

数原がワンテンポ遅れて近づいてくる。

恋という魔法、それは、平和をもたらす……。

77 ラストステージ、名探偵、最終決戦。（前書き）

ちょっと長くなっちゃいました

これで、ひとまず終了ですね

一日目はまだ、美和ちゃんのメイド服が残ってますから。
甘くはないかも……。

77 ラストステージ、名探偵、最終決戦。

「いったあ……」

倒れ込んでいる翔と浜平楓。

な、なんで浜平はここにいるんだ？

「浜平、どうしてここに！？」

「え……。ちょっと、石灰倉庫の前を通ったら……この、黒ずくめ
の人が遠藤君に襲いかかろうとしているのを見て、とっさに……」

……とっさに、ね。

浜平の顔が少し赤らんでいる。

なるほど……翔、おまえ鈍すぎるって。

「大丈夫、遠藤君っ」

「明美ちゃん……っ。ま、まだ俺を殺そうとするのかっ」

「えっ……。そんな……」

しよ、翔、それは勘違い……っ

「そうよ！明美ちゃん、これ以上こっちに来ないで！」

「ち、違います！私はただ、謝ろうとして……」

「そんな嘘、信じられるかつ！」

「そうよ！」

ヤバイ、アイツら、完全に藪原が犯人だと思いこんでる……。どうすれば……。

このままいくと、藪原が危ないっ！でも、今のアイツらに何か言っても……

「お嬢様っ」

「あ、若！」

「私にお任せを。翔様っ」

「な、何だよっ！」

わ、若っ！？

あ、そうか……。ここは、マンガとかのおきまりのパターンで、翔に土下座をして……。

うっ、そこまで藪原の事を思っているなんて、感動だ！

「ここに、爆弾のスイッチがあります」

……。

……！……！

「「「「「はあっ！？」」「」「」

そこにいる全員の声が一致する。

藪原までもが驚きを隠せない様子だった。

ってか、これ、作戦じゃねーの!?

ってか、おきまりのパターンは?

「どうということなの、若!」

「このスイッチを押すと、学校全体が、爆発します」

藪原の声を無視して、若の音が響く。

誰も、何も言えない。

コイツには、逆らえない……

誰もがそう思った。

くそっ。

本当の敵は、テメエかよ……。

「もちろん、スイッチを押さなければ、学校は安全です。翔様、お嬢様を許してくれますよね」

「……んなわけにはいかねーよ!俺にもプライドっつーものが……」

「爆破しますっ」

「しょ、翔っ!許せ!」

「遠藤君、許した方が……」

「翔君っ!」

「若、やめなさいっ！」

「翔様、ご決断を」

「……………俺は、許さないっ」

翔つつっ！…！

翔が言い切った瞬間に、若の手が素早くボタンを押す。

『10…9…8…………』

スイッチから不気味な音が流れ出す。

か、カウントダウンッ！？

ヤバイ、爆発するっ！

「みんな、逃げろおおー！」

「もう一度押したら、止まりますよ」

なにっ！

『5…4…3…2…………』

扉へと向かう間も、カウントダウンは流れ続けている。

「やめてえええー！！！」

ピッ…………。

え…………？

藪原が若の手にあるスイッチをつかんでいる。
と、とま……つた？

「藪原っ！」

「さすがですね、お嬢様。ですが……」

若がスツと藪原の手からスイッチを奪い取る。
あ……。

ピッ……。

ニコリと笑顔で若がボタンを押すから、反応が遅れてしまう。

え、ええええー！！！！

ば、爆発……っ！！！！！！

……しない???

「わ、若？これは、いったい……」

「翔様に信じさせるための、ワナですよ。お嬢様も、ご自分の気持ちに気づきましたね」

わなあー！？

マジかよ……だまされてた？

ありえねえ……っ

「もうっ。若ってば……。でも、その通りです。遠藤君……」

「え？」

「ありがとう」

「は???」

藪原が翔に近づいて笑う。

ふーん、結構カワイイじゃん。

美和の方がカワイイけどな。

「さーちゃんが、笑っていた理由がわかったの。どうして、こんなひどい事をされたのに、笑っているのかわからなかった。本当は、遠藤君に復習をしたかったんじゃないくて、さーちゃんの不思議なほえみを確かめたかったの」

「わら、てた？」

「うん。わかったよ、その理由。本当に、好きだったから、例え振り向いてもらえなくても、幸せなんだって。素敵な思い出をくれて、ありがとうって、さーちゃんが言ってた。私も、その気持ちかわかるよ。遠藤君は……私には、振り向いてくれない。でも、一緒にいるだけで、幸せなんだもんね」

「明美ちゃん……」

……はあ。

そんな理由で、翔を殺そうとしてたのかよ……。ま、これで一件落着だな。

「遠藤君、さようなら」

「……」

「みなさん、失礼いたします」

藪原が立ち去っていく。

石灰と（ゴホッゴホッ）涙を振りまきながら。

「え、遠藤君っ！」

「え？楓ちゃん……」

「い、一緒に、お店、まわりませんか？」

浜平？

真っ赤な顔の浜平。

なぜか、だんだん翔も赤くなっていく……。

「あ、うん。いいよ、別に」

「本当ですか！？じゃ、いきましよう！」

石灰倉庫を二人が立ち去っていく。

ど、どうなってるんだ？

「やっと気づいたんだね、翔君。自分の気持ちに」

「はっ？稜？」

「ま、いいんじゃない？これで決戦も終わりってことで」

そうだな。

これで、ひとまず俺達の戦いは、幕を閉じた……。

78 メイド服だニャン(ー!?)

はあああああ~~~~…。

ここで、もう一回ため息。

はあああああああ~~~~~~~~~!!!!

ふう。

はあ……。

もう、嫌かも。

あ、どうも、美和です

なんか最近、出番が少ない……。

それはともかく、今、私達が接客する時間帯。

当然、あれに着替えるわけで……。

「はい、美和ちゃん」

「明美ちゃん……っ。私、委員長の仕事を手伝ってく……」

「美和ちゃん？みんな、美和ちゃんのメイド服に期待してるんだよ？その期待を裏切るの？っていうか、これはクラスのみんなの行事だし、一人が怠けると、クラス全体がダメになるんだよ？我がクラスには、美和ちゃんの力が必要なの、知らない？だいたい、自分勝手な行動はよくないよね。ずっと思ってたけど、ワガママすぎるの

もよくないよ。何でも自分の思い通りにはならないし……」

うぐあゝ！

明美ちゃんがどんどん責め立ててくる。

……はあ。

今、美和ちゃんは、メイド服を片手に、私を追いつめています。
怖いです……。

「わ、わかりましたからゝ！こ、来ないでくださいゝ！」

「わかったなら、いいんですよ。そうそう、バッチリ写真に撮らせてもらいますから。明日が〆切で、間に合わなくなると困るんですよ、校内新聞。文化祭だし、張り切っちゃって」

さ、さすが明美ちゃん……。

恐るべし！

って……

本気で、こんなのを着ると言っのですか？

無理！

だって……

エプロンにもフリルって……。だいたい、私が想像してたのは、紺色くらいかな、みたいな。でも、これなんでピンク！？シーカーもー、真ん中ハートマーク？っていうか、リボンはどでかいし、ブラウスはフリルごっつてり、たっぷりだし。スカートは、なんかふんわりふくらんでるよ？スカートの中にはレースのフリルが敷き詰められているし、スカートは、赤！？だいたい、靴だって、茶色のリボ

ンつきブーツだし……。そして、トドメは……猫耳。意味わかんねえええー！だいたいですね、猫耳という発想がおかしい！それに、どこにそんな費用があるんですかっ！もっと有効に使えっ！そして、猫耳だけではなく、猫手（猫の手袋っ！か、猫の手の手袋ですね、はい）！？ありえない！ノー！

と、ゴチャゴチャ言っているとキリがないので、いったん終了。とにかく、すごいことになっているのは、言うまでもない。（言っちゃったけど）

「それじゃ、試着室で着替えてきてね」

「……」

明美ちゃんに押し切られて、試着室へと急ぐ。
はあ……。
最悪だ……。

そういえば、運悪いな、今日。
午前中の自由行動でも、松平君と回れなかったし、さっき聞いたんだけど、松平君は明美ちゃんと相当イチャイチャ（？）してたらしい。

女の子達が言っていたのです。
はあ……。。

「あ、美和？」

「松平君……？」

前言撤回。

ムチャクチャ運がいいかも。
だって……

カッコイイ……。

一瞬、見とれてしまう私であった。
だって……

「執事服……」

「あつ！……こ、これは、だな！」

タキシードも前に着ていたけど、微妙にデザインが違う。

タキシードはきちんと着ていたけど、ちよつと重ね着みたいな感じで、オシヤレ。

ベルトとかも、カッコイイし……

運よすぎでしょー！

「ともかく、だ！薮原に無理矢理着せられたんだ！」

びくっ。

その言葉に、耳が傾く。

やぶはら？

つまり、明美ちゃんでしょ？

やだ、なんか……

嫌な気分……。

79 心境……曇り????

「ともかく、だ！藪原に無理矢理着せられたんだ！」

「……何、それ……」

「え？」

「な、なんでもない、ですつ。それに、すご……く……似合ってる、し……」

なんだろう、この気持ち。

気分が、モヤモヤ。

私の中で、黒い渦がモヤモヤしているような、そんな感じ。

「じゃ、じゃあ……！そ、それ、ではっ」

「あ、ああ……」

もやもや、もやもや。

渦がどんどん黒ずんでいる。

藪原、藪原、藪原……

松平君が、藪原と言った時の顔。

なんか、赤くなってた。

恥ずかしそうに、してた。

それって、まさか。
明美ちゃんの事……

「松平君……」

試着室に入って、意識朦朧いしきもつろうと着替え中。
モヤモヤするなー……。

何なの、この気持ち！

天気为例えると、曇り？

雨が降るかもしれない、晴れるかもしれない……。

天気予報、土砂降りに注意。

「はぁー……」

なんか、運悪いなあ。

さっきも思ったけど。

メイド服も、松平君に見られるなんて。

似合わないとか思われるのがオチだし……。

だいたい、猫耳なんて、見られたくないよ……っつつっ！……！

ぐあああー！

気がつくつと、着替えも終了。

……よし。

いくか……。

ガラガラッ

いざ、出陣！

試着室の扉を開けて、出発！

もう誰に見られてもかまうもんか！
開き直ってやる！

明美ちゃんに教わった、接客態度……

「いい？猫語で話すのよ？」

そうだ、猫語！

この日のために練習してきたんだから、がんばってみよう！

まずは、この誰もいない廊下で……

「ご主人様？おかえりなさいませデスにゃん？」

「みつ……か、ず？」

……。

オーーマイ、ガアアアー！！！！

誰もいないはずの廊下に立っていたのは、松平君。
やだやだやだ、これは悪夢だよね？

だって、松平君はもう教室にいるはずだもん。

そうだよ、現実なわけない！

「何ですにゃん？」

夢だとわかれば、怖いものはない！

こうなったら、思いっきりベタベタしてやるー！

「はっ……！？にゃ、にゃんって……」

「ご主人様？どうしたんですにゃん？」

「つつ……！！！」

夢だから、ムチャクチャ積極的にアピール！
松平君の腕に抱きついて、頬をスリスリ。
にゃはは、この夢、さめなければいいのにー。

上を見ると、真っ赤な松平君の顔が。

ありやりや、夢の中の松平君は、純情？？？
だって、松平君って、クールなイメージがあるし……。

「み、みみみ……美かつ……ず！その、だな！はな、してくれっ」

「え？嫌にゃんデスか？」

「……！！！！そんなことない！！！」

耳まで真っ赤にして言う松平君。

あー、このまま夢の中で暮らしてもいいかも……。
だって、松平君かわいいんですにゃん（あれ？）。

「でも、そろそろ起きなければ。松平君、私のほっぺたをつねって
くださいデスにゃん」

「え？こっか？」

イテッ！

痛いです……って、え？
いたい……？

夢の中だし、痛くないんじゃないや……。
そっか、目覚めたんですね！

って……

目の前の景色は、何も変わってないし……。
ってことは、まだ夢の中！？
でもでも、ほっぺたたつねっても、痛かった……

それって、まさか……？

「あの、松平君。これって、夢、ですよね……？」

「え？何言ってるんだ？現実、だけど？」

……。

え？

え……？

え……？

ええええ……！！

そ、そそそ、それって、つまり……
本物の松平君に、猫語で話して、腕に抱きついて、スリスリして……
ぎゃあああー！！！！

「うぎゃっ……うぎゃ……うめんなさいっ……」

「……」

お、怒ってるよ、松平君。
だって、無言だよ？
怖いって！

「別に。少し、嬉しかったし」

「え……？」

「いくぞ、美和」

「あ、はいっ！」

さっきのって……空耳、だよな。

80 指名された私。

「うつわぁ……」

「……」

教室に一步はいあると、もう喫茶店のムード満開。
お昼時だから、一番混むんだよね。
うん、がんばらなくては！
地味に隠れながら接客するのだ！
目立つなんて、ありえない。

「あつ、美和ちゃん！」

「いいんちよー？どうしたんですにや……じゃなくて、どうしたんですか？」

「それがさ、大変なんだ。美和ちゃんの指名が、十件近く超えちゃつてさ。予約が入っておりますって言ったら、終わるまで外で待つて。ともかく、最初のお客さんのところにいつて！」

「ええー！！！」

「あ、松平君も！お願いね！」

「……」

無言で訴えている松平君。

さ、さすが、何事にも動じない男、松平拓海！

「それじゃ、松平君、さようならですね」

「……………美和」

「はい？」

客のところにいきこうとしていた私を、松平君の声が引き止める。
な、なに？？？

「あんまり……………見られるなよ」

「ほえ？」

「つまり、だ！その……………他の奴らに、お前のメイド姿、見せたくない」

「……………っ！……！」

一瞬で、顔に火がつく。

美和、点火！

ばおおー……。……。

つて、今、なんて？

み、見せたくないって、それって、つまり……………

考えれば考えるほど深まるなぞ。

この体だけは、その答えを知っていて、どんどん熱くなる。
スタスタと去っていく松平君を見送りながら、ボーゼンとたちつくす私なのです……。

「美和ちゃん、指名ココだよー」

「あ、はい！」

奥のほうで手がピヨピヨ動いている。

あれが、私を指名した人？

よっぽど変わり者なんだろうな……。

って、どこかで聞いたことあるような……

「美和ちゃん、おっそおーい」

「申し訳ありません、ご主人さ……って、ダイさん!？」

「そおだよ いまさら？」

「し、知りませんでしたっ！」

なるほど、ダイさんが指名したのかー。

からかい半分だろうな、きつと。

にしても、ダイさんなら、絶対に松平君指名すると思ったのに。
以外。

そこまでしてからかいたいのか……。

私って、もしかして……M？

「か、からかうなら、辞退させていただきま……」

「からかってないよ。それに、猫語でしょ？」

こ、これって……

完全に、からかってるな。
目が光ってるし。

「写真、とらないですよね」

「ええ。バレたあ？」

「バレバレです！」

「じゃ、猫語ね？ほら、猫耳つけて、猫の手になってるんだからさ
」

「……いらつしゃいませ、ご主人様？今日の用事は、何なのかにや
あ？美和う、気になるんだにや」

「っ！――！」

完全に開き直った私。

もう、どうにでもなれだにゃん！
女を捨てろ、馬鹿になれ！

「……美和ちゃん」

「何ですかにゃ？」

「ぼ、ぼぼぼ……僕、帰るから。じゃね！」

「え……?」

ズダダダダと、ものすごい足音を立てながら帰るダイさん。
じ、地響きが……。

一応、飲んでいたコーヒーのお金は払って帰っている。
意外に礼儀正しいんですね。

「はい、次の方どうぞー?」

扉の前にいるクラスの女の子が、私がいる席を指定する。
またお客?

つて……。

扉の外側には、列ができていて、二つに列が分かれている。

一つは、普通席。

そして、もう一つあるんだけど、女の子が持っている看板によると
……

美和ちゃん指定席だにや

……。

い、いいんちよーめ!

くっそー!!!

80 指名された私。（後書き）

いや、スイマセン。

昨日、おとといは、風邪で、熱もでて、ボタンキューです。

なので、パソコンにも向かえず、ただただ寝込んでいました。
ほんつとくに、申し訳ないッス。

こんな馬鹿な作者ですが、これからどうぞよろしく……。

b y、ゆながりか（ゴホッゴホッ。病み上がりなもんで…）

81 独立ファンクラブ、ここにあり。

「それでは、お飲み物をお持ちするんだにや。お持ち帰りなんですにゃん？」

「ああ、そうさ、美和ちゃん。本当は君を持ち帰りたいくらいなんだけどね」

黙れこのヘンタイ！

何が持ち帰りたいだよ、馬鹿野郎！

内心相当いらついている私。

今はなんとか接客中なんだけど、いやあゝな態度。

何こいつら！

私にいったい何を求めているのよ！

「ウェートレスさん」

「何ですかにや、ご主人様」

なぜか、私専用指定席が三つに増えて、忙しさ倍増。

松平君はいそがしそうだし。

いいんちよーは次々と入ってくる大金に目がクラクラしてるし。

どいつもこいつも、アテにならなーい！！！！

「美つ和ちゃんゝん」

「はい？」

パシャッ

な、何これ……っ
シャッター？

つてことは、まさか……

「お姉ちゃん！？」

「あつたり〜。飯塚君と一緒に来たんだ 美和ちゃん指定席は混んでただけどお、普通席は空いてたから あつちの、拓海君指定席も混んでるわね〜」

しゃべりながらもシャッターを切り続ける姉。

他の人は、呆然と姉を見つめている。

ああー、もう、最悪。

クルリと、姉から向きを変える。

「美和ちゃん、こつち向いてえ〜？」

「な、何よ、おねえちゃ……」

パシャッ！！！！

うわ！

な、何、これ……。
水？

頭の上から降ってきた雨。

「というか、これは……コップにっついであつた水だよね？
何で？？」

「あら、花形美和じゃない。ごめんね、かかつちやつたわね」

え？

目線を、姉から逆方向へとズラす。
誰？

「私、独立、松平拓海ファンクラブの会長なの。それで、あなたが
邪魔だから、排除しに来たの」

はい、じょ？？？

つて、まず何？

独立、松平拓海ファンクラブって。

「独立、松平拓海ファンクラブとは、一年から三年までのファンク
ラブとは別に、どんな最低で卑怯な手を使つてでも、松平拓海をゲ
ットしようというクラブですの。正式にクラブとしてあるのよ」

へえ。

つて、納得してる場合じゃないし！

それに、どんな最低で卑怯な手つて……つまり、誰かを傷つけても
つて事？

許せない……っ

たかが松平君の事で、そこまでするなんて。
最低……っ

「イヤアゝ！涙目の美和ちゃんゲエゝツト」

「お黙り……」

「あら？」

「お黙りとおっしゃっているのよ、このボンクラめ！」

あれ？

また役に入り込んでる！？

最近は少ないからいいと思っただのにー！

「ボンクラとは何ですか！？下部よ、やっておしまい！」

「はっ」

「やれるもんならやってみなさいよ、このボンクラ！」

そうだそうだー！

今日は珍しく変身くんの意見に賛成。

だってだって、こんな奴、ボンクラだよね！

「キーーーーッ！」

「それでおしまい？負け犬の遠吠えもいいところね」

「何よおおお！それ以上言つと、それ以上言つと……」

え？

視界がブラックアウト。

って、そんなわけないか。

いつのまにか、私の視線は天井に。

これって、倒れてる????

「そこまでにしろよ」

「何ですの、私の邪魔をするのは!……ま、松平、拓海……」

「体当たりして突き飛ばすって、やり過ぎだ。だいたい、俺はおまえ達には、”落ちない”」

イタタタ……。

まだヒリヒリと痛む背中をさすりながら立ち上がる。

目の前の女の人達の顔には、ガンと書かれている。

あ、ありやりや……。

「ちょっと、そのボンクラ」

え?

まだ役者モード続いてるの?

「アンタ達も。正々堂々と、勝負しましょう」

……。

キヤアアアー!

や、役者、カッコイイじゃん!

正々堂々って言葉がいいよね、うんうん!

「あつ」

視界がまたボヤけて、今度は自分から倒れていく。
さっきはどうやら、体当たりされたみたいだけど、今度は違う。
モードから切り替わって、力が抜ける……。

「つと。大丈夫か、美和」

「え？あ、松平君。大丈夫です」

松平君が私を支えてくれている。
なんか、この空間、いいな……。

「……美和ちゃんつてば、ヤッダー！カッコイイ男の子に、支えられちゃってえ！もお、お姉ちゃん、ドツキドキ」

「つな……！何を言ってるんですか、お姉ちゃん！」

「キャハハハ、もうこのショットは永久保存よ！」

「つて、写真とつたの！？」

82 この気持ち、何なの？

「それでは、またいらっしゃってくださいですよ」

「もちろんだよ、ハニィ」

「美和ちゃん、コーヒーもう一杯！」

「はいですよ！でも、あんまり飲み過ぎるとお……体に、よくないよ？」

「……うつぐあ！萌ええええ！」

「たたくさー、疲れるんだよねー。」

今は午後一時、まだ終わりの時間まで一時間あるよ……。

お姉ちゃんは出て行ったけど、他のお客はいっぱい。

あー、何でお昼ご飯の時間の係なんだろっ……。

もっと人がいない時間の方が、私としては……

「ウェイトレスさん、パフェちょうだい」

「はい、わかりましたですよ」

普通席の方からも注文がどんどん舞い降りてくる。

きゅ、休憩したい……っ

そ、それに、ご飯食べてないのに……！

「松平くうくん。私い、ケーキがほしいのお……」

「かしこまりました」

「キヤア、クール」

あ……。

女の子達に囲まれている松平君を発見。
やだな、変なところ見ちゃった……。

モヤモヤ、モヤモヤ。

何、あの子達。

松平君の隣にいてほしくない。
私が、いつも横にいたのに……。

つて、え????

何、今の気持ち。

気分が、モヤモヤして、なんだか、ひどい事を言ってる……。
こんな私、嫌だ……。

「……」

「美和ちゃん？注文、教えてくれない？」

「……え???あ、明美ちゃん！えっと、二番席のお客様が、コー
ヒー、七番席のお客様がパフェ……」

いけない、ぼーっとしすぎた。

今はこれでも仕事だし、きちんとしなくちゃ。

「ふふ…。美和ちゃん、疲れた？美和ちゃん以外は、みんな昼食休憩してるから、休憩したら？美和ちゃん指定席は、他の人に任せておくから」

「あ、ありがとう！明美ちゃん、優しいね！」

「ううん、これも私の役目」

そう言つて、にこつと明美ちゃんが笑う。
その笑顔につられて、私もほえみかける。
いい子だな、明美ちゃん。

「あ、松平君」

……え。

明美ちゃんが、松平君の方に走っていく。
やだ、何で？

まさか、松平君と、明美ちゃんって、両思い？
でも、遠藤君は？

明美ちゃんが立ち止まったその先には、松平君が。
う、うそ……。

明美ちゃんって、松平君の事……。

楽しそうに話す明美ちゃん、明美ちゃんの前では、疲れ切った表情を見せている松平君。

松平君、明美ちゃんの隣、安心するんだ…。

「…………くっ」

唇をかみしめる。

な、何も言えないよ…あんなに、二人がラブラブだったなんて私、馬鹿じゃん。

「他の奴らに、お前のメイド姿、見せたくない」

これ、冗談だったんだ。

なのに、一人で舞い上がったちゃって。

ほんと、馬鹿みたい……。

「あ…………」

明美ちゃんが、松平君の耳元でコソコソと話している。

それも、私の方を向きながら。

だんだん、顔が熱くなってきているのがわかる。

もしかして、私の悪口？

それとも、ただのラブラブな会話？

「…………！」

耳元で言われた松平君の顔が、ぼっと赤くなる。

……。

明美ちゃん、最低。

人の気持ちもしらないで……。

いなくなっちゃえば、いいのに…。

「はあゝ…」

疲れる、あんな奴らと話していると。

今俺は、接客から解放されて、客からの注文を言いに来たところ。
なんでこんな喫茶店にしたんだろうな。

でも……美和のメイド姿は、かなりカワイイけど。

めっちゃ似合ってるし。

ってか、他の奴らに見せたくない。

俺が独り占めしたいし…。

そんなことを密かに考えていると、藪原が近づいてきた。

「松平君、大変だったね」

「ああ……」

疲れたあゝ。

藪原は翔に熱中だから、本音をバラせる。
俺に夢中になる確率はゼロだからな。

「ところで、さー」

コソコソと、俺の耳元に口をよせて、つぶやく。
ん？

「……美和ちゃん、カワイイね」

「……！な、何で俺に言うんだよ、んなこと、知るかよ！」

「ふう〜ん……。いいんだ、美和ちゃんの猫耳ショット、たくさんとつてあるのに」

「え……」

思わず、藪原を見つめてしまう。
しまったと思う時には、もう遅い。
目の前には、ニヤリと笑う藪原の顔が。
なんて憎たらしい顔なんだよっ

「ほしい？」

「……別に」

「さっきの美和ちゃん、ちょーど涙目で、肩もぬれてて、セクシイー！・か・も！今なら、こぉーんなセットでついてくる！」

じゃじゃーん、と言われて見せられたのは、美和の涙目のどアップ。す、すげ、カワイすぎる……。

「今なら、たったの三百円！三百円で、このセット！」

小さなアルバムに、美和の写真がズラッと貼られてある。こんなの……

「……買う！」

買うしかない……！

俺は、美和の視線も知らずに、藪原の持っている写真に食いついていた。

83 プレゼント交換

「はあ……」

今私は、お昼休憩。

だから、人のいない、空き教室でご飯をトボトボと食べている。

にしても、松平君……。

はあ……。

「嫌な気分……」

「何言ってるんだよ、美和」

「それが……つて、誰っ!? あ……松平君!」

いきなり、私が落ち込んでいる原因が登場!

やだな、会いたくなかったのに。

できれば、忘れたかったのに。

「べ、別に、なんでもないんです! ただ、ちょっと……ヤキモチ、を」

つて、ええっ!?

私、ヤキモチ焼いてたの?

言葉に出して初めて気づいたんですけど!

「……俺、仕事戻る」

え……っ。

や、やだ……！

ぎゅっ。

「……美和？」

「い、行かないでっ」

とつさに、松平君の腕に手をのばす。

行かないで……お願い、だから。

手をのばしてはいけない……それはわかっている。

だって、松平君は、明美ちゃんの事……

でも。

もう、自分に嘘は、つけない。

「……来いよ」

「えっ？」

あ。

つかんでいた手を、無理矢理離される。

そ、そうだよ……迷惑、だよ。

そりゃ、明美ちゃんのとこに行きたいよね、そっか……。
だって、ラブラブだし。

おじゃまをしちゃ、悪い……。

私が、馬鹿だったんだ。

一瞬でも、恋愛小説の主人公になった気分で。

それで、松平君の気持ちも勝手に決めちゃって。

やだ、私って場、最低…。

「美和、行くぞ」

ぎゅっ。

え????

私の手を、暖かいものが包み込む。

一瞬で、そこから体中に熱が伝わる。

「松、平君？」

「……手、離すと、おいてくぞ！」

「……う、うん！」

今までのモヤモヤはどこへやら。

いつの間にか、冷たい手は、熱をもっている。

これは、アナタがくれたんだよね。

「ここ」

「え？ここ、ジュエリーショップ……」

目の前には、どこかのクラスがやっている、ジュエリーショップが。

ここのクラス、アクセサリークラブの人が多いのかな。

そういえば、最初のクラブ発表会で、雨風君に無理矢理ジュエリーもらったっけ。

今は、お姉ちゃんが使ってるけど。

「りよ、稜に、もらったんだろ」

「え？なんで知ってるんですか？」

ズバリ今考えていたことを当てられて、ビックリ！

もしかして、霊能力とか？

いやいや、エスパー？

「稜に聞いた。お、俺も……買ってやる」

「ええ！？いいです、そんな……」

松平君に買ってもらうなんて、そんなことしたら……

ファンクラブの目が、キツイ！

絶対殺しにくるよ、あの人達。

ああー、どうすれば……

「いいから。買う」

そ、そんな、断言しないでー！

きつぱり言い張ると、ズンズンお店の中に入っていく松平君。

ああー、殺されるな、絶対。

今は、この幸せを味わっておこうっと。

でも、せっかく買ってもらうなら、お返しした方が……？

店内をウロチヨロしてる私。

でもなぜか、周りの目線が、かなり気になるんですけど……
って、ああああー！！！！

わ、私、メイド服のままだし！
どおりで変な目で見えるわけだ！

「って、ヤダヤダ、早く帰らなきゃ」

そのためにも、さっさと松平君用のを選んで、帰ろう！

うーん、どれがいいんだろう……。

やっぱり、男物って少ないんだよねー。

お花とか、ハートとか、リボンとか……
そういうのばかり。

「あ……！」

キラキラと輝いているそれ。

私の目に映った瞬間、光が放たれた。
すっごい輝き……これ、何？

「あ、男物……」

輝きの正体は、十字架のペンダント。

よくあるデザインだけど、小さな宝石がはめ込まれていて、学校の
出し物のわりに、本格的。
すっごい、カッコイイ……。

「あの！」

「お客様？なんでしょうか」

「これ、いくらですか？」

「これは……少々お値段はキツイですよ？ええーっと。二千五百円になります」

「え……」

確かに、キツイ。

でも、普通のネックレスより、安いよね……。

「ください！」

「あ、はい」

レジでお金を払っていると、松平君がやってきた。
手には袋を抱えて。

「美和」

「はい？」

「これ……」

「……あ、ありがとう……」

顔を真っ赤にさせながら受け取る私と、少し頬を赤くしながら渡す

松平君。

他人からはどう見えるんだろう。

「わ、私も、これ……」

「え？別に、美和はよかったのに……」

「ううん！お返しっていうか、交換だし！」

「そうか？じゃ、開けてみていいか？」

「もちろんです！っていうか、私も開けますね」

何が入ってるんだろう……。

あ……。

これって……

袋の中からは、ハートの形のネックレスが。
これにも、宝石がはめられている。
やだ、これ、高そう……。

「これ、高くなかった？」

あ、ハモった？

同時に、私達が笑い合う。

まあ、お互い高い買い物をしたって事が。
きつと、値段は同じくらいでしょ。

でも……

松平君がくれたことで、なんだか、このネックレスの価値が高まるような気がするよ。

84 お説教は、辛いです…

「もぉーっ！」

「……………」

「二人とも！何で勝手に職場を飛び出すんですかー！二人とも売れっ子なんですからね！大事な戦力なんですから！美和ちゃんはお昼休憩だとしても、松平君はどういうことですか！」

「……………別に」

「別にじゃないですよー！！！！」

あはははは……………。

ただいま、説教中。

明美ちゃんが、私達が急にいなくなったのをすごく怒っている。まあ、仕方がないか。

「まあまあ、明美ちゃん。結局上手くいったし、もういいじゃん？」

むちゃくちゃ適当なことを言っているのが、いいんちょー。

いやね、こつちにとってはすごくありがたい言葉だけどさ、もう少し委員長らしさを……………

「いいんちょー。もう終わっていいか」

ま、松平君、なんてだいたんな……！

そりゃまあ、終わりたいけどさ、そんなこと言ったら……

「何ですってえー！松平君ってば、サボったくせに、何を偉そうにー！」

「……」

ほらね、こうなった。

こういうときは、おとなしく聞いていたほうがいいんだよね……。

にしても。

私と松平君は、さっき交換したジュエリーをそれぞれつけているんだけど。

なんか、恥ずかしい……っ

ペアとかじゃないけど、松平君を見て、私が選んだものがついていると、なんだかドキドキするのです。

「明美ちゃん、おさえておさえて。っていつか、もう最後の係りの子がきてるし、解散しよう?。」

「……」

「ええー……」

「あ、明美ちゃん、ごめんなさい……」

黙っている松平君のかわりに、私があやまっておく。
松平君、無口すぎるって！

「それじゃ、解散〜！」

いいんちよーの合図とともに、私は試着室へとダッシュ！
だって、こんな格好からいち早く普通の格好に戻りたい！
猫耳とか、ありえな〜い！

「み、美和っ！？待てよ！」

待てません！

これ以上、このままでいたら、明度服アレルギーにでもなりそうだし。

そりゃ、松平君は似合ってるからいいけどさ、私なんかはちょっと……。

「松平君、スイマセン！」

「ま、待てって！」

松平君がせっかく呼びとめてくれているけど、今はとまっている
余裕はナッシング！
試着室の扉が……！

「待て、よっ！」

「うわっ！」

ぼふっ。

松平君に腕をつかまれて、後ろヘダウン！
ぎゃあああ！

つて、痛くない????

あ、抱きかかえられてる。

よかった、セーフ……じゃなくて、早くどかないと！

「ま、松平君、どいてくだ……んっ！」

な、何っ!?

いきなり、松平君がキスしてくる。
つて、キスウウー!?

あ、あわわわ、どうすれば……?

「……待てつて言っただろうが」

赤い顔をした松平君が、唇をやつと離す。
う、うそ、マジ?

顔を松平君からそらしてしまう。

「あのさ……一緒に、学校、まわろうぜ」

「え……?」

ま、まさかのお誘い!?

や、やった、松平君と一緒にいられる!

「あ、いやなら別にいいけど……」

「べ、別に、いいです……」

目をそらしながら言っと、松平君の顔がぱつと輝く。
やだ、そんな顔見たら……

誤解してしまうじゃないか……。

く番外編く 真実の愛 咲

「あ、飯塚君！」

今日は、リズリサドルの激力ワな服でコーディネートしてあるから
さすがの飯塚君もきつと……

「やあ、花形さん」

……はあ……。

どうも、改めまして、花形美和の姉、花形咲です
今日は、飯塚君とのデートなんだけど……
まだ、「花形さん」、「飯塚君」って呼び合ってるの。
もう、いやになる……。

それに、一番気に入らないのが。

「今日は、美和ちゃんの学校に行くんだっけ？」

……これ。

なんで、美和は、「美和ちゃん」って呼ぶの？
そりゃ、妹に嫉妬はないけど、ちよつと、さ……。

まあ、飯塚君が美和をよく思っているのもわかる。

夏休み最終日にあつた、あの事件も、結局は美和に助けてもらったし……

「花形さん」

「え？なぁに、飯塚君」

夏休み最後のデート……気合いをいれて、オシヤレをしてきたかいもあつてか、飯塚君の頬が赤い。

やったね、冷静な彼を、ここまで追い込む事ができたなんて。ウレシイ

「あのさ……僕、本気で、愛してるから」

「……え???」

いきなりの告白に、私もとまどった。だって、いきなり真顔で言うなんて、ありえないでしょ。

「だから、いつか……結婚しよう」

「……」

すぐに返事が出せなかった。

今までなら、すぐに断ってポイ！だけど、彼は……

最初に恋した、あの人に似ているから。

初めは、あの人と似ているって理由で付き合った。

そしたら、なんだか、離れられなくなって。

ずっとずっと、一緒にいたいと思った。

でも……

いざとなると、決心が……

「ご、ごめんなさ……」

少し、時間をください。

そう言おうと思ったのに、彼は、勝手に勘違いをする。

そのくらい、彼も焦っていたのかな……。

「……きつと、いつも。いつも、そうだったんだろ」

いつもは敬語の彼が、急にタメ口になったから、驚いた。

彼の、本性が見れた気がして。

うれしかった。

「何が？」

「誰とでも気安く付き合って、気安くプロポーズされて、気軽にふる。それが、花形さんのパターンだろ！今だって、そうだろ。俺がプロポーズしたとたんに、別れるなんて」

「こ、誤解……」

「いいよ、君の望むとおりにしてやるよ！じゃあな！」

「えっ！……ちよっ……い、飯塚君？ねえ、いいづく……っ！！
！……はあ……」

付き合って、何ヶ月かたった。

でも、彼が怒るところなんて、初めて見る。

ずっと、見たかった、彼の本性。

でも、今は……見たくない……。

彼が、走り去っていった後、思い切り泣いた。
それしか、私にはできなかったから。

その時。

美和が、助けてくれた。

私に、勇気をくれた。

「飯塚君！」

勇気をもたらった私は、飯塚君の家を訪ねている。

はー……深呼吸……すってー、はいてー……。
よし！

「……なに？」

玄関からのそつと顔を出す飯塚君。

ぷっ……！

笑っちゃうよ……だって、顔がやつれてる……！

これって、帰った後に、泣いたって事でしょう？

「私、プロポーズを断ってなんかいない。もう少し、時間をちょうだいって、言おうとしたの。それに……」

「……それに？」

言おうかどうか、迷う。

だって、言う必要がないし。

でも、言わなきゃ気持ちは伝わらない。

「……私、飯塚君の事、本気で好きだから」

「……」

無反応？

おいおい、精一杯の告白なのに……。

でも……

顔が、赤い。

これって、私に答えていると、勘違いしてもいいのかな。

「それだけ。またね、飯塚君」

「……ああ。今度は、来週の、日曜日に、会おう」

え……。

よかった、ちゃんと気持ちは伝わったみたい。
また、二人で、付き合っていけるんだ。

「よろしくね」

「ああ……」

みたいな事が前にあった。

あれから、私は、飯塚君の「美和ちゃん」という言葉に敏感になっている。

はあ。

ごめんね、美和……。

〈番外編〉 真実の愛 咲（後書き）

スイマセン！

いきなりこんな番外編を書いちゃって、申し訳ない……（――）

ま、まあ、ともかく……！

咲お姉ちゃんの、番外編を書きます！

おそらく、今日明日で終了……だと思います！

たぶん。

あ、でも、番外編が結構続くような……。

番外編が嫌いな人は、見なくても全然オッケー！

っていうか、飯塚君の本名って、決めてないですよ？

あ、忘れてるだけかな……？

ともかく、私は全く覚えていません！

だから、適当に決めて……飯塚海^{いづかかい}って感じにしよっかなと。

もし、以前に本名決めて、これと違っていたら……（っていうか、

絶対違うと思う）スイマセン！！！！！！！！！！

b y , ゆながりか（^^） /

く番外編く 真実の愛 咲

「うつわあゝ、いっぱいお店が……ないな」

大げさに喜ぼうと思ったんだけど、はっきり言って、お店少ない！
って、そういえば今日は、クラスの発表だっけ？
明日はクラブだから、もっと多いんだろっな……。――。

「花形さん、早く行くよ」

「あ、うん！」

これ、彼氏彼女に見えてるのかな……。――。
不安になってくる。
だって、さん、君、だしね。

「美和ちゃんの教室、どこかな……」

「ええゝつと、どこだっけ？？？」

一年生、だよな。

えーつと、A組？B組？C組？？？

「確か……A？」

「……本当に、合ってるわけ？」

「うつ……！ひ、ひつどおい、疑うのお？」

「君がマトモじゃないことを言うのは事実だろ」

「はうつ……！な、なぜそれを……っ」

「君と付き合って長いからね」

「ま、参りました……っ」

ま、また負けちゃった……。

悔しい……！！！！

今度こそは、必ず勝つつ！

って、何考えてるんだ、私。

今日は、なんとしてでも、飯塚君のことを名前で呼んでやる！

ちなみに、飯塚君の本名は、いづつかかい飯塚海。

海君、海君、海君……

「か、かいっ……」

「失礼します」

ああ………！！

勇気を振り絞って、海まで言えたのに、飯塚君ってばー！
勝手に一人で入っていかないでよね！
プンプン、だ！

「いつ！？いらっしやいませー」

「……ガラガラだな」

「ちょっ、飯塚君、はっきり言いすぎ!」

「真実を言っただけですね」

「……そのカップル二人、ウザ!」

え?

ちょ、それ違う!

確かに飯塚君はウザい時もあるけど、私はウザくないのぉ!
そこんそこ、間違えないでよねっ!

「ところで、ここに、花形美和さんはいますか?」

「それ、隣のクラスだけど?」

「えっ!」

「……花形さん、どういうこと?」

「いや、その、これは……」

私が飯塚君に追い詰められている!

たまに飯塚君Sキャラになるんだよね…

怖っ!

「はぁー……。そのカップル、さっさと出て行って!イチャイチャしないで!」

イチャイチャ？

これが、イチャイチャ????

ええー、うそ！

「……店員が愛想を悪すぎる。だから客が入らないんだな」

「むつかー！何だよそれー！」

確かに。

飯塚君の言うことも一理ある。

ここ、喫茶店なのに、客が一人もない。

店内では、店員がぼーっとしている。

「客が来ないのは、隣の萌え喫茶が、はやってるから！特に、松平拓海と花形美和が人気で、客がみんなあっちに行くんだよっ」

「……」

「きゃあ、美和ってば、そんなに人気者？」

「ああ。確かにかわいいもんな……」

「あはっ！そう？そうでしょー???私もそう思うのよね」 だつてえ、私もあの子の魅力にはかなわないもの。美和の眠っている姿とか、かわいすぎてもう死んじゃう!!!昔は、私の言うとおりにドレスとか着てくれて、「おねえたん」とか言ったら、もおかわいいいー!!!萌ええええ!!!でも今は反抗期なのよね。でも、いいの！おねえたんは、寝ている美和ちゃんの写真を取るこ

とができれば、それで十分！それにー……」

「花形さん、行くよ」

「あ……！」

だめだめ、また勝手に妄想の世界に飛んじゃったよ。

その後、美和の教室に入って、美和の写真を取りまくったの
おねえたん、シ・ア・ワ・セ

「美和ちゃん、かわいすぎよねー。だいたいー、あの猫耳が似合い
すぎなのよ！それでいて鈍感っていうところも、また素敵……」

「……花形さん、またその話？」

あ。

飯塚君、この話に飽きてる？

私は飽きないんだけど、さすがに他の人は飽きるよね。

「ごめんね でも、私、美和ちゃんLove だから」

「それはわかってるっ！でも、美和ちゃん大好きって言われている
こっちの気分も考えろよ」

あれ？

何か怒ってる？

何で……？

美和ちゃんの話がおもしろくない？

ん、でも、いつもはニコニコしてるよね。
あ、私の話し方に問題があるとか？
うぐぐ、それは悲しい……。

「来いよっ」

「え???」

いきなり腕を引っ張られて、校舎を出る。
ちよっ、どこに行くの？

人が少ない道に連れてこられて、飯塚君と向き合う。
ど、どうなってるのぉ？

「ハッキリ言っけど。俺、美和ちゃんがうらやましい」

「????何で？」

「君にそんなに愛されてるから」

「っ!!!そ、それって、まさか……」

ヤキモチ????

「そ、それって、まさか、や、ヤキモチ？」

「……。そうだよ、俺は、ヤキモチをやいている」

一気に顔の温度が上がったような気が……。

そ、そんなにストレートに言われちゃ、平常心でなんていられないよ。

それに、なんだか、私も、はつきり言いたい。

「わ、私も、飯塚君に伝えたいことがあるの！」

「……。美和ちゃんの話を、これ以上俺の前でしないでくれ」

私の言葉を見殺して話しつつづける飯塚君。
ちよつと、聞いているのっ？

それに……

何よ、美和ちゃん、美和ちゃんって。

そんなに美和のことが気になるなら、美和と付き合いゃいいじゃない！

「！？ちよつ、花形さん？」

「え……？」

頬を伝う雫。

なに、これ……。

「な、なんで、泣いてるんだ？」

泣い、てる……？

美和じゃあるまいし。

私が、泣くなんて、そんな馬鹿な。

でも、目からあふれる水滴は、とどまるということを知らない。
どんどんどん、あふれ出してくる。

やだ、私、泣き虫じゃないのに。

いつだって、美和を守ってきたはず。

でも、今は……誰か、私を、守ってよ……。

「いつ、飯塚君が、悪いんだからっ！私のっ……うっ……。めっ、目の前で、美かつ、ずちゃん、なんて言う、から……」

そうだ！

目の前で、美和のことを名前と呼ばれたら、傷つくに決まってる。

私のこと、そんなに弱くないと思っていたとか？

そんなことない。

私だって、悲しいときは、泣いちゃうんだから。

「……それって、美和ちゃんに、嫉妬？」

嫉妬？

そんなわけがない。

姉が妹に嫉妬なんて、どこの少女マンガの世界？

「そつ、そつよ！」

えっ？

なぜか、思いもしない言葉が口から出てくる。
ちよつ、そんなこと、思ってたないし！

「わ、私、はつ。飯塚君、にい……名前です、呼ばっ……呼ばれ、て
っ、いる、美和に……嫉妬、してるのよ！」

あ、そうなんだ…。

言葉にすると、自然と楽になった気がした。

そつだ、私、嫉妬してたんだな。

嫌な女。

でも、これはこれで、私らしくていいかな。

男は、嫉妬したら喜ぶって言うし。

飯塚君は、喜ばないだろうけど……。

「……。咲さん……というか、咲……」

……っ؟؟??

聞き間違い？

今、小さな声で、飯塚君がつぶやいた言葉。
嘘？

それとも、冗談？

それとも……本気？

「俺、うれしい……」

「んっ！」

いきなり、唇を奪われる。

つて、ええええー！！！！

キスは、飯塚君と何回かしたから、驚かないけど、それって一方的に私の方からキスしてたし…。

飯塚君自らなんて、今までなかった…。

「咲、好きだ…。俺、咲にそんなに愛されてるなんて知らなくて…」

「べっ、別に！そこまで愛してなんかいないし……っ」

顔が真っ赤になっているだろうな。

愛してる…そうなのかな？

「ふうん…。じゃあ、プロポーズ、断る？」

え……っ。

目の前にいる飯塚君の目は真剣。

これ、本気なんだ……。

今まで、散々迷った。

だって、この年でプロポーズ受けちゃったら、就職とか、絶対無理だし。

でも、飯塚君のこと、愛してるし。

それで、私の出した決断は……

「今は、もっと、自由な人生を、楽しみたいの。だから、大学にも

いくし、できれば就職もしたい。でも……そつ、それまで、海が、待っていてくれるのなら……」

初めて、飯塚君のことを、海と呼んだ。
その響きは、初々しくて、なんだか、恥ずかしくなる。

「い、今、海つて……」

「うん。海が、私を、それまで待っていてくれるなら、プロポーズ……受けます」

意外にすんなりと言葉が出る。

だって、それは、本心からの想いだから。

いつか、必ず、海と結婚したいな。

本当に、そう思うよ。

「……いつまでも、待つよ。咲が、俺のところに来てくれるなら……」

ぎゅっと抱き寄せられて、胸がときどきする。

でも、海のドキドキって音が聞こえてきて、海も、私と同じなんだなって、思った。

「でも、浮気はダメですよ、咲」

いつの間にか、いつもの優しい海に戻っている。
怖い海も、嫌いじゃないんだけど……。

「浮気なんてしてないもん！」

「……本当ですかー？」

「当たり前だよー！本命、っていうか、好きなのは海だけだしー！
！！たまにナンパされることあるけど、全部断ってるし！」

「……」

あれ？

なぜか、一瞬沈黙が訪れる。
はてな？

どうして、黙っているの？

「咲」

「？なあに？」

「これからは、僕がそばにいるから。ナンパ野郎に、咲は渡さない」

……。

ぷぷっ、またヤキモチやいてるよ、この人は。
でも、その気持ちがうれしかったりして。

「うん、よろしくね」

これからも、ずっとずっと、一緒だよ

く番外編く 私の心、君に届け 楓

私の心、あなたに届けば、いいのにな。
でも、それは。

叶ってはいけない願い。

どうか、神様。

私の心が、あの人に、届かないでください。

「美つ和ちゃん」

駆け寄ってくる遠藤君。

それは、私ではなく、美和に寄ってきているのだ。
どうして、あの人は。

私の親友の事を、好きになっているんだろうか。

っていうか、それ以前に。

私が、あの人を好きになってしまった…それがおかしいのか。

私……浜平楓は、今、恋しちゃってます。

その相手は、誰かって？

それは、ヒ・ミ・ツ

今日は、文化祭。

遠藤君が、私のメイド姿見てくれたら、うれしいかも、なんちゃって。

「ねえ、みか……」

小声で美和に話しかけようとした時、美和の視線がある一点にそそがれているのがわかる。

はあ……。

どうして、この子とあの人が、両思いじゃないんだろう。

両思いなら、あきらめがつくのにな。

あの人の、一方的な片思いだなんて、一番最悪のパターン。

あきらめることも、アピールすることもできない。

ねえ、美和。

どうしてあなたは、松平君の事を、好きになってしまったの？

前方からやってくるのは、王子様グループ。

最初の頃は、キャーキャー言ってたけど、もう慣れちゃった。

王子様達の後ろから、テーマソングの、「舞い降りた王子 作詞作曲・友原鈴香」が聞こえてくる。

もちろん、その曲を流しているのは、ファンクラブ一同。

あ、そういえば、集まりがあったっけ？

忘れてた……。

「あけ、みちゃん???」

さっきまで松平君にそそがれていた美和の視線が、どこか他のところに向かっている。

それは、さっきまで美和のスクープを言うとって張り切っていた明美ちゃんを見ていて。

その明美ちゃんは、なぜか遠藤君を鋭く睨んでいる。

その瞬間、嫌な予感が頭をよぎった。

遠藤君……。

その後、明美ちゃんは、怪しげな言葉を口に出していた。

敵？

復讐ってこと????

「さ、いきましょー?おはよーございまーす!新聞部の、明美でえゝす 今日のはあ、遠藤君っていう、素敵な方とご一緒できるなんてえ、もお、運がよすぎですよねゝ」

さっきまでのオーラはどこへやら、明美ちゃんは、完全に恋する乙女モードだ。

でも、やはり。

さっきの黒いオーラは、どこか明美ちゃんにつきまとっている。

そして……。

さっきから感じる、このモヤモヤは。

明美ちゃんが、遠藤君に一步近づいたたびに、心の中の黒いうずが、どんどん大きくなっていく。

嫌だな……。

「あれは、遠藤君がヤバイわね……」

「えっ？」

ふいに、もれた言葉。

ヤバ、つい口に出ちゃったし。

美和に怪しまれてるよ……。

こうなったら、言っちゃえ！

「美和も、さっきのセリフ聞いたでしょう？明美ちゃん、遠藤君に……復讐、するつもりだと思う」

美和の顔が、一気に驚いた表情に変わる。
全く、わかりやすいな。

遠藤君が、美和の事を好きなのもわかる。

こんなに可愛い子、他にいないしね。

だから、美和を恨めない。

私なんかが、勝てっこない。

まあ、もとから勝負するつもりなんてないけど。

「ふ、復讐って？」

美和の顔に、はてなマークがついている。

わかりやすすぎ！

「さあ？でも、何か遠藤君を恨んでいるのは確かだね。あんなにぶりっこで、いかにも恋してます みたいな顔してるけど、あれは演技だよ。心の中で何を思っているかわからない」

ボソリと、優しいんだねとつぶやきう美和。

「なっ！……た、ただ、気になっただけ、だし……っ」

私の心を読まれたようで、かなり焦った。

だって、この恋心は、誰にも気づかれてはならないから。もちろん、遠藤君にも。

この気持ちが届いたら、私はもっと、苦しむから。

その後、遠藤君の事を美和に任せて、さっさと戻った。

試合があるっていうのを理由にしたけど、よく考えると、今日はクラス発表だし。

試合なんて、なかったんだ。

そのくらい、私が焦っていたってこと。

く番外編く 私の心、君に届け 楓（後書き）

ああ〜！

楓、よすぎる！！！

隠された恋心って、なんだかいいですね〜。

翔君、憎い男ですね〜。

つと、今更ですが、楓の番外編です

まあ、最初の方は、本編でご覧のとおりですが、二人でお店をまわった事、書かれてないですね？

書いちゃいますよ〜。

まあ、この恋が実るかどうかは、のちほどのお楽しみッス！

んじゃま、さようなら〜

b y , ゆながりか

〈番外編〉 私の心、君に届け 楓

「若、ソイツを、殺して!」

……。
ど、どうしよう……。

今、状況がヤバイ。

部活動の先輩達に「学リンピック!」を手伝わされていたの。

学リンピックっていうのは、学校での、オリンピックって感じ。

短距離走、高飛び、ハードル走などなど、種目は様々。

出場するかどうかは、自由。

この企画は、生徒会が作ったんだよね。

って、話がズレた!

つまり、先輩に言われて、石灰を取りに来たの。

ほら、線をひくときに使うから。

それで、石灰倉庫に来たら……

「こ、ころすっ!?」

石灰倉庫の中では、壮絶な戦いが繰り広げられている、らしい。
いや、声だけだとわかんないし……。

そして、狙っているのが明美ちゃん、狙われているのが遠藤君だと

わかった。

もう、美和つては何をしてるのよっ！

「お嬢様……っ」

「何をしているの、若っ！早く、いきなさい！」

「……はっ」

つていうか、明美ちゃんつて、お嬢様だったの！？

つて、ええええー！！！！

こ、殺すつて、本気？

なにここ、本気で戦場なわけー！？

とにかく、確かめないと……

中の様子を見た私の目に飛び込んできた映像……それは、黒装束の男が、遠藤君に走り寄っているところ。

これって、ヤバイ状況？

あ……。

黒装束の男が、手にしたのは、ポケットナイフ。
それを、遠藤君に向けて、立ち向かう……。

「え、えんど……」

「うぎゃあああー！！！」

私が声をかける前に、遠藤君の叫び声が響き渡る。

や、ヤバイよ、これって……。

本当に、殺されちゃう！？

「わ、わかつ」

えっ？

さっきまで、復讐モードだった明美ちゃんが、いつの間にか、黒装束の男に叫んでいる。

な、何それ、どういうこと？

でも、黒装束の男の勢いは止まらない。

や、やだ……

やだやだやだやだやだやだやだやだ……

やだああああああー！！！！

私が飛び出したのと、他の人達が叫んだのはほぼ同時だった。自分で、何をしているのかよくわからない。でも、とにかく、遠藤君を助けたかった。

「翔！」

「翔君！」

「あつつ」

「遠藤君っ！！！！」

ふん、これでも、部活で毎日鍛えてるんだい！
素早さでは、負ける事を知らない楓様のお通りです！

黒装束の男の前を通り過ぎた時、刃物が肩をかすめるのがわかる。
い、痛……っ！

それでも、私は遠藤君に一直線。
お願い、どうか、間に合って！

「楓ちゃん？」

……？

気がつけば、遠藤君を突き飛ばしている状況。
つてことは……助かった？

「だ、大丈夫？ 遠藤君」

「あ、ああ……」

よ、よかったあ……。

ケガなんて、してないよね。

ああ、ホッとするな……。

「え、遠藤君つつっ！……！」

ここからは、一部省略。

とにかく、明美ちゃん、遠藤君に恋してたみたい。

ら、ライバル出現！？

そして、明美ちゃんは、遠藤君の好きな人が美和だって事も知って
いるみたい。

それでも、最後に私に向かって笑ったのはなぜ？

「え、遠藤君っ！」

「え？楓ちゃん……」

勇気を出すのよ、楓。

じゃないと、何も変わらないんだから。

「い、一緒に、お店、まわりませんか？」

やった、言えた！

たぶん、嫌だとか言われるかもしれない。
でも、それはそれで。

「あ、うん。いいよ、別に」

っ！？

う、うそ……！

それって、まだ、私にも望みがあるってこと？

って、違う違う。

遠藤君は、チャラ男なんだから。

こう言うのが当たり前なのよ。

「本当ですか！？じゃ、いきましよう！」

うふふふ、嬉しいな。

やっぱり、好きな人とのデートって、嬉しい。
というか、デートって言えないけど。

形だけのデートでも、やっぱり、この時間を大切にしたいな。

とにかく、私は、石灰の事を忘れていた。

これだけは、确实である。

「あれ？」

「どうしたんですか、遠藤君」

「……肩、ケガしてる……」

「あ……！さ、さっき、ポケットナイフが、かすったような……」

そう言えば、ケガしたんだっけ？

服の上からでもわかるくらいに、血がしみ出ている。
あっちゃあ、どうしよう……。

「そんなっ！じゃあ、保健室にいかなきゃ！」

「えっ、でも……」

せっかくのデートが、終わっちゃっ！

やだよ、私。

もっともっと、遠藤君との時間を、大切にしたい。

「でもないよ。楓ちゃんの事を思っ言っているんだ」

遠藤君の真剣な瞳に、不覚にもときめいてしまった。

カッコイイ……。

きゅん……。

く番外編く 私の心、君に届け 楓

「失礼しますっ」

「……遠藤君！…もう、いいのに…」

「よくないから」

遠藤君に連れられてやってきたのは、保健室。

やだよだ、デート中止なんて。

保健の先生に私を任せて、遠藤君は他の子と遊びにいくんだ。
この幸せな時間、長くは続かないとは思っていたけど……

「で、でもっ！」

「先生いないのかな…」

よ、よかった……。

これで、もう少し遠藤君と一緒にいられる。

ほっとした瞬間、肩の痛みが急に気になる。

やだよだ、私ってば。

遠藤君にめいわくをかけるだけでしょうが。

「ん……。そんじゃ、俺、保健の先生呼んでくるよ」

え……っ？

遠藤君が、扉に手をかける。

やだ……行かないで……っ！

ぎゅっ。

「え……？」

「……い、行かないで……」

とつさに、遠藤君の片手をにぎる。

こんなベタな方法、美和くらい純情な乙女しか使わないと思っ
たのに。

これじゃ、私も美和くらい純情ってことじゃん。

「……」

「だ、ダメ、かな……」

上目遣いでチラッと見てみる。

そしたら、遠藤君の顔はりんごみたいに真っ赤っか。
あらら、どうしたんだろう。

「だ、ダメじゃないってか……い、いいよ、俺、行かないから」

え……。

そう言っと、私の手を振り払って、ベッドに座る。

神様、ありがとう。

もうっ少しだけ、一緒にいたい。

そんなワガママを言ってもいいですか？

「でも、遠藤君、優しいね」

「何で？」

「私みたいな、遠藤君が何とも思っていない女の子にも優しくしてくれるなんて」

「お、おい……」

言い出したら、止まらなかった。

言葉にすればするほど、自分の心が壊れているばかりで。
自滅寸前。

「美和っていう女の子がいるにも関わらず、私なんかと一緒にいるなんて、つまらないよね。いいよ、もう。美和のところに行つてきなよ。わ、私に、優しくしてくれなくていいから」

「おい、楓ちゃん？」

「そ、そうか、チャラ男はどんな女の子にも優しいんだよね。だから、遠藤君、私なんかに優しくしてくれるんだ。ほ、ほら、私、美和みたいに素直じゃないし、馬鹿だし、かわいげないし……」

「楓。やめろよ、そういうの」

……！！！！

かえで？？？

今、そう言ったよね……。

それより、遠藤君の真剣な顔に驚きを隠せない。
今まで、目にうるうるかとまっていた涙が、ポロリとこぼれ落ちる
……。
その瞬間、遠藤君の顔が近づいてきて……

「っ！ー！！」

「ん」。苦い、かな」

ほ、ほっぺに、キス……。
ペロリと涙をなめられて、呆然と立ちすくむ私。
他の男なら、キスを何度しても平気だったのに。
どうして、この人の前だとダメになっちゃってしまうんだろうか。

「ど、どうして……」

「ん」？
「」

「どうして、こんな事するのっ！ー！！」

どうして？

私には、あなたの行動が読めない。
これ以上、私を期待させないで……。
あなたを失った時に、絶望にひたりたくないの。
だから、余計な事を、しないで……。っ

「どうしてって……」

「遠藤君が好きなのは美和で、だから、遠藤君は美和にしか優しく

しないはずでしょ！どうして、私に優しくするの！チャラチャラするのもいい加減にして！」

ああ、自滅……。

ついに、ボロボロと涙があふれ出してくる。

そうだよ、遠藤君は、私の事なんて、何も思っていない。だから、こんなに優しくしてくれるんだ。私の気持ちも知らずに。

「遠藤君の、馬鹿っ！」

これ以上、涙でグシャグシャになった顔を見せていられなくなる。いっそ、崩壊してしまえばいい。

はつきりと失恋した方が、いいに決まってるんだから。

「待てよっ」

！？

ぐいっと腕を引っ張られて、私はいつの間にか、遠藤君のバリケードの中。

もう、逃げられない……。

どうして、そこまで、追いつめるの？
どうして？

ねえ、どうして……？

く番外編く 私の心、君に届け 楓

「待てよっ」

!!!!

もう、嫌だよ……。

胸が、苦しい…。

美和にだけ、優しくすればいいじゃない。

私のこと、何とも思っていないんでしょう？

なら、もう、ほっといてよ！

「な、何なのよっ！」

「俺から、逃げないでくれ……」

え……？

改めて遠藤君を試してみる。

遠藤君の顔は、不安げで、泣きそうだった。

「……………」

「お、俺が、最低な事、自分でもわかってるから」

「……………」

私は、何も言えない。

だって、遠藤君が最低じゃないとは言えないから。

「美和ちゃんのこと好きって言うておいて、楓に優しくするなんてめいわくだって知ってる。でも、俺、自分の気持ちはまだわかんないんだ！美和ちゃんのこと好き。でも、楓がものすごく気になる……」

「……」

今までは、意地を張って黙っていたけど、今度の沈黙はそうじゃない。

啞然としています。

わ、私のこと、ものすごく気になるですって！？

それって、少しは、好意を持ってもらってるんだよね？

あ、でも、美和のこと好きってはっきり言われるのは、やっぱり悲しいかも……。

「こんな俺、楓に失礼だと思っけど……でも、やっぱり、俺、楓のこと……」

「や、やめてっ！」

あれ？

気がついたら、口が勝手に動いていて、遠藤君の言葉を阻止していた。

それはなぜかって？

それは……

「……やっぱり、俺じゃ、だめ？」

「……。わ、私、意地っ張りなの……！」

そうなんです。

私は、どがつくほどの意地っ張り。

っていうか、負けず嫌い。

本当は、美和にも負けたくなかった。

でも、あきらめてしまっていた。

そして今。

美和のことも好き、でも、私のことも気になる。

そう言ってくれた遠藤君に対抗心を燃やしている私。

馬鹿だね。

「いじっぱり……？」

「そう！遠藤君に、負けたくないからっ！」

「な、何を……？」

な、何って……

ほら、今のパターンだと、告白のパターンでしょ？

さっきも言ったとおり、負けず嫌いの私は……

「わ、私からさきに、告白したかったの……！」

言ってから、顔が真っ赤になるのがわかる。

何これ、遠藤君の事好きって言っているようなもんじゃないか。

でも、後悔はしていない。
だって……

遠藤君に勝ったああー！！！！

「……そんなこと？」

「うん」

言い切った！
よくやった、私。

「……」

「遠藤君？」

「……俺も、負けず嫌いなんだよ……」

えっ！？

この状態、なんだかヤバくないか？

目の前には、怪しい顔をして近づいてくる遠藤君。

後ろには、狭い保健室の壁。

完全に、追い込まれてるな。

気がつけば、自然に足がジリジリと後ろに下がっている。
な、何してるのよ、逃げなくてもいいじゃない！

「なあ〜んで、楓は下がってるのかな〜？」

「っな！！べ、別に……」

「俺、負けず嫌いだから……」

あ……。

背中に痛みが走る。

どうやら、壁にぶつかったらしい。

「告白、負けたから、キスは負けたくないんだよね……」

そう言つて近づいてくる遠藤君の顔。

わ、わわわわつつつ！！！！

な、何するのー！？

怖くて、ギョツと目をつぶる。

そのとき……

「あら？あなた達、何やってるのかしら？」

「せ、先生……？」

「あれ？先生、早いつすねー……」

素早く私から離れて行く遠藤君。

はあ、怖かった……。

でも、期待してたりして……。

これは、私だけの、ヒミツ。

「あらー！！！！どうしたのお、その肩！」

あ……。

すっかり忘れてた、ケガしてるんだっとな。

「えっと、ちよつといろいろあつて……」

「そうなんだよなー。先生、よろしくー」

先生が入ってきた裏口のところで立って話していた遠藤君が、私の立っている扉に近づいてくる。

どうせなら、裏口から出ればいいのに……。

「……校舎の裏の、桜の木の下で。さっきの、続き、やろっか」

「!?!?!」

私にだけ聞こえるような、小さな声でつぶやく悪魔。
一瞬で、私を赤く染め上げる。

「じゃーな」

そう言って笑う、遠藤君の目が光っていたこと、一生忘れられない。

「ほら、浜平さん、手当するわよ」

「……」

浜平楓、十三歳。

私の気持ち、あなたに、届いたのかな。

85 恋人ラリー……マジ？

「それで、松平君……」

「ん？」

「……何で、めがねをとるんですか？」

「……まあ……イジワル？」

「ひどいですー！」

全く……。

松平君は、意外に子供っぽかったりする。
でも、そういうところが、かわいかったり……。

「ははは……。って、何だありゃ」

今は、松平君とお店をまわってるんだよねー。

あー、幸せかも……。

って、なにに？

松平君の視線をたどっていくと、「恋人ラリー」というのが。
何、それ……。

「そういえば、ダイさんとこ、そんなのやるって言ってたっけ……」

「ダイさんの組が？へえー、そうなんですかー…」

そこに次々と入っていく人達。
すごい人気だなあ……。

つて、あれ？

まさか、あれつて、お姉ちゃん？

お姉ちゃんと飯塚君が、仲良く腕を組んで入っていく。
ま、マジすか……。

ああああー！！！！

あ、あれつて……楓？

そんなわけない！

だって楓は今、接客中のはず！

だいたい、楓と一緒に歩いていくのが遠藤君！？

ありえないっしょ！

「あ、あれつて、翔と浜平？」

「……う、うん、そうなのかな……」

あー、もうっ！

楓つてば、何してるのよー！

サボつて、また明美ちゃんが怒るつてば！

「……入るか」

「うん……つて、ええっ！？は、入るつて、何に！？」

ま、まさか、ね……。

だって、恋人じゃないし……。

「何って……恋人ラリー？」

……何で???

「それで、松平君……」

ははは。

今、幸せだ。

俺、絶好調かも。

「ん？」

「……何で、めがねをとるんですか？」

ああ、これな。

美和のめがねは今、俺の手元にスッポリ収まっている。

「……まあ……イジワル？」

ニヤツと笑ってみる。

そうすると、プクーっと美和の頬がふくらむ。
にやはは、カワイー！

「ひどいですー！」

本音：き、キスしたい、抱きしめたい！！！！

あー、かわいすぎるって、マジ。

理性が崩れるから、マジ。

ぐははああー！（俺、壊れた？）

「ははは……。って、何だありゃ」

俺の目に飛び込んできたのは、「恋人ラリー」という看板。
そして、その横に書いてある文字。

「バカカップルのみなさん（笑）！今年も開催、カップルラリー！
みなさんの愛を、深めちゃいましょう！そして、まだ両思いなんて
無理！な、むなしい方々！この恋人ラリーに誘ってみてはいかがで

しょうか？愛がはぐくまれること間違いなし！……」

……。

そーいや、ダイさんが……？

「そういえば、ダイさんとこ、そんなのやるって言ってたっけ……」

口からこぼれ落ちる言葉。

誘いたい……。

つてか、このまま片思いは辛すぎるだろ。

「ダイさんの組が？へえー、そうなんですかー……」

そうなんだよ。

つて……

あれって、翔！？

翔と、浜平が仲良く手をつないで中に入っていく。

あ、アイツら、いつの間に！？

つていうか、そんな仲だったのかよ！

その二人の様子を見て、俺の闘志に火がついた。

ぜってえ美和を誘って、カップルになってやる！……！

86 マジ。恋人ラリー

「ハア〜イ みなさん、恋人ラリーによおこそ〜！」

……。

沈黙、ですね。

今、恋人ラリーの参加希望者として中に入ったところ。
にしても……

マジっすか？

今でも信じられない。

だって、恋人じゃないし……。

っていうか、松平君の好きな人って、明美ちゃんでしょう？

「…………。とにかくう、いらっしやいませえ！本日ご来店の皆様の中で、正式なカップルの方はこちらへ〜」

会場の中にいた半分以上の人が、その店員さんの指示した方向へ。
残っているのは、五グループだけ。

「さて、恋人じゃないけど、あの人を誘ってきました！そんなみなさんには……ちょっとしたイジワルをしちゃいますう〜」

はつきり言っちゃうと、気持ち悪い。

目の前にいるお姉さんは、警官の格好をしているんだけど……

何て言うか……ピンクすぎ。

「イジワル〜!？」

「そおなんです!!!」

やっとお姉さんの言葉に反応した私達。

それを見たお姉さんもピョンっと反応している。

「ジャジャーン!!!」

おおっと、のりにのったお姉さんが、手錠を取り出したぞー!

って……

て、手錠?

「そのとおり!これは愛のラブラブ手錠でえ〜す!この恋人ラリー
では、この手錠をつけて行動してもらいま〜す」

え……。

マジ?

横の松平君も、目を見開いてる(でも、なんだか嬉しそう?)。

手錠って、つまり、手と手をつなぐ(?)あれでしょ?

あれを、誰とするの?

お姉さん?

「ププッ!何言ってるの、その鈍感少女!もちろん、その横の彼
……って、ま、松平拓海っ!?!その鈍感少女、なかなかやるわね
〜って、アンタは、花形美和!?!」

いつの間にかため口のお姉さん。

っていうか、松平君が有名なのはわかるけど、何で私まで？

「……さつさと、進めろ」

「はあーい！じゃ、まずその松平拓海と花形美和からね」

ふ、フルネーム！？

めがねを外しているのに、お姉さんが近づいてくる気配を感じます。こ、怖いです……！！！！

「……っと。はい、できましたあー！これであなた達も、ラブラブウな愛を、ゲットしてくださいね」

ここで、おそらくウインク。

めがねがないと、わかりにくい……。

「行くぞ、美和」

「あ、うん……」

このラリーのルールは簡単。

五つのポイントのお題に従うだけ。

でも、そのお題っていうのが……

かなり、キツイらしい。

カードがそのポイントの場所においてあって、そこから一枚ひく。そのカードに書いてあるのが……お題。

例題として出されているのがヤバイから、かなり……。

たとえば、「抱き合いながらキスをする」とか、「三十秒間、みんなの前でキスをする」などなど。

はぁー……これ以上悪いのが思いつかないけど、きつと、これ以上悪いのがあるんだろうな…。

はぁー……………。

86 マジ。恋人ラリー（後書き）

予定変更！

一日目、長くなります！

甘いかどうかはわかりませんが……。――

っていうか、自分にそんなのが書けるわけないじゃん！？

あー、今頃気づいた私って、馬鹿？？？

とにかく、がんばって甘くします。

予定的には、甘くなる、はず？？？

はずですから、期待しないで！

お願いですからっ。

87 苦い味。

「あ、あのっ！」

「何だ？」

「わ、私、めがねないから、よく見えないんですけど……」

だ、だから、めがねを返して！
そう言おうとしたつもり。

「……手錠だし、大丈夫だろ」

エエーン、そうなんです…。

手錠なんていう変なものをつけているから、めがねを返してくれないー！

ひどいよー……。

「あ……。第一ポイントだ」

えっ……！

あ、本当だ……。

みんな並んでるし。

すごい人気かも……。

「じゃ、並ぶか」

「う、うん……」

ああー、どうか神様！

お願いだから、変なお題が出ませんように。

できれば、ラッキーカードてきなものがあたりますように。

「はあーい、お次のカップルどうぞー」

……！

私達、だよね……。

前にいるお兄さん（？）がにこつと手招きする。

……神様、お願い……！！

「……」

「……松平君？」

カードをひいた松平君。

でも、何も言わない。

どうしたの？

「……おおっと、これは、ラッキーカードだ！」

……！！

ワァーイ、やったー……！！

これで、このポイントはパスできるんだ！

やったね、ラッキー！

「よかったですねえ、お客さん！このカードをひくと、一日デート券がついてくるんですよ！あ、でもこれ、明日用ですね」

???

一日、デート券？

何、それ……。

「一日デート券っていうのは、一日ずっと、どの場所で何をやって
も、タダなんだよ。ただし、そこのお客さんと一緒の場合だけ。だ
から、明日はその二人でなら、何をやってもタダ……！」

ただ！

タダって、無料？

ってことは、お金がガッパガッパ？

きゃあああー！！！！

最高ですね、天国じゃないですかー！

「そ、それください！」

「そのカードが、一日デート券ですよ。それじゃ、第二ポイントへ、
いつてらっしゃあーい」

やったね

あ、でも……。

一つ、問題がある。

松平君、私と一緒に、嫌かな……。

「松平君、ごめん」

「？何がだ？」

「……この、券」

「はっ？」

松平君は、私なんかと一緒には嫌だよね…。

今日も、いやいや付き合ってくれているんでしょう？
はあー……。

「ほ、本当は、明美ちゃんと、行きたいんでしょう？い、いいよ、私は。明美ちゃんと松平君に、この券あげるから。二人で、行つてきなよ」

「……美和」

「べ、別に、気にしないで。私は、ただ、松平君と今一緒にいるだけで、楽しいし……」

よくもこう、ペラペラと嘘がつけるものだな。

自分でもそう思う。

だって、本当は。

すごく、悲しい……。

胸が、締め付けられるの。

これも、恋なの？

「……美和」

「も、もう、十分だよ…。明美ちゃんのところに行つてきなよ。ほ

ら、この券もって」

「美和っ！」

「……！」

つつー！！

キスをされた。

思いつきり。

甘くもなんともない、苦くて、しょっぱい。

どうして、こんなことをするの？

だって、松平君は、明美ちゃんのこと……

「ついて来い」

「えっ？」

唇を放されて、手を握られる。

……もう、あきらめきれない……。

88 突然のlove

て、手が痛いよ……。

がっしり手を握られているので、さっきから痛くてしょうがない。

「ま、松平君？」

どこにしているの？

松平君は、ラリーのコースからどんどんはずれて、藪の中に入っていく。

松平君の表情は、どこか怒っているようで、あまり声をかけられない。

「あ、あのっ！」

「……」

「……松平君、私……」

「……」

これ以上、めいわくをかけたくない。

もう、離してほしい。

でも、離れたくない。

恋って、複雑。

ずっとずっと一緒にいたいのに、彼は、私ではない子と一緒にいた

いなんて。
残酷すぎるよね。

「松平君っ！」

「……着いた」

「だか……ら？ここって……」

「ここ、どこ???」

目の前に、広い原っぱが。

ってか、何ここ？

こここの学校？本当に？

いや、確かにこの学校は広いし、設備もむちゃくちゃいいんだけど

……

こんな原っぱがあるなんて、聞いてないし……!!

「……ここ、学校じゃないから」

えっ!?

何で今考えている事がわかったの!?

何で????

「わかりやすすぎ」

「……」

「で、美和」

「っ!?!?!」

松平君から目をそらしていた。
でも、一度振り向いてからは、もう、目が離せない。
やだな、やだな……。
もっと、好きになりそう。
松平君、ズルイよ……。

「……はつきり言うと、おまえにさっきムカついた」

！！！！

……。

私って、馬鹿だ……。

自分から拒絶しておいて、松平君にはつきり言われると、こんなに
も傷つくなんて。

もう、あきらめられないんだ。
松平君からは、逃げられない。

「俺が、薮原と行きたい？ 冗談じゃねえよ。アイツは、翔一筋だ。
つてか、おまえは何で俺を拒絶したんだよ」

え……。

なん、で？

そんなの、知らない。

悲しくて、つらくて、胸が、締め付けられて。

ただ、それだけ。

「私……どうして、あんなことを言ったのか、わからない」

「……」

「明美ちゃんと話している松平君を見たら、すっごいムカムカして……。だから、その……」

「それって、美和は……」

美和は？

その後の言葉は、何なの？

「美和は、まさか俺のこと、好きだったりしてな」

あっ……！

な、何で、わかったの……？

驚きを隠せない私に、松平君も目を見開いている。

「要するに……藪原に、嫉妬したのか？」

……。

そう、なの？

私が、嫉妬……。

「……」

「それって、やっぱり、俺のこと……」

「そ、そうですよ！私は、松平君のこと、好きですっ……！」

あ……。

後悔した時には、もう遅い。

すでに、私は。

松平君に、告ってしまったのだから。

89 告白の次は何が????

「そ、そうですよ！私は、松平君のこと、好きですっ……！」

言ってしまった私。

その言葉に、驚いている松平君。

ああー、私の馬鹿ああー……！！

数秒前の私を恨みますー！

こんな事になるなら、恋人ラリーなんかに参加しなければよかったのに……。――

「美和？」

「う、ごめんなさい、今は、うそ……」

でも。

ここで、このまま、ごまかしてもいいの？

このままだと、何も変わらない。

今までの私と、今までの松平君だけでしょう？

そんなの……嫌だ。

今までの私から、もっと強い自分になりたい。

もう、自分にウソはつけない。

「う、ウソ、だよな……」

「ウソじゃない」

「はっ!？」

「う、ウソじゃないから!私、本気で松平君のこと、好きだから!」

よし、逃げる!!!

つて、うぎゃっ!!!

な、なな、なんで???

なんで私倒れてるの???

だつて、私はただ、逃げようとして……。

あ、そうか、転んだんだ!

つて、んなわけないし……。

あ……。

そういえば……手錠……。

「きゃっ」

「……つと……。つたく、美和は危なっかしいな」

え……。

地面スレスレのところで、何とか抱きかかえられる。

ふう、よか……つて、はい!?

か、顔が、近い、近い……ッ!!!

近すぎるし、つてか、きき、キスされそうなんですけど!?

「美和……」

あ、あわわわわ……。

松平君の顔がどんどん近づいてくる。

ヤダヤダヤダアー……！！

だ、だだ、だって、松平君は……

「ちょ、ちよつと待って……！！」

「……なんだよ。本気じゃなかったの？」

意地悪そうな目つきで聞いてくる松平君。

うつ……。

そ、そりゃ、本気っちゃ本気だけど、でもやっぱ違う、みたいな……。

「だ、だって……」

「だって？」

「……。わ、私、松平君のことあきらめようとしてたのに、き、キスなんてされたら、もう……」

そうだよ。

もうすでに、限界を超えた私の気持ち。

これ以上大きくなる事はないと思ったけど、やっぱり、気持ちにはふくらんでいくばかり。

「……何で、あきらめるんだ？」

「だ、だって、松平君の好きな人は……」

「好きな人は？」

……。

わかんない、かな。

今までの様子だと、明美ちゃん、じゃないよね。

それなら、鈴ちゃん？

舞ちゃん……の告白は断ってたし。

それなら、会長さん？

「……友原兄弟？」

「違う」

「……ファンクラブの子達？」

「違う」

「……あ、わかった！実は松平君も同性愛……」

「なわけねえだろ！！！」

あ、あはははは……。

わかんないなあ。

うーん……。

「俺の好きな人は、美和だよ」

????

今は、何？
はは、冗談？

「もう一度言う。俺の好きな人は、美和。おまえなんだ」

……。

90 両思いっ!?

「もう一度言う。俺の好きな人は、美和。おまえなんだ」

え、ええええー!?

私の名前は、花形美和。

もしかして、美和っていう名前の子が、この学校にもう一人……いるわけないか。

この名前、珍しいもんね。

じゃ、じゃあ、まさか、私!?

マジ???

「わ、わわ、私???」

「そうだ。おまえ」

ビシッと指をさされてとまどってしまっ
さ、さつきから混乱の嵐だよ……。

「俺は、おまえのことが好きなんだ」

「……で、でもっ!」

「でもじゃねえだろ」

……。
で、でも……

「俺は、美和のことが好き。美和は、俺のことを……」

「……好き」

そうだよ。

私は、あなたに恋をしてしまった。
それは、仕方ないこと。

「……。あああー！！！」

???

いきなり松平君が叫び始める。
はい？

なになに、ぶっ壊れたの？

「マジかわいー！ってか、美和かわいすぎだろ！」

うきゃっ！

むぎゅっ……。

完全に、抱きしめられてる？
か、体と体が、密着してるとか、ありえないし。
もお、体中が熱いよ……。

「ま、松平君の方が……」

「ん？」

「松平君も、すごくカッコイイ、です……」

キャアー、言っちゃった…。

は、恥ずかしいんですけど!?

はつきり言えば言うほど、体中が熱に溶かされていくみたい。
か、完全に溶けちゃうって。

「……………」

「松平君?」

あ、もしかして、松平君は「カッコイー」とか言われるのが嫌いな
の?

だから、ファンクラブの子達も苦手だとか。

まさか、それなら、私を好きになった理由って、キャーキャー騒が
ないから?

それなら、私、嫌われちゃったのかな…………。

「……………」

「松平君……………」

「か……………」

か?

何それ、かつて?

虫の蚊?

「カワイイイイー!!!!」

…………。

かなりきつく抱きしめられている。

こ、これだと、嫌われたわけじゃなさそうかも。

それはいいとして、キャラ、かなり壊れているような……。
松平君って、クールキャラじゃなかったっけ？

「美和」

「はい？」

「明日、この券使って、デートしような」

「……はい！」

なんだか、とつても。
ものすつごく、幸せな気分です……。

「とーこーろーでー」

「へ？」

は、はえ？

か、顔が近いんですけどおー！！！！
近っ、近っ、近っっっ！！！！

「キス、していい？」

ほへ？？？

後わずか数？で、唇が触れあおうとするそのとき、松平君は顔を近づけるのをやめた。

その行動に、こっちも拍子抜けるって。

それより……

ま、松平君の息が、顔にかかっているよー！！！！
や、やだ、顔がほてってる！

「だめ、か？」

うっ！！！！

そんな顔で聞かれたら、だめとは言えないじゃんかよー。
卑怯者！っていうか、意外にSだったりするの？

「……だめ、じゃない」

顔を松平君から背けて言う。

だって、真っ正面からなんて無理だもんね。

「ん！じゃあ……」

ちゅっ。

うぐぐ、この音が気になるんですけど。

でも……

両思いになってからのキスは、とっても甘かった。
ああ、Happy！！！！だよね。

90 尚思いつ！？（後書き）

ううーん、ハッピーエンド！

といっても、まだ終わりじゃないけど。

一応まだ、明日のクラブ発表が残ってるし。

そうそう、「王子様を求めて。」は、とりあえずは、クラブ発表の段階で終了です。

その後は、「ラブ・ターゲット」というのを執筆しようと考えています。

たぶん、毎日更新は無理です！！！！

あ、でも、「王子様を求めて。」の方も、もちろん番外編を書いていくつもりですから、ご安心を

できれば、「ラブ・ターゲット」ものぞいてみてくださいね

by ゆながりか（ハ―ハ）ノ

9 1 文化祭二日目！

「美和、朝よ！」

「ん……………」

ふあー。

眠い…………。

にしても…………

ハッピー…………！！

まさか、松平君と両思いだったなんて…………。
本当に嬉しい！

あ、でも、まさか、実は夢でした…………なんていうオチじゃないよね？
そうだったら、もう…………。

「ちょっと、美和！今日はクラブ発表でしょ！」

「あ、うん。そうなの、だから、今日は一日忙しいと思う」

ん？

そ、そういえば…………で、デート、できないかも…………。
だって、今日は一日中働いてるらしいし…………。
ガーン…………。

「い、いつてきます……………」

「え？い、いつてらっしやゝい……」

はあゝ……。

初デートが……。

チーン……。

だ、だって、両思いつて事は、こ、恋人、みたいなもんじゃないですかゝ。

うぐつ、なのにいゝ……。

そ、それに、二人とも隊長と副隊長なんですよゝ。

うぐぐ、抜け出せないよゝ……。

「美和」

「え……？」

「こつちだつて……」

「あ……ま、松平君！？」

ポカーン、です……。

な、何で、ここにいるの？

だって、私の家の前だし……。

はっ、まさかのまさか、迷子！？

それで、頼りになるのが私だけで、ここに来たとか！？

「んなわけねーだろ……」

「で、ですよ〜……。あ、じゃあ、何でここに？」

「おまえを迎えに来たに決まってるだろ」

へ……？

むかえ……？

それって、それって……

「い、一緒に、登校するって事？」

「そういうこと」

つか……！！

おぬし、なかなかやるのお。

じゃ、じゃなくて……な、なんか、恥ずかしいかも。

松平君と一緒に登校……これは、嬉し恥ずかし初登下校！
って、何言ってるんだ、私……。

「美和」

「はい？」

「俺達、両思いだよな？」

「……そ、そう、ですよ……」

「だから……ほら」

???

松平君が、手をさしのべているんですけど……どうして？
ううーん、わからん……。

「……はあー。相変わらず鈍いなー。ほ・ら！手、つなぐぞっ！」

「え……」

耳まで真っ赤にして言う松平君に、キュンってきてる！？
うっわー、かわいすぎでしょ、松平君。

「は、はい……」

きゃー、手にぎっちゃったよ……。

恥ずかしいけど、やっぱり嬉しいかもー。

「そうだ、松平君」

「どうした？」

「デート、一日中仕事だから、できないかも……」

「……」

一気に無表情に突入する松平君。
それはそれで、かわいいかも……って、私、馬鹿？

「で、でも、楽しましようね、クラブ発表！」

「……お、おう……」

少し声のトーンが下がってるけど、仕方ないか。
っていうか、文化祭二日目、思いつきり楽しまないと！

92 自立ちすぎです、文芸部員。

「それにしても、松平君は人気がありますよね」

うんうん。

自分の言葉にうなずくのもどうかと思うが、そのしぐさをやっている私。

だって、本当に人気だもん。

「……いや、それおまえもだろ」

「????え?どういうことですか?」

「おまえの方が人気あるかもしれないし」

「……え、ええええー!!!そ、それはないですよー」

全く、「冗談もほどほどに。

っていうか、この私のどこにもモテ要素があるのかな?
謎ですね……」。

「それより……」

「あぁっ!!!!美和ちゃんです!」

……。

こ、この声、笠原君?

「笠原君……」

「蓮？」

「あつ……！ズルイです、拓海ってば！美和ちゃんと手をつないじゃって！」

「こ、これは……」

「……」

どうしよう。

説明したほうがいいのか、両思いでしたー、って。

あ、でも、まだ付き合ってるって決まってるじゃないよね……。

「松平くうくん！」

「二人とも、あきらめたらあ？」

「お、お姉ちゃんズルイ！」

「か、会長と、舞ちゃん、鈴ちゃん……」

「……」

そ、そうでした、忘れてました……。

私には、敵がたくさんいるということ。

松平君を彼氏にする……その行動を起こすと同時に、この学校中全

員の女子を敵に回すことになるのです！
恐るべし、松平拓海のモテモテ恐怖……。

「……松平君」

「黙っておいた方が」

「よさそうですね……」

顔を合わせて、ウンとうなずき合う私達。
敵に回すと、殺されるしね。

あ……。

つないでいた手を、離されて、手がスカスカする。
なんか、寂しい、かも。

「美和ー！」

「拓海」

あ！

向こうから駆け寄ってくるのは、楓と遠藤君。
それはいいんだけど……

キヤー、睨んでますー！！！！

後ろの女の子が、完全に楓の事を睨んでるよー！！！！
あれってきつと、遠藤君loveの人達でしょー？
怖いよー！！！！！！

「か、楓、後ろ……」

「そうなのー！！もう、アイツら意味わかんない」

「……翔も、大変だな」

「そうなんだよなー。でも、俺のことを睨んでくる奴もいてさー」

本当だ……。

そういえば、楓も人気あるもんない。

うん、これは大変だ。

でも、松平君は、この学校一の人気をほこる、モテモテ王子だから

……

余計に、私を睨む人が多いんだろうな……。

……はあー……。

「あ、いたいた！美和ちゃん！」

「みなさん、遅いですよ」

「……五分遅刻ですね」

またまた駆け寄ってきたのは、ダイさんと、佐々さんと、井上先輩。い、井上先輩、カメラ磨くのはいいけど……目を光らせながら磨かないでー！！！！

怖いって、怖いってえええー！！！！

「ん？あ、拓海と美和ちゃん！」

「みんな、おはよー」

後ろから声をかけてきたのは、雨風君と天道君。

この二人は、私の好きな人知ってるんだよねー……。

まあ、それはそれでいいか。

「みなさーん、おっはよー」

『あ、赤羽兄妹……。 (またやってるよ、ラブラブだなあ) 』 み
んなの心の叫び。

今日もまた、あの兄妹は手をつないでノコノコ歩いてくる。
ラブラブを見せつけないでよね……。

文芸クラブ、全員集結！ (って、楓は違っつけ)
は、いいんだけど……

みんな、派手な人ばかり！

っていうか、イケメンとかモテる人、不思議な人ばかりで、目立ち
すぎだよ……。

校門の前で、何やってるんだって思われてるよね、絶対。

ああ……もあ……！！

93 コスプレ……わ、私が王子？

「それじゃ、美和ちゃん達、よろしくね」

「……………」

……。

な、何ですかいこれはあゝ！！！
こ、コスプレ、だよね！？
いや、これは……

「な、何で王子様あゝ！？」

「ええゝ？だって、ファンタジーじゃない？」

「だ、だから、何で“私”が王子様なの！？私は、女だっゝ！」

「ダイジョーブ！美和ちゃんは、男装もバッチシ似合ってる！」

「そーいうことじゃなくってえゝ！」

そうなのだ。

なぜか私は、“王子様”の格好をしている。
っていうか、いわゆる男装？

って、そういうんじゃないかってゝ！

何で女の子が男の子役？

やっぱり私、男にしか見られてないって事！？

「部長……」

「ん？わあっ！！男の子達も、似合いすぎ！」

え……？

振り向くと、そこには……じょ、女装した、松平君達が……！！
ぷ、ぷぷっ……！！
に、似合いすぎかも……！！

「何で、俺がこんな……」

「文句言いつこなし！」

松平君達は、お姫様……っていうか、ドレスを着ていた。
カツラをかぶって、フリルやリボンがたっぷりついたドレス。
ぷぷっ、ダメダメ、笑っちゃ失礼……。

松平君は、顔がキリッとしてるから、似合っつていうか、似合わないっていうか……。

雨風君は、かなり似合ってる。

その辺の女の子よりカワイイかも……。

遠藤君は……うん、似合ってるね。

天道君も、まあまあ……。

笠原君は……イマイチ？

「かつ！」

「カズ君！」

あ……。

ラブラブ二人組……。

華月さんは、王子様。

うわ、アイドルみたい……。

一樹さんは、もちろんお姫様ドレス。

うん、まあまあ、似合ってるかな。

「美和」

「っ！……ま、松平君？……ぷっ」

「……笑うな。俺だって、着たいから着てるわけじゃ……」

「そ、そう、だよな。あ、アハハ……ぷぷっ、あ、あっはっはは……。わ、私も、笑いたくて笑ってるんじゃ……っぶ」

だ、だめだ、笑いが止まらない……。
ぷぷっ！……！

あ、アハハ、はっは……！！

って、よく考えると私も同じようなコスプレだし。

カツラをかぶって、王子様スタイル。

マントと、剣（けん）と、王冠……。

人のこと笑えないかも。

「さ、みんな、宣伝にいつてらっしや……い！」

『はい……（全員の声が合体！）』

い、行くしかない……。
それっ！！！

バンッ

「え……？」

扉の外にいた、文化祭を見に来たお客が、呆然としている。
や、ヤダ、見られてる！？

「あ、あの……っ」

これには、わけがあるんです！
好きでコスプレしてるわけじゃなくて……

『か、カッコイイ……！！！！』

……へっ？

松平君達のこと？

でも、なぜか女性の視線は私にそそがれている。
つて、私！？

「わ、私、おん……」

女なんですけど！

そう言おうとした私。

でも、その言葉は人々の歓声に吸い込まれる。

「きゃあー！松平君よりカッコイイかも」

「っていうか、松平君は女装？」

「この人誰え？」

「私とつきあってえ」

「王子様あ」

「」

あ、アハハハハハ……はあ……。

94 同姓にモテても…

「ところで、王子。お名前はあ〜？」

「いったい、誰なんですか〜？」

「松平君とは、お友達？」

う、うう〜っ。

今、女の子に囲まれています。

もちろん、男装をしているからなんだけどね。

王子様の格好をした私は、完全に男と見られているみたい。

「ぼ、ぼぼ……僕は……ま、松平君のイトコの、花野和はなのかずって言います」

ば、バレてない……。

私が、女だって事。

にしても、モテるって辛いんだね。

初めて松平君の気持ちがあったかも。

今、宣伝をしながら校内をまわってるんだけど、私の周りをつろついている女子が、正直ウザイ。

うろちよろしすぎでしょ……！！

「和君って言うんだあ〜」

「素敵な名前ね」

「私、超タイプ」

あ、アハハハハ……。

やっぱり私って、男っぽいのか？

「みか……じゃなくて、か、和！早く来いよ！」

「あ、はい！」

さっき雨風君に言われた設定だと、私は松平君とイトコっていうらしい。

女だって言うのも面倒くさいので、このまま宣伝しようってさ。それはいいんだけど、なれないなあ……。

それに雨風君、完全におもしろがってたし。

「……ったく、どんだけ人気があるんだよ……」

「そうですよね……。やっぱり私って、男っぽいんですかね」

「いや、もとの顔がいいからだろ……」

「何か言いました？」

「いや、何でもない」

はて……？

まあ、それにしても、もうすぐ一時間たつから、着替えないと……。

「王子様、どこへ行くのお？」

「ぼ、僕の仕事の時間は、これで終わりなんだ。だから、帰らないと……」

「なら、私達と一緒に、お店を回りませんか？」

「い、いや、その……」

実はまだ、女としての仕事が残ってる……なんて、言えない。
みんな目をハートにしてるし。

こんなことなら、お姉ちゃんに女子をやっつけるお色気を習っておくべきだった……。

「コイツは、今から俺とデートなんだよっ」

「へ……？」

手をつかまれて、思い切り体重が傾く。
ちよっ、どうなってるの？

……っ、助かった？

あ、松平君……。

っ、松平君！？

「お、男同士？」

「なわけないでしょ、ただ遊ぶだけよ」

「そ、そうだよねえ」

『なら、私達も一緒に……』

「却下」

冷たく切り捨てると、グングン松平君が歩き出す。

つて、おもしろい、なんか変な展開になってるような……？

「まったく、おまえつて、モテすぎ」

「ううーん、同姓にモテても、意味ないんですが……」

「いや、異性にもモテてるだろ」

「え……？」

でも、とにかく助けてくれたし、御礼を言っただけなのかな？
なんていえばいいんだ……？

「ま、松平君……！」

「ん？何だ？」

「あ、ありがとうございます……！」

頭を下げる。

ゆ、勇気を振り絞ったつもりなだけ……

「……別に。どうってことないから。気にするな」

……な、なんか、勇気が無駄になったような気が……。
まあ、とりあえず、一件落着????

95 写真集売出し中！

「ハァーイ、美和ちゃん、ラブリー」

あ、あははは……。

ダイさんにかなりほめられているけど、この格好でほめられても……。

「あ、あの、ダイさん……、」

「ん〜？」

「な、なんで……猫の格好なんですか!？」

次のコスプレは、なぜか猫。

猫耳と猫手は、メイド服の時と一緒にんだけど、首には鈴、服は毛がついていて……と、完全に猫の格好。
ちなみに私は、三毛猫です

「……ダイさん、おもしろがってますよね？」

あ……。

黒猫の格好をした松平君が、ジロリと睨む。

っていうか……これまた、松平君似合いすぎでしょ！

で、でも、猫……。

カワイイかも。

「でも、カワイイからオツケー！さ、いってらっしゃい」

「「……………」」

他のみんなは、白や茶色の猫姿。

みんな似合ってるかも。

これは、写真に撮ったら、何十万かで売れ……………るかも。

「にしてもー、この写真集、すごいよねー」

おっ……！

扉を開けた瞬間、我が文芸部のウワサが！？

これは、チェックしておかないと……………。

我が文芸部の「写真集」。

実は、まだ見てないんだよね……………。

「うん、すごい。だって、この花形美和さん、王子様たちと秘密でデートするなんて！」

へ……………？？？

はながた、みかず……………。

それって、私？

って、デート！？

どういうことお〜？

「ま、松平君……」

「どうなってるんだ？」

「どうしよう……」

「……おい、その女子達」

「何です……かつ！？ま、まままま、松平拓海！？って、そっちは花形美和！？」

な、なんか、おびえられているような……。
き、気のせい？……だと、いいな。

「その雑誌、見せてくれ」

「ハア、イ、喜んで」「」

おお、さすが松平君！

女子を殺させるくらいの顔力！

これは、誰もができる技ではない！

奇跡のイケメンのみがこの技を覚えることができるという、とても貴重な技なのだ。

って、何考えているんだ、私。

「こ、これは……」

「あ、私にも見せてください！」

え……？

これって、何かの間違い？

それとも、私へのイジメですか？

神様、どうかうそだと言ってください。

「これって……」

「あのときの……」

表紙に載っていた写真は、いつぞやの肝試しの時の写真。
っていうか、正確には、肝試しをやる前の。

雨風君と、松平君が、両方の頬にキスをしている、アレ。
こんなのが表紙なんて……。

しかも、表紙にはこう書いてある。

『一夏の思い出……私の五人のダーリン』だってさ。

「部長ー！ー！ー！」

「だ、ダイさん！ー！ー！」

96 アリススタイル

「で、どうしてこの雑誌がこんな風になってるんですかー!!!」

部長の所に押しかけにいくと、なぜか笑顔のダイさんが。
はあっ!?

私は今、怒ってるんですけど!!!

「まーまー。はい、美和ちゃんと、松平君に」

そう言つて渡されたのは、あの写真集。

私の水着姿も一応載っているんだけど、ほとんどが、王子様達五人とのイチヤイチャ。

ぐあああゝ!!!

まあ、何でこんな写真ばっかりなのー!?

「っていうか、こんな写真いつ撮ったんですかー!!!」

「え?まー……盗撮?」

「笑顔で怖いこと言わないでくださいー!ってか、私のプライバシーがあああ!」

「だいじょーぶ!美和ちゃんのプライバシーは全て僕が管理して……」

「部長？それ以上言ったらぶつ殺しますよ？（拓海、目を光らせながら言う）」

「拓海君、やめてえええー！！！！」

「ま、松平君が怖い……」

って、何漫才やってるんだ、私達は。

全く、コメディじゃないんだから、限度というものがあるはず……

「と・に・か・く！どーしてくれるんですかあー！」

「どーもしない！」

「……部長、本気で殺しに行きますよ？」

「あ、それならー、写真集を十冊あげちゃ……」

「「いりませんつつつ！！！」」

私の最終兵器は、松平君だろうな。

ほら、今だって、すぐにでもダイさんに襲いかかろうとしている。

あー、怖い怖い（他人事）。

「ああー、もういいです！」

「そうそう。そうだ、ついでに、着替えてくれる？次の衣装は、アリスなんだ」

「ありす……？」

アリスって、不思議の国のアリス？
へえー、そんながあるんだ……。

↓数分後↓

「か、カワイイ……」

アリスの衣装に身を包んだ私。
その衣装のかわいさに、かなり驚いてます。
本当にアリスになった気分……。

「ぶ、ぶちよっ……」

「まあまあ、落ち着いてえ」

「これで落ち着いていられますか！」

え？

何の事だろう……。

試着室の外から、騒ぎ声が聞こえてくる。
っていうか、うるさっ……！！

「どうしたんですかっ？」

扉を開けると、二人が目を見開いてこっちを見る。
ええー……っど、どうして……？

ああああ……！！

そういえば、私アリスの格好じゃん！？
他人から見て、似合ってたとか？

「あ、あの……っ」

「美和ちゃん、サイコー！見てみて、この拓海君」

え……？

松平君は……ウサギの、格好をしていました。
きゃあああ……！！！！

か、かわいすぎる……

白ウサギの格好をして（ウサギの耳をつけている）、時計を持った
松平君は、完全にウサギくん。
ぐはっ！！！！

すごい、かわいすぎ……。

「……部長、もう、やめていいですか？」

「ええええー。だ・め」

「……ぶっ殺す……！！」

こ、怖いよー！！！！

97 近づくと運命。

「みいゝんな、本を読んでもかなあゝ？」

「「「「「はあゝい！」「」「」「」

あはははは……。

子供は元気だなあ……。

えっと、現在状況、子供に囲まれている。
でもって、衣装は魔女。

終了ー！

「終了じゃねえだろ……。どうすんだよ、美和」

「え？それは、この子達に本を宣伝して……」

「んなことできるわけねーだろーがぁ！幼児に小説や詩を読ませろ
っつーのかよ！ああ？それとも何だ、写真集でも見ろってか？おま
えの水着姿が満載の？」

ひいひいーつつつ。

なんか、怒ってる？

いつになく怒りっぽい松平君に、私はオドオド。
何でこんなに怒ってるんだろう……。

「ま、松平君……？」

「あ、悪い。少し、イラついてて……」

周りの小さい子達も、かなりおびえている。
ううーん、どうしてこんなに怒ってるんだろう……。

「ごめんな、美和」

「え？どうして？」

「その……俺とおまえが、両思いつて言えなくて」

「ええっ？それは別に、いい……」

「よくないんだ。その、女子とかに何かを言われるような勇気はないのに、美和が他の男に触られていると、すっげえ不安になる。それなら、言えばいいのに、だよな。でも、俺にはそんな勇気ないんだ……」

……松平君の弱いところ、初めて見た。

だって、私にとって松平君は、いつも励ましてくれる、強い人だから。

でも……

こんな風に、裏の松平君を見るって、恋人同士みたいじゃない？と、なぜかうきうきしている私です。

「こんな俺、嫌だよな」

え……。

急に開き直って（？）いる松平君。
でも、その目はどこか、助けを求めている。
そんなの、放っておけない……。っ。

「……いいと思います」

「え……。っ」

「みんな、誰だって怖いんですよ。前に進むのが。それでも、向かって行かなくちゃ、成長しませんからね。あるだけの勇気、出しましょう」

松平君の目の前に、手を差し出す。
一緒に、向かっていきたいから。

「……ああ……」

私の手にふれた松平君の手。
そこから、だんだんと熱がこみ上げてくる。
や、やだ、私、何しちゃったわけ？
っていうか、すごい偉そう！

「お姉さん達、ラビュラビュだね」

へ……。っ！？

完全に自分たちの世界につかっていた私。
でも、まわりに子供がいるのを思い出しました。

「……み、見られてた！？
ぐはぐはっ、ダメージがでかい……」。

「……美和、逃げるぞっ」

「え……！？は、はいっ！……！」

手を引つ張られて、とりあえず松平君の後に付いていく。
つて、また？

そういえば、松平君といると、何度もおいかけっこになったっけ……。
懐かしいなあ。

「ねえ、松平君」

「ん？」

「言えるかな、私達」

「……勇氣、出してみようぜ」

「うん……」

手をつないで、学校を駆け抜ける私達。
その目に、曇りはない。

今、私達は、運命を変えようとしている……。

97 近づく、運命。（後書き）

うーん、なぜか意味深な終わり方に。

そうそう、今更ですが、おそらく明日、ラストです！
要するに、最終話？

あ、でも、その後も一応番外編を書きますから
毎日更新は不可能ですけど。

私、飽きっぽいんで。

三日坊主？

まあ、そのわりにはこの小説、長く続いたかも……。

と、いうわけで……

さよーなら～

by ゆなかりか

98 私の王子様。

「ああーっ！」

学園の中を走り抜け、風を切った私達を待ちかまえていたのは、文芸部員のみんな。

華月先輩達以外の女子は私を睨んでいる。

あ、そうか。

手をつないでるんだっけ……。

一瞬、手の力を抜いた。

手を離してくれって言おうとした。
でも。

強い力で握られていて、とてもじゃないけど、逃れる事なんてできない。

松平君の顔には、汗が浮かんでいる。

「……ちよっと、美和ちゃん！松平君の手を離しなさいよっ」

「そうよ！次は私なんだからね！」

「拓海！美和ちゃんの手を離すです！」

「そうだよ、ズルイ……！」

うっ……。

どうしよう、やっぱり無理かも……。
両思いです、なんて言ったら、確実に殺されるよ……。

「ま、松平君、どうしましょう……」

「……」

ああー、こんな時に無口ですか！？
俺は無心突き通すぜ、みたいなー？
そんなああー……。

「ちょっと、美和ちゃん！」

「拓海っ！」

女の子と、男の子がせまってきている。
ヒィーッ、怖いよ……！
目が光ってるー。

やだやだ、こっちに来ないでえー！

「みんな、聞いてくれ」

え？

全員の視線が、一気に松平君にそそがれる。
あ……。

私の手をにぎりしめている、松平君の手。
より強くにぎりしめられている。

松平君も……怖い、んだ。

「俺と、美和は……ッ」

「はい、ストoupper！」

へっ！？

むちゃくちゃいいところで、話を中断したダイさん。
な、何でっ???

「わかってるよ。二人が、付き合ってることなんて」

えっ！？

つきあ、てる？

いやいや、誤解なんですけど。

周りのみんなも、ダイさんの言葉に強くうなずいてるし。
だから、誤解だって…。

「あ、あの……」

「あんた達のアツアツっぷりを見て、こっちが意地張りたくなっただけ」

「そーそー。美和ちゃんも、松平君も、相思相愛って感じだったし」

友原兄弟が、すっかりあきらめきったモードで話しかけてくる。

うっわー、開き直りが早いなあ。

失恋しても、大丈夫なんだ……。

すごい、カッコイイ！

「おい……」

「だから、もう僕達はあきらめてたんだよね」

「そうそう」

あきらめてたって、何を？

ダイさんはわかるけど、佐々さんはどういうこと？

ほら、ダイさんは、同性愛者だから、松平君をねらってたってこと
でしょ？

つまりは、松平君に失恋。

でも、佐々さんは、ノーマルでしょ？

あああつー！！

ま、まま、まさか……佐々さんも同性愛者あー！？

「美和ちゃん、思考がぶっ飛びすぎだよ」

ハッ！

佐々さんの一言で、現実世界に戻ってくる私。

おお、つい我を忘れて……。

「みんな、美和ちゃんの事が好きなんだよ」

……???

美和ちゃんノ事が好き……？

それっていったい???

「好きって？」

「っ・ま・り！美和ちゃんに、こういうことをしたいと思ってるわけ」

ん？

何だか、生暖かい感覚。

頬にふれている、この柔らかいものは何？

「先輩！！美和に何してるんですか！」

あ……。

ほ、ほっぺたにキスされたあ！？

うがあああ！！！！

って、みんなが、こういうことをしたい？？？

それって、それって……

「みなさん、ヘンタイなんですネ……」

『（超鈍感……）』 男子一同、心の叫び

ううーん、でも、ほっぺにキスされるのは、嫌だなー。

ほら、気持ち悪いし。

あの、生暖かい感覚がねー、ちょっと。

だから、ヘンタイの皆さんにはすみやかにお引き取りを願いま……

「バァーカ、何言ってるんだよ」

「あ……松平君！」

頭の上をポンポンと、手でたたかれる。

軽くだから、痛くはないんだけど、こしょばゆいよ……。

「おまえに、恋してるんだよ。この辺の男はな」

「えっ？」

「まったく、モテすぎだぜ。おまえがモテるから、俺はむちゃくちゃヤキモチやいたんだけど」

「ええっ！！！」

ま、松平君が、ヤキモチい？
誰につ！？

つて、私？？？

「だ、大丈夫ですっ！私には、松平君しか見えてませんからっ」

「……っ！！！」

松平君の顔が一気に赤くなる。

おお、なんか純情？

つて……

私、よく考えたらすごい事言った？

「……ああー、もうっ！今からバカップルになりそうなんだけどお」

舞ちゃんが叫ぶと同時に、他のみんなもブーブー言い出す。

つて、ば、バカップル！？

うっくん、それは問題かも…。

「もう、さっさと結婚しちゃえば！」

「「け、結婚！？」」

おいおい、話が飛躍しすぎでしょ。
だいたい、まだ付き合ってるのに。

『つ、付き合ってる！？』

え？

なぜか、そこにいる皆さんが一斉に絶叫する。
付き合っていないことが、そんなに珍しい？

「……よし、ここは、盛大に盛り上げてあげるよ」

え……？

ダイさんの、妙にニヤけた顔がいつまでも頭に焼き付いている。
どういう、事……？

「さ、みんな、いつくよー！」

『オォー！』

〜数分後〜

「どうなってるのー？」

なぜかアイマスクをかけられているこの状態。
ううーん、全くわけがわかりませんね。

服を脱がされたり、髪をイジられているのは何となくわかる。

だって、手がどんどん体とかを触ってるし。
たぶん、女子だと思うけど……っていうか、女子じゃなかったらヘンタイ！

「よし、完成！」

「女子、終わったー？」

「オッケー！」

「そんじゃ、うちの学園の校門のところで、盛大にパーティーだな」
「」

「サイツコー！！！！」

ふえ……？

ぱー、ていー？

なんじゃそりや。

頭の中で、やっとカタカナのパーティーに変換される。

あー、なるほど。

つて、はい！？

「美和ちゃん、もうすぐでアイマスク外してもらってからね」

あ、鈴ちゃん……。

ううーん、何が起きてるんだろう…。

っていうか、松平君は無事なのかな？

「……それでは、文化祭にお集まりの皆さん」

え……っ？

なぜか、放送でダイさんの声が響く。
どうして……？

「あのね、お姉ちゃんが、生徒会長命令って事で、放送させてもらってるの」

へえ、さすが、権力者は違うね！

こういうのを考えると、生徒会もなかなかいいかなって思っちゃう。

「今から、校門の前で、盛大なパーティーを始めます。主催は、松平拓海と、花形美和です。ぜひぜひ、ご覧ください」

は……っ！？

主催が、私達い？

どういうこと？

もう、本当に意味わかんなくなってきた！

「さ、着いたよ。それでは、オープン！」

かけ声とともに外されたアイマスク。

目の前には、タキシード姿の松平君が。
でも、なぜか白くばやけて見える。

「松平、君？」

「美和、その格好……」

えっ！？

自分の格好を見てみると……

完全に、ウエディングドレスだ。
って、どうしてえ!?

……どうやら、私は、アイマスクをしている間に、鈴ちゃん達にこの格好にさせられたみたい。
もちろん、ベールもある。
やけに本格的だな、おい。

「実は、ダイさんが、ラストはこのコスプレにしようって、買ったらしいの。そしたら、意外に本物も安くて、コスプレじゃなくて本物を買っちゃったわけ。アハハ、よかったね」

す、鈴ちゃん……ッ。

前までは完全に敵だったのに、今はこうして祝福……。

エライ、エラすぎるっ!

私、感動しちゃったよ!

「……で、これから何をするんだよ」

私から目をそらしている松平君。

??? どうしたんだろう…。

「……松平君ッ。美和ちゃんのかawaiiさに、うろたえていますねっ」

へ…?

鈴ちゃんの厳しい指摘に、かなりうろたえる松平君。
そ、そうなのっ?

「……そうだよ。おまえ、かわいすぎ」

ううーん、確かにドレスはかわいいけど、私は、かわいくないよな？
とか思いつつ、今は松平君の言葉に甘えている私。

「それでは、新郎新婦のご入場でーす」

……ダイ、さん？

これって、まさかのまさか……結婚式！？

「ほら、二人とも、行かないと！」

あ、鈴ちゃん……。

鈴ちゃんの目に涙が浮かんでいる。

それでも、賢明に私達を祝ってくれている鈴ちゃん。
ううーん、感動っ。

「美和、行くしかないよな」

「あ……。は、はい」

ふうー。

な、なんかかなり緊張ッ。

あ、でも、ここで練習しといたら、本当の結婚式の時にドジふまな
くてすむかも……。

タン、タカ、ターン

音楽も流れて、かなり本格的。

いつの間にか、みんな校門で道をつくってくれてるし。

あー、なんだか、本当の結婚式みたいかも。

「オホン。汝は……って、面倒くさあーい！よし、拓海君、言っちゃえ！」

どうやら、神父のダイさん。

でも、面倒くさいとほかってるし。

ダメじゃん！

「……美和」

「松平君？」

一瞬にして、あたりに静けさが舞い降りる。

おお、みんな、かなり空気読めるね！

って、何を考えているんだ私。

「俺と……付き合ってくれ」

「え……？」

『ヒューッ！！！！』

つきあ、う？

それって、恋人？

……。

うれしい、かも……。

だってだって、本当に、本当でしょう？

「……美和、ご返事は？」

うつー!!!

松平君の顔が、悪魔になっている。
イジめてるよ、この人。

「……私、もっ、」

言ったら、新しい一歩。

運命への、一歩を踏み出したって事。
そう、私は、“言おうとした”。

「美和ちゃん、ラブリーー！」

あ、姉っ！？

姉の一言につられて、観客も沸き上がってくる。

「クッソー、松平拓海い！俺らのアイドル美和ちゃんを独り占めな
んで、せこいぞー！」

「打倒っー!!!花形美和」

「美和ちゃん、拓海はやめて、僕と付き合ってください！」

「どおせなら、舞と付き合ってください」

ヤジウマや、文芸部員から、一斉にブーイング。
な、なんか、みんなが一致団結？

「美和」

「はい？」

「逃げるぞッ！」

ま、またですかぁー！？

結局、これからの私の運命は、おいかけっこの連続なんだな。
あー、せっかく少女漫画できなパターンだったのに！
作者のバカヤローッ（すいません… 作者）

「美和」

「……あのつ。私も、付き合いたかったから……」

走りながら言うのって、おかしい気がする。
けど、今はそんなことどうでもよくて。

周りの雑音なんか、この胸の音にかき消されている。

どうか、伝わりますように。

私の、この想い。

本当に、好きだから。

少女漫画みたいなパターンじゃなくてもいい。
個性的なパターンでもいい。

ただただ、自分の気持ちを、伝えたいだけ。
それが、私の運命への一歩。

「……これから、よろしく」

そう言つて、強く握りしめられた手。

心なしか、松平君の頬は赤く染まっている。

「うん！」

今はまだ、目の前にいる人が、これから生涯とともに生きていく人だとは知らない私。

でも、そのうちわかるよ。

この人がいないと、私は私じゃなくなるってことがね。
今は……この時間を、大切に過ごしていきたいよね。

『待てえー！』

「美和、行くぞ！」

「ええっ！？う、うん……ッ」

これ以上スピードアップですか……。
でも、引つ張られるままされるがままだしな…。

「……美和っ」

「え？どうした……んっ！」

走っている間に、素早いキス。
自然に、息が上がってくる。

もー、ただでさえつらいのに、さっきのキスで、呼吸が……ッ。

『その、バカッブルー！』

「松平君！」

「何だ？」

振り向いた松平君は、誰よりも輝いている。
この人は、私の王子様。

「大好きです」

F i n ! ! !

98 私の王子様。（後書き）

うーん、終わった!!!

感動だああ!

今まで読んでくださったみなさん、本当にありがとうございました！
感謝感激です！

こんな、長いだけの物語を読んできたなんて……。
うう……。感動で涙がツ（っていうのはウソだけど）。

オホン。

とにかく、本当に、みなさんには感謝しております。
更新できなくて、迷惑をかけたこともありました。

誤字ばかりで、読みにくいことも……。むっちゃくちゃありますね、
はい。

それでも、こうして書き上げましたっ！

みんなー、私をほめてー！

と、冗談はここまでにしておきますね。

これからは、番外編、特別編などを更新していきたいです。
とにかく、お休みをください！

最後に、私を支えてきてくださったみなさん…そして、こんな小説を読んでくれた皆さんに、心から感謝しております。
本っ当に、ありがとうございました!!!

by!!! ゆながりか

（よければ、ラブ・ターゲットも見に来てください）
それでは、またどこかの物語でお会いしましょう！

〈番外編〉 恋愛一步手前 舞

「はあああー……」

正式にあの二人が付き合う事になってから、一週間がたつ。
私はもともと松平君にフラれてたから、心の傷は浅い方だと思う。
でも……

「はあああー……」

このため息を止められない。
あの、バカップルめ……ッ……!!

美和ちゃんと松平君は、今日も一緒に昼食。
舞も、一緒に食べたかったな。

「もぉー、舞が失恋するなんて、ありえない……」

そう。

私は今まで、失恋なんていう事を味わった事は一度もなかった。

小さい頃から、なぜかブツクリとした体型。

それはコンプレックスなんだけど、男の子からは、「舞ちゃんにぷ
っくりは合ってるよ」と言われていた。

ぶりっこキャラと言われて、女子からは冷たい目で見られる反面、
男子からは結構人気がある方だったと思う。

そんな私が、恋をした男の子……

それが、松平君だった。

今まで、下部として男の子を扱っていた私。

でも、松平君は……すごく、かつこよかったのだ。

もう、私が下部になりたいほど。

ずっとずっと、松平君の事が好きで、でも、想いはなかなか伝わらなくて。

だから、余計に、悲しいんだ。

「うつ……。思い出してたら、涙が……」

こんな顔、誰にも見せられないよお。

だって、舞の顔、涙でグシャグシャ……。

この私が、こんなところで泣いているなんて……！

ちなみに、ここは屋上。

失恋記念日にはちょうどいい。

ううゝ、松平君のばかぁ……！

「……あれ、片岡さんでーすか？」

「っ！……！」

だ、誰っ！……！

反射的に扉の方に振り向く。

そこには、金髪が。

って、じゃなくて、笠原蓮君が。

王子様グループの一人、本格的は王子様キャラだよな。

「なあにいい、どおしたのぉ？」

ささっと涙を手でぬぐう。

涙は、誰にも見られたくない。

「……………何でもないです。ちょっと、失恋の心を癒しに……………」

あ、そういえば、笠原君は美和ちゃんの事……………。
変なこと聞いちゃったな。

ごめんね、笠原君。

「舞は、ちょっと空を見に来たんだよ」

これは、ウソじゃないもん。

青空を見ると、元気が出てくるから。

だから、空を見に来たんだから。

「僕もです。本当は、一人でたそがれるつもりだったんですけど
ー、先客がー、いましたねー」

そう言っただけで笑う笠原君。

その顔は、楽しそうなのに、少し……………悲しそう、だった。

私だって、悲しいよう。

でも……………あの二人見ると……………恨めないもん。

あんなに、幸せそうだから。

「……………悲しかったです、さっきまでは」

「え……………？」

さっきまで？

それって、もう悲しくないってこと？

回復早ッ！

「片岡さんに、会えたから」

「~~~~っ!？」

え、え、ええええ!!!

私が驚いているのは、その言葉使い。

さ、さささ、さっきまで、日本語になまりがあっただじゃん!?
なのに、何で急に綺麗な言葉に？

「僕、日本で暮らす事が多かったから、結構日本語慣れたんだ。でも、他の人には、「でーす」とかがウケるし、あのままだけど」

「そ、そう、なんだ……」

「僕はもう、悲しくないよ?だって、片岡さんがここにいるし」

「っ!!!????」

そ、それって、どういう意味なのお？

かなり焦るよ……!!

今まで告白は何度もされてきたし、二つ返事でオッケーしてたけど、今回は、そうはいかないかも。

「あ、あの、」

「泣いても、いいんだよ」

「え？」

「片岡さん、泣いても、いいんだよ。僕は、誰にも言わないし」

「か、笠原君……」

ポロツ。

あれ？

そう言われたら、なんだか涙が……。
と、止まらないよお。

「うつ、うつ……！」

雨のようにあふれ出した涙は、とどまることを知らない。
ポロポロとこぼれ落ちて、そしていつか、この世界を水浸しにして
しまっんじゃないか。

「おいで、舞……」

「か、笠原、君……、」

いつもなら、名前で呼ばれることを許さない。
だって、嫌だから。

自分が恋した人以外に、下の名前で呼ばれたくない。

でも……

今日は、なんだか許せる。

それは、私が……笠原君のこと、好きだから？

そんなわけないか。

「おいで……」

「うつ、うつ……ウワーーーーンッ……」

笠原君の胸の中に飛び込んで、思い切り泣きわめく。
こんな事、今までなら絶対にやらなかったのに……。

認めたくない。

認めたくないけど……確かに、かつこよかった。

「ヒック……」

「涙も、おさまったみたいだね。それじゃ、僕は行くよ」

「え……」

なぜか寂しい、なんて思う私。

そ、そんなわけない！

だってえ、私は、松平君のこと……

まつだいらくんの、ことが？

……あれ？

なんだか、悲しくないぞお？

失恋の気持ち、いつの間になくなってる。

「いつでも、僕の胸を貸してあげるよ」

「っな……！！！！じよ、じよおだん？やっただあゝ！！」

できれば、今までのも冗談だと言ってほしいけど。

「冗談じゃないよ、片岡さん」

あ。

片岡さんに戻ってるし。

なんか、寂しい……？

そう思った瞬間。

一瞬にして、起こった出来事。

「……………っん！」

屋上で起こったハプニング。

それは、冗談？

そんなの、笑えないよ……。

「な、何してるのお！！！！」

「キス、です。それじゃ、また合いましょー？」

き、キスされたああー！！

こ、この……馬鹿ああー！！！！

〈番外編〉 恋愛一步手前 舞（後書き）

ども

お久しぶりです！

舞ちゃん、失恋のショックは意外に大きかったのかな？

でも、蓮くんがなぐさめるなんて……だいたい、日本語話せるんかいっ！！！

と、自分で作った設定なのに、怒りを覚えつつある作者です。

さて、それはともかく。

言っのを忘れていましたが、この小説を読んでくださった方には、ぜひ、感想を書いてくださると嬉しいです。

また、アドバイス、指摘もどんと来い！です。

次の物語に生かしていきたいので、ぜひぜひ、送ってくださいね

b y , ゆながりか

〈番外編〉 恋愛一步手前 鈴香

「あーあ……」

今、あの二人が逃走中。

もちろん、あの二人っていうのは、美和ちゃんと松平君の事。
あきらめてたから、いいんだけど……。

もともと、松平君が美和ちゃんにひかれてるのは百も承知。
でも、あきらめられなかった。

「絶対バカップルになるよね、アレは」

みんなが追いかけていく中、私はあの二人を見つめていた。
見えなくなるまで、ずっと見ていよう。

そしたら、はつきりと失恋だつてわかるもん。
じゃないと、あきらめきれない。

「あれ？鈴香ちゃん？」

「あ……えっと、天道君？」

優しい、お兄さんのような笑顔を顔に貼り付けて立っている天道君。
その表情はどこか、悲しそう。

そうだよね……私も、天道君も、失恋記念日だ。

「あはは、天道君も失恋記念日なんだね。私もだよ。まあ、とつくにあきらめがついてたんだけどね」

初めて、二人の気持ちを知ったのは昨日の夜。

お姉ちゃんが、教えてくれたんだ。

あの二人、両思いだよって。

だから、昨日は、泣いた。

「ああ、そうみたいだね。その割には、鈴香ちゃんは悲しそうじゃないね」

「うん。昨日泣いて、泣き疲れたっていうの？とにかく、もう、涙が出てこないんだ」

パーティー会場（つていつても、ただテーブルとイスが何個かおいてあるだけ）に、私達二人。

失恋を癒すには、新しい恋だってよく言うけど、私はそんなに簡単には乗り換えられない。

だって、松平君は。

私の、理想の人だったから。

「僕は、悲しいよ」

「えっ？」

いつものお兄さんの存在の天道君。

その天道君が、泣いた……。

「て、天道君!？」

「一応、僕もずっと前にフラれたんだけどさ。や、やっぱり、悲しい、んだね……、」

天道君の目からあふれ出ている涙。

本当に、好きだったんだ。

美和ちゃんの事。

背も高くて、顔もお兄さん。

でも今は、どこか小さくて弱い、子供みたいだった。

「……大丈夫だよ」

守ってあげたい……私が、天道君の事を。

「え？」

「大丈夫。天道君は、優しいから、涙が出てくるだけ。それに、泣かないと、新しい恋を、すぐに捕まえないよ？」

さっきまで、新しい恋なんて、私には早いと思ってた。
でも、なんだか。

今の気持ち……少しだけ、恋に似てると思う。

「す、鈴香ちゃん……」

「私も、失恋したし、天道君も、失恋した。それって、運命みたいでしょう？」

今度の恋は、遠慮はしない。

誰に邪魔されても、ただひたすらに、がむしゃらに、向かっていく

だけ。

まだ、恋かどうかは、わかんないけど。
ずっとずっと先の、ゴールに向かって、突っ走っていきう。

「うん、めい？」

「そう。運命だよ」

松平君。

私、あなたのこと、卒業します。
さようなら……

そして……

「よろしくね、天道君」

「????」

いらつしゃい、新しい恋。
あなたと一緒に、ゴールまで、走って行けたらいいな。

〈番外編〉 恋愛一步手前 鈴香（後書き）

どんな組み合わせにしようか、結構迷ったんです。
うーん、ワガママな舞ちゃんと、優しくておおらかな性格の天道君
は合っていたりして。

とか、いろいろ考えた結果、こういうペアに。

1 蓮・舞

2 司・鈴香

そして、ラストをバッチシ決めてくれるのは……

3 稜・鈴菜

です！

この二人は、最初から決めてました。

だってだって、なんか、ちっちゃくてカワイイ男子と、大きくて（
身長だよ、体重じゃないよ）カッコイイ女子の、年の差恋愛って、
一度書いてみたかったんです！

念願の、逆年齢差恋愛。

がんばっちゃいます！

く番外編く 恋愛一步手前 鈴菜

「かぁゝいいちよう」

「……近い」

「何言ってるんですかぁゝ。これも、僕と会長の仲でしょ」

「どんな仲だよっ!」

キイイゝゝゝッ、ウザイ!

今は優雅に昼食タイムだ。

それなのに、それなのに……っ

「雨風稜! さつさとここから出て行けえええ!」

「んゝ?」

さつきから生徒会室に居候^{いこう}? している馬鹿……雨風稜。

コイツはなぜか最近、この私にまわりついてくる。

ウザイ。

ウザイウザイウザイウザイ……。

「会長、稜君、会長になつてますねえゝ」

「なついてるどころじゃない。ウザイ」

生徒会役員の佐々秀が声をかけてくる。
声をかける前に、邪魔なコイツをどかしてくれ!!!
ろくに弁当も食べられない。

「会長の手料理ですかあ〜?」

「そうだ。何か文句でもあるか?」

「いやあ〜、意外だなって」

……。

意外、か……。

そつだな、こんな不器用で冷たい私が、手料理など、似合わないだろつな!

似合わなくて悪かったなあ!!!

「そんじゃ、卵焼きいただきい〜」

「つな……」

「隙がありすぎですよ、会長さん」

一瞬、雨風稜の言った「隙」という言葉が、「好き」という文字に変換させられて焦る。

うがあああああああああ!!!

なんつー恥ずかしい変換を!!!!

「ん? 顔が赤いですよ、会長」

「つな……!!! う、うるさい! 誰のせいだと思って……」

「ええ、僕のせい？」

う、ウザったあゝい！！！！

ムカつくイラつくウザりたい！！！！

「さ……さつさと、出てけえええ！！！！」

そんな私の悲鳴が、生徒会室に響き渡ったのである。

+++++

「また、会長にちよつかいかけてるのか、稜は」

ここは、生徒会室の扉の前。

二人の男子生徒が会話をしている。

一人は、かなり平凡な顔立ち。

そしてもう一人は、まるで女の子のような顔立ちである。

「えへへ。だって、会長の顔がかわいくて」

「よくあきないな……。それにしても、いっつも押してばかりじゃダメだろ」

「え？そうなの？」

女の子のような男子生徒、名前は雨風稜。
今は会長の天敵だ。

「そーそー。押してダメなら引いてみる…ってよく言うだろ」

「ふうーん……」

一般男子生徒が去っていった後も、稜は扉の前で考え込んでいた。

「……押してダメなら引いてみる、か……」

+++++

「ったく、やっと出て行っただか……」

何とか雨風稜を追い出す事に成功した私。

これで、平穏な昼食タイムが訪れるんだな。

ここ最近、かなり普通じゃなかったもんな……。

私は、お弁当を食べながら回想に浸っていく。

「会長！待ってくださいあーい！」

「ぎゃあああー！！！」

ズバババババ、と、猛烈な勢いで追っかけてくる雨風稜。

その小さい体のどこに、そんな体力が眠っているんだ……！

と、毎日放課後は一緒に帰ろうと追いかけて回された。

結局最後は、私があきらめるんだけど……。

「会長、手をにぎっても」

「ダメだ」

放課後一緒に帰ったら、必ずセクハラ的行為をしてくる。

コイツ、この前までは花形美和にお熱だったじゃないか！

それなのに、立ち直り早っ！

私は、コイツのおかげで（？）鈴香や舞よりも早く立ち直ることができたけど。

コイツは、もう少しドンヨリしてもいいんじゃないかっ！？
だいたい、花形美和の時はこんなにしつこくなかっただろ！

「……………う！……………長！……………会長っ！」

「あ！な、ななな何だ！」

いかんいかん、つい思い出（？）に浸ってしまった。
つたく、どれもこれも雨風稜のせい……

「おかしいんです！」

「何がだ？」

「あ、雨風君が、生徒会室に来ません！……！」

「え……………」

こ・な・い……………？

アイツは、突風のごとくやってきて、まずは追い返される。
それでも、その後また突風のごとくやってくるのだ。
そのくらい、しつこかった。

なのに……

「こ、来ないだと!?!」

「は、ハイ!生徒会室の扉の前にもいません!」

生徒会は大騒ぎだ。

アイツが来て、邪魔をするのがみんなはなぜか楽しみらしい。
この私が、焦っているのが……カワイイ、らしい。

「は……はは、い、いいこと、じゃないか……ッ」

「かい、ちょう?」

「あ、アイツ、も、おちゃらけ、を、やめ、たんだ……」

その時は、自分の言葉がかなりとぎれている事には全く気づかなかった。

「会長……」

「そ、れじゃ、私は、きょう、しつに……もど、るよ」

「あ、あぶなっ……」

「うがつ……!い、いた……」

いきなり壁にぶつかってしまう私。
い、いった……。

全く、どうな……つぎゃっ!

今度は、机に衝突。

「か、会長？大丈夫です、か？」

「あ、ああ、だいじょ……んぎゃっ！……！」

こんなに動揺するなんて……。

たかが、雨風稜。

雨風稜ごときに……ッ……！！

+++++

「ぷつ。た、確かに、たまには引いてみるのも悪くないかも……ッ」

会長の様子を、物陰からコッソリのぞいている奴がいるのは、まだ、誰も知らない……。

く番外編く 恋愛一步手前 鈴菜（後書き）

あっちゃあ、前編後編になっちゃいました…。

テヘ

許してえ〜！

ほらほら、その……なんか、二人ともかわいくってえ
会長、ツンデレキャラっすか？

稜君って、やっぱりカッコイイ……。

それでは〜。

く番外編く 恋愛一步手前 鈴菜

「あー……」

「あの……会長？」

「何だっ！……！」

「ヒイイー！あ、あの、雨風稜は……」

「知らんっ！……来ないほうが静かでいい！」

ああ、もうっ！

どうして、仕事が進まないんだ！

今日は調子悪い……っ！

最近、雨風稜が全く。

全く、来ない。

私の前に、現れないのだ。

それはいいことなのだが、なぜか仕事が進まない。

そして、ストレスがたまっている。

くっそ、前はこんなことなかったのに……！

「会長」

「あ……佐々君……」

「稜君、来ませんね」

「うつ、うるさい！余計なお世話だ！」

何で佐々君にまで言われなくちゃならないんだよー！

たかが雨風稜のことで！

た・か・が、あのバカのことで！

「いつつもいる稜君がいないと、こつちも調子狂うんですよー。
というわけで、会長」

「なっ、なんだ……！？」

ものすごく嫌な予感がある。

冷たい汗が、額から頬へと流れ落ちた。

「生徒会代表として、稜君を迎えに行ってください」

+++++

「はあ……」

そんなこんなで、今、雨風稜を探している。

つたく、何で私が……。

だいたい、あんな奴は生徒会役員でもないし、さっさと撤去してお
かねば……

「あ、あのっ……」

「ん？なあに、その女の子」

っ！！！؟؟？

こ、この声……雨風稜だ……

見つけた……でも、もう一人の声って、いったい……？

「わ、わた、わたし、加藤美也子かとうみやこって言います！稜君のこと、ずっと好きでした！付き合ってください！！！」

っ！？

……なんだ。

いるんじゃないか、雨風稜のこと、好きな奴が。確かに、顔はいいもんな。

だったら、私にかまわなくてもいいじゃんか。

「ミヤコちゃん？」

……つく……。

ミヤコ、ちゃん？

私のことは、会長って呼ぶのに？

その子のことは、ミヤコちゃん？

……何よ、バカ……。

「は、はい！」

「ふうーん、カワイイね」

……何が、カワイイね、よ。
ばかばかばか。

雨風稜なんて、大嫌いだ。

もとから、す、好きなんじゃないよっ!?

ほら、この空気で言つと、っていつ、あくまでも想定のも……。

「そ、それじゃ、付き合つてくれ……」

「んー……ごめんね」

……っ!?

「どっ、どうして……」

「僕、好きな人いるんだ。片思いだけど」

えっと、それって、私?

「そ、そうですよね……。稜君、会長にゾッコンですし……」

「あ、気づいてたんだ?」

「はい。それじゃ、会長とお幸せに!」

「うん さ、出てきてよ、会長」

っ!?

き、ききき、気づかれたあー!?

っていうか、この状況はヤバイ!

生徒会長が人の恋路を邪魔したとか、告白シーンを聞き耳したとか、ありえないから!

よし、ここは、逃げる!

「はい、逃げないでね」

「……」

逃げようと一歩踏み出したときにはもう遅く、腕をガツシリ？まれ
ていた。

おいおいおい、行動が早いだろ……！！

「……会長、今の聞いてたでしょ」

「……っ……！！」

耳元でささやくな、耳元で！

私は、そういう、のに……っ……！！
弱いんだ……！！

「……ずっと、私のところに来なかったじゃないか」

「エへ、ごめえくん 押してだめなら引いてみるって言うでしょ？」

「……この、馬鹿」

「馬鹿でいいよ。会長と一緒にいられるなら」

「……っ……っ……！！」

ど、どこからそんな恥ずかしい台詞が出てくるんだ！
こっちが赤くなる！

「ね、会長」

「……違う」

「えっ？」

「私の名前は、鈴菜だ。会長ではない。……おまえの前ではな」

少しだけ、心を許したのは。

私にとって、少しはこいつが必要なかもしれないと思ったからだ
…。

ゝ番外編ゝ 恋愛一步手前 鈴菜（後書き）

終わったあゝ!!!

さて、これで一応番外編は終了！

次回この場で会うときは、おそらく特別編でしょうね。
バレンタインとか、卒業とか、そういうのを書いていきたいなあゝ、と。

まあ、どっかでは終わると思います!!!

く番外く 王子様はご機嫌ナナメ？（前書き）

あー、急に書いてしまった…。

く番外編く 王子様はご機嫌ナナメ？

「…………はあああああ~~~~」

俺は、今日何回目になるかわからないため息をつく。
隣では、美和がかわいく笑っている。
幸せだ~~~~。

そう、とても、幸せなのだが……。

「はあああ~~~~」

「どうしたんですか、松平君」

そう、コレ！

俺の悩みのもとはこの、「松平君」という呼び方だ。

この前までは付き合ってたからよかったけどさ……
俺達、付き合ってるじゃん？

それなのに、相変わらず、「松平君」だもん！。

まさか、俺の下の名前、知らないのかっ？

「…………ん。…………らくん。…………松平君ってば！」

「ッ！！わっ！？　って、美和か……。何だ、どうした？」

いかん、妄想の世界に意識が飛んでた……。

最近、こんな調子で、俺は正直……機嫌が悪い。

「何だ、じゃないですよ……。せつかくのデートなのに……。さっきからずっと黙ってばかりで、私もつまらないです」

「あ、ごめん……」

「ほら、早く行きましょうよ!」

そう言つて、美和が指さしたのは映画館。

まあ、デートの定番、だな。

今日、俺達はデートしている。

美和のファッションは、いつものメガネに、水色のワンピース、白いカーデガン。

俺は、黒い上着に、白いシャツ、ジーンズという格好だ。

美和の格好は、俺としてはかなりカワイイ。

それはいい、それはいいんだが……

「じゃ、行るか、美和」

「……あ……うん……」

今更、手をつなぐ程度で赤くなったりする、この反応。

カワイイんだけど、それが俺を挑発してるみたいで……。

欲望を抑えるのに精一杯だ。

「美和」

「え?どうしたの、松平君」

「……何でもない」

今日こそは、「拓海って呼んでくれ」と言おうとしてたんだが……

失敗、か?

どうも、あの、クリクリ、とした目を見ると、言えなくなるんだよな……。

可愛すぎだし！

「あー……、映画、見に行くか」
「ウン！」

+++++

「……！？」

「……」

あー、カワイイ。

この映画は、なんだかラブシーンが多くて、美和が「キスシーン」があるたびに顔を赤くさせている。
その純情さが、美和らしい、ってか…。

「美和、大丈夫か？」

映画館を出て、喫茶店にでも行こうかなと思ってた時。
手をつなごうとしたら、美和が……

「！？」

と、驚いた顔でこっちを見て、バシッと俺の手をたたいてきた。

「み、美和……？」

「あ……えと、ゴメンナサイ……」
「……」

な、なんか、悲しい……。

正直、悲しみが怒りに変わってくるんだけど……。

「……美和」

「まっ、松平、君……？」

気づくと、スラスラと言葉が出ていた。
思っても見ない言葉が。

自分のやっていることが信じられない。

「俺と手をつなぐの、そんなに嫌ッ？」

「っな……」

「別に、いいけど。とりあえず、今日は帰るから」

明らかに泣きそうになっている美和。

一瞬、かわいそうなことをしたと思ったけど……

「ま、待って、松平君！」

「……ツチ……」

その一言で、完全に怒りが爆発した。

俺は、美和を街に取り残して、その場を離れていった……。

〈番外編〉 王子様はご機嫌ナナメ？（後書き）

猛烈に、「王子様を求めて。」が書きたくなって、居ても立ってもいられなくなりました。

美和ちゃんと拓海君に会いたい！
そんな勝手な願いからできた番外編です。

拓海君、ご機嫌ナナメですね…。
そりゃ、ずっと「松平君」じゃ、ストレスたまるよなあ…。

さて、次のタイトルは、「お姫様の憂鬱」です。
美和ちゃんが出てきますよウ〜〜〜。
ヤッタネ！

く番外編く お姫様の憂鬱

「うええええくくん！どうしょー、ウウツ…」

シクシク、ヒクヒク、と泣き出した私を慰めてくれるのは、「楓」
&「遠藤君」だった。

「まあまあ、落ち着きなよ、美和」

「そーそー。美和ちゃんも、泣きすぎだよ…」

「ウツ、でもあくくく…。わ、私…ツ、松平君に、悪い、こと、
しちゃったかも、しれない…」

「まつだいら、くん…くくく…」

楓と遠藤君が、二人そろって顔を見合わせる。

そして、ハァー、とため息をつく。

くくく

な、何でっ！？

「……美和」

「……美和ちゃん」

「「事情を、話してくれる？」」

二人の、鋭く厳しい目線。

その、刃やいばのような視線が痛くて、気づいたら、頷うなづいていた……。
あー、怖すぎて涙止まっちゃったんですけど……。

「あ、あのね……」

今日、松平君とデートしてて、なんだか松平君が上の空だったこと。映画を見たら、ラブシーンが多くて、恥ずかしくなってしまったこと。

つなごうとしてきた松平君の手を、思いっきり跳ね返してしまったこと。

そして、松平君が出て行ってしまったこと……

全て、正直に話した。

すると……

「ハアアアアアアー」

盛大なため息が。

しかも、二人同時に。

な、ななな、何でエっ!?

「美和……それ、全部アンタの責任だからね」

「うえっ!?!ど、どどど、どうして?」

「……はあ。ちよつ、翔、バトンタッチ」

「ラジャ、任せて、楓」

ん?

そう言えば、二人は名前で呼び合ってるんだな。

本当に、恋人同士なんだ…。

「美和ちゃん。いい?拓海が怒ったのは、ね……。美和ちゃんが、“名前”で呼んでくれないから、だよ」

……へっ????

「えっと、名前、ですか？」
「「そう」」

いや、そこ、ハモらなくていいし。
すっかり息が合っている二人に、私がため息。

「それで、美和ちゃんは、今でも「松平君」でしょう？」
「はい、そうですけど……」
「つまりは……」「拓海」って呼んでほしいワケですよ」
「はあ、ナルホ……どおっ!？」

バツシーン！

はっ、驚きのあまり立ち上がってしまった！
っていうか、「拓海」なんて呼べるわけ、な……

い、今、頭の中で言ってしまったんだけど……。
ま、松平君は松平君だもん！

「あと、その純情さ！」
「じゅ、ジュンジョー？」
「そう。すぐに赤くなる態度とか、最初の内はカワイイけど、手をつなぐたびにやられてたら、ゲンナリするよ。もっと大胆に！」
「だ、だいたん、デス力？」
「Yes!!!」

デデン、と指を突き刺す遠藤君。
その格好に、なぜか楓は頬を赤くしている。

ナルホド、これが純情……。

確かに、少しばかりムカつくかも…です。

「だいたん……だいたん……ですか…」

「うん。その意気だよ、美和ちゃん！」

「ガンバッテ、美和」

「……た、拓海………君。の、ところに行ってください！」

「おう！アイツなら、たぶん、公園にいるよ」

「ラジャーです！」

まつだい……じゃなくて、拓海………君。

待っていてください。

もうすぐ、大胆、な行動をしてみせますから！

ゝ番外編ゝ 眠り王子はキスで目覚める（前書き）

番外編完結！おめでとおゝゝゝ。

く番外編く 眠り王子はキスで目覚める

夕暮れ時の公園。

五時をすぎているので、子供も見当たらない。

「え、と……松平君、どこにいるんだろう……？」

キヨロキヨロとあたりを見回して歩く私。

不審者っぽいかな……？

「いない……」

ベンチを見てもいない、遊具にもいない……

それならば、一体どこに……？

「どおしよ……」

松平 拓海。

その名を聞けば、誰もが、「あの拓海君？」と呼ぶ……そんな、大きな存在の彼。

クールで、何も考えていないみたいだけど……本当は、優しくて、私を分かってくれる、そんな人。

私は、心のどこかで……甘えていたのかも、しれない。

「私って……馬鹿ア……」

おさまったはずの涙が、あふれてくる。
馬鹿だ、私。

松平君に、会いたいよ……。

「　　ッ！……！！……？……？」

すごい、綺麗……ッ。

見上げた空は、夜とも、夕方とも違う……不思議な色合いだった。
赤……黒……？
陽が沈む直前、桃色に染まった空。

「……松平君と、一緒に見たかったな……」

ヒクッ……。

また、涙がこぼれ落ちそうになった、そのとき。

「　　泣いてる顔も、嫌いじゃないけど。美和は、笑え」

あ……。

声が出したのは、大きな木の上。

そこには、枝に登って寝転がる、松平君の姿が……。

「ま、松平君ッ」

「笑え」

「ウツ、う……」

笑えって、そんなあ……。

それでも、私は必死に笑顔を作る。
松平君……。

「まつ……」

「お休みなさい」

「……え？」

ゴロン。

私から顔を背けて、また寝転がる松平君。
ヤダ…… やっぱり、嫌われてたの……？？？

「ウツ、うゝ……」

「……眠る王子は、キスで目覚める」
「……？？？」

「俺に笑ってほしかったら、助けに来い、馬鹿」

？？？

たすけに……？

眠り姫は、王子からのキスで目覚めました。

つまり……私が、松平君に……？？？

「……つく……」

決心して、木を上り始める私。
笑ってよ、松平君。

「……つと……」

手が痛いんですけど。

それでも、私は。

笑ってほしくて、上り続ける。

「……とりやつー！やあー！」

運動オンチでも、気合で登ってやる……！！！！

「つととと……。つ、ついた……」

目の前で目を閉じている、松平君。

すっかり眠り王子になって、お姫様を待ち構えているみたい。

……笑ってよ、王子様。

「大好きです、拓海……」

私は、軽く、唇にキスを落とす。

「ッー？」

ゆっくりと、目を開ける松……じゃなくて、拓海。

「拓海？笑ってよ……」

「……反則だ、馬鹿ッ」

「つて、え!？」

視界が、真っ暗に。

しばらくたってから、拓海の手が、私の背中に回っている事に気づく。

だ、抱きしめられてる？

「た、拓海……?」

「俺は、名前で呼べなんて言っていないけど?」

「あ……。ご、ごめんなさい……」

や、ヤダ、また嫌われてるの？

うううう~~~~、嫌だよお…。

もっと、拓海と一緒にいたい……。

「ばーか、何で謝るんだよ。俺は、嬉しかったんだけど?」

「え……???」

う、ウレシイ????

喜んで、くれた?

「拓海……」

「美和……。大好きだ」

「うん……。私も……。拓海の事、大好きだよ……」

そう言って私は、拓海の背中に手を回した。

桃色の空が、私達を包み込んでいる……。

とりあえず、F i n ! ?

〈番外編〉 眠り王子はキスで目覚める（後書き）

それでは、この辺でいっちょ大事な（？）お知らせを。

「王子様を求めて。」を呼んでくれている方々、どうもありがとうございます。

えっと、このお話みたいに、これからは「番外編」や「特別編」を執筆していくつもりです。

日頃お世話になっている、読者様のご希望……たとえば、「美和ちゃんと拓海君のお話が読みたい！」とか、「鈴菜ちゃんと稜君のお話が気になる！」など、様々な恋人を募集！！！！

楓ちゃんと翔君……などなど、何でもアリです！

なかったら、作者勝手に決めますんで、そこんとこ、ヨロシクです。（時期になったら、クリスマス特別編を書きたいな、と思ってます）それじゃ、さよーならー！。

+ 特別編 + 聖なる夜に、贈り物（前書き）

M e r r y X · m a s !

ということで……会長さんと稜くんのお話です。
ツンデレ会長、お見逃しなく

+ 特別編 + 聖なる夜に、贈り物

しんしんと降る雪の中、私は一人……生徒会室に居ました。

「うああ……」

何故こんな事になったんだろう……。

話は、今日の午前中へと遡る。

生徒会長である私 ともにはいらずな 友原鈴菜は、休日である今日、25日も、

生徒会室でせつせと仕事をしていた。

明日までに提出しなければならぬ書類を一気に片付けよう、という魂胆である。

ところが、その書類は一気に片付かず、た~~~~くさん、残ってしまった。

「あー。残ったな」

「会長お~~~~。私、彼氏とデートがあつて……」

「おつ、俺もツス！彼女と会う約束が……」

「自分も自分も。だから、ちよつと残つて書類を片付けるのは、無理かも……」

あーあー、そうですか、分かりましたよ。

どうせ、私は彼氏がいませんから。

クリスマスにもデートの約束は入っていませんからねえ。

「分かった分かった。私が一人で残るから。任せておきなさい」

「イヤッホー！！」

…というわけ。

皆デートの約束があるらしい。

それもそうか。

クリスマスは、恋人同士にとって、大切な一大イベントだもんな。

そんなことを考えながら、黙々と書類を片付ける私。

そろそろ目が疲れてきた…。

それに、外も暗くなってきたし。

でも、書類はまだ半分も残っていない。

ど、どうすれば…!!

「ふあゝ…。眠いい…。でっ、でも、明日までに完成させなじと、あのツルツ禿^{バゲ}校長に怒られちゃ…。うう…」

駄目だ…。

瞼が重い。

ここで寝たら、生徒会長の面目丸つぶれだ…。

そう思いつつも、私の意識は、だんだんと、夢の世界へと旅立つて…。

「鈴菜あ…?」

ッ!!

忘れもしない声。

男のクセに可愛らしくて、守ってあげたくなる声。

その正体は、^{あまかぜりょう}雨風稜。

「あまかぜ…りよ、うう…」

まるで二日酔いだ。

眠すぎて、雨風稜の姿がぼやける。
もうすぐ寝てしまいそうだ…。

「ッ……。寝ぼけて僕の名前呼んでくれるのは嬉しいけど、我慢できなくなっちゃうよあ？」

おどけて言う雨風稜。

我慢、て……。な、にが……？

「こーいうこと」

ちゅ、というリップ音が、静かな生徒会室に響いた。

その後の、シーンと静まり返る沈黙。

……。ま、待て。

今……。私に、何をした。

「ぎゃあああああああ！……！おっ、お、おまつ、お前ええ！……！
何をしたあああ！」

「何って、キス？」

そう、コイツは、私にキスをした。
額にだけど。

それでも、ドキドキしてしまう。

馬鹿野郎ッ！！

眠気が一気に吹っ飛んだ。

「ヒイヒイヒイヒイ！……！しっ、瞋がなっ……てない！誰か、コイツ

を捕まえてー」

「あはっ、無理」

「笑顔で言っくなあああ！！」

慌てる私と、おどける雨風稜。

ハッ、いけない。

私は、書類を書き終えなければ。

「雨風稜、眠気を覚ましてくれたのは有難いが、もう出番はないぞ。出て行け」

「えー何で？」

「私には仕事がある。よって、お前が邪魔だ」

「うっわー、邪魔とか言ってくれちゃうんだー。酷いなあ」

へらへらと笑い、ヘナヘナと動く雨風稜。

だあーっ、もう、邪魔だあ！

「どけ」

「嫌だなあ」

「私の邪魔をするつもりか」

「うん、そのつもり」

「……本気で怒るぞ」

「どうぞ、かかってきてちょうだい？」

お、お前なあ……！！

……いいこと、ひらめいた。

こうなったら、大人の魅力を使って、やっつけてやる。

こんなことをやるのは、初めてだから、上手くいくかどうかなんて分からないけどね。

「稜……」

「え、」

いきなり名前呼びして、雨風稜にぎゅっと抱きつく。

奴の体系は小柄だ。

私の体系は、大型とは言えないまでも、小柄ではないだろう。
だから、雨風稜は、私を振り払えない。

そして、今のうちに。

サササッと、「痴漢撃退」のスプレーを手につ。

ふはははっ！

こういうときのために、「痴漢撃退」スプレーは大事に持っておいたのだ！

今こそ、真の実力を見せよ！

勢いに乗って、雨風稜にスプレーを吹きかけようとした、そのとき。

雨風稜が、キスをしてきた。

唇に、だ。

「んっ……」

…鈴菜が、いきなり名前で呼ぶから。もう我慢できないよ」

いつもの可愛らしい声とは違い、男っぽい雨風稜の声。

え、えええ！？

我慢できないって、どういう意……

「…ッあ……」

自分の声とは思えないような声がでて、恥ずかしくなる。
や、やめ……！！

私、こういう行為に慣れてないんだからぁー！

「鈴菜、可愛い…」

「……！！」

馬鹿野郎、耳元でそんなことをつぶやくな！

聞いているこっちが、恥ずかしくなるだろーがあ……！！

「ッ……。は、離せエ……！」

せめてもの抵抗は、私から見ても煽っているようにしか見えず。
案の定、彼は顔を真っ赤に染めて、

「誘ってる？」

などと聞いてきた。

ムカアアアー！

「離さないよ。せっかく、鈴菜とクリスマスデートしようと思って
いたのにさ、生徒会室に籠もっちゃったんだから。酷いよね」

くりすますでえとお！？

わっ、私達、恋人じゃないぞ？

「僕は相思相愛だと思ってたけど？」

んなわけあるかい！

「どっ、どうでもいいから、離せ……！！」

「無理い。……でも、鈴菜がお願いしてくれれば、いいよ？」

お願い??

何だそれ。

意外と楽だな。

「離せ、頼む」

「……可愛くない」

「はあ？お前、お願いに可愛さを求めているのか??」

むう、と頬を膨らませた雨風稜。

よっぽど私より、お前の方が可愛い。

そう言いそうになったが、取り敢えず胸の中に納めておく。

「……離して。おつ、お願い……」

精一杯可愛くしてみたつもりだ。

だが、まだ雨風稜は、頬を膨らませてすねている。

「だあああああああ！もう、面倒くさいなあ……！かつ、可愛くすればいいんだろ!？」

ええつと、“可愛く”するには……

「りょーう？お願い、聞いてくれる？」

甘えた猫なで声。

私の妹の友達がよく使っている声だ。

私なんかには似合っていないだろうけど、これしかないだろう。

すると、雨風稜が、腕を離れた。
おお、作戦成功！

「鈴菜」

え？

スルリと雨風稜の腕から逃げ出した私に、雨風稜が声をかける。

「何だよ、雨風稜」

「僕が名前で呼んでいるんだから、鈴菜も名前で呼んでよ」

はあ??

何だよそれ。

「別に、いいけど……稜。これでいいか？」

「うん。ありがと。それじゃ、これ、僕からのクリスマスプレゼント……」

えっ、プレゼント!?

私が目を光らせて、稜を見つめれば、奴はニヤリと笑う。
うっ、嫌な予感……

「僕、書類書くの手伝ってあげるよ。一人じゃ、大変でしょ？」

それは、大変ありがたかったが……。

稜と、生徒会室に二人つきりというのは……危険だ。
いろんな意味で。

「謹んで遠慮す……」

「遠慮しなくていいよ さあ、熱い夜を過ごそう!」

「寒い……。寒すぎるよ稜!」

「鈴菜、恥ずかしがらずにおいで」

「イイイイアアアアア!」

FIN

＋特別編＋ 聖なる夜に、贈り物（後書き）

これを読んでくださった皆様に、心からの祝福を。

＋特別編＋ 聖なる夜に、贈り物（前書き）

遅くなりまして…。

+ 特別編 + 聖なる夜に、贈り物

『メリークリスマス!』

愛想笑い。

スカートからむき出しになっている足が寒い。
ううっつ、最悪。

私、はまひらかえで浜平楓は今日、喫茶店でバイト。

クリスマスなのに…。

本当は、朝から、翔とデートがしたかった。

でも、バイトがあるから、仕方なく、夜からのデート。

そうまでしてバイトを続けたい理由があるんだ。

それは、今日のデートに関係する。

「メリークリスマス! 今日、喫茶ティでは、恋人同士でお越しく
ださると、ポイント二倍! 是非是非どうぞ」

私の役目は売り子。

寒い外で、サンタクロースの格好をして、宣伝をする私。

ああ、何て哀れなのかしら!!

でも、サンタの格好は、真っ赤なポンチョに同じく赤いミニスカ
ート、茶色のブーツ、赤い帽子という、可愛い服なので、意外と気
に入っている。

「メリー…つくしゅ！クリッ、は、はつくしゅん…。うう~~~~ッ」

私の隣で、同じく売り子をやっているのは、西岡君。
同期のバイト仲間。

顔立ちはなかなか格好良いのだけれど、かなりのヘタレ。

今も、鼻水を垂らしながら宣伝中…。

ちなみに、西岡君はトナカイの格好をしている。

「西岡君、風邪？」

「あ、うん、そうなんだ。昨日、微熱でさあ…。」

くしゅん、とくしゃみを繰り返しつつ話す西岡君。
これはこれで哀れよね…。

「微熱って…結構酷いのね」

「うん、そうなんだ」

『うん、そうなんだ』今日で二回目。
熱で、頭おかしくなってるのかしら？

「西岡君、デートとかないの？」

「うん、僕、彼女居ないから」

あつ、悪いこと聞いてしまった。

一瞬、地雷を踏んだかと焦ったけど、どうやらセーフみたい。

たまに、彼女が居ないことを刺激した瞬間、怒り出す馬鹿な男が居るのよ。

でも、西岡君はいつも通りヘラヘラ笑っている。

「頑張って彼女作ってね」

「うん、そうす…つくしゅん！」

会話の途中でくしゃみをされ、驚く私。
じゅ、重傷だね…。

そのとき、お客さんがやってきた。

「メリークリスマス！」

「いらっしま…へッ、クシュン！」

+++++

午後五時、やっとバイト終了。

クリスマスのボーナスをもらって、急いで、デートの待ち合わせ
場所に向かう。

えゝん、ヤバイ！

勝負服とハイヒールで走るのは辛い。

薄いクリーム色のワンピースと、白いふわふわの上着。

髪はお団子にするつもりだったけど、時間がないので、何もイジ
っていない。

靴は白いハイヒールを履いている。

「遅刻うゝゝ」

今日をもってバイトは終了。

だって、バイトは、今日のためにしたようなものだし？

「全てはこのプレゼントのために、かな」

翔とのクリスマスデートは、特別なものにしたかった。

だから、プレゼントも、特別にしたい。

そっという気持ちがあつて、ギリギリまでバイトで働いていた私。翔、喜んでくれるかなあ。

待ち合わせ場所に、翔はいなかった。

えっ、まさか……私が来ないから、帰っちゃったの？

「そ、んなあ……!!」

まだ五分しか遅刻していない。

髪は乱れて、ほぼスツピンで、服も崩れているけど、私、走ってココまで来たのに。

翔が居ないなんて、来た意味ないじゃん…。

でも、翔、まだ来てないかも。

ほんの少しの希望を抱いた私は、ここで翔を待つことにした。

ハアッ。

何気なくついたため息は、白い。

もう、冬なんだ…。

そんなことを、考えていた。

「おーい、浜平さあ〜ん…」

え？

私の名を呼ぶ、弱々しい声。

翔じゃない。

でも、この声、聞いたことがある。

誰だっけ？

「あつ、そうだ！」

西岡君だ！

バイトのことは、すっかり記憶から抜けていたから、分からなかったよ。

うん、このヘタレな声、西岡君に間違いない。

「どしたの、西岡君？」

首をかしげて聞けば、西岡君はしばらくゼゼエと肩で息をしていた。

「あ、あのっ……！こ、この人の、メールアドレス、教えてください……！」

……は……??

目を丸くした。

西岡君が、言葉と一緒に差し出したのは写真。

その写真には、私のよく知る人物……はながたみかす花形美和の顔が映っていた。

「……何で、西岡君、この子の写真持つてるの？」

「じつ、実は、僕、この子に一目惚れしちゃって……。ほら、昨日この子さ、浜平さん訪ねて来たじゃん。だから、浜平さんなら、メールアドレス知ってるかなって思って……」

照れて頭をかく西岡君に、哀れな視線を送る私。

残念ですね、西岡君。

美和には、とつくの昔に、「松平拓海」というダーリンがいるのです。

周囲公認のバカップルなのですよ。

とは言えず。

「うーん……それは、プライベートだし」

取り敢えず美和を守るために言ってみた。
これで引き上げてくれるといいけど…。

「お願いッ！！頼むよ、浜平さん…」

ほぼ涙目の西岡君。

あーもう、ウザいなあ。

いくらヘタレとはいえ、ここまで来ると私、キレますよ？

「……楓？其奴^{ソイツ}、誰」

おわわっ。

冷たく、氷のような視線が後ろから私を突き刺した。
しよ、翔……？

「き、君、浜平さんの彼氏？聞いてくれよお、酷いんだ。浜平さん
つてば、メルアド教えてくれなくってさ…」

馬鹿西岡ー！！！！

大事なところをハブくな阿呆！

「浜平さんつてば、メルアド教えてくれなくってさ…」
じゃなくて、

「浜平さんつてば、“この写真に写っている女の子の（注意…美

和）”メルアド教えてくれなくってさ……」
だよ！

今の西岡君の言葉だと、翔は、西岡君が私のメルアドを聞きたがっているみたいじゃん！

翔、違うから！

誤解だから！！

「……じゃあな、楓」

「はっ、へ、え！？ちよ、翔！待つてよ！誤解だつてば！」

「浜平さあぁん……！教えてよぉ……」

私にすぎりつく西岡君が真面目にウザい。

ああもう、本当どこかに消える。

翔を見失うじゃないか。

「この子のメルアド教え……」

「いいわよ教える！だからさっさとこの場から消え失せやがれこの
阿呆西岡ッ！」

怒り狂った私は誰にも止められない。

馬鹿じゃないの。

翔も西岡君も、本当に馬鹿。

「ほら、これ、その子のメルアドよ！これで告白するなりなんなり
すれば！？」

ごめん、美和。

アンタのストーカーになりそうだけど、私の恋の邪魔だったから。
ごめんね。

「ありがとう、浜平さん！」

「じゃーね、これ以上つきまとったらぶっ殺すー!!」

翔……!!

どこにいるの？

+ + + + + + + + +

「翔！どこ？翔！！」

あれから数分。

私は、翔を捜して街を歩き回っていた。

馬鹿翔。

誤解なんかしないでよ。

せっかくのクリスマスなのに…。

「うう…」

もう、疲れた。

ハイヒールなんて履くんじゃなかった、私の馬鹿。

それもこれも、全部西岡君のせいだ。

西岡君のせいで、美和にも迷惑がかかる。

「馬鹿馬鹿、馬鹿あ…!!」

クリスマスなんて、大嫌いだ。

こんなことになるなんて。

せっかく、翔に、プレゼント買ったのに…。

私の頬を、涙が滑ったそのとき。
雪が、降った。

「ゆ、き……??」

ヤバイ、これ、積もるかも！

危険を感じた私は、近くのコンビ二へ避難。
ふうー、これで雪宿りができる。

ほっと一息ついた。

「「あ……」」

目が見開かれる。

驚きすぎて、心臓止まりそう。

だって、私の目の前には……翔がいた。

「馬鹿ッ!!」

私が翔に投げつけた最初の一言は、これ。

馬鹿馬鹿馬鹿、馬鹿野郎!!

もう、誤解なんてしないでよ!!

「ば、馬鹿はどっちだよ！あんなところで、簡単にナンパに引っこ
かりやがって。俺、心配したんだからな!？」

真っ赤な顔で怒鳴る翔。

な、ナンパじゃない！

ナンパ男くらい、自分で退治できますよーだ。

「ナンパじゃないわよ、ばあーか。あれは、美和のメルアドを聞き

に来た、“美和の” ストーカー予備軍！私にとっては、ただのバイトの同期」

早とちりしすぎだ、馬鹿翔。

おかげで、プレゼントを渡すタイミングがつかめない。

「…………マジで？」

「マージーでーすー」

大声で返してやれば、翔が、ほっと息をついた。

その顔を見て、ああ私、愛されてるな、なんて感じちゃうのは、自惚れかしら？

「良かった。でも、ああいうのが楓の周りをうろついているのは嫌だ。だからさ…………」

ほらよ、と投げつけられたのは、小さな箱。

…………ま、まさか、これ…。

箱を開けてみれば、案の定、綺麗な指輪が入っていた。

パワーストーンがはめ込まれているタイプの、可愛い指輪。

これ、琥珀アンバーかな。

一応女の子だから、何となく種類は分かる。

「指輪。楓は俺の物だつて証拠、な。ちゃんと付けろよ」

ぶっきらぼうに言い捨てられて、言葉の意味が分からなかった。数秒経ってから、顔が赤くなるのを感じる。

ふ、不意打ちなしでしょ。

「わ、私も、これッ」

翔と同じように投げようとして、失敗。
な、情けない…。

変な方向へ投げてしまったけれど、翔はギリギリキャッチ。
それから、その中身を見て、目を丸くした。

「こ、これ……」

そう。

私がプレゼントしたのも、指輪。

ただし、男物^{メンズ}の。

ロック系の指輪で、さすがにパワーストーンは付いていない。

「私も、翔と同じ事考えてたのよ。…アンタを、私だけのものにしたらかった」

半ばヤケクソでそう呟けば、翔にぎゅっと抱きしめられた。

息が詰まる。

冷めていた体が、一気に温かくなった。

「ありがと、楓。これで、ナンパ男のことはチャラだ」

「だから、ナンパ男じゃないっての」

「俺にとっては同じよーなもんだよ」

悪いか、と翔に聞かれて、反射で、悪くない、と答えてしまった。
馬鹿な翔に影響されて、私も馬鹿になっちゃったかな。

後から気づいたことだけど、コンビ二の前で抱き合っていた私達は、美和達に負けず劣らずのバカカップルらしい。

FIN

＋特別編＋ 聖なる夜に、贈り物（後書き）

ああ、もう一話書かなければいけないのに…。
時間がない！

今日でクリスマスが終わっちゃうんですけどぉ！

今回は、美和＆拓海のお話です。

ストーリー 西岡 vs 拓海 ですな。

ただし、今回は拓海が一方的に不利なですよ（むふふふふ）
ではでは、お楽しみに。

＋特別編＋ 聖なる夜に、贈り物（前書き）

特別編ラスト！

「むふふ」なバカップルを、どうぞご覧ください（笑）

+ 特別編 + 聖なる夜に、贈り物

「ジングルベル、ジングルベル」

鈴がぁなるうゝ。

どうも、花形美和です。

ジングルベルを歌って、上機嫌の私。
これには、訳があつたりするのです。

今日は、拓海とのクリスマスデート。

だから、気合いを入れてオシャレをしました！

白いセーターに、フリル段重ねの黒いスカート、上から薄い桃色の
のコートを羽織っている。

上機嫌でスキップをしながら歩いていく私。

世界が輝いて見えた、そのとき、私の携帯が鳴った。

「ん？」

画面を見れば、なんと、拓海からの電話。

およよよ、緊張してきた…！

「も、もしもしイ…！」

緊張しすぎて、声がうわずってしまふ。

うへえ。

「もしもし、美和か？」

「はい、美和です。拓海、どうしたんですか？」

気のせいかな、拓海の声が弱々しい。

気分悪い、とか？

「実は、俺、風邪ひいちゃって……」

「……………え、」

「今日のデート、行けそうにない、んだ……ゴホッ、」

風邪……。

デート、来られない？

そんなぁ。

でも、仕方がないか。

風邪なんだから。

「……しつ、仕方ないですね！今日のデートは、諦めましょうー！」

はぁ……。

いくら風邪とはいえ、ショックだな。

クリスマスは、拓海と一緒に過ごしたかつ…………た…………。

……………そうか！

いいこと思いついちゃった。

「拓海！私、お見舞いに行きますよー！」

「へ？」

「拓海のおうちには、誰か居るのですか？」

「いや、両親は仕事。俺一人……」

「それでは、看病に行きます！」
「で、でも…ッ」

何ですか。

そんなに私が、お見舞いに行くことが嫌ですか。

「美和は、俺のことなんて心配せずに、クリスマスを楽しんできていいんだよ？」

むっ。

拓海つてば、わかっていない。

私が、拓海の居ないクリスマスを、楽しめる訳がないのに。

「私は、拓海と一緒にクリスマスを過ごしたいの！だから、拓海と会いたい！駄目なの？」

半ばやけくそになって叫べば、電話の向こうの声が黙った。

…私、余計なこと言っただけなあ。

「…お前今、むちゃくちゃ可愛い」

ボソッと、拓海が呟く。

えっ！？

一気に顔が熱くなる。

い、いきなりそんなこと言われたら、照れるじゃないですかああ！！！！

+++++

拓海の家を目指して歩いてしていると、また携帯が鳴った。

およ？

今度はメール？

「んつと……楓から？」

無題

美和、ごめんね。

The ストーカー西岡に、アンタのメルアドを教えちゃった。
今度何か奢るから、許してねm（――）m

すとかー??

それって、美人な女の人に付きまとう気持ち悪い奴？
そんなあ、私のストーカーなんて居ないよー。

あつ、でも……。

そういえばこの前、楓がバイトする喫茶店に行ったとき、誰かの
視線を感じたような？

そのとき、また携帯が鳴った。

「……誰……??？」

知らない人からのメールだ。

何、これ。

怖い……。

取り敢えず、メールを読んでみると…。

無題

好きです。

一目惚れしました。

付き合ってください。

.....。

え？は？へ？

「好きです、一目惚れしました、付き合ってください？？」

何度読み返しても、同じだった。

嘘？

冗談？

これは、欲に言う……告白、っていう奴ですか？

「ヒエッ」

この人、まさか、The ストーカー西岡？

か、楓、どうしてくれるのさ！？

「どっ、どうしよう……」

拓海に相談しようか。

でも、拓海は今、風邪だよね。

こんなときに、迷惑じゃないかな。

……ここは、自分で解決するしかない！
とにかく、返信してみよう。

無題

誰ですか。

The ストーカー西岡さんなら、お断りです。

つと。

返信した直後に、メールがかえってくる。
は、早い…。

ストーカー！？

僕、ストーカーじゃありませんよ。

ただの、純粋な男の子です。

ストーカーと勘違いされたことは悲しいけれど、僕の名前を知っていることは嬉しい。

君の名前は？

メルアドに、m i k a z u って入っているから、ミカズちゃん？
漢字はどう書くのかな？

今、どこにいるの？

会いたいなあ。

ヒッ……。

思わず、叫び出しそうになった。

嫌だ、この人……気持ち悪い。

「む、無視しよう。そうしよう」

ゾクゾクと寒気がする。

早く、拓海の家に行こう。

+++++

「お、おじゃましまーす…」

無事、拓海の家へとたどり着いた私。

ストーカー男のことはひとまず忘れて、拓海の看病に取り組まないと。

「上がって…」

恐ろしく暗い声がする。

ヒッ、と声を上げて振り向けば、そこには、暗い影を背負った拓海がいた。

こ、怖ッ…。

「こ、こんにちは、拓海」

「……よお」

目の下にクマ。

整った顔が、グシャグシャだ。

こ、これは酷い…。

「拓海はベッドで寝てて！私、おかゆ作るから！」

フラフラしている拓海をベッドに連れて行き、私は台所へ直行。

ええっと、卵がゆでいいよね…。

人の家の台所は、使いにくい。

でも、拓海の家は、綺麗に掃除されているから、まだいいと思う。

私がガサゴソと調理をすること数分。

卵がゆは完成し、温かいお茶と一緒に拓海の部屋まで持って行く。

「おかゆできましたよ……って空気が淀んでいる!!」

「あ、悪い……」

「た、拓海が暗い……」

ベッドからのそりと起きあがった拓海は、黒いオーラを放っている。

そのせいか、部屋まで黒々と見えてくる。

「まず換気するから、拓海は毛布かぶってて！おかゆとお茶はこれね、食べてていいよ。私部屋の掃除するけど、掃除機どこ!？」

汚すぎる。

窓を開けると、寒い風が部屋を吹き荒れた。

ふと、窓から外をのぞくと……

そこには、こちらを見つめる人が居た。

……え？

慌てて、キョロキョロと周りを見回す。

が、私の他には誰もいない。

つまり、あの人、私を見つめてる？

ゾクリ。

寒気がする。
気持ち悪い。

もう一度、外をのぞけば、あの人の顔はニヤリと笑っていた。
不気味だ。

一瞬吐き気がした。
速攻で私は、窓を閉める。

「??? 美和、どうか、した？」
「大丈夫、何でもない。気にしないで」

卵がゆを美味しそうに食べる拓海を見て、彼に迷惑はかけられない
と思った。

た、立ち向かわなければ。

「ごめん拓海。ちょっと私、外に行ってくる」
「え? う、うん、わかった...」

納得していないような顔の拓海。
頑張れ私!

+++++

「あつ、ミカズちゃあ〜ん」

目の前の男の声が、私の体にまとわりつく。
き、気持ち悪い...

「どうしてここに居るのですか、The ストーカー西岡さん」
「ストーカーじゃないってえ」

私を追いかけて拓海の家の前に居るアンタをストーカーと言わないなら、他の誰をストーカーと呼ぶのだ。

「僕はただ、ミカズちゃんが好きなだけ」

へへ、と口元をゆがめて笑ったストーカー。

吐きそうになった。

嫌だ。

この人と一緒にいたくない。

拓海と、一緒に居たい。

「ねえミカズちゃん、一緒に楽しいところへ行こうよお」
「ッ、や、やめてくださいっ!!」

ガシッと腕を掴まれる。

意外と強い力に、私は引っ張られた。

い、嫌だ……怖い。

拓海、助けて……ッ

「人の彼女に手エ出すとは、たいした度胸だな」

ッ!!

た、くみ……?

ストーカーと私の目の前に立っている人影。

それは、拓海だった。

「え、あ……僕は別に、そんなつもりは……ッ」
「なら、その腕を放せ」

すぐさま私の腕を放すストーカー男。
うわ、弱い。

「これ以上、俺の彼女にさわったら、承知しない。つつーか、お前、消えろ」

「は、ハイイ！！す、すすす、すいませんでしたあ！！」

拓海の剣幕に怯えて逃げるストーカー男。
そして拓海は、私に冷たい視線を向けた。

「どうして、あんな奴のところに、一人で行った？」

「だ、って、拓海に、迷惑かけちゃ駄目だと思っ、て……」

拓海の額にしわが寄る。

お、怒ってる……。

「お前がストーカーに付きまとわれる方が迷惑だ。頼むから、今度ストーキングされたら、俺に言え」

風邪で辛いはずの拓海に、これ以上迷惑かけられない。
これからは、ちゃんと言おう。

「ごめん、なさい。これからは、ちゃんと、言うから」

つつかえつつかえにそう答えれば、拓海はニコリと笑った。
そして……

「た、拓海!?」

「あ、安心したら、気が抜けて…」

そして、拓海は倒れた。

ば、馬鹿。

心配させないでよ。

「ほら、部屋に戻ろう。拓海は、風邪ひいてるんだからさ」

うん、と頷いた拓海。

ふらつく拓海を支えながら私は、拓海の部屋へと戻った。

～余談～

部屋に戻った拓海は、ベッドで横になっている。
相当辛かったみたいだ。

ごめんね、私のために、無理したんだよね。
ごめん。

「拓海、おかゆ食べられる?」

まだ少し残っているおかゆ。

拓海は、首をコクンと下に振った。

でも、起きあがるのは辛そう…。

「食べさせてあげようか?」

半分冗談、半分本気で言ってみれば、拓海はまた、コクンとうなずく。

……か、可愛い。

「は、はい。あーん」

「……美味しい」

パクリと一口で食べた拓海。

な、何この可愛い生物。

可愛すぎて困る……！！

「っ、ごほ、ごほ…っ」

拓海が咳き込む。

えっ、ちょ、大丈夫！？

すぐにお茶を手にとった私。

でも、これは、おかゆのように食べさせる訳にはいかない。

…ええーい、こうなったら、どうにでもなれ！

「ッ、」

「ん…」

私は、水を口に含んで、拓海の唇にキスをした。

それから、口の中の水を拓海の口に移す。

目の前にある拓海の目が、見開かれている。

そんなに驚かなくても…。

「はあ…。美和、お前…」

「非常事態でしたから！仕方なくです！迷惑だったらごめんなさい
！」

とっさに謝ると、頭をぼんぼんとたたかれた。

な、なんだか恥ずかしい…。

「謝らなくてもいいって。非常事態とはいえ、嬉しかったし。ただ、風邪、美和にうつるよ?」

え。

思いがけない優しい言葉に、胸が高鳴る。

それに、嬉しかったってことは……もっとキスしていいの?

「う、うつつてもいいです。私は、拓海とキスがしたい」

本音を打ち明ければ、拓海は柔らかくほえんだ。

「上等」

さっきまでの、^{はかな}儚げな拓海はどこへやら。

一瞬で、私の唇は奪われた。

甘い甘いキス。

拓海のことしか考えられなくなってしまふ。

「んっ…」

「言つとくけど、これは美和が俺を誘惑したんだからな。今更止められねえぞ」

「え、な……??ツ、あ……」

メリークリスマス。

熱い夜を、過ごしましょう。

F
I
N

＋特別編＋ 聖なる夜に、贈り物（後書き）

「むふふ」…。

余談は、甘くさせていただきました。

うへへへへへ（キモ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9222i/>

王子様を求めて。

2010年12月29日02時29分発行